秋田叢書
別集

菅江真澄集

第三

菅江眞澄翁墓



南秋田郡寺内村寺内字大小路に在リ
(昭和六年六月撮影)

（正面）

菅江眞澄翁墓

友たちあまたして石碑立る時によみてかきつける歌

三河ノ渥美小國田雲はなれ、こゝに來をりて夕星の、かゆきかくゆき年まねく、あそへるはしにかしこきや、殿命の仰言いたゝき持て、石上古き名所まきあるき、かけるふみをら鏡なす、明徳館にこゝくに、さゝけをさめて劒太刀、名をもいさをも萬代に、きこえあけつるはしきやし、菅江のをちかおくつき處

鳥屋長秋

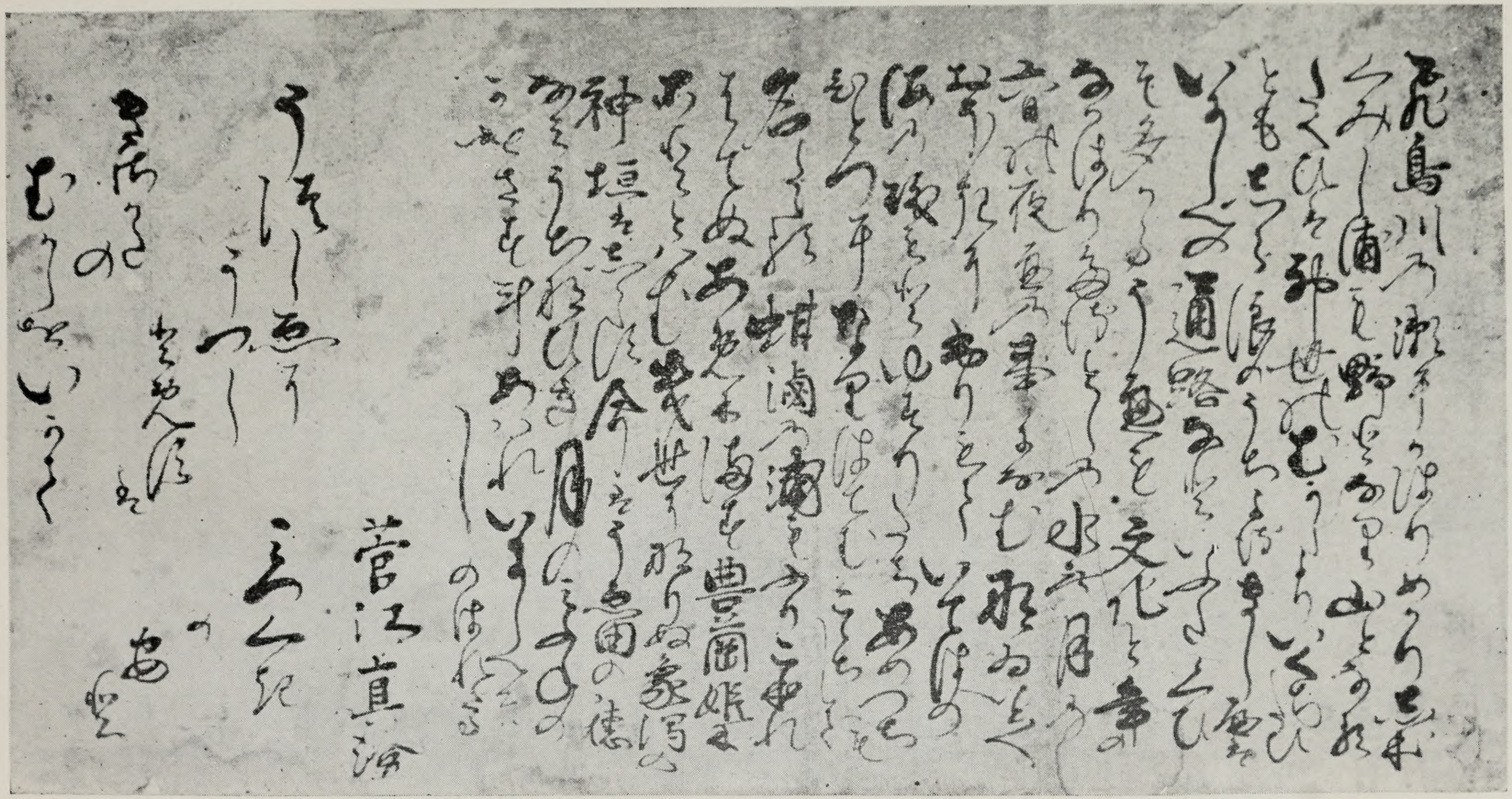
（側面）

文政十二己丑七月十九日卒

年七十六七

（碑高サ三尺七寸、厚サ九寸）

菅江眞澄翁遺墨（其五）



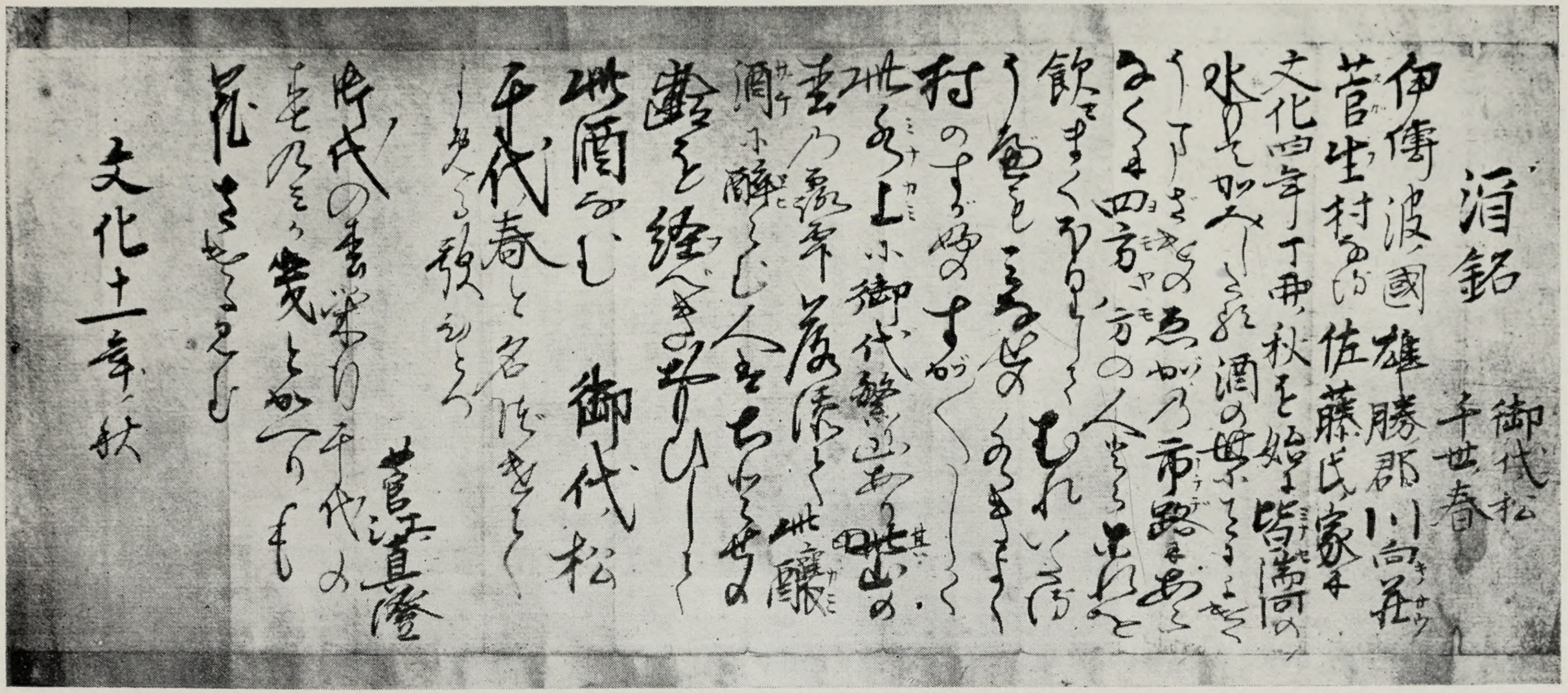
大館町栗盛教育團所藏

飛鳥川の瀬にかはりめかり、しほくみし浦も野となり山となるたくひは、神世のむかしよりいくちたひともしら浪の、うちよるきしへはいにしへの、通路なといふたくひそ多かる。うへも、文化と年のなかはりたるとしの水無月の六日の夜への事になむ、なゐいと〳〵おほきにふりもて、いてはの海の磯もとゆすりたち、あめつちも、ひとつになりはてむこゝちして、名たゝる蚶潟の浦もふりこほれはてぬ。あめにます豊岡姫にこととはむ、幾世になりぬ象潟の神垣はしらす、今はうゑ田の穂なみうちなひき、月のみふねのかけさす斗、あはれいにしへそしのはれたる。

菅江眞澄

うつしゑにうつしとめすはきさかたのむかしをいかてみつくきのあと。

菅江眞澄翁遺墨（其六）



雄勝郡稻庭町佐藤有秀氏所藏

酒銘

御代ノ松
千世ノ春

伊傳波ノ國雄勝ノ郡川向キノ莊菅生村なる佐藤氏ノ家に、文化四年丁卯ノ秋を始に、皆瀬河の水もてかみしたる酒の世にこゝによけく、うまざけのゑがの市路にあらなくに、四方八方の人こらこれを飲マまくほりしてむれいたる。うべもみなせの水きよく、村のすがふのすが〱しく、此水上に御代繁ッ山あり。其山の松の露雫落添て、此釀酒に醉らむ人はちとせの齢を經べきおもひして、此酒なん　御代ノ松　千代ノ春と名づけてよめる歌ひとつ。

菅江ノ眞澄

御代の松榮行千代の春のみか幾とかへりも花さける見む。

文化十一年ノ秋

菅江眞澄集第三　目次

解題

本集に編輯したる菅江眞澄翁の著錄は、『雪乃道奥雪の出羽路』以下十種の遊覽紀行文であるが、地理的に見て主として縣北部、卽ち南北秋田郡、山本郡、及び今の秋田市に屬するものを收錄した。但し、此の間自然他地方に屬するものもある。卽ち『雪乃道奥雪の出羽路』は、青森縣津輕郡から、大間越海道を南進しての紀行であるの類である。又年代的に見ると、翁が齡四十八から五十七八までの著錄である。

此の十種の著錄中、翁が最も珍奇に感じたらしいと思はせるものは八龍湖の氷下漁法である。隨て其の筆先も鮮麗に其の觀察も光つてゐる。而して此の漁法を斯くも詳細に綿密に書き記したものは、恐らくは空前にして絕後のものではなからうか。

其の他各卷に亘り、風景土俗及び其他萬般の事象に對する、飽くなき感激と眞摯に燃えて居る眞澄翁の姿を明かに見ることが出來る。現在及び將來の人達は此等の遺著に依つて、旣に滅びたる、又は現に滅びつゝある過去の人間生活の諸相を如實に知り得るのみならず、又翁の敎示感化を享くる事如何に多きか、想像も及ばぬところである。

本集に收錄したものゝ內、『雪のやま踰え』『花のしぬのめ』『梅の花湯の記』の三種は、何れも大館町栗

盛教育團所藏の、翁の自筆原本より直接採錄し、其の挿繪も亦此の原本より寫眞としたものであり、其の以外のものは全部佐竹侯爵家所藏の原本より採錄寫眞としたることゝ、前集と異なることがない。讀者諸賢と共に、侯爵家、栗盛家に厚く謝意を表する。

雪乃道奧雪の出羽路　一卷

享和元年十一月四日今の青森縣西津輕郡深浦の湊を出發して、濱づたひに大間越の海道を南に進み、師走の末秋田の久保田町、卽ち今の秋田市に在りて、年市の賣物を見て其の興趣を細かに筆に收めてゐる。翁は此の年四十八歲になる。前々年の四十六歲のとき、津輕藩の藥草調査の囑託を解かれてから如何なる旅にあつたのか明瞭でないが、深浦には相當永い間滯在したことゝ思ふ。出發のときには某々の友人等互に手を把りて別を惜み、和歌を贈答して切々の情を陳べてゐる。それでも尙足らずして、態々秋田の土崎湊まで送つて來た人さへもある位だ。

十一月六日、翁は今の山本郡岩館にありて鰰の網漁の壯觀を見てゐるが、鰰に對する傳說竝に漁場、あるは其の漁具及漁法などを詳細に記述し、又得意の繪を以て說明を加へてゐる。能代港に入りては土地の沿革、山王社、住吉社の緣起などを巨細に記してゐる。

宇良乃笛多幾　一巻

享和四年翁年五十一歳。前年の末北秋田郡阿仁の川井村にあつたが、此の正月から能代方面より岩館方面にかけて遠足し、土地の風景土俗を主として、見もし聞きもしたる故事を繪とゝもに書きつけたものである。八皿酒の俗、能代の萩か平、或は五月雨沼、或は杉澤の寒泉、岩館の山々などを書き收め、五月十日には終日笛瀧を見て畫を描き、題して浦の笛瀧としたとある。

霞むつきほし　一巻

文化三年翁年五十三、能代に滯留し、二月二十一日より三月二十六日までの間に歌の友垣と共に附近の鶴形山に登り、浦の梅、檜山の櫻、あるは笛竹の杜、花見山の花、鹿の渡、さんだ、副川の神山などを狩りくらし、牛の首戸の桃咲くころ月星の故あとを探り得て、此の一巻の名としたとある。例によりて風景畫多く、風趣共に掬するに足るものである。

雄賀良能多奇　一巻

此の書は文化四年丁卯翁五十四歳の時、五月の初より同月の半までの間に、主として南北秋田郡及山

本郡内の各地に歴遊した、所謂名勝舊跡地の遊覽紀行である。其の大要は序文にも書いてあるが、八杜山の阿遮羅明王瀧の由來から藤倉の柵、肉入籠の故事等、地方史に於て閑却すべからざる史觀を說き、聟の五器、嫁が箸、さては人形生む石などの傳說、及び其他の土俗信仰習慣などを記し、添ふるに多種多樣なる山水の風景畫を以てしてゐる。例によりて興味津々たるものあり、殊に翁の卓說發見によりて、史實の湮滅を免れたるもの甚だ多きを感謝せざるを得ない。

夷舍奴安裝婢　一卷

文化六年夏秋の候、翁は南秋田郡五城目の近くに居りて附近の名勝史蹟に遊筇を曳いた。今戸の浦に於ては多くの古碑を發見し、又五城目に於ては承和の石佛を發見して、詳かに此の「石地藏大士の記」を作つてゐる。又、郡に傳へられて居る昔ながらの盆踊に關しては、非常の興味を以て品々の歌詞なども書きのせてあり、尋で番樂舞に就ても、廣く各地の同樂と比較對照して其の批評を試み、其の舞曲と歌詞を入念に詳記し、尙其の面などの數々を寫生してゐる。其の他織田信雄の舊跡を尋ね、馬場目季宗の文書を採り、相渝らず土俗と信仰、史蹟と名勝を書きあつめ、殊に盆の月の此の附近の行事風俗を、最も如實に記錄されてあるのは有り難い。翁此の年五十六歲。

比遠能牟良君　一巻

文化七年正月寒中、八龍湖上に於ける氷刺といふ氷上の漁法を見んとて、親ら漁夫と共に厚氷の上を往來して仔細にこれを觀察し、而して、並ぶものなき克明さを以て綿密に之を繪に寫してゐる。寒國の湖水ならねば此の漁法を見ることが出來ないし、從つて此の漁法は、此の八龍湖上に於て最も特質的に發達したものであることに氣づいた翁の卓見は、敬服に禁へないところである。此の記事と圖解によりて、八龍湖の氷刺なる漁法が、永遠に向つて完全に記錄されたことは何よりの幸福である。翁は又此の作業を視察中、蜃氣樓の湖岸に出現するを望み、又黑狐などを見て興じて居る。翁が旅中にありて、飽くことを知らざる此等の土俗に對する愛と感激とは、此の文と繪に依て遺憾なく紙面に横溢してゐる。翁此の年五十七歳になる。

簷迺金棣棠　一巻

文化八年の春より夏にかけての紀行日記である。南秋田郡金足村小泉の邊に居を占めて、豐川、飯田川、下新城、五城目、仁鮒等、附近の名勝を探り故事を訪ね、史蹟をあさり習俗を愛でて書き得たるものは此の一卷で、奈良氏の家などにも出入し、藩の宿儒那珂碧峯との交遊も此年に初まつて居る。而して

田植の葉盛の飯、端午のがつぎ卷、六月齒固めの祝ひ等附近の習慣風俗をこま〴〵と書き綴つて、彌生の末近く、山吹を折りて家々の軒葺くことのあやしければとて、此の册子の名としたとある。此の年翁五十八歲。

雪のやま踰え　一卷

此の書には紀年がないが、前後の事情から推して文化六年の師走の頃と考ふる。十二月十日に、長く滯在して居つた五城目町の加賀屋彥兵衞の邸を出で、例によりて此の附近の土俗あさりをはじめたものである。直に話は狢の物語に始まつた。此の土俗的話題から文學的、歷史的、科學的に變化する翁の筆路はさえたものである。斯くて八九日を經て、今の富津內村の中津又の川の獨木橋を渡りて、鼯鼠の足跡を見て興じつゝ藏王權現の堂に至り、大蛇物語を書いて筆を擱いて居るが、風景及び其他の插畫が多い。此の書、或は未完のものでなからうかと思はる。文化六年は翁年五十六。

花のしぬのめ　一卷

此の書紀年がない、單に彌生の中旬とある、多分文化九年と思ふが未だ詳を得ない。久保田城下に在りて、鷄鳴に假の旅宿山本某の家を出で云々とあり、最後には能登家に來たと書いてある。同じ家のこ

とであると思ふ、能登家は多分屋號であらう。

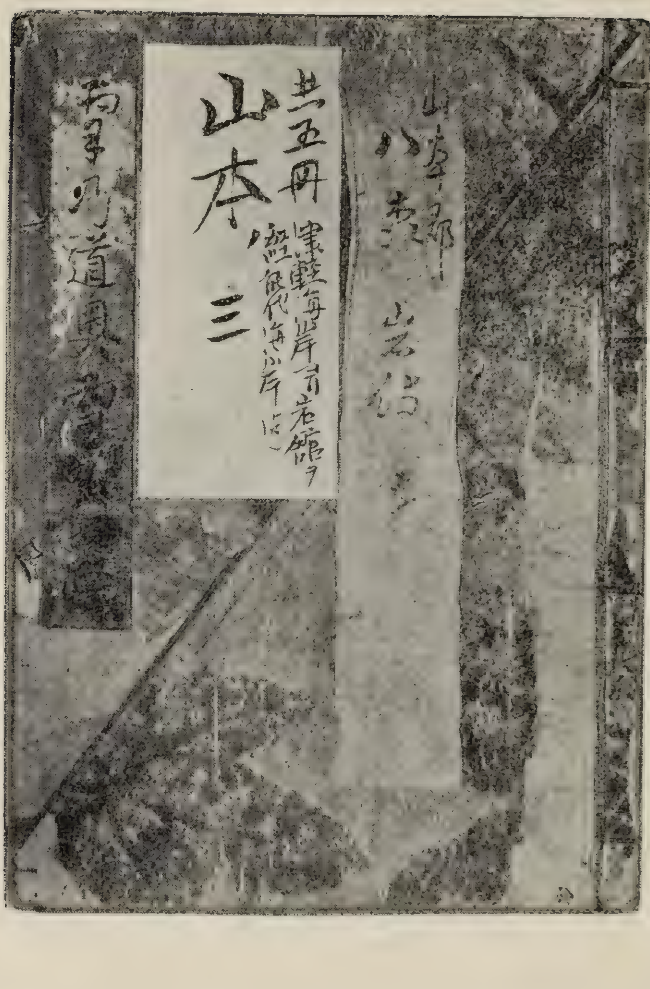
五丁目橋から櫻を見はじめ、龜の丁より明德館の前に出で手形に入る。此の間にも尙、國主義隆公の仁政に關する逸話を記することを忘れない。斯くて矢橋村に入り寶鏡院の花を賞し、北の丸を經て其の日の朝の中に、在々より花賣りに出る人々の中に混つて歸つた。極めて短時間の記錄ではあるが、久保田城下に於ける、朝の花に對する禮讚のこゝろもちは豐富なものである。

梅の花湯の記　一卷

今は昔、寺內村綾の小路邊に梅の花湯を賣る茶屋のあつたことは知られて居る、相並んで藤茶屋といふのもあつたといふ。翁は、梅の花湯のことの最と風流なればとてか、それとも切なる人の願によりてか、太文字に書きたる一卷が傳へられてある。文化九年といへば翁五十九歲の時である。特に翁の書を寫眞版として上に揭げて置いた。

昭和六年七月　　　　編輯同人

雪乃道奥雪の出羽路


共五冊
山本
三

このひとまきは享和のとしのはしめ冬のころ、陸奥のくに有馬の濱、いまいふ吾妻はま、深浦のみなとへをたちていてはの飽田路に入て、鰰のあひきを見つゝ渟代の浦に來て、久保田に至るのすち〳〵をしるしぬ。さりけれと、玉くしけふたゝひとてことそきて、つはらならぬところ〳〵もありき。ならふふたくにの事しるしたれは、ふみの名をして　雪のみちおく雪のいてはち　といふことしか〳〵。

深浦港にて

盡きぬ名殘

いにし秋のころほひより、こゝを出たゝまくひたふるにおもひ立ぬれと、赤葉にくれ月にあかして日かず時雨とふり、はつ太雪梢の花と見やらるゝまていやつもりはてて、名におはぬ霜零月の三日なん、この夜明なばいでたちなんとおもひとりつれど、ならしばの馴れむつひたる友かきの、あかぬまとゐにうまのはなむけして、かげなきひまもしらみわたりて、けふなん日は四日にしもなりぬれは、陸奥の國都賀呂花輪の荘、深浦のみなとべをつとめて波とともにうち出るよそひしつれは、人々、餘波の歌とてなかめ贈られける。そのむくひそせりける。

わかれちの袖はなみたそしくれける又あふことはいつとちきれと。

かくなん、くすし大高安定のよめる返し、

人もかく身をおもひやれ別れてはなみたのしくれ氷るたもとを。

おなしぬしのふたゝひ、

けふよりは雪の山路をふみ分てふるさとにゆく人をしのはん。

とそありける返し、

かたらひし人をけふよりしのふ山しのふにつもる雪もおもひも。

やすさた又いへらく、

君いなはたれにとはましみちしはの霜いや寒き袖のわかれち。

この歌の返しをす。

又もとひなれみし來三をみちしはの霜の八重山へたて行とも。

浦谷正介の、

朝霜のそれさへうきを別れてのゆふへはいとゝそてや冴へなん。

と、ありしうたの返し、

旅ころもさゆるたもとをかたしきてこよひは人を夢に見なまし。

くすし山崎尙貞。

冴へわたるみちのく山をけふ越へてわかるゝ人やいつ皈り來ん。

此歌の返し、

別れても又みちのくの山越んこかね花さく春を待得て。

験者仲覺の、

わかれては袖のうら浪かゝるとも又たちかへれもとのみきはに。

とある返し、

馴れてうきわかれにぬるゝ旅ころもそての浦浪たち皈りこん。

わきてむつひなりにし宿のあるし竹越貞易、此としころのなこりしかすかにおしまれて、うけくなとかい聞へて、

憂なこり惜しめは袖にふる雪をはらひもはてず人や行らん。

とそありける返し、

うき名殘尙おもひやれふる雪を拂ひもあへぬ袖のわかれち。

おなしぬし、ふたゝひ、

はらからとおもひむつへは別れても空吹風のたよりまたなん。

なと、なさけ〳〵しうありつる歌の返し、

皈るともえやは忘れんはらからとおもひむつひし人の言の葉。

貞易のまな子なりける貞養の歌に、

又いつかこゝにとはなん友衙ことうら遠くわかるゝそうき。

浪遠くたちへたつとも友ちどりなれ見し浦をしたひなかまし。

岡邊のやかたにすめる人〻らあまたとひ來て、ありつる句どもの和句せり。

雪沓にはしり付たるわかれかな　つるがや　其柳

なみたのつららいつとけて寢ん。

眺望やるその香はのこれ冬の梅　宿のあるし竹越　白湖

雪に付たるあとも恥かし。

冬の日の梅かつ咲て別れかな　たけこし　川鳥

その木のもとの雪は忘れし。

盛り見ん行さき〳〵は布由能烏梅　あきたや　二松

雪吹に袖も重き山越。

枯る中に開出る冬の牡丹かな　二松女　武良

雪のあしたの名殘ある屋戸。

別れての宵やさひしき多万巨左郞　かゞや　巴蕉

宿はいつこに榾火あたらん。

此うらやかたに在る人々の、をもかいませたり。竹越貞易の父は世の中のほかにのがれ、み

つわさすまて身は老て、あけくれたゝほとけのみちにこゝろをひちてまこゝろふかう、けふの別のせちにものうし。もはや老は、又のたいめいかてかとなみたはら〳〵と念珠を止て、

自正

なに事もかきりしあれは別る身の老はふたゝひ會はぬかなしさ。

とそ聞へけるに、いとゝむねうちふたかれて、此ひとくさをすんしつゝすゞろに返しせり。

かくはかり老のなみたの身にしみて別るゝ空のあらんともなし。

やはら出たち、濱へたにたゝすみてしはし内外のみやところを遠かたにをかみまつりて、小阪にのほりて木花開耶比賣の神籬のほとりなる、陰の町ちふやかたあるはしの、野良めける芝生の霜ふみしたきて六十人あまりの人々、老わかき男女、又もこゝに來ませ、をそきものなくひそ、馬よりなおちそ、寒さいとひて事なくあれ、われは小石拾ひてあさゆさにきよめん、はや別れなめり。旅立してける人しあれは、小石ふたつをとりて水うちかけて、その人のはきのつよからん事をいのるのならはし也。こは、ことくにうざにすべきならひならねど、こゝにとし月をへて、ところ人のごとにになうおもへはそ、しかいひけるにこそあらめ。

この、まめなるこゝろさしをおもひやりて、

わか袖におつるなみたの玉かしはかゝるなさけをいつ忘るへき。

袖をひき馬くらをおさへて、多かる人々のなにくれととり〱に聞へたるに、いよゝ行なん空もおほへず。

わかれちにつくすまことの一言の身にしみ通る袖の朝かせ。

馬もやゝ遠さかれば、あとにむれたつこゝらの人々手をあけ、やゝと、もゝたひちたび斗叫に、送りそふ人とらも、馬の左右より笠をさゝげ手をあけ聲を合せて、やとこたふ。行〱高岡に登るや見へつらん、又やゝとよばふをかへり見やれば馬とくはせて、はや遠う隔りてあまたのこゑも仄に聞へたり。竹越自養こゝまて送り來て、いさとて皈りいぬれは尙こゝろほそく、宿のあるし貞政(マヽ)と、たくみ與之介といふもの、したしうこの夜の泊まてとて送り來けり。盲簪(めくら)坂なといふ處も過て、弓手のかたに雪のきら〱とつもりたる大山の遠からす見へたり、名をとへば杓子岳といらふ。このあたり、なべて眞白の山かさなれり。尙行ほと、ゆくりなうさと風吹おこり雨のふりきて、金神(かながみ)の坂もうち越てやゝ岩崎の浦やかたになりぬ。こゝよりめてにしはし行て、沙間といふいそやのあるに、相しれる萱森左兵衞といふ泉郎のもとに日高うついて、いよゝ雨風頻りなれはこゝに泊りをさたむ。送り來けるたくみしは、ふたゝひとてこゝろにないて別れぬれは、貞政と語り暮たり。

杓子岳遠望

沙間に泊る

五日。夜經よりの雨も巳ひとつ斗に晴てければ、出たゝんよそひすれはあるしかやもり、け

ふばかりはといへれど、餘波はいつもおなしといへは、すべなしとて、まをりよりよき馬ひき出て、これにのりていきねなとねもごろに聞へて、荷鞍の促して濱路しはし送り來て、馬よく追へ童とて別たり。岩埼の浦にいつれば、深浦に栖る問丸のあるし桃兒といふ翁、このころこゝに在りつとてうまのさきたちて、

岩埼におくの霜道見送らん。

しかいふ句を口つから聞へたり。さすかに名殘しられて、　別に寒き袖の追風、と附て、はやその人も遠さかりて、ふりしく雪の朝風いと寒く濱中といふ處のやかたを過るに、此あたりの屋の棟には木をうちちがへふせて、おほひたる塊の上におくは、外か濱への海士のやかにもしかぞせりける、その名を牛鞍てふものにひとし。此門に二柱の神門の如きものをくろ木もて作り立て、しりくへ縄をひきはへたるなとさながら神殿のことく、遠きいにしへふりを見るに足れり。はた篠葉に粢をさし貫きたるやうに、束ね付て軒ことにさしたり、これをほうじ事といふ。ゑのやまふを避るのためとか。このころ風のこゝちしてやごとにふしぬれば、此ましなひそありける。さゞなひ川を渡るほどに、こしかた行末もしらす空かきくれて、笠も衣もうち通るばかり霰たはしりて、馬も行なやみぬ。

濱中にて

さゞなひ川

あられふるきしへのをさゝなひくらし川瀬のなみもうちしきるなり。

久田、正道尻を經て森山てふ磯山也。（天註――左差内、正道尻。奈以或南比、もと澤といふ蝦夷辭、志利とは崎てふ蝦夷辭なり。むかしそれらが此あたりに住けんほとそしられたる。）此あたり面白ところなから霰うちふりいと寒く、弓弦前といふさゝやかなる流を渡りて、色かへぬ松神の村も降り埋れ、黒崎の名も白崎といはまほしく雪と浪との中に見へたり。

白髪が嶽

弓手の方に高き磯山ともの多かるなかに、尙秀たるは白髪か嶽となん。（天註――白神山、白髪の礒、松前の嶋に同名あり。出羽の國雄鹿の島にも同名あり、紀の國にはおなし名ところあり。）春秋のころはいづこも〳〵見ところなれど、今は山もとしよりてなと、馬追ふ子等がおかしきものかたりしたりけるを聞つゝ、

　こまかへる春やまつらんとしたかきしらかみ山の雪のをもかけ。

大間越

津梅川の橋渡れは大間越のやかた也。この椿飯河にて一とせ雲砂（天註――蛭石は仙臺面白川のほとりに多し。金雲母郎雲母黃色者別錄日雲砂青黃色方俗これを比流委司といへり。火に投して蛭の形をなす、のち金粉の如し。）を拾ひしことあり、そのころよりこゝに相しれる菊地なにかしがもとに中宿して、のり來し駒は返して、はたあるし、あしとき馬にくらおけ、山なかの雪路寒からんとて山羊の裘てふものをとうだして、これきてなとこまやかに聞へて關は越たり。このあたりまては見しところ〳〵なれば、つばらにはものせず。佛崎といふも經て、雪の中に高くかゝる瀧のなからは氷ぬ。

　山風にかたよる瀧のしらいともなひきしまゝに氷る岩かね。

木欒子坂といふを下りのぼり行、みちのべにその木いと多く、こぼれたる實をところ人のひ

境の明神
出羽に入る
鍵懸と笛瀧

ろひて緜に貫き、おもひの珠とせり。むかしは寺のありたりしあたりと話るを聞つゝ、陸奥と出羽の國とをおしわかちたる境の明神とて、神のほぐらのふたつまで片岨にならびたる。この神にぬさとりむけて出羽の國界に入て、菅生の崎といふもへて、いさゝかの枯生のあるに馬たち休らはせて、人々もけふり吹くゆらす。

あさるへき草もなかく〳〵かれはてて霜のすけふに駒そいはへる。

蘿(つた)の澤ちふ處に何の梢ならん大木のあるに、もぎ木の枝をひしく〳〵とうち掛たり。いつこにもある鍵懸(かんかけ)てふ名にいふ、けさう人をねんじて衢の神に願ふうらとひにこそあらめ。此下つかたに御瀧とて神の在すところありて、その瀧の落來る磯邊にいたり、一夜寝もせて笛なん吹て瀧の神に手向すれば、かならず妙なる面白き手を吹出して其道に名ある人もあれば、工人、あるはさるがうの笛、かうぬしが神樂笛、あげまきが草刈笛も吹手酬(たむく)るとて、いそなる掛水(たき)を笛瀧ともいふとなん。

うちそふる浪のつゝみも笛瀧のしらへに通ふ磯のまつ風。

小菅生崎も遙けくあとに過て日はくらく〳〵になりつれど、夕月夜、はつかに木の間より照りて山路たとるく〳〵、雪さへふりて袖重く身も冴へわたりて、八幡のおほん神とて、雄元(そのはしめ)の神を祭るちふ神籬の鳥居いくはくならん、ひしく〳〵と立るか月かげに見わたされたり。

岩館に入る

行末のそこともわかてくれなから月と雪とに道はたどらし。

やはら闗舎も近つきて猶さかしき路を下りて、あら垣のこなたに立てしはふけば、闗の戸おし明て、ゐだち立出てたそぞとはせて、宿はいづこ、宿あらずは保長（きもいり）をもてことわりつべしといふ。岩栖の浦屋形になりて（天註——津輕根子の浦の麻屑（いとくず）織、能代の浦の木綿絲割（かなさく）織、八森、岩館の麻苧剝（いとさき）織とて、あつ〳〵と織たる荒妙（あらたへ）を出せり。）菊地小三郎が舍（や）につきたり。

須藤有衛門

此浦の須藤有衛門といふか家に、親鸞聖人のおほん筆にて南无阿彌陀ほとけ、蓮如上人のかいたまふ畫あみだぶち、實如上人の御筆とて二通一巻の御書を傳へもてり。上祖は須藤形部左衛門、その子須藤兵部とともにみちのおくの武士たりしが、南部の亂を避て津輕の猿賀村にしぞき、此いで羽にいたり、かゝる磯山陰に田畠をひらいてすめり。さりければ、その孫の名（マヽ）を呼て有衛門崎といふ。近きころならん、しか岩館にそれかうからやからそすみけるとなん。

鰰の網漁

六日。星をかざして浦人のおきいづれば、われも手あらふ。鰰の網曳すとてこゝらの小舟こき出て、あれにあれたる磯の大濤のなかをやすげに乗りありく。かゝる冬の海の漁に、あら潮のからきめ見る泉郎の世渉りは、蝦夷の膃肭獸獵（か）るにひとし。岸の岩の上に男女むれたち、かなたよ、こなたよと、手を振り身を浪にひちて叫ぶ。（天註——神魚、みちのくにもあれとわきて出羽秋田の土毛たり。佐竹常陸介義重と小田讃岐守入道天菴の中一たびうちなこみたりしころは、此魚いと多かりし。佐竹家飽田に入給へは、又此魚秋田の海に多し。世の人のいふ、神魚は佐竹につきしたかふ魚となん。）

あひきするこゝらの小舟けふもはたはた重の波を海士のこくらし。

此魚なん、衣手の常陸の國、あられふり鹿嶋か崎、あるは玉ほこのみちのおくの西蝦夷の嶋べ、あるは津輕の海、阿字か澤の港、深浦の海、大間越の浦、出羽のくぬちは雄鹿の島なる南は船川、北は染川（天註―いにしへは北の郡染川といへり、今は北の浦とし、染川を相川とせり。北の浦より相川の浦のあたりまで、としことに神魚多し。南は船川の濱に漁れり。）のほとりにいと多し。この岩楯のうら〳〵かけてもとも多ければ、これを飽田の雄鹿鰰、八森神魚こいへり。秋の土用過て二十日一夜を經て漁津間といひて、いつもかんな月のなから斗、海のあれにあれて吹しふき、沖にこほ〳〵雷公かならず鳴也。それを委波通咩といふ、魚集てふ事をいへるや。□人の癖とて、集るをまつめるといふ、そのこゝろもていふにや。世に波太多雷てふ辭は此魚の名より起るや、雷の鳴り響をもて魚の名によぶにてやあらんか。此魚集の沖に鳴るをよしといひ、山にひゝけば魚のうすしといふ。鰰に黒女子、白咩寸、霰形、黄肌、黄金肌なといひて五の品あり。（天註―黄金肌は神魚のみならず大口魚(たら)又鮭の魚にもありき。）網するに起し網、小曳網、投網、すくひあみのたくひなり。すくひ網は五尋ばかりの柄長き網して、あら磯の岩の上にひねもす夜すから魚の寄り來をすくふ。おしあみは引網にやゝ似たり。投網はもはらとはせじとなん。漁のもなかは沖に鷗むれ、磯に鴉むらがり人さはに集り、漁りたる魚を斗ッ桶といふものにはかりてあちかにうち內れ、あらかひ買て馬におふせて、關山を越て陸奥にも

てはこひ、あるは能代の港、阿仁、比内に追行、雄鹿の嶋べよりは土避の港、久保田、仙北、由利、平賀、あるは酒田、最上越へもしてこれをひさく。眞盛の漁のころは、浦〳〵に魚舍(なや)ひし〳〵と立ならべて、松前の鮭の魚あびきのごとくあまのむら君ありて、もともふるきためしのこれり。その、こゝたあひきのころは磯邊に魚の山をなし、村はしにあらたにさもらひをたてて馬荷あらためなど、いとにぎはゝしう、なか〳〵の見もの也。さりけれどはや漁も末となりぬと、此鰰の、われからのごとに藻にうみ付たる雷子(ぶりこ)てふもの拾ふとて、かなくまでやうのものゝ、からいと長きも短きもとりぐしてかいよせてとり、あるは浪に打上まろぶ

濱傳ひ行く

をひろふに、雪はこぼすがごとくふれり。やはら浦傳ひするに、岸波高く沓をぬらしぬ。ふりあふき見る立岩とていや高く、越の國の根矢の鉾楯に似るあり。小入川の浦館に來る、此山陰に白貴鎔(しろかねふく)てふ處ありしなど話る。至らん歩坂(かち)といふが氷居て、馬人越へなやみて三澤渡りといふをして、瀧の間村をへて横間村に來る。磯山の嶺に藥師佛を神と齋ひて、鷄栖枯木

三内村

の中に見ゆ。岨路を下りて三内といふ村あり。津輕路にも三内といふ村あり、そこにて古瓦、埴輪のごときものを掘り得し事あり。そこなん、ふりたる地なれば寒苗(きむなへ)の里にてもやあらんかしとおもひしかど、おなし名のいづこにもありつれは、こゝろまどひたり。馬背内(ませうち)河

立石村

の早瀬に丸木ならへて、長き高橋を渡すをあやうくふみて至る、村を立石といふ。藻浦てふ

村とおしならびて、わいためかたし。此あたり、春は漁りにいとまなき處と人のいふ。ぶりこひろふとて女あまた行ぬ。

　かくむれて春は沖邊にあまの刈るもうらのやかた冬こもりして。

椿の浦

泊川を過ぐ

こゝをしはし遠さかれば、離れ磯のやうにへたゝりて見ゆるを雄島といふ。此嶋なかに清き泉あるてふ、いはゆる沖の井の此浦にもありけるものか。弓手に遠う見へたるは雨零(ふり)山といふか、冬は雪降り山の名におふ斗、中の間の帽子山とおしならびて、晴たる空の雪のなかめことにおかし。椿の浦になりぬ。もろこし船の來寄なんをうちもるさもらひ、高岡に造りなせり。此浦の家居さゝやかの住家、なへてならず內の清げに、圍(かはや)なとはかやをあつ〳〵とつかね葺て、塼(くれ)てふものをいたゝきにふせて磯邊にあまたつらねたてたるが、浪のうちよる中におかしう見やられて、風情なきものもことにそ見へたる。鹿(か)の浦の坂、泊川の坂とて二坂三阪を越る、うなの見渡しおもしろし。みちのへに蜮(ひきかへる)の形したる、いつさか斗の岩のさし出おほひかゝりたり。したつかたにちいさやかの祠あり、人にとへば畔神といひ、黑尊佛といひ、はた馬の神ともいふ。泊川を渡る。此川をさかのぼれば窟の不動尊とて、圓仁大師の大杉をもて作り給ふがあり。八森山の瀧の無動尊もおなし木にて、おなしう慈覺大師の造りなし給ふとなん。この岩屋にいたらんに遠し、いさなふ人もこゝろあはたゝしう、

行えすなりぬ。館ちふ村を岨に見て濱田の村に來る。鰤のまさかりにはこゝに役所(きもらひ)ありしなとかたりもて、馬追ひとく至り湯澤の村になりぬ。八森山の麓におましある阿遮羅明王の鳥居見へたり。まうでまく田の中のみちをしばし行て、御前近くうすらひとけ流る淨き山川あり、曲梁わたしたるを渡る。冬枯の中に松杉生ひて神さひたる村に寺あり、瀑布山天瀧寺といふ。（天註――天瀧院を近きころにあらため作りて天瀧寺とはいふ也。）文德の帝の御代仁壽のはしめに、圓仁大師の作り給ふみかたしろは不動尊、釋迦牟尼佛、觀世音菩薩、地藏大士ありつと。そのいにしへは河堂村といひて寶塔寺といひしかありたりしか、天慶七年甲辰の秋八月、地震大にふりうこきてあまたのいらか、村の栖家もなごりなう埋れしかは、このほとりより村を溫泉澤(ゆさは)にうつして、八の森あれば八森とは村名せり。その寶塔寺はいづらや。今瀧峯山松源院とて、むかしは天台たりしか曹洞になかれたるあり。驗者は慈光坊、泉長坊、此天瀧寺たり。是もむかしは寶塔寺の末たりといふ。不動堂いと大に作り、洪鐘に瀑布山としるし「山本郡八森村別當天瀧院」と鐫たり。堂の弓手の後に大瀧あり、なゝさか斗の劔をふたふり、瀧のもとに、ふたはしらの鳥居のごとくたてり。落來る瀧の頭に小祠あり、又紫銅の不動あり。朽木のごときもの立り、これなん、そのむかし圓仁の作りたまふをこゝにをさめたりしとそ。

ふりつもる雪より雪のおち來かさ瀧ついはなみかゝるはけしさ。

駒の鈴の音

やはら湯澤のうまやに出たり。このあたりにひきかふ駒に、須利氏(すりで)とやいはんいと大きやかの鐸を十あまりをもづらにつけて、土毛(くにつもの)もてはこぶにてやあらん、さゝやかの俵ふたつおはせたるやつこ馬のはぎよはげに、かしら重げにうちふり遠近に聞へて、此鈴の音の妙なる事ものに似ず。俵ひとつに二斗五升のよねを内(いれ)て、四の俵をもて一石として、よき馬は四ッもおはせり。しりより來かゝる人いふ、中路してきのふ行しか、ふかぬかりして一足もなか〱ゆかれず皈りき、けふは濱路より行なんと、女名形の村を左になして雄沼川、水澤川、あるは高谷野(こやの)川、沼田河を渡りて、濱路はる〱と過れば竹生といふ村あり。菅大臣の森の雪の中に見へたり。

いやつもる雪にたかふの一むらはひと夜のふしに埋れにけり。

いもわらじ

須田といふ村に入りぬ。疱瘡(いも)わらじとて、ひとつちの大わら沓を懸て「輕部安右衞門宿」の札をさし、紅の四手とりかけて軒に見へたり。もかさのやまふありとはしられたり。落合の村より坂のやうなるところを行ゆきて、至る河のへを鹿之丈、あるは鹿村といふ。もと鹿

向能代

の津といひしがふりにし名也となん、今は向能代とはいふ也。このあたりに古城のあとゝ

米代川渡り

おほしき處、弓手の川岸に在り。やはら舟にのりつ。此水なん、陸奥鹿角郡七時雨山のしただり、あるは、「大空に渡る千鳥の我ならば」とながめありける狹布の渡なとも落そひ、かの、

能代の湊

だんびる長者の養老のものかたりある米代川もひとつに落會て、この能代を米代古河の港ともいふとなん。此河の渡りあやうく、舟こぞりて岸遠くやゝつきたり。冬ふかうなりては厚氷の上を人むれてかち渉りし、雪舟に米つみて曳わたりて、往復やすしといふ。山王の杜を馬手に能代の湊になりて、河端町といふ市に出て尾張屋といふ問麿、伊藤氏のもとに宿つきて暮たり。酉ばかり錫杖を引めぐり、戌のときになれば火あやうしと木をうち、亥の時まをすにはつゝみうちありき、更掫うちめくり衢の板を打ち鳴す。

古き渟代郡

七日。雨いやふりぬれは出たゝず。こゝをなかむかしには野代とかきつれど、近き世となりて能代とかいあらためしといへり。想ふに、伊勢の國多度山にも能代の宮とて、天照太神のしはし宮居ましまししところあり、おなし名もありけるものにこそあなれ。遠きむかしは渟代の郡にして、そのみやつこ沙奈具那のすめりしところは、今いふ鹿村の邊りにやあらん。齊明天皇の二とせ丙辰の卯月のころ、阿倍臣□やそまりのふないくさをいたして、蝦夷とたゝかはしめける事なんありき。齶田、渟代、二の郡のゑみしら怖れて降れり。はた、渟代、津輕の二郡のみやつこをさためおき給ふたるところにして、今も能代、津輕と、ちかとなりに闘をへたててならひたり。

名産春慶塗

九日。あるし伊藤氏の舎兄（天註—舎兄をせな、舎弟ををちてふくに辭たり。）加藤なにがしにいさなはれて、そのぬし

の栖家富町といふに至る。この能代に名たゝる春慶の塗師あり、それか上祖の末にて加賀屋三九郎とて侍ありて、三方、四方、折敷、掛盤なと塗りなす。その色あへかに、山吹の露にぬれたるがごと黃金の光せり。三九郎か弟子たれど、萬町の莊九郎といふか塗りたるをもはらよけんと、こと國の土産にせり。この黃色は、桃黃を以て蟬の小川の水に解て下塗しけるか（天註――攝津船にたのみて、一とせ五升斗加茂川の水を汲ませり。此水は上品の器を塗るにもちゆとなん。）、いたくひめて傳へこと〳〵にありとなん。又千代子か飴、松葉屋が十字、はた傾城（くゞつ）の唄ふ間雛ぶしふりたれど、今は絕へにき。

この浦なん、春秋は鰯の網曳をもてとみ榮へたり。遠きむかしは、海士の栖家はつかはかり小栖岬（はな）といふ處に在りしを、姨が懷といふ岡邊にうつり住居して、小館鼻をは舊野代（もとのしろ）といひし。弘治二年に清水治郎兵衞、後に清水河內政吉といふが城介實季に仕へまつり、今の野代にうつりて家居あまた軒をつらねたり。この清水政吉のすめれば、そこを親町として名を大町といへり。（天註――永正大永の頃は小栖岬のほとりに野代ありて、浪にうち崩れて後に米代川よりこなた大森てふ邊に移り、亦姨か懷に家居せしころは清水善兵衞住て、政吉の世に大町に居をうつせり。その遠つおやは加賀の國より來て、しはし雄鹿の脇本に在りて、水陸のたより能きところもとめんのこゝろさしありて此能代をひらけり。）元祿七年の地震に、家居なこりなうふりこぼれて人多く死ぬ。その十とせを歷て寶永二年四月に地震して、こゝらの家ども倒ふして人々泣まどひ、こはあさましの世のありさまとうれへり。里の名も野と代るの文字ふさはしからじとて、能代（よくかはる）とかいあらためでんと越前屋久右衞門といふがうたへ申たれ

ば、うべなりと、くにのかみより仰わたりて能代とは書つ。荒町の名も聞よからじとて、萬(よろづ)町とそ熊谷茶左衛門といふか附たる。そのころならんか菱屋和八といふ翁の、こゝより松前渡りの鍼路(ふなみち)をさためりしが、今はその菱屋小路の名のみ殘れり。山王の神門の額に、日吉宮とありけるは都護亞相公の御筆也。永正のむかし、清水善兵衛某の夢のみさがありて海へたに至るに、木の根の童形なれるが浪に寄來けり。こは、まさしの夢のおほみさとしにたかはしとて日吉の御神とこれを齋ひ奉り、姨箇懷に社を作り、はた慶長のころ、今の安久度(あくど)にみやところをうつして、その神像は赤銅の帑に內(をさめ)て、ゆめこれを拜み奉らんことかたし。寛文のとし御殿も大に作りなし、中の申とて卯月の二の申の神事をまねび、六月十五日のかんわざもはしまりてとし〳〵にぎはゝしう。別當とて金松山鳳來寺を、近きに改て鳳來山能代寺とそいふなる。これや天明開別天皇の御世に、日吉の御神淡海の國琵琶の湖辛埼のほとりに現形ましまして、琴の御館の宇志麿に移託ましまして、日枝の山脚に鎮り奉れり。恒世といふ人粟の御饌をさゝげ奉れり。この能代の海にげぎやうしましませしをいたゞきまつりし清水氏は、牛丸、恒世のたぐひにして、神輿の大町を過るに、駕輿丁(かよ)かならずこゝに舁居(かきすえ)奉れり。清水の家よりは神酒、御膳供をさゝげ奉る、しか〳〵。（天註……清水氏の大町の居館を享和のころ般若山の麓の原に、うつして、家の跡には祠を建つ。日吉の神事の日、神輿を清水の舊宅の地に休らはせ奉る也。）

住吉社緣起

神體八幡神

十日。人にいざなはれて、眞住吉の神のみやごころ、いと清げなる松原に在けるに詣ぬ。この神雛はしめを浦人の傳へにいへらく、陸奥の毛布の郡より出ながるゝ米代の水尾と、千福の緒婁の川の流の末とひとつに落會て、しか浦の名をも落合とぞいふなる。その水のみわだに神在せり、これなん鰐田の浦の神知りたまひなんと、ゑみしらがよごとをはなちて誓せしおほみ神とも聞へたりし。さりければ、大化、白雉のそのいにしへより落會にしづもりませしことのいちしろけん。それよりもゝいそまりのとしをへて延暦のころほひ、阪上田村麿蝦夷むけ給ひしいくさのきみにして、しるしの御幡を落會の社にをさめて、譽田のすめらみことのみたまを齋ひまつり給ひつと。なかむかし地震ふりて、面の河の水勝平山の麓にこぼれ落て、土剣の湊とはなりぬ。米代の水路もかはりて、此神雛のあたりも大濤にうちこぼたれて、流れ洲の派にみやしろの立せたまへば、中隝の八幡、あるは蝦夷平の八幡と唱へ奉りてとし久しかりき。河のこなた大森てふ處へ落合の浦人も越へうつり住つきて、そこも亦野代の浦といひたりけん。城介實季の世に、その八幡のおほみ神を般若野といふ廣野に遷し奉りて護國山般若寺といふ。はた大社の座あり、こは三の筒男の神をも般若寺の社にうつし奉り、近き世に少彦名の神をもおなしう此みやしろのうちにあはしまつりて、三はしらのかんたちぞおましましける。やはたの御神はまさしきかんさねにておまし

龍神宮由來

ませど、誰れもさはとなへ奉らで、もはら住吉の神のみぞあがめ奉る。此神垣の外に池ありその池の心に嶋ありて、さゝやかのほぐらを居たり。近き世の事になん、三日潮の播磨潟女鹿てふ浦の鹿子、渟代の遊女にふかからんそら契りをして、はりまへいざなはん、とく大船にしのひのりねとて夜ふかくぐして小舟にのせ、くひれころし、しづみをかけて人しらず水門にうちはめたりしかば、ゆくりなう風吹おこり、大浪の磯もとゆすりたち、大船にありとある人とらみなくつがへりしづみたりとなん。今も播磨船の泊すれば、風なきに浪いやたち鰐の出てはひもこよふ。又こともなう水門のうちふたがりて、こと國の船も入くべうすべなければ、くゞつのみたま、あらふるこゝろをましますなゆめ、あはれなきたまを神といはひ祭らんとて、海べたに小祠を建て齋ひしかど、をりとして浪にうちとられてければ、此池の心にかねて在しける神とあはして龍神と祭りぬ。海あれ水戸のくへふたかれば、問麿、浦のゑだち、播磨船や寄りつらん追ひやらへと、浦ののりいつくしうさかしもとめてけるは、津輕のうら〳〵にて丹後船をいみきらふにひとし。はた、春はいや咲白藤のはひまつはる齋

酒解神社

槻のほとりに酒解の神の社あり。こは、かんあだかあしつひめとも、木花開耶姫のおほみ神とも申奉れり。吾田鹿葦津媛、うらへ田を名づけて狹名田とのたまひ、その田に佃る稻を刈もて天の甜酒をかみして、これを瀰波奈比たまひしおほん神也。さりければ、田殖の神事あ

りける住吉の御籬の内にうつしまつるも、ゆゑよしのあらんかし。此八幡、住江の神につかへまつる験者の、遠つおやより三世にあたりて前晩翠堂尊爲法印桂葉は（天註――今云淳代寺の開山は永祿の年の尊長也。其二世の尊榮也、三世尊爲にして桂葉、四世尊閑里鶯也。五世尊亮春鳥也、六世尊（マヽ）春北、七世尊□（鳳來山より入院たり）、八世尊隆、九世尊乘大光院、十世尊妙淳代寺也。）、雄鹿の浦回の温泉山に在る太上神仙につかへまつるけんざ、龜尾山長福寺常樂院の尊榮の子也。こゝろさしふかゝりし人にて、そのころ都に在りて北村季吟にものまねびせり。その子尊閑里鶯もおなしう北村を師とたのみて、ぐゑんじもの語十五箇のひめたるすぢ〳〵を傳へ、亦日本紀の局傳といふ事もせり。此里鶯吉野の皈るさ、むさしにすめるころ雉子橋の向南亭に至り季吟に見へて、一日清話抄といふを書て父桂葉の土産とせり。桂葉亦衙足をあらはし、里鶯、山ふところといふ書をかけり。はた、あし分舟のさはる事ありて雄鹿の嶋山に身をしぞき、世にかくろひて「埋れ水」及「日陰艸」といふ二巻の册子を編り。桂葉や身まからんとせし三日斗さきつ日、里鶯に筆をとらせて自のなかめし百首の和詞をかゝせて、寶永三年丙戌の六月二十七日の事になん、「行水に根をはなれたるあやうくさあやうききしをあとのしらなみ。」とて、八十三にしてをはりをとれり。桂葉の手して「花と見ん波のむかしのあとたへて霞そこゆる末のまつやま。」「一こゑは夢にもかもな時鳥うつのやまへのうつゝならすは。」「彦星のあふ夜すくなき恨にはあまの川浪たちもまさらし。」「思ふ事こゝろひとつに埋

火の埋れてのみ過るころかな。」と書るか殘りぬ。又元文二年丁巳八月廿一日「玉ゆらの露にやどれる月とても此世の外のものとかは見ぬ。」と書、里鶯のとし八十七にて身まかれり。

渟代寺遺物

般若寺を近きに大光院といひ、今渟代寺とあらためよぶ。この寺に桂葉のふみ、里鶯のふみとものこりたるを傳ふ。亦紅葉の文臺といふあり、季吟のたまものなりともいへり。あるしの優婆塞尊弘の物語を聞つゝ、しはし休らひてこゝをいづ。

長慶寺と德善寺

此能代に寺〳〵いと多かれと、ふるきはむかし比内の郡田代山の麓に長慶寺といふ天台のふる寺ありし、此寺の號をうつして長慶庵とよび、弘治のころ、長慶庵を萬年山長慶寺と改て曹洞たり。はた淨光坊といふ一向の庵あり、これを圓命山德善寺となして、淸水の家に加賀の國より傳ふ親鸞聖人の筆にて九字、十字の名號、繪佛師の畫るあみだほとけを寄せて此寺の寶とせりけれと、今はあみた佛の畫のみかたしろのみにて、九字の名號、十字の名號も火のためにうせたり。長慶寺の額は、支那心越のめてたうかけり。此二の寺は淸水氏のおこしたるもの也。

大窪山光久寺

渟代寺の近となり、般若山の麓に大日如來堂あり、いとふるき佛也。慶長のはしめ米代古川のみなと、この能代を奉行たりし大久保三河守光久、大日堂にすりをくはへてんのこゝろさしむなしう身まかりき。光久の子、大窪丹後の建られて大窪山光久寺といふ。光久は和詞にこゝろさしありける人にて、あしな統のわかれの時なかめられし歌なとあはれふかし。此大日

砂留の松林

長尾祐達

久保田に向ふ

如來は、いとふるきふみにもかい聞へしといふ。

十二日。ふたゝびとて能代を出つ。日撰(より)山の峯も尾も松多し。むかし西風のいさゝかたちても沙吹あげて、家ごとの窗に吹入て往來たゆばかり、人々是をうれへとせり。寶暦のころ、こゝにすむ白坂新九郎、鈴木助七郎といふ二人の武士、かくなん公にうたへまをして、あまたの人を促して沙留に松をひしく〳〵と植させ、後又般若山の尾ごとに、ぐみの木、かうかをも人々植て、風つよく四方にたちても沙吹來うれへなけんと、その功をおもふべし。しかこの事をかゞなへそめしは、くすし長尾祐達といふ人也けり。此くすし家の風はいふもさらなり、もの事にたづさはりてこゝろさしふかき人にして、こゝろさまもことに、己か栖家も穴居のごとく深く埋み穴に作りて、冬はあしの尾花を衣として着て、やま人の市にかくろふがことし。春もはや時正や近からんころ鹿津(しか)村より人來るに、此米代川の氷の上を雪舟(そり)にのりて行つるを、人々、氷(しが)あやうし、はや岸はなれしたり、とゞまりてとひたにいへど、我いたらずばやまうごや死なん、いさひけとてひかせつれば、氷のやぶれてつぶりと雪舟ながら落入たり。人々さはぎたてど、いふかひなう死たりと。しらぬむかしがたり聞つゝ袖かつぬれて、出戸、長崎、坊か崎も經て橋渡りて、大内田(おほちだ)といふ村左に見へ、かしこごころといふ村名もゆゑありげに聞へ、鹽辛田といふもあやしの村見へたり。祖神堆、大曲りといふ野

脚摩乳の神

一日市

若宮八幡宮

廣く、雄鹿の赤神が岳、寒風山などいと寒げに雪ふれり。

たひころも身に寒風の山ちかくみるめなきさの氷る水海。

しづくらに似たる山の三なん湖水のへたに在れば、三鞍岬の名はありけりとなん。此山かげ、湖際に夫殿窟（をとこのあな）とて窟のありき。脚摩乳の神を齋（いは）ひてさゝやかの寒泉あり、鬢水とそいへる。ゆゑをとへば、此湖水に八岐の虵を平給ふの神事あり、葦崎（あしさき）の浦に姨御前の神といふ社あり、此神は手摩槌の神にして、水をへだてて、めをのふたはしらのかんたちのみやゐそありけるとなん。鳩の崎といふ處など面白のながめ也。夜叉が袋の蝦夷の湊などいふ處も經て、一日市（ひとひいち）の浦やかたにくら〳〵に來て宿つきたり。

十三日。つとめて舍を出る。弓手のかたに、押切といふに寺あり。此寺は浦といふ處よりこゝにうつして、むかし花嶽山石頭寺といひし。寺の門の外に祠あり、若宮八幡と齋ふは三浦義包の靈魂也。そのゆゑは、三浦介平義明の後胤にてそれの年鎌倉を出て、出羽の國に來て秋田城介實季の身うちとなりて、森山鷹岡の麓、浦といふ處に館をかまへて居れり。三浦兵庫頭義豐といへり。其子五郎鷹義包の代となりて、義包の伯父なりける三浦九郎某といふねちけ人ありて、義包を讒して、五郎義包を北野といふ牧にてうたせたりとも、亦土埼の湊べ、永覺寺町といふ市中にてうたれたりしともいへり。そのうらみのつもり、亡魂人にた

大河渡りて

中野村

小夜莚稲荷

土崎の湊

たりをなしてければ、人々これをかしこみ恐ち怖れて、義包のなきみたまを神と祭ひ(いは)、五郎義包のしはし栖るこの押切(おつきり)といふところに社を建て、義包の木像を造りて三浦五郎の社といひ、はた若宮八幡ともとなへ奉るといふ事しか〳〵。やゝ大河の舟渡りせり。此源は馬場の目の奥山、あるは山内川(さんない)もひとつに落合て五城の目を經て（天註 ― 八森山内、五十ノ目山内なといひて、三内てふ村名の三四もありとなん。五十の目、或五城の目ともいふといへり。）こゝより湖に流れ入る末も見へたり。かくて今戸、飯塚、妹川(いも)、虻川、大久保、新關(にひ)に至りて湖水のへたは離れたり。大清水といふ茶亭にしはしは休らひて中野村に來けり。こゝにたうとき神の在すは、天平のむかし齋ひし神垣にして今は羽黑權現たり。此邑の、大龍寺の優婆塞の仕へ奉るとなん。こゝを經て、小松生ひ茂りて朱の神門の弓手の岡に見へたり。こは小夜莚といふ稲荷の在すといふを聞て、

　廣前にきねかいもゐのさよむしろしきて塵寝の袖やさゆらん。

狹夜蓆(さよむしろ)にはあらし、左右衛門四郎某といふ人のむかしこゝに栖めり、應永三年の春ならん飯形の社を阿倍康季の建られしが、いくとせをへて神祠もこぼれたるを、はた近き明和のとし、ふたゝび興したてて人まうでり。大龍寺の驗者これにも仕へ奉るといひ、馬(は)蹄坂といふ小阪あり、これもむかしは阿倍坂といひしなど、こまやかに人のかたれり。土埼の湊になりて、萱村町と菻(がつぎ)町とのあはひに内の宮をうつし奉るあり、いとふりにしよしをいへり。や

湊の城跡

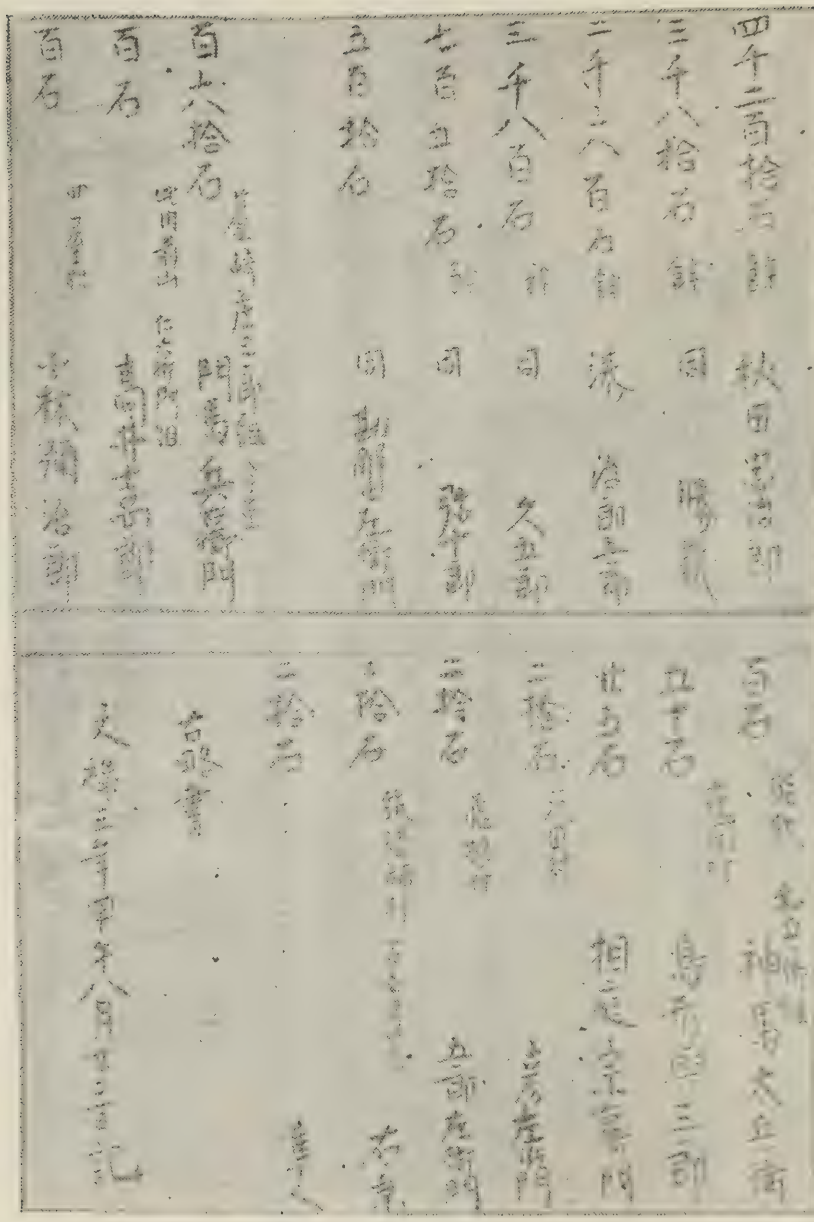
秋田實季

はら永覺町といふに來る。（天註―菻を此里にてがつぎとよめり。加都美にや、菻のたなるをいふ也。むかし此あたりに永覺坊といふ修験者ありしか、今町の名と殘れりとなん。）太刀洗川とて小堰のごとき流れあり、三浦五郎義包か火矢にうたれて、その頸をかいて、血にまみれたる太刀をあらひたりし物語のありき。能代にてなつさひし、矢守なにかしのもとに宿つきたり。（天註―矢守氏は常陸國より來ける兵術の家たり。萬治のころ爰まかれり。今いふ矢守稻荷の祠あるは此上祖の祭るといへり。むかしの禰家は新町にして矢守坂の名あり。）

十四日。雨零れば、あるし矢守氏、津輕の竹越氏など埋火のもとに集て、なにくれのものかたりしてくれたり。

十五日。つとめて神明のみやところにまうでぬ。このあたりは、いにしへ湊の館とて在りし城跡也といへり。これは陸奥の津輕十三の湊にすめりし安日の後胤にして、いくさのきみ阿倍の比羅夫よりたうばりし阿倍氏の末ひろく、康永のとしこの出羽の國河北の郡、今いふ檜山の郷なる霧山の城に在りて、足利尊氏より秋田、山本、比內しか此三の郡を賜りて、秋田城介吾妻太郎實季までふたもゝとせあまりをへて、天正のころ實季、あか甥土崎九郎逆意ありとて、かれを攻て此城をとれり。又日內の扇田の淺利と戰ひ勝て、こゝろにかゝる雲もなう功世にあらはれしかと、常陸の國宍戸にうつされ、はた、つみありて伊勢の國へうつされ給ふ。（天註―關箇原のみたれにいくさいたさず、出もむかはで、たゞ一族のみはせのほせて、湊の城に籠り居られし罪にてやあらん實季宍戸にうつされ、亦朝熊へ左遷せられ、その嫡子河內守阿倍俊季は陸奥の三春へうつり給ふとなんかたりつたふ。）この神籬の外には山舍布とて、人々のなりところのあまた軒をつらねたるがごと

秋田城介實季家分限牒


四千二百拾石餘 秋田[illegible]
三千八拾石餘 同 [illegible]
二千二八百石餘 湊 [illegible]
三千八百石 餘 同 久五郎
七百五拾石餘 同 [illegible]
五百拾石 同 [illegible]
百六拾石 [illegible]
百石 [illegible]
百石 [illegible] 小林[illegible]
百石 [illegible]
五十石 [illegible]
廿五石 [illegible]
二拾石 [illegible]
三拾石 [illegible]
二拾石 [illegible]
二拾石 [illegible]
文禄三年甲午八月十三日 記

に多かるあたりは、そのむかしの往復の街にて、としふる榎塚の殘れり。あはれ實季の君さがなきゆゑとやおほしけん、この土避の城なる柏木のもとにたちて、「風さはく廣葉檞の世の中やうら上反る人そつれなき。」とながめて、こゝなん立しぞき給ひしとか。

竹越氏袂別

十六日。津刈の竹越氏、はる〴〵と此土崎の浦まて國をへたてて送り來て、けふなん陸奥に皈りける。なこりやらんかたなし。

實季の手蹟

二十五日。こゝに日を經て、淳代の伊藤氏ありて、あけくれめやすくかたりぬ。ある日越後屋なにかし、實季の手にて書るぐゑんじわか菜のものがたりの、めぐりの火にやかれたる冊子の、やゝ文字殘りたるをとうだして見せける。その手ぶりことにめでたう、うべもこゝろさしふかかりつる君たる昔を語る。やかて遠波多也といふ問麿にうつりて舍りぬ。

寺內村

斯波須のなからばかり、通地左吉の浦を出て弓手の雪の岡に大なる石の塔あり、是をしるべと船の湊入すといふ。寺內といふに至る、古四王の堂大に、あまたのいらか作りかさねたり。此あたりはゆゑいと多き古きもの話のあれば、ふたゝびこゝに來て、ねもころにとひたつねてん。高清水のふる城や、いつらの世にゐしは誰れならんかし、いさしら雪の上を乘り

少林山西來院

つる雪舟(そり)のはやく、めてに五百阿羅漢の堂を興し建んと、かりの御堂を作れり、少林山西來院といふ。もと此寺は久保田のひんかしにあたりて、松原といふ處に在りしをこゝにうつせり。松原村には、萬里小路中納言藤房卿世にかくろひ出家して、良雄和尙といひて、貞治のころひらき給ひしよしを語る。この君のふるあとゝてこゝろ〳〵に聞へ、かしに有るてふ事はみな空ごとにて、うべも都に遠き國やもとめ給ひてんかし、倘その松原のあともとひ見まくおもふ。

油田を過ぐ

むかし古四王の神にみあかしの代(しろ)を寄せられし、油田(あぶらでん)といふ邊の坂を雪舟さとおとしやりて、臭水(くさうづ)涌き流るゝ川を橋より渡て、ふかく雪に埋し石佛見へたりしあたりは、鈴か森にひとしう、つみんとのをこなひありしとなん。かゝる石腦油をけふりとして、墨なん製(つく)らまくほりすといふ人あり。おもふに、いにしへ、こまうどの法師雲徵の作れる墨なん紀の國に在りし、それなん石液のたぐひにていとよからぬ品にや。「逢事を松にかけたる藤代の墨に名高き楮(かぢ)のたまつさ。」といふ冷泉爲重卿のながめあり、そのむかしもありけるものにや。

矢橋山王の櫻

矢橋といふに、山王の櫻とて名たゝる花の木あるちふ、朱なる塔とともに雪の下に埋れたり。

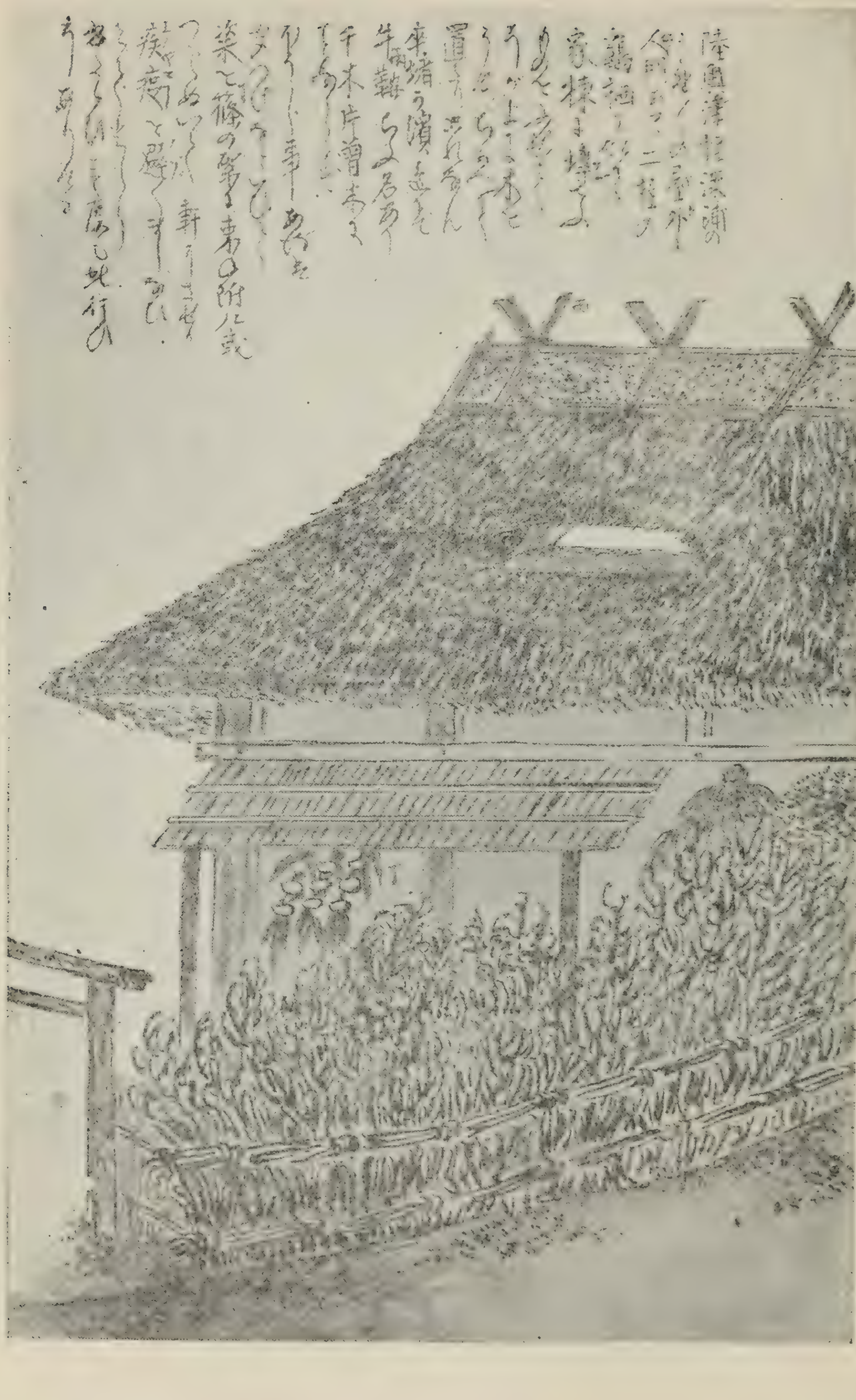
春はいかに櫻の梢花もさそゆきもとをゝに見ゆる一本。

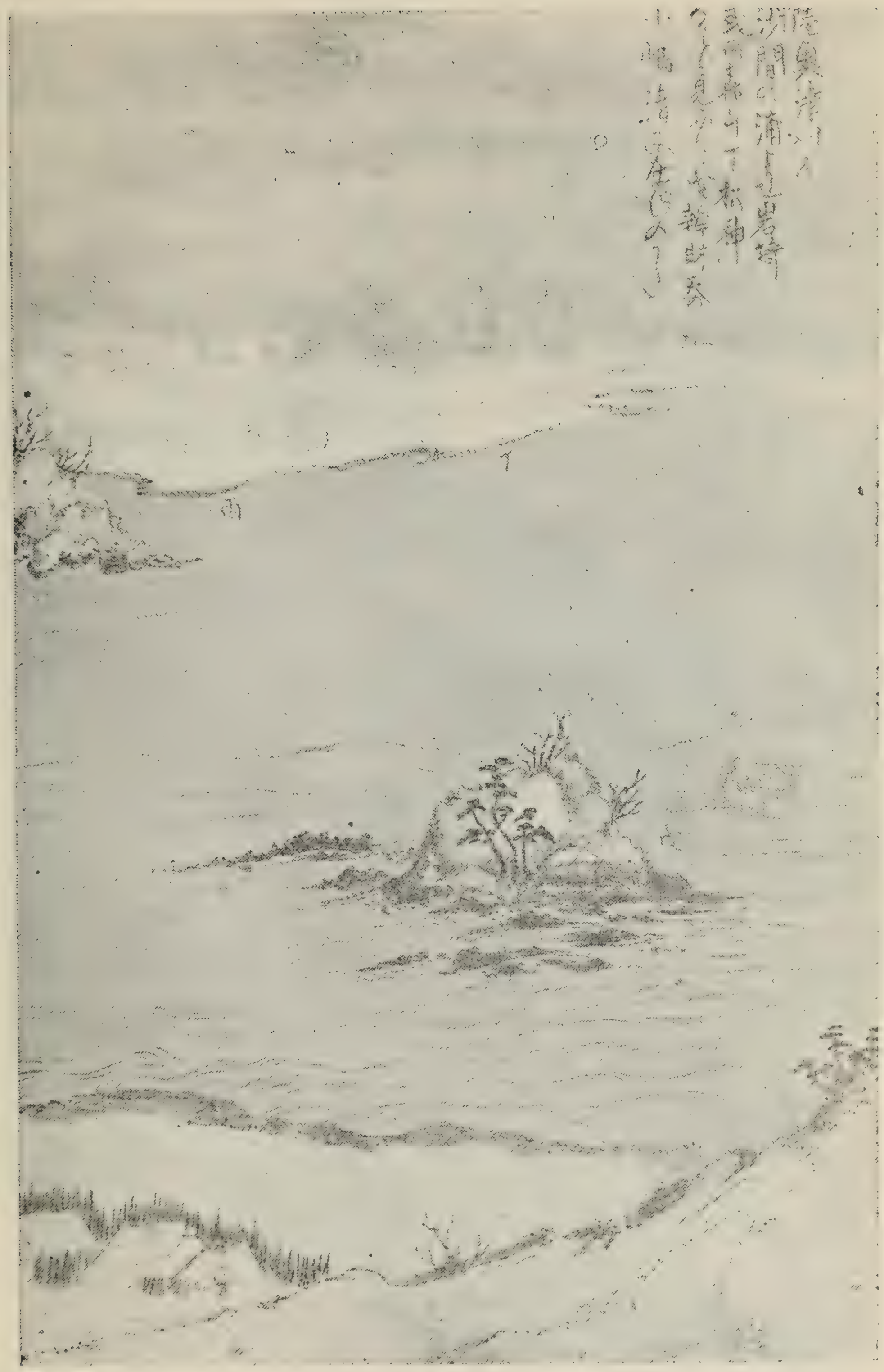
良久の家々

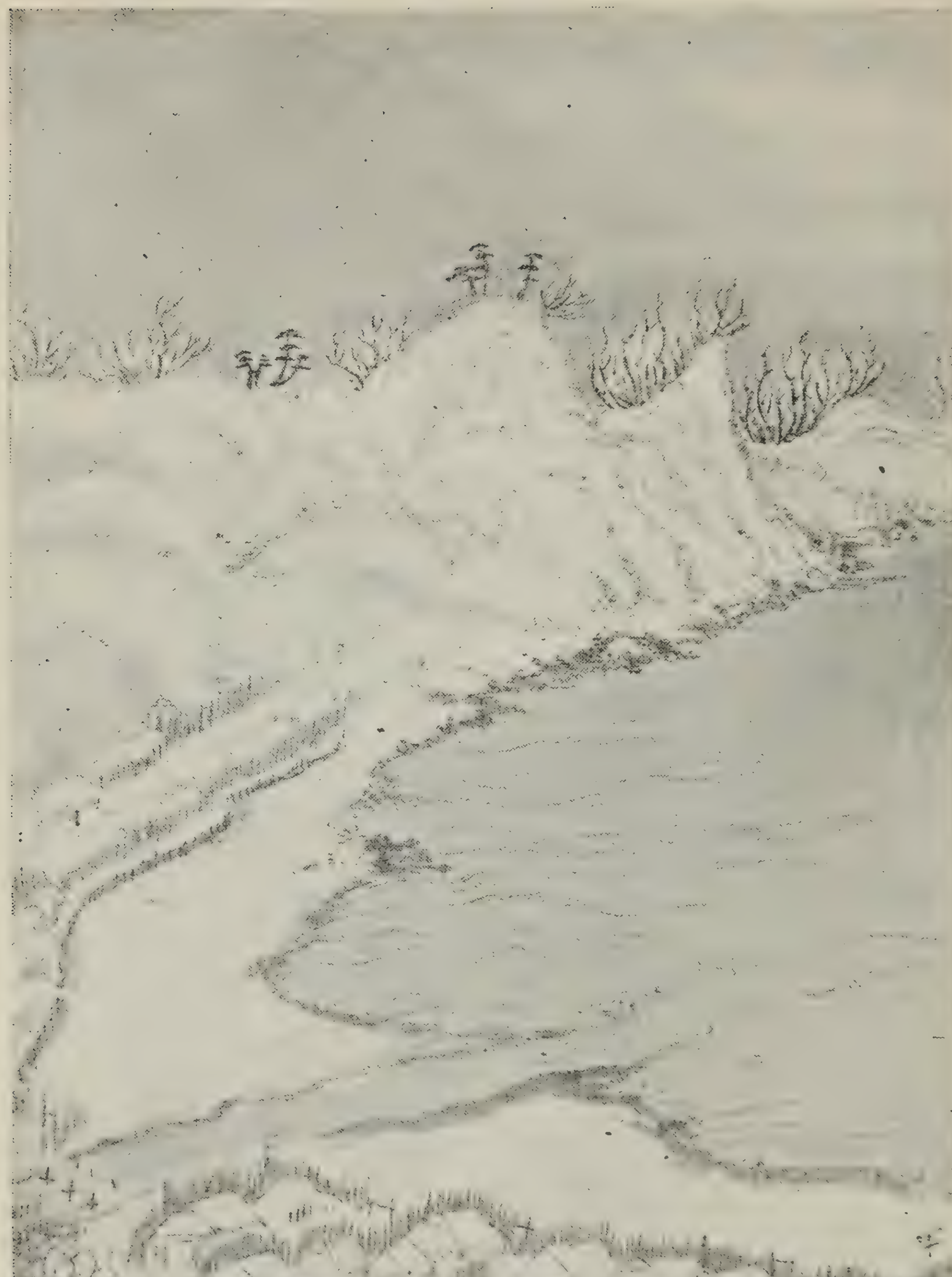
壽量院といふ天台あり。かくて下町ちふところに來り、軒もせにつるきの袋、阿堵物の帒、

皷、雪沓、したうつのたぐひを皮もて作り掛ならへてひさぐは、良久とて、ゐとり、かたゐめけるものらが栖家とはいへり。久保田になりて鐵砲町といふに、高橋なにかしとかいふ宿のみぎりに植たる松の流れ枝いとながやかに、隣の軒ばまてさしおほひて雪を帶たるすがた、ことにめつらしかりき。陌いくつを經て委斯多なにかしのもとに來つゝ、かたらひくれたり。

久保田に入る










出羽の國







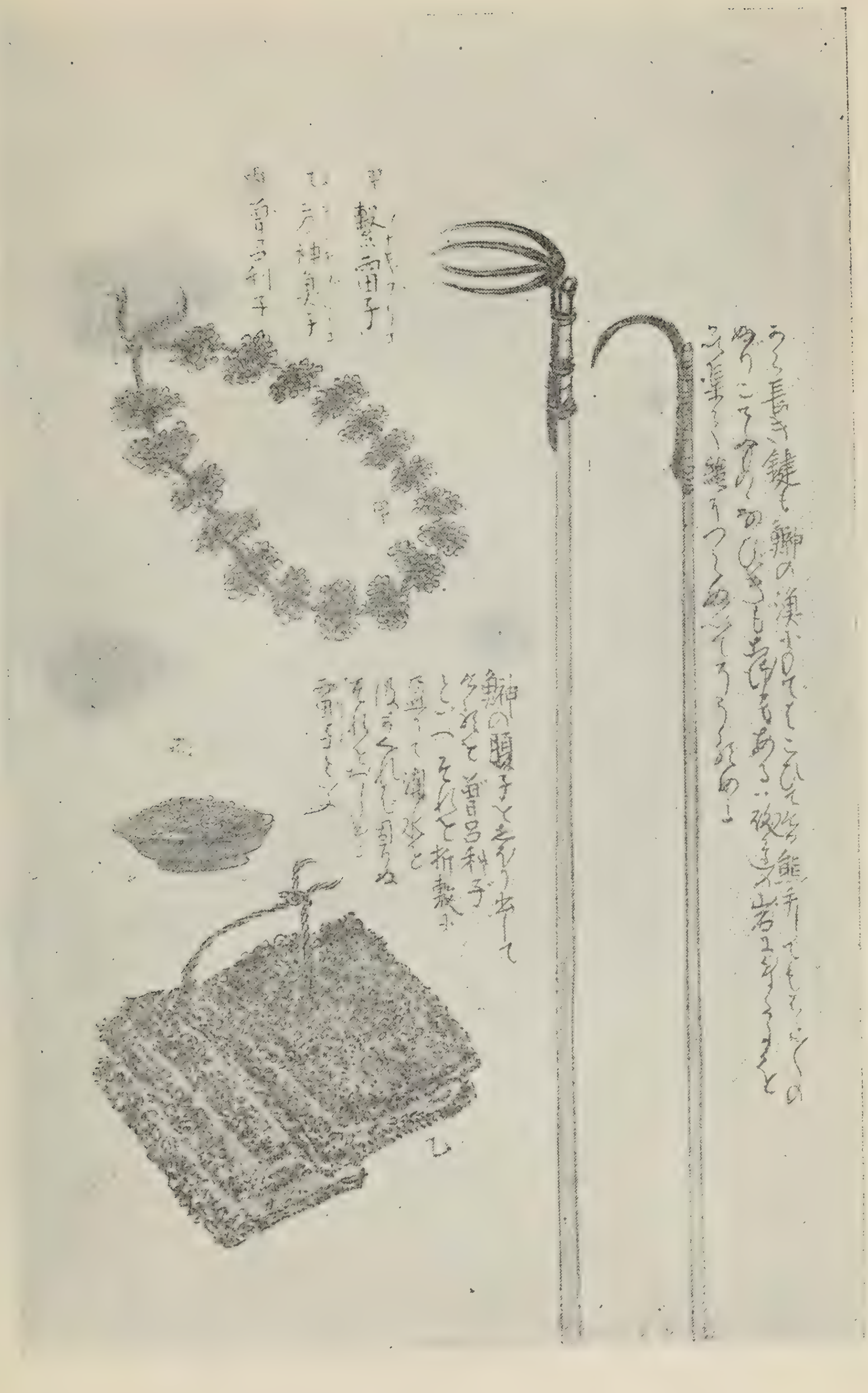






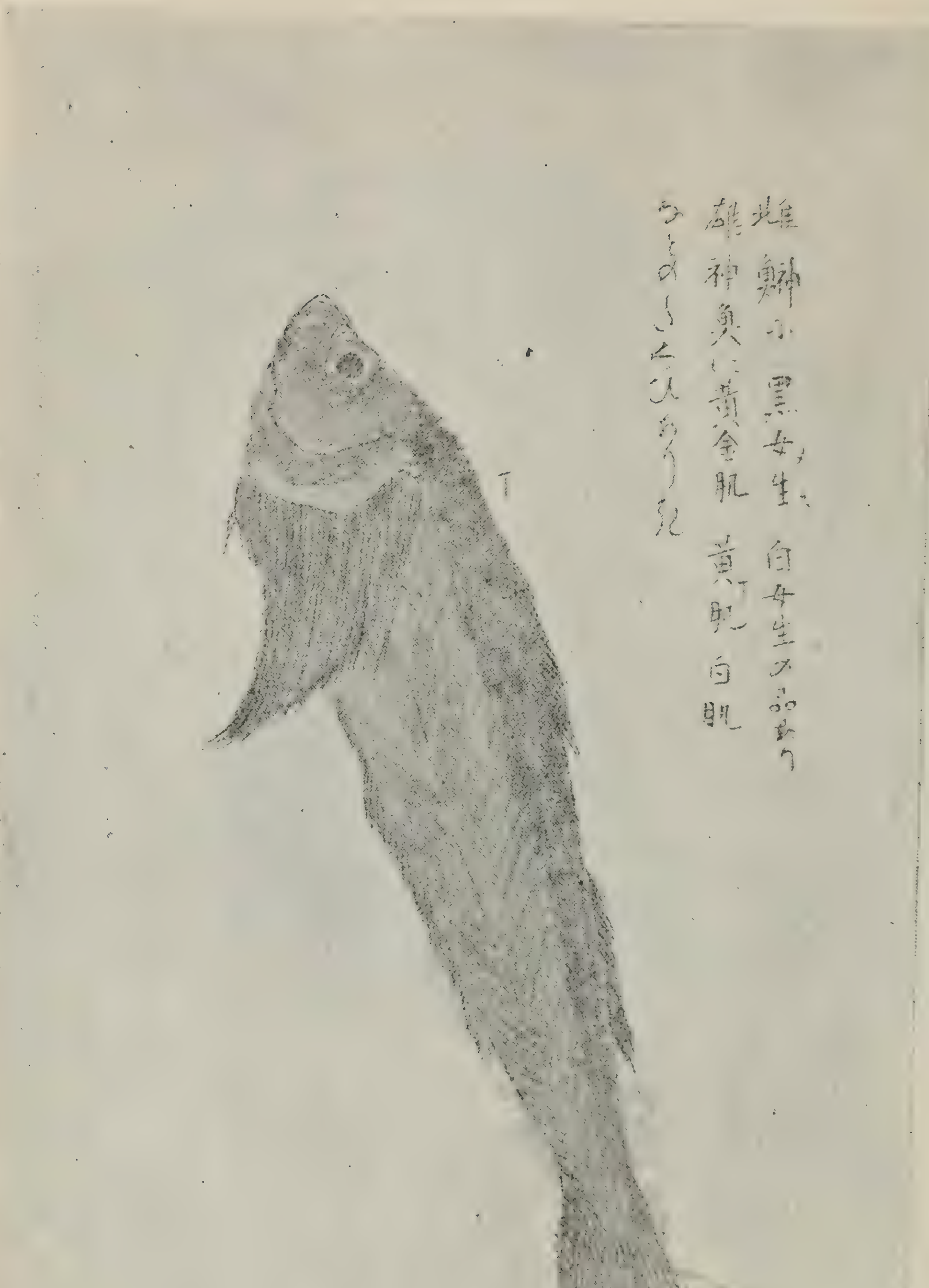


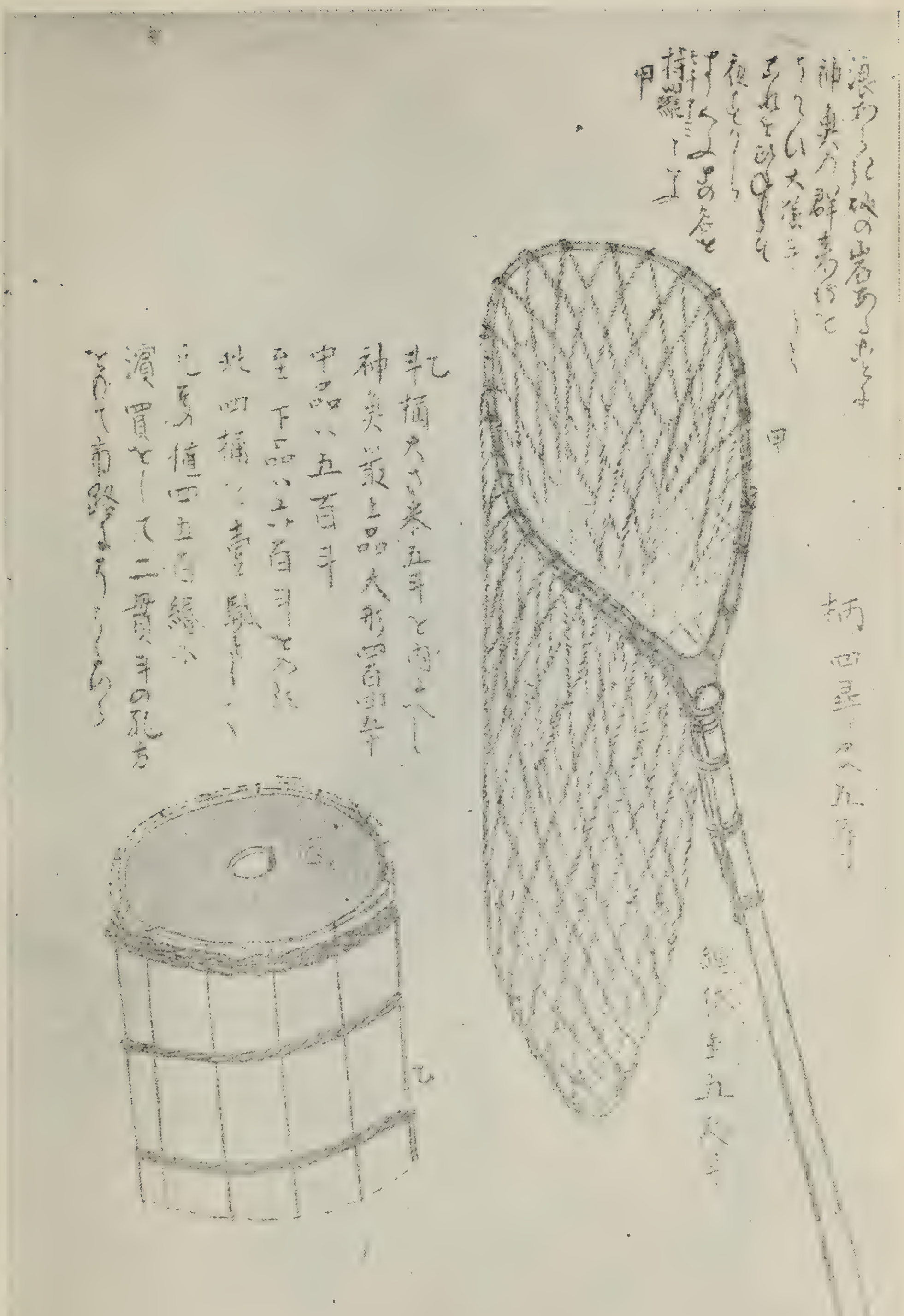







咩波多播駄乃布離姑乃圖
甲
乙
甲
乙




甲
甲
乙
乙

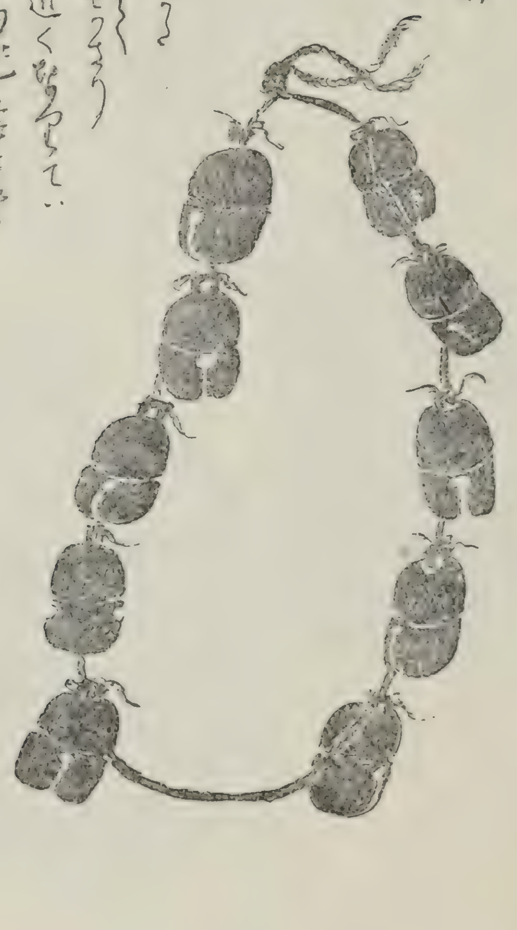







杜瀧の不動尊

八柱の驛の馬あるハ貢馬の頭に八口弐十口の
大鈴を紋斜る總につゝ懸てとしろ
鈴に新剝あり
古剝衣なり 古剝
はるも大し



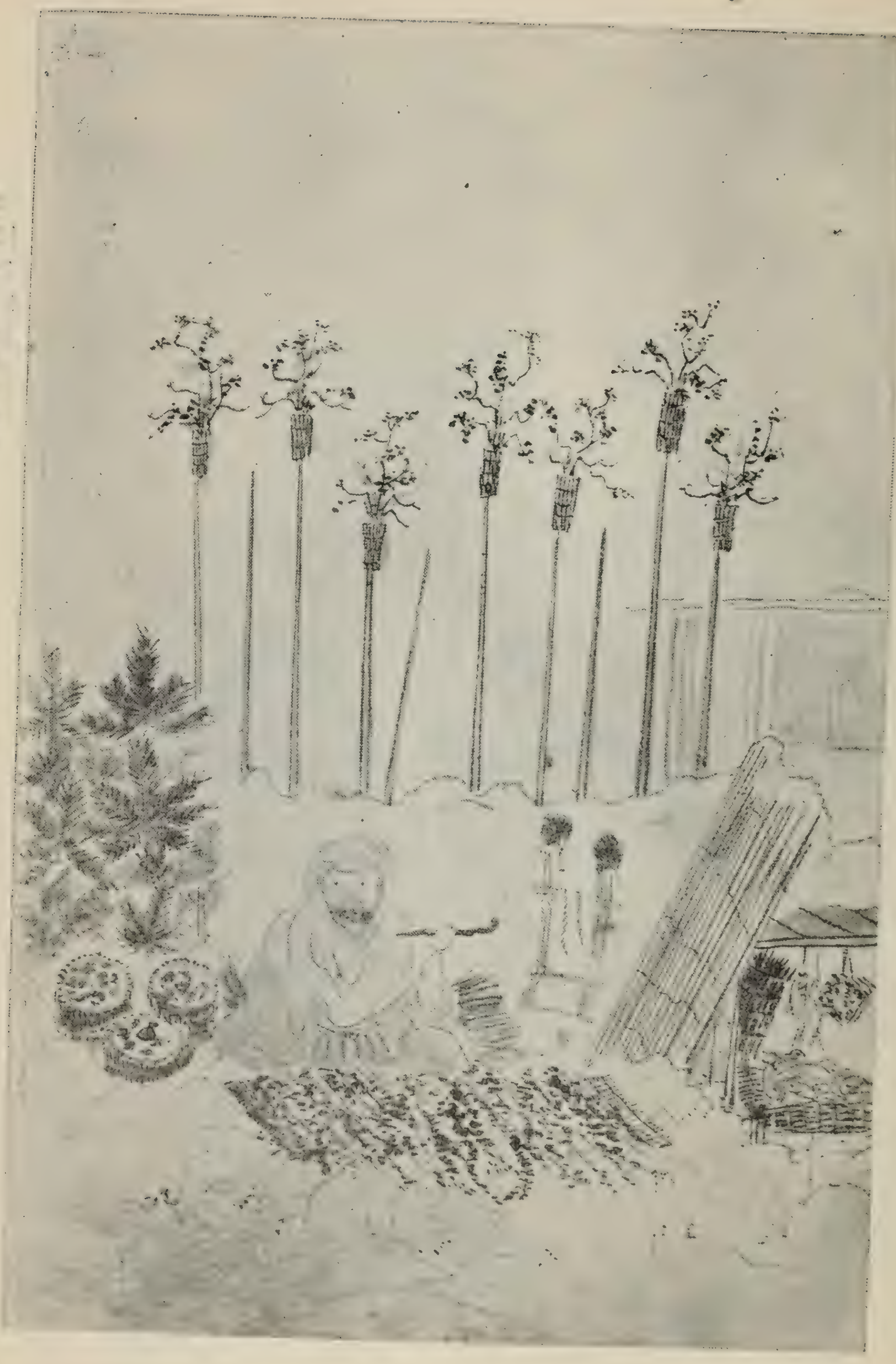
波地母黎浦なる
ひまの時ろうらく
のとりく古剝衣をうまり
津代のこゑと近くなりて
この新剝の馬槐 鈴をつけ
赤關来鈴といふあんと
くらしいるとうまる遊え

ろめ、からすみ、うちあはひ、紫菜(のり)よ、くろのり、ふくろのり、籠挑燈、へり、むしろとよはふこゑ〳〵、春はあす辰の市路やいかならん。松よ小松よ姫小松、霜零(ふり)、五葉、ゆづる葉、炭、柿(かき)、かえ、くるみ、栗、ゆず、みかん、ところ、ほだはら、ことのばらよとにぎはゝしう見る〳〵行ば、雪を坡のごとにつきならして、そが上に楓の紅葉、はじ、柞、山橘、白蒿(よもぎ)、屋遊(しのぶ)、榧の葉、いつ葉、ひむろ、はまばひ、鳫翅檜(あすならふ)、南藤(はまがき)、桃葉珊瑚(あをきば)、なべて一とせの木くさの花を乾してとゝのへ、あるは今ふる雪の野山なるをも折ませて、たぶさにけがれたるは、ふりかゝる雪にきよまはりて奉る。めせ〳〵三世の佛の花をと、雪の上に折ちらしこきたれたる春秋の色の、雪にまみれこほれたるをふみしたき、袖にちりたるもおかし。又ゆひはらのみきよきばかりなるに、のりをたゞして杙のこときものゝうれにさして、いくもとも雪の小高きところにつき立ならべたるも、倚けしきことなり。こはめつらしのうりものかなとたゞずめば、これをかれをと買ひもて、こゝら市路をむれ皈る人とらを見つゝ、

惜めともとしはいそきて紅の花やもみちをかざす市人。

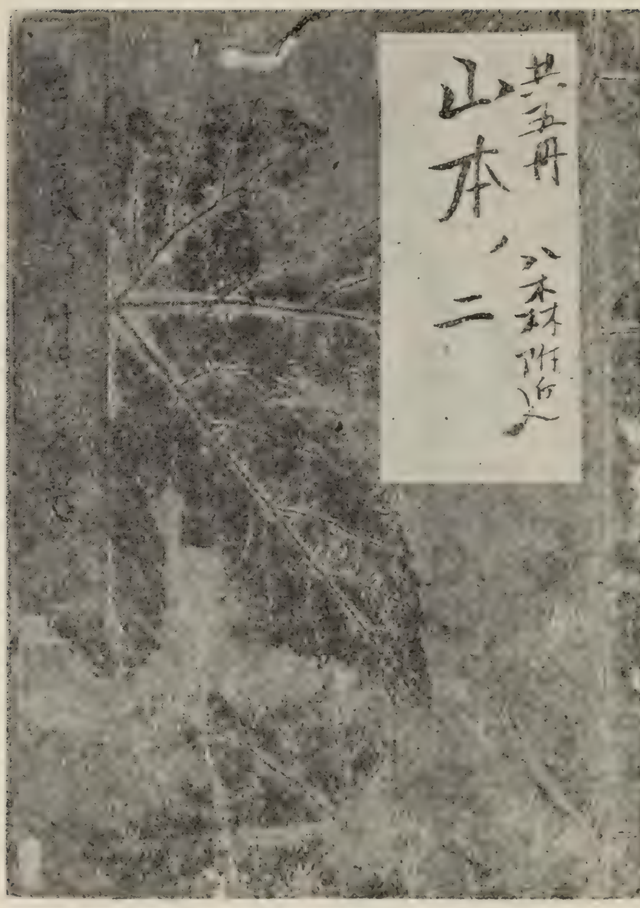
三十日。わきてけふは、あくるよりとのとよみにぎはひ、日もかつくれて舎(やどり)ごもこぼちとり、なにくれのものを、われも〳〵とやとにもてはこぶそりの音のしげう、すはや事のあるやとおもふまでにあなかまと聞まどひて、やゝ夜も更にふけて雪のいたくふれり。

けふとのみくれ行としのをさゆつるたゆはつかんとみゆきふるなり。」





宇良乃笛多幾


共五冊
山本ノ二
八森林附近

かい捨たるふみのなかよりひろひ集て、もと末のわいためなう、ひとまきと
はせり。
享和の四とせのむつきより阿仁の莊に在て、なにくれのものかたり、八皿
酒のためしさへのせ、渟代の萩か平、五月雨沼、杉澤の寒水、岩楯のや
まく、笛瀧の圖かいて、この册子の名とはせりけるものか。

川居村にて

くれのころ日數もそひて、このはつかまり五日になん春のたちて、こよみすてにまきをへり。としのなもかはりてはや三とせを經ぬれは、これのとしの四とせとやいひてんかし。

としのうちにことしもくれて麁玉の年立かへりとしや去ぬらん。

竈の神祭り

二十日まり八日は竈の神を齋ひまつるのけふとて、牛の畫三十六を紙ひとひらにおしもて、屋戸ことにみやつこのもてありく。こや、かんかせの伊勢の國べに、みそあまり六の牛の力して、なにくれともてはこひたりし、その功のすくなからし、かれにみあへすへしとありつ。そのとき和久產巢日の神のみこ豐宇可能賣の神、いつくさのたなつものを生みて酒をかみし、みあへたてまつる。御炊の神、氷沼のみちぬし、みそまりむつのへつひの神を率て、あしたの大御氣、ゆふへのおほみけをかしき備て御饗(みあへ)たてまつれり。たにはのみちぬし御杖代として、くさ〳〵のものを、もゝとりの机にあさへてみあへ奉る。もろかんたちの作るところをもて、しか神をまつるのことのすてに成り、おほみたから饒(にきは)ひ榮ふ。そのいさおしす

てにをへて、あまてらすすへおほん神の、伊勢の國にみゆきなりたまふ。とゆけのおほむかみは高天のはらに復（かへ）り昇りて、日の少宮にまし在す也。さるゆゑをもてかまとのかみと、うしをもてやまつらんものか。」

月も日も川居の村にながれながれて、としもはやをはりはつらんとなかめられて、

　行としを鶩の毛衣汝れも來て河居の淀に春やまつらん。

大晦日

かくて、はつかまりこゝぬか、けふなんとしをへりとて、みたまのほかひせり。

　あすは又春や越ゆらん暮て行こよひはとしの峠也けり。

鍋、臼を復（ふ）せるのためしありて、とりは鳴つ。

元日の行事

享和四とせ甲子の睦月の朔の旦、川のべに人のうちむれて、氷る若水挹といふ。

　春は今朝きしへの松の影見へて千代を川井に掬ふ里の子。

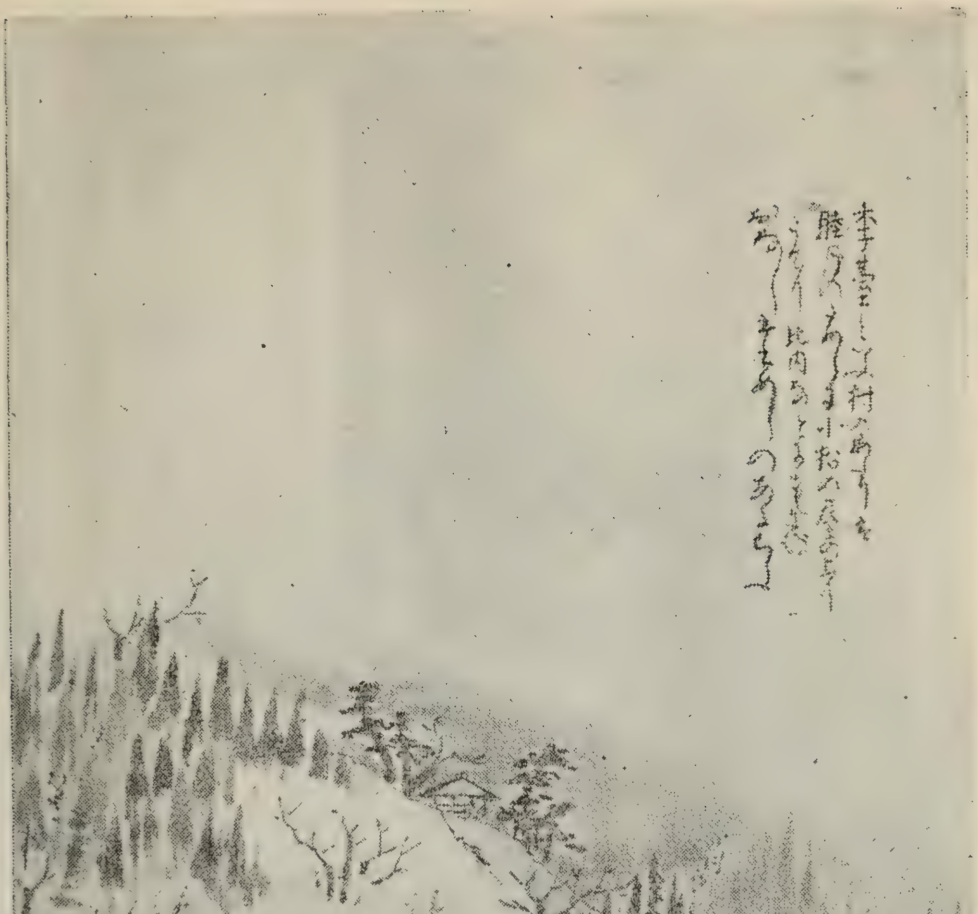
初日の、雪の山よりうら〳〵とさしのぼり、軒はの五葉に雀のうちはふきて、千代〳〵と囀るもあらたなるかほなり。みやしろの松に日のさしかきろへば、「心葉にはつ日揷頭や宮の春」、といふ句したり。

雨降る

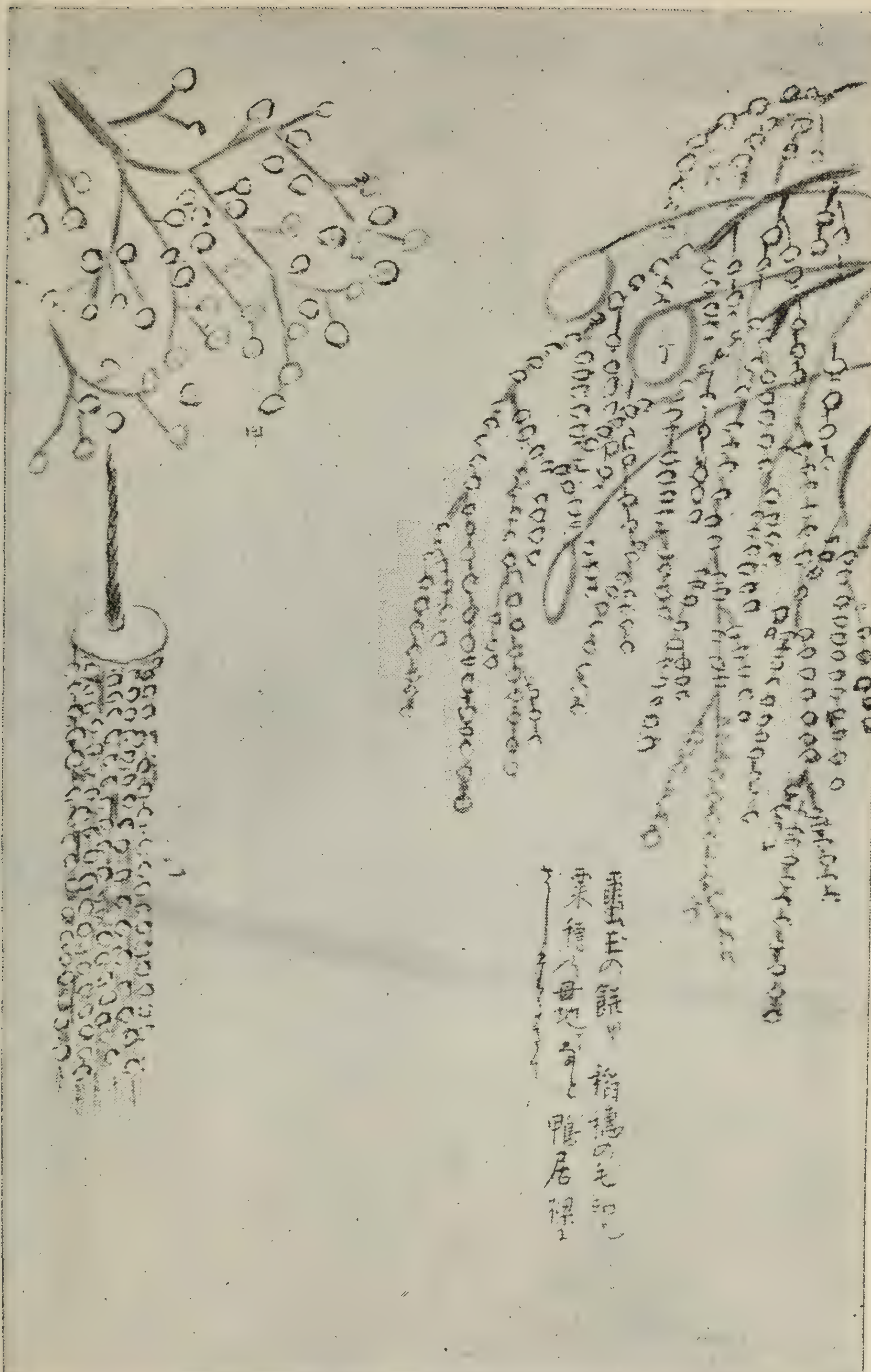
三日。きのふより、をさかりしめやかに、いつさか、むさかのみゆきの上にふりはへて、むら鴉の音なふ。遠かたの山くもりて、はつかに見へわたれり。

　昨日今日零るも長閑き春雨に霞初たる雪のやま松。

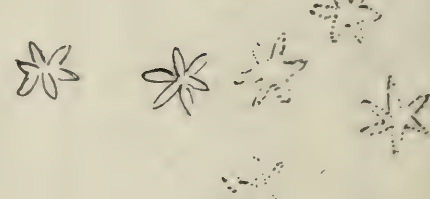








弁都乃波寺参る日ありける吉日なり
ゆくにもそれ雪降りて宰治にて
近鏡なうつしてこそ見れ大きさよろし
う色も六花は雪とふすれ
まてども来ぬらはしらくもさしおく
落るところよ寒中は六出なり
華全し寒すぎれて五出の・ともと
ちらしそうし近り



苗代の種まきぬれば
八皿酒とておしきの世く
皿をそまれ飯椀の蓋をそまれ
八の数をかうへて濁酒を
あつし飲めり八塩ちの八醞の酒をよ
八岐の大蛇の由来とやうすみ
三河の國よりて十月よ太麦
まきそへぬれてよふ皿つゝしく
ともに神する御酒とそなり
屋戸にいりけりそのしもその
例ありける



能代住吉社の藤

萩野の山神

玫瑰の花

五月雨沼

木のくれやみ卯月の十日まり三日はかり、眞住吉の神籬の藤の白きも紫も、いと高きこのれにはひまつはり咲たるをふりあふきて見つ。

むらさきの雲かあらぬかしらなみのかけてこゝにもきしのひめ松。

くすし照井象賢、伊東浚、あるは伊東祐信なといさなひ、近き萩野の沼をめくりその岡にのほれは、山祇の神の祠のありける内に石の佛三軀をおいて、かたはらに、あすらのことき木のみかたしろのはちまきをして、かひなも鼻もそこねたれど、たゞうとの作りなしたるさまとも見へす。こは神にてやおましまさん、佛にてやおはすらんと、あやしう人のをかみたり。辨慶が腰懸山を見やる。そこにむかしは家居もありて、この山より住吉のみやところもうつし奉たりしなと語りもて、たゝ砂山をふみ〳〵長埼のやかたも近う、徘徊（はまなす）の花のこきもうすきもさきに咲て、濱風の吹さそふ匂ひのかくはしう。その花のことにおほきやかに、ゑみすくすりの花にすかたもやゝ似たり。うへももろこし人のくしにも、　三株紅勺藥、一架紫玫瑰と花を好（まめ）り。まことに、秋はあかたまのなれるその實さへ花さへとめでて、高さによちてなかめいとおもしろきところなりけり。この岡べの下つかたに五月雨の沼とて、ひろき水の面に岸のかげ涼しうおちて、さゝなみのうちよる小嶋のやうにきしべよりさし出たるは、五月雨大明神とて、なが月の十日ごとにみわすへ祭る。大行院のうはそこ尊嚴のつかへ

奉る稲の神の座(みまし)なり。此沼の魚なんなへて片目にして、神のつかはしめとてゆめ網せさるならひながら、この春〱にのかみの入らせ給ふたるをりしも、ぬさむけて、ひとさかあまりいつきの鯽、ふたさかの世具呂の魚をとりて、まさなことにたてまつりしとなん。笠のしろ〱と見へたるは、けふをはしめに田殖すといふ。かくて月の倚涼しう見つつ、やかたのほとりにはあすの料とて、ゆひやとひして早苗とり渡りぬ。

田植始まる

　五月雨の沼のあたりもかきくれて田子のたもとにやとる月かけ。

くれふかうなりて渟代に來つきたり。

五月五日雨のふりしかば、七日藥かりせまく、れいの人々とともに舊(もと)野代を經て野路をはる〱と行て、杉澤といふやかたを弓手に見なして、めてに杉の木立のいやとしふりし杜の、おちくぼなりけるところにありて寒泉(しみつ)きよげに流れたり。神のほぐらあり。何の神とゝへば、たゞ椙澤權現といらへてさらにしるてふ人しもあらねば、

杉澤の權現

　たつねても三輪の山もとそれならてこゝにいく世を杉澤の神。

鸛の木のうれに群れ、朱鷺の巣こもりてその聲のかまひすし。かくて、清水のもとにむすび盃をあらふ。水無月の二十八日ことには此神に祭して、野にすまひありてにきはゝしう、この水にこゝろふとをうかへ、むきなはを流して涼みとりぬと。うべも、水の清さは檜山なる

杉澤の清水

呉庵清水、はた鶴形の辭(ことは)の澤水にいやまさりぬらんか、この能代のほとりには、もとあらさなる水にこそあらめ。野はらに出てかへさのなかめ、四方のいとおもしろし。

權現社由來

路にて人にとへば、この神は三熊埜をうつし奉るみづ籬にして、城介實李の建たまひしを、たまくしけふたゝび佐竹のおほんいのりごもありしとなん。竹生(たかふ)村のうはそこ大乘院か世々つかへまつりしを、

里鶯の事

畠谷(はたや)村のうばそこ常福院とこの社のあらかひありて、そのことにたつさはりて住吉のうはそこ里鶯、さもらひところにいたり人なけにいひのゝしりしかは、それをつみとて雄鹿の嶋山に流され、そこにこもり居りて、埋れ水てふふみをかけりしことそなとかたりつれて、月のさしのほり行袖の涼しうおほゆる。

みちのへのうはらの花の露見へて涼しきかけをやとすゆふ月。

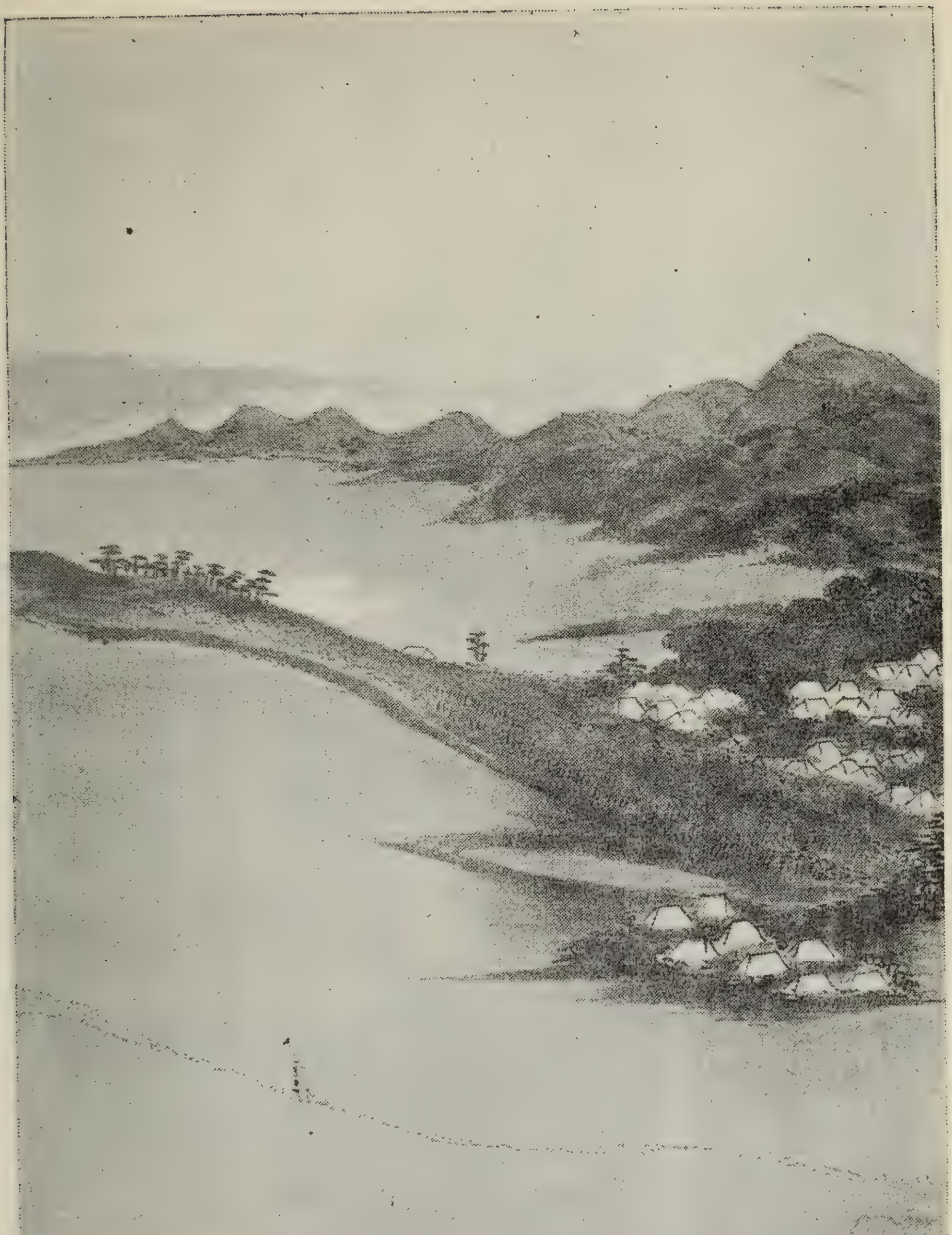
渡舟月美し

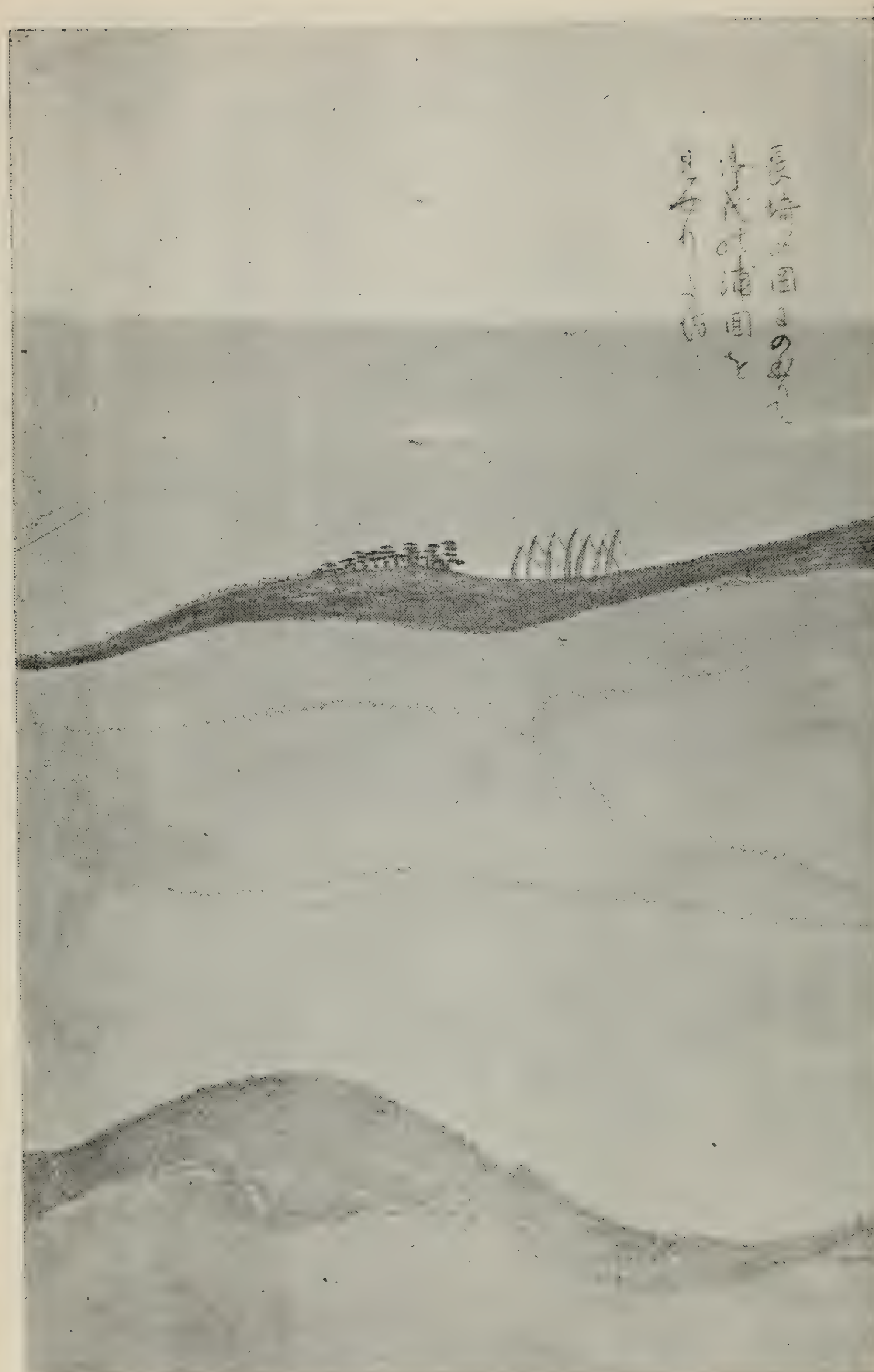
かくて鹿野城の渡りして、夕附夜おもしろう舟うちこそりて、からのやまとの歌をすんじて月をよみし、舟のときことをねたしとおもふ。落合、能代てふふたつの名を、

あら汐におち會ぬ末のしろ〳〵と見渡る浪の月そ涼しき。

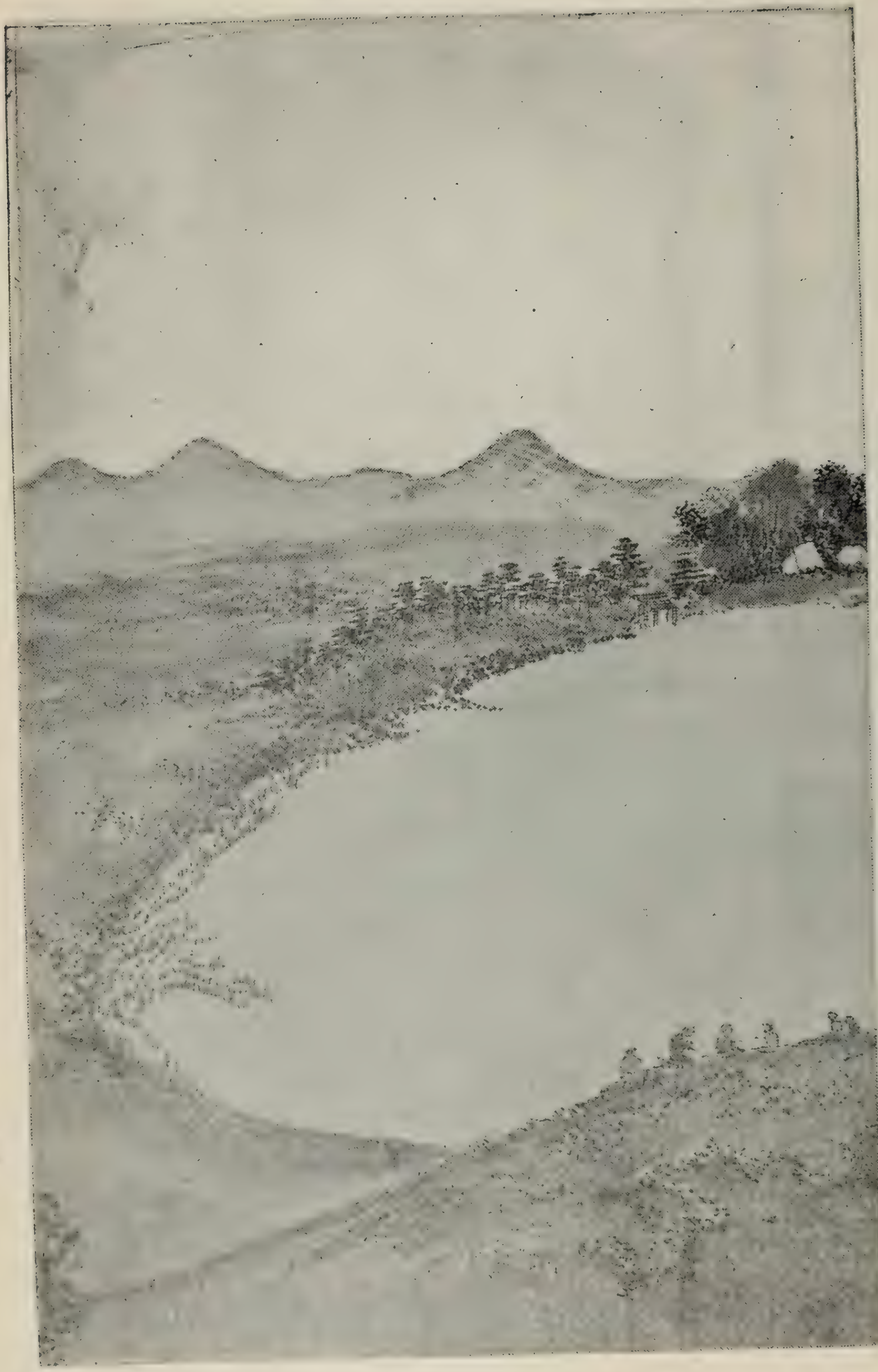
やはら、のしろにつきたり。


山祇の神






五月雨奴満



宇良山乃〻笛　多幾

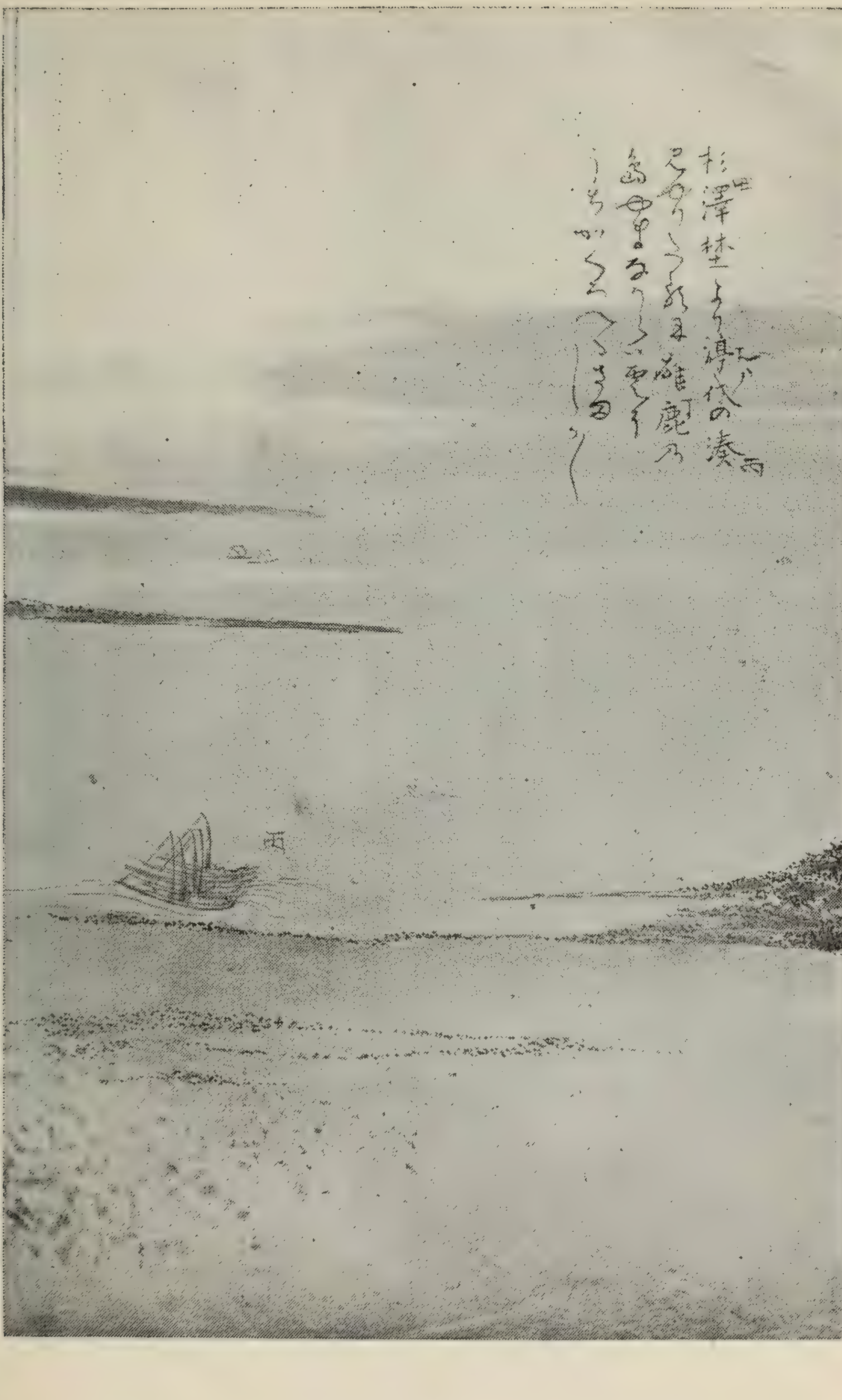

五月雨明神の祠


須企荒波の杜


白神ノ嶽　馬背打山よ
ひきつゞきたる菅生の岬
近きハ熊野の社　杉澤
のやしろなど廣野より
見渡したり



宇良乃笛多淺





宇良乃畄多幾


鹿野城の跡

笛瀧にと　氷澤　女名形　阿遮羅明王

ふん月の五日はかり、道奥山のちかとなり、岩楯山に在るちふ笛瀧といふ面白のところにいたらまく、けふなん渟代を出て、米代川の渡りして鹿の尉につく。見やる潮湍(しほせ)くろみ渡るは雨のふり來んとて、行かひいそぎぬ。

　くもる也浪の遠方けふもしかむら雨わたる風の涼しさ。

鹿村ともいへり。落會、洲田、竹生(たかふ)に近つきて、橋渡りて松原に神社あり。菅大臣を齋ひ奉る、ゆゑよし多となん。もゝくさの花ひもとき初て涼しけに、稲田の穂なみしらみなひきて秋とはなりぬ。尙空のくらく、なる神の音さへ聞へぬれば、道とく過て水澤のやかたになりつ。皆河吉秀、その子東元なと、やつがれ津輕に在しころかねて聞つる人となと、いさねもころに聞へける。こゝに一夜を經て六日、けふも語りて暮たり。

七日。ふたゝひとて、ひるつかたより水澤のやとをたちて、行ほどもなう女名形といふに出たり。弓手に岩子山を見やり、その山澤に大蛇あるものかたりをせり。野原にきちかう、をみなへしを手毎に折て、「ことしはうれしやおもふ事かなふた。」と、女の童の唄ひ行ぬ。

　うなひ子か秋の七種手折りもてうたふや星の手向なるらん。

八森やかた、湯澤のうまやとになりぬ。阿遮羅明王の瀧見てんと、めてに入る。五とせのむかし雪のいやふるころ見しところなから、けしきことにおかし。この明王につかへまつる

圓仁作明王

尼堂

新發心泣せ

うはそこ、天龍院のあるしこゝに齋居(いもゐ)して在りて、こよひは此堂にかたらんとて瀧のもとの堂のくまなる、はしとみのうちにふしぬ。

つかれこしぬるともなしに瀧枕むすひもはてぬ夢のはかなさ。

堂のしりなる板戸させば、さはかりとよみ山谷とゝろく瀧の音も、いさゝか遠う聞へて、ものうち語るによけん。

八日。此堂をたちて、天龍院のうはそこ尊翁にふたゝひとて別たり。濱田になりぬ、岩堂とて窟の内に不動尊の在すちふ。こゝよりあないをたのみ、此小川にそひてめての山路に入りたり。みちしばし經て、みさほばかり高きいはやとのうちの、いとまひろきに阿遮羅尊を齋ふ。この明王は、大杉のもと末の木にて圓仁の作りなしたまふ、八森山の瀧の朽木の明王とひとし。雪にふりこめられし鹿の來宿りて、此不動尊のみくしよりはしめみな嚙(かみ)つくして、そのすかたとも見へ奉らずと話る。川のあなたに、尼堂とてさゝやかのいはやあり、むかし、尼のひとり行ひたりしよしをいへり。虫長根といふより、雲いやたち雨のふり頻りぬれば、出て濱田に來つゝ、あないのもとに雨やどりせしまゝに宿りぬ。

九日。くろそんふちのほとりの坂なかにたちて馬琴山(まこゝやま)を見やり、安萬賀多の鹿の浦、網掛の崎、祁委擄(けいこ)崎、雄嶼(をしま)なと弓手になして藻浦につく。めてに、のぼきりの齒のごとき磯山のあ

小銀山

終日笛瀧に

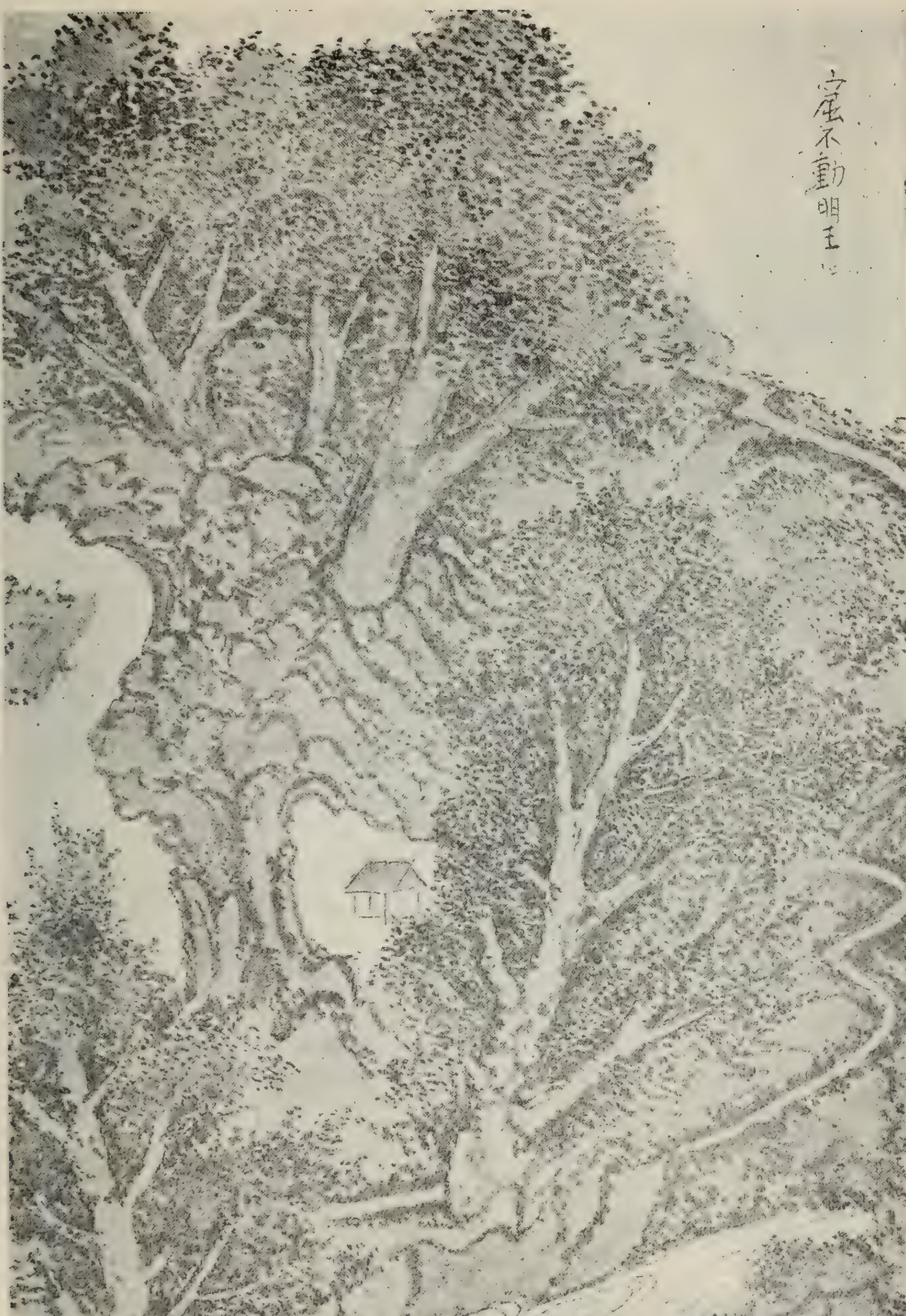
り、勝助山とも彌山つゞきともいへり。新發心なかせといふさかしき處あり、雪に見しとはことに、立石の崎より高橋を渡りて三内に至る。横間の崎、瀧の灣を經て三澤野を行、左に立岩あり小入川といふ。右に銀の山あり小銀山といふ、院内のしろかね山にならへいふ辭にや。いつのころならんか田川郡のほとりの人の來て掘りそめし後に、米山七郎左衞門といふかふたゝびおこして、よきしろかねを掘りぬ。その子四代にして、喜助といへるか倘ありといふ。乃祁曾利山といふ高山の見ゆ。岩館に來て、こゝなる菊地なにかしのもとに宿かる。

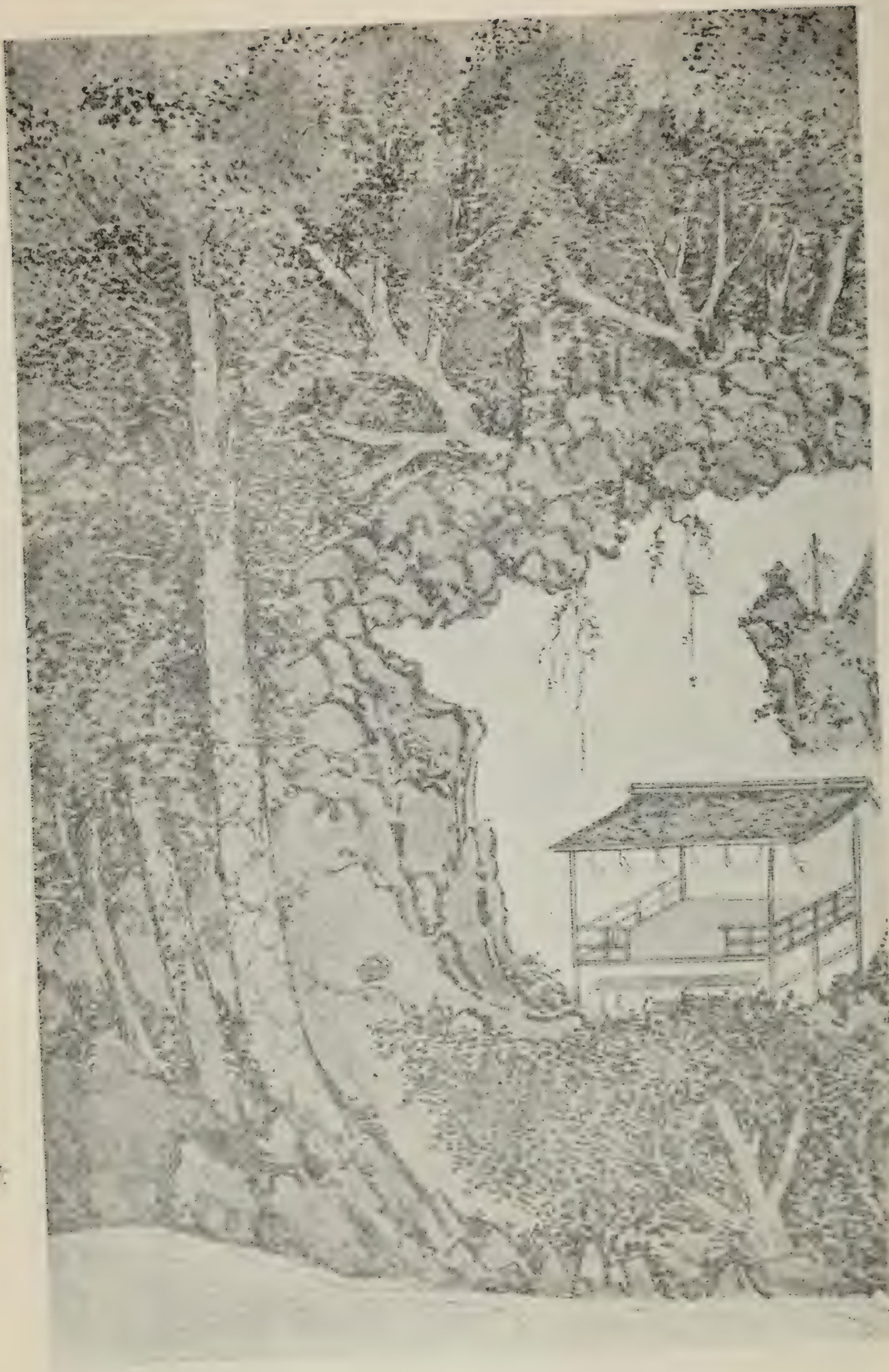
十日。この關山の守りて、そのさもらひに檜山の大越なにかし在りてとふらひ來て、けふなん笛瀧見てんとて舟人のもとに人はしらせ、とく〱とて、磯舟のさゝやかなるにのりてさしいたりて、ひねもす瀧のもとにありて夕つかた皈りく。





宇良乃笛多幾


窟不動明王



宇良乃笛多幾





宇良乃笛多幾



秋田叢書刊行會 會報

昭和七年六月

（本號には本會第一期事業概況報告があります）

綱領三則

一 縣内各地に於て郷土史編纂に必要なものを先こし漸次他の稀覯の珍籍に及ぶものとす。

一 校訂を嚴にするため同種の異本を極力採求して之を參照し其の正確を期す。

一 一般商品に非ず、從て價格も至廉を期し實費を以て同好の方々にのみ頒つの方法を採れり。

秋田叢書刊行會役員

編輯顧問 文學博士 喜田貞吉

石井忠利

編輯及校訂 沼田平治

細谷則理

大山順造

深澤多市

本會代表者 深澤多市

印刷監督 國本善治

秋田叢書第二輯豫定書目

◇第七卷（原稿整理中）

羽陰雲煙錄　雪之出羽道（平鹿郡下）

◇第八卷（第一回配本濟）

三十三觀音巡禮記　鹿角緣記　月出羽道（仙北郡一）

◇第九卷（次回九月配本）

秋田昔物語　寛延四年那珂忠兵衞通賓の著錄。

秋田千年瓦　文化十四年二階堂道形著の珍籍。

月之出羽路　仙北郡（二）神宮寺大曲六鄕方面。

◇第十卷

長野先生夜話集　異本由利十二頭記　月出羽道（仙北郡三）

◇第十一卷

秋田藩田法叢書

△訂正御格式△田法歩尺精辨△田法四六精術△田法欠借精術△檢地秘傳集△御金藏御定法書△黑印御定書△六郡生米考△黑澤道家覺書附斗代名義考△秋田潟東之内野田村御檢地野帳△門間氏古文書△指上高定△指上高條例△指上高式△指上高帳△御借上高帳△御借上高次第

◇第十二卷

羽陰史略後篇　德政夜話　以上

大體右の如く假りに定むるも或は多少の異動あるやも計り難い。特に御諒恕を望む。

秋田叢書第一期自第一卷至第六卷事業概況報告（昭和六年七月一日現在）

收入ノ部	一金	一一、四五〇・八二円	會費其他雜收入
支出ノ部	一金	一三、四七一・〇二	印刷費、原稿費、事務費其他諸雜費
差引	一金	二、〇二〇・二〇	立替金

備考

一、收入ノ部ニハ些少ナレドモ振替貯金利子ヲ包含ス

二、支出ノ部ニハ創業準備諸費金「二一七圓八九」、外ニ第二期及別集準備諸費ニシテ分割シ得ザル額若干ヲ包含ス

三、本表ニハ山崎某ニ直接交付セル入會金ハ包含セズ

本表ノ外收入未濟分郡市別左表ノ通リ、此金約「千六百五拾圓」ハ將來收入シ得べキ額トス

外ニ殘品見込額約四百圓アリ

以上ノ通ナルヲ以テ收入未濟額ガ完全ニ收入シ得レバ收支共大差ナキ狀態ニシテ第二期事業ノ好轉ヲ見ルコトヲ得ベシ

▲第一期分會費收入未濟表

區分	未濟金額	區分	未濟金額
仙北郡	三五〇・〇〇円	平鹿郡	一二九・五〇円
雄勝郡	二二七・五〇	河邊郡	四九・〇〇
南秋田郡	一四七・〇〇	北秋田郡	一一二・〇〇
山本郡	一六八・〇〇	由利郡	二二七・五〇
秋田市	八〇・五〇	鹿角郡	八七・五〇
縣外	七〇・〇〇	計	一、六四八・五〇

「備考」本表ニハ目下再版中ノ第二、三卷分ハ包含セズ

事業經過報告

簡單に申せば、兎角手慣れぬ仕事の爲めに喰ひ違ひが多く、思ひもかけぬ困難と豫想外の經費がかゝつた事であります。當初は印刷費に於て可なり多額を要したの感もあり、又奸商の乘ずる處となりて事業の支障を來した事は可なり多く、其經營の困難なりし事を深く痛感したのであります。現在及將來は印刷と其費用の點は安心の出來る狀態にあるも、會員數の漸減と會費徴收の困難とは、是又大に警戒せざるべからざる處であります。

本會創業者は初より資金の準備豐かならざりしを以て毎囘收入の會費を運轉して事業の進行をなし來つた事は各位の御諒知の通りであります。然し會費の未納分が一囘毎に多くなり、隨て毎囘入金以上の支出を要し、其度毎に代表者が貧弱なる財嚢の底を叩いて補充し來りしが今や嚢底既に空しく、又運轉し得べき收入の途もなく、動もすれば生活の脅威を感ずるの狀態であります。故に本會の繼續は、一に未納會費の徴收を以て事業費を支辨するより外に良方法はないので、此點、特に各位の御諒察を願ふ次第であります。

尙此際一寸御報告致します。本會役員は編輯顧問をはじめ其校訂の任に當らるゝ各位も、何れも無報酬を以て本會の事業を懇切に指導し、翼成して下さるのであります。此點は全會員と共に深く御禮を申す次第でありますが、資金の缺乏の爲めに常に若干其御指導の意に副ひ得ざりし點もあり、從つて聊か編輯上の完美を缺く事あるは深く遺憾とする次第であります。此點も各會員の御諒承を御願ひ致します。

要するに、本會がこゝまで進行し得たのは偏に會員各位の深厚なる同情の賜で、深く御禮申す處であります。尙此上とも御庇護と御鞭韃とに依て所期の目的を達し、本會有終の美を濟さしむる樣御聲援下され度、御際特に御願ひする次第であります。

昭和六年七月

秋田叢書刊行會
代表者　深澤多市謹識

秋田叢書別集
菅江眞澄集

來十一月刊行豫定の
次回配本第四

秋田の部

▽鬱田の假寢　▽小野の古里
▽高松日記　▽駒形日記
▽平鹿の御鷹　▽月の大蛇峯
▽雪能袁呂智泥　▽勝手の雄弓

信州の部

▽委寧能中路　▽來目路の橋
▽わかこゝろ

北海道の部

▽ゑみしのさへき　▽蝦夷喧辭辯
▽蝦夷廼手布利　▽ひろめかり
▽婢呂綿乃具　▽智誌磨濃膽咀

既刊第一　內容

○十曲湖　○恩荷奴金風　○恩荷能春風　○小鹿の鈴風　○牡鹿の嶋風　○牡鹿乃寒かぜ

既刊第二　內容

○けふのせばのゝ　○錦木　○辭夏岐野莽望圖　○阿仁迺澤水　○雪能飽田寢　○秀酒企乃温濤　○美香弊乃譽路臂　○贄能辭賀樂美　○房住山昔物語

既刊第三　內容

○雪乃道奧雪の出羽路　○宇良乃笛多幾　○霞むつきほし　○雄賀良能多奇　○夷舍奴安裝婢　○比遠能牟良君　○簷廼金棣棠　○雪のやま踰え　○花のしぬのめ　○梅の花湯の記

◇尙引續き津輕、南部方面の紀行文は勿論、其他の著錄も漸次輯錄刊行する。又其他短册色紙等も總て集錄したいと思ふので、會員及特志家の御報を切望する。

秋田叢書第一輯既刊書目

◇第一卷　△羽陰史略前篇△杵山峯の嵐
◇第二卷　△六郡郡邑記△絹篩△由利十二頭記△蘆名記
◇第三卷　△六郡祭事記△雪の出羽路（雄勝郡）△鹿角郡根元記△古四王神社考
◇第四卷　△戊辰秋田藩戰記△本莊隊出兵聞見誌△龜田藩戊辰戰記△戊辰矢島戰記△鹿角口戰爭實記△仁賀保領出兵實效錄
◇第五卷　△秋田紀麗△淺利軍記△代邑見聞錄△雪出羽道（平鹿郡上）
◇第六卷　△秋田風俗問狀答△六野燭談△鳥籠奇談△由伎能伊傳波遲（平鹿郡中）

會員各位に御願

▲本卷の刊行も豫告より遲れたのは會員各位に對して全く相濟まない事である。何卒御宥恕に預りたい。

▲會費は本書受領の上は直ちに振替にて御送金を願ひたい。御送金なき方には止むを得ず**集金郵便**にて會費取立をなします。若し集金拒絶になれば、會費に加算して此手數料も頂く事になりますからお含み願ひます。

▲會費御送金のときは振替用紙の裏面に第何卷分會費と必ず御明記を願ひます。

▲會費御送付のとき受領證或は請求書を要するとか、其の他返信を要するものは返信料を添付せられたい。

▲本叢書第一卷から第六卷までを第一期會員とし七卷より十二卷までを第二期會員とし、御入會の方々は此の期間だけは退會せずに願ひたい。又別集は別集丈けの御入會も差支ない。

▲本叢書は以上の如く會員組織の頒布本であるから分册の需求には遺憾ながら應じ兼ねます。

秋田叢書再版廣告

本叢書第二第三卷現品不足を告げ配付未濟の分は目下再版中に付不日御送附いたします。

定　規

●第一輯　全六册配本濟。
●第二輯　全六册。分册の需には應じない。
□體裁　菊版天色總布製　每卷五百數十頁
□刊行　第一回配本　昭和六年四月濟
　　　　第二回配本　同年九月の豫定
□頒布　豫約申込者に限る（但申込金不要）
□會費　一册參圓五拾錢（送料實費を申受）
●別集　凡て本叢書に準ず。
　　　　第一回配本　昭和五年七月濟
　　　　第二回配本　同年十二月濟
　　　　第三回配本　昭和六年七月濟
　　　　第四回配本　同年十一月の豫定

發行及申込所　秋田縣横手町
秋田叢書刊行會
代表者　深澤多市
振替仙臺八二五二番

（東京事務所）　東京・芝公園十四ノ九國本善治方

宇良乃笛多淺



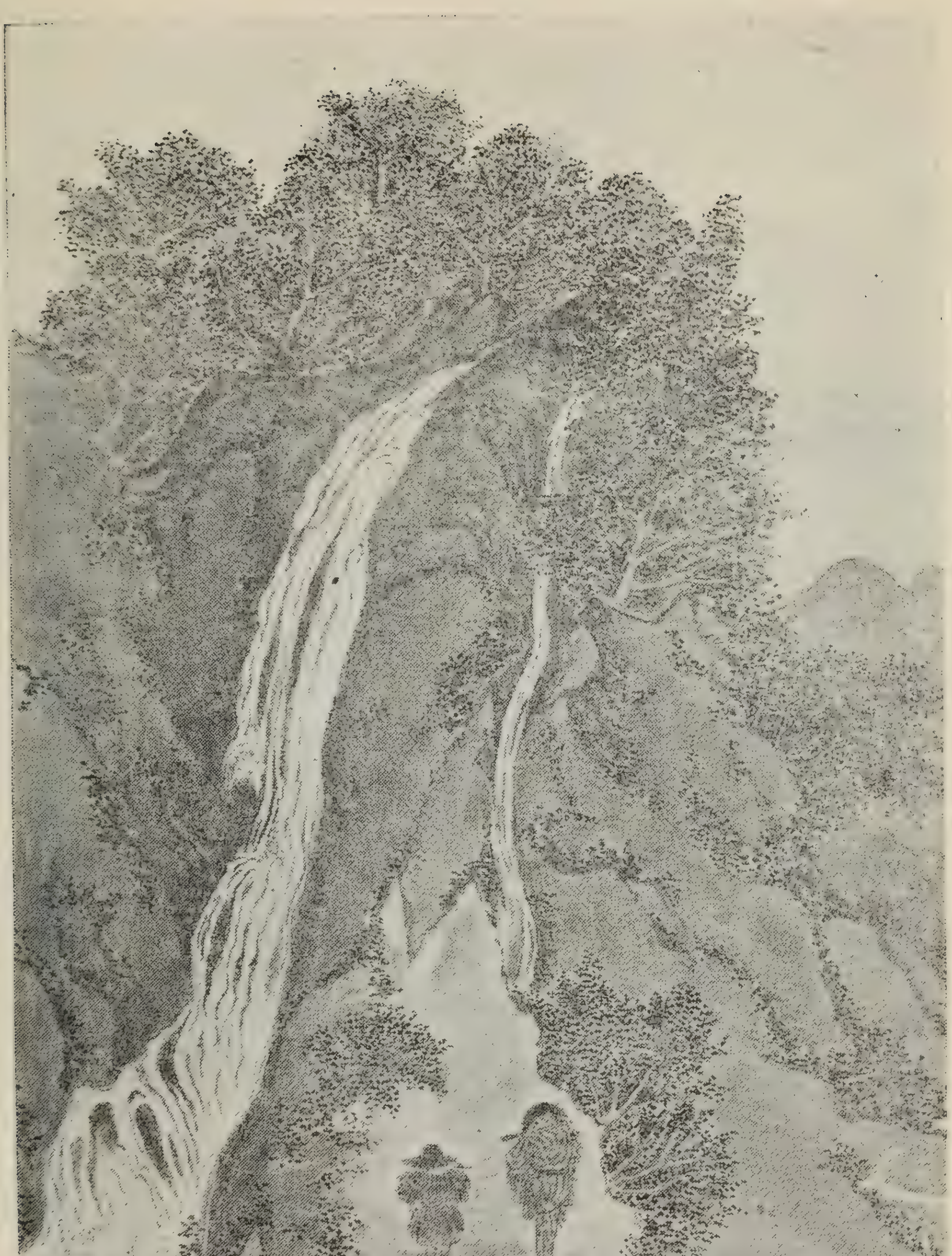

岩館の浦

宇良乃笛多幾

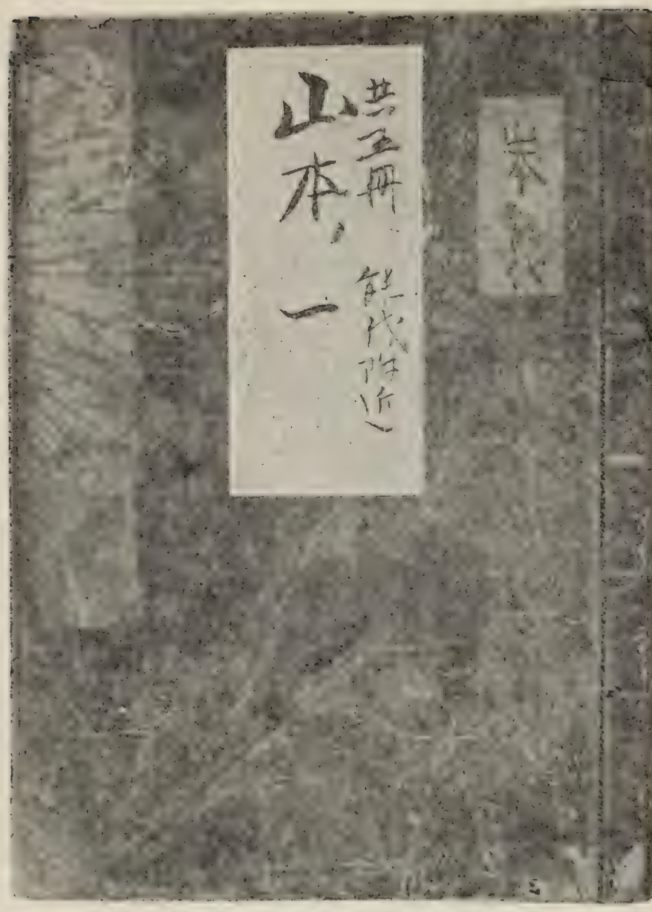








霞むつきぼし


山本ノ一
共五冊
能代附近

文化三とせの春、出羽の國淳代に在りて鶴形山にのぼり、浦の梅、日山のさくら、あるは笛竹の杜花、花見山の花、鹿の渡、さんだ、副河の神山の櫻などをかりくらし、うしのくひとの桃發くころ、阿陪のうし月星のふるあとをさくりえて、この册子の名をそ「霞むつきほし」とつけたり。

津輕白神山の遠望

貴艸樂企のはつかまり一日、渟代をたちて、高き岡にのほれは海原のうら〳〵と見やられ、霞渡りたる中に、みちのおくのさかひわきて雪のふかう、津刈の白神か嶽そいと近う見へたる。ひんがしの蝦夷の國に斯黎弊都あり、津輕の蒼杜の坡(つゝみ)河の川くまにも埼河(しりべつ)あり。おなし都賀呂の十三(とさ)の湊に近きあたりに多通吡(たつひ)の沼あり、三厩の浦の西にも多通吡の碕あり。松前の隝に白神の磯あり、はた津刈路の深浦に近き磯山にも、しか白神てふ名もあり。かゝるおなし名ともの多かるは、遠きむかしは、もはらこのあたりにも蝦蛦人の栖家しつらんことこそ、うへもしられたれ。

霞つゝ麓はこのめ春そともまたしらかみの山は雪ふる。

見渡す村々

田つらに見渡す大内田、かしこところなといふ村の名は、さにくな、かなまろらか在りしそのいにしへや、出羽介たる君のおはしつらん政所なとありしもの語もありき。

仁井田村

倫勝寺

仁井田といふ村に入る、大槻の内に白鶴山倫勝寺といふふる寺のあり。むかし檜山のひんかしなる母

躰の邑の田面の、蟹澤といふところに國淸寺といふに、華嚴のをこなひありし在天禪師を開山としたり。黑尊佛と人のたふとめるは在天の木像にて、そのたけ四尺あまりに見へて、いま此寺にそありける。さゝやかの寺ながら、永祿七年のころまでもいかめしう寺の榮へしかど、亂れのためにやかれぬ。秋田太郎の百三十石二斗三升を寄られて、龜尾山補陀寺の末葉となりて明曆のころ、補陀寺の六世宗端和尙をふたゝび開山として、ふたもゝとせあまりよそふたとせのむかしに、道元禪師の流をくむ寺とはなりたるとか。いやとしたかき大槻の二もとありて、此寺も大同二年のいはれを語り、近きころ蝦夷塚のやふれて、白骨の出たるを石の祠にをさめたり。機織村に來けり。柳のふかうかゝりたる家に女のさをなくる音の聞へ、はた、門田うちかへす男のあれは、

　風渡る軒の柳のいとまなみ田うちはた織る里のにきはふ。

機織村

村のしりなる曾利の目といふ字のある畠のなかに、一本樹とて大なる皂角のありけり。この木は和銅、靈龜のころよりありつるよしをいひつたへ、胴木は、いそとせのむかし坤のつよかりけるに、吹折られたる物語を畑うつ老のせり。かくて檜山につく。

一本木皂角

二十三日。つとめて雨ふり晴たれば善城山淨明寺を出たち、あるしなりける獅絃師、九嶋敏里、成田、高橋、近藤、畠山なとのあけまきもいさなひて、鶴形山をわけて母爺（もや）の夜久志尼に

檜山

學問長峯

のぼらまく、霧山の麓を妻手にして、安斯賀呂萬智、多滿地を根として學問長峯といふ。ちいさき山の片岨に机の形ありければしかいひ、こと好める人は、これなん菩奈毗の丘ともいふとか。初聲のどかにおもしろし。

むかし誰れこゝにまなひの岡の邊のあとにふみ見て鶯のなく。

毛蓮菜摘む

女のわらはあまた、巨陀須てふかづらこをみなほそ腰につけてありくは、毛蓮菜(ころもな)といふものをつむとそいふなる。野邊に猶うくひすの來つゝ鳴は、

うくひすよ霞のころもなれもきて日をつむまゝに消ぬるしら雪。

國淸寺跡

またらに殘りたる山のべを見はなれて、蟹澤といふ田の面に鴨蹠葉樹(いてふのき)の大なるか生ひたてるは、かの國淸寺のあとにて、在天ぜじのむかしをしのぶ。乳のたらざる女のねきことをしたり。

安佐比奈が胡麻畑

尙ふかうわけ入りて、安左比奈が胡麻畑といふ山ある也、朝平(ひら)の護摩火焚(ほたき)ちふことゝなん。むかし、僧侶のいのりかぢせしところとなん。

箭堀の柵址

山坂を越へて、馬の跡のあとの三四ある岩あり。こゝを礫石とて、亂し世にとふてうちせし物語をし、分越しかたに箭堀といふ柵めける址あり。こは、阿倍愛季しはしこゝになりところのありしといひ、はた蝦夷の毒煉り矢作(やはぎ)し館柵(チヤシ)の址とも、今も毒氣の水流れ出るなとそいふめる。そこにさゝやかの井のありて、いと多くうんなんさうのすむといふは、鯢魚、人魚、鯑魚、鯣魚てふ山椒魚、あるはいふ山

椴河鹿といふものを、このあたりにはしかそいふなる。深澤といへる山中をへて母爺にのほる。雲谷(もや)は嶽ならすしていや高く、つとひとり峙へたてる山をやいふらん。靄とは、なへて雲、霞、霧、微雨をいふ方言もありけり。毛夜の名は松前、津輕、飽田路には八森の浦にも聞へたり。寘にいたれば窪にして、石室のうちに藥師佛をすへたり。ひんかしに杜良を、西に雄鹿の嶋山、あるは白神、馬背内(ませうち)などのやま〳〵、雪の眞白につらなりて風のいや寒く吹わたり、しはしも四方をのそむべうもあらておりはつれば、桐の澤、旭の澤なといふ深谷のそこに囀る鶯のおもしろさ。

鶯も出る朝日の澤のへにわきてのとけき聲をこそきけ。

此あたりの澤に油土といふものありて、檜山の大越なにかしの門脇の翁これをとり來て、大なる蠟燭のごとにつかね串にさして、あか〳〵ともし繩糾ひ沓作り夜なべせし。その土の出るところをとへば、ふか澤のあたりとのみいらへて採り來つるかたはひめかくして、その翁の身まかりてのちは、脂土とり來し人もなけんとか。野原に出て谷に下り、行〳〵て觀世音の堂あり。圓通山の額は月舟和尚のかけり。廣大寺と額あれと、すゝけたれば誰か書るとはしらじ。城介實季いまたをさなうおはしけるとき、おもき病にふしたまふを、父愛季つねにいのる觀世音にふかき願ひをして、日あらずやまふかろらかに、しぬべういのち

母爺の藥師

油土

愛季祈念の觀世音

船繋ぎの槻

堂に蛇多し

春浅し

鶴形村にて

をとゝめけるとなん。箭堀の館よりこゝにまふて、あらたに觀音のみかたしろを作り、此堂に三拾三石の稻を寄せたまひき。さりければ、いまも三十三年を經てみとしろ錦をひらかせ、をろかみ奉るとそ聞へたる。むかしはこのあたりまで潮のみち來て、二井田の寺の二本の大木、一本を船つなぎの槻とて千世經たり。鶴形も浦といひて、問丸の末ありて川舟の宿たりなと語る。蛇の出たるを童の打なんとするを、なせそ、堂の上にはいと多くありて、手向つるうちまきをはみにはめばいと大になりて、あまた觀音につかへまつるおろちなりとしめす。坂の妻手よりきよく細う流る水上を、辭の澤とそいふなる。

　花はいつ咲て影見んうくひすよ語れこそ葉の春の澤水。

やはらこゝを出れは、海藏寺の入逢は花なき山に聲むなしうひゞきて、暮行空のほゐなう、かの觀音につかへまつる清水寺のうはそこかをこなひの、鈴の音ほのかにさそふ風寒く、鶴形のうまやに出て小林長左衞門かもとに至て、人々を別れて日山にいにき。われひとりここに旅ねしたり。

二十四日。雨もよの空をかごとにうらふれあれは、けふも此鶴潟にくれなん。季忌宮のさうじすとて軒に幡さして、その頭の宿に人さはに集ふ。暮るまで酒なんゆめ〳〵たうひざりけるのをこなひは、初午の茶をのまぬためしにひとしとなん。

釜臥の澤

筑法師また月星

朴の木瀬

二八田

二十五日。小雪のふりて寒ければ、ひるつかた鶴形の村をたちて、釜臥ノ澤といふあたりよりさちなる舟にこひのり、かへり見て、

かまふせの早蕨いつかもへ出なん野邊は葉くさのけふりのみして。

と、ひとりこちて舟つきたり。かくて、朴の木瀬の小川も水ふかく渡りえんことのかたければ、すへなうさかのほりいたり至れば屋形あり、名を筑法師といひ、あるは月星とむかしはかけりと。これや康平のむかし阿陪貞任うたれ、その末の子高星は二ッのとし、めのとにいたかれて津輕郡藤埼にのがれ、柵をかまへて家榮へぬ。高星の子にてや、月星といふ君ひとところおはしたり。高星殿、月星殿といまも唱ふ畑の字あり、これなんその君たちのふる塚にや。さたかにいまはそこと知る人もなけれと、おほ祖母のつねの物語にせられたりしををさなきより聞なれ、老て耳に殘りむかしをしのぶなと、藤崎の長たる川越茂助といふ人の、話り聞へたりしことありしをおもひ出たり。うべも、月星のしるよし出羽の國までもありつるよしをおもへば、此あたりにてやありつらん。こはゆくりなう、名たゝるいにしへ人のあとをさくり得しことのうれし。林平(たひ)といふ松原をはる〳〵と來て、朴の木瀬のやかたになりぬ。苔める梅の宿のあり、名をとへは正福寺のうはそことて、その廣く殖なしたり。こゝを離て二八田といふやかたのありき。あみたふちの堂を神とし鷄栖たてり。そのあみ

たほとけはいま、みちのく津刈の阿彌陀川といふ浦におましありといふものかたりをせり。大高相模守康澄の末の、此村にもありき。近き世に、その遠つおやより傳へたる繪佛師のかいたるあみたほとけと、厩戸皇子のみかたしろとを、淳代の敬正寺にをさめたるといふ物語をせり。

風邪除禁厭

村のはしことに、わらふたあまたをとりつかね捨たるは、こたひをぞき風のはやれば、これを避んとのましなひに四合餅とて、ひとりが手に四合のよねを合せて、家に在りとある人の數を搗て神に手向、をのれらもくひて神送りせしとなん。吹越といふ村に出る。さゝやかに遠く行水の面に、柳ふしたれなひく。

　流れ江の遠きしつたひふきこして柳をわたる風しつかなり。

向能代

ひたに米代の河くまをめくり岸をつたひて、のほり來て向能代に出たり。いにしへ淳代といひ、野代といひしもこゝをこそいへ、今の能代は、近き世にやこゝらの家作りつらんかし。元龜、天正のむかしまては、苫ふける泉郎(あま)の屋形の、十斗もならひたりしとのみいひ傳へり。

高比良城址

河は米代、浦は能代、さりければ米代の湊ともいひけん。高比良とて城の址あり、これや阿倍鹿季の築れけん。村の名を鹿野城、あるは鹿村、あるは鹿之丞といふ。

徳昌庵古器

この村の德昌庵をとふらへば、主の僧あやしき釜をとうたして、これなんむかしの器たらん、はた、これ見てよとて鯰尾鉾めけるものなん、八森に住つるころ、小入川の浦田の中より掘り得しをもとめ

住吉社由來

たりとて、たまさくりしをさめられたり。世に多かるものから、しか丹ぬりたるは見しかいまをはしめにこそあなれ。こゝに日もくら〳〵になりて舟渡りす。落合の小鍎岬(こたてはな)と下濱とのあはひなる汐瀨に、中嶋といふところあり。こゝのしほあひはむかし岡邊にして、阪上將軍田村麿のゑみしらをむけたひらけて、御幡を齋ひて譽田の神を祭り給ひしといひ（天註――齊明帝の御代に阿倍臣ゑみしをうちたまふのとき、ゑみしらが齶田の浦の神知りなんとよことをはなちて誓ひせし神といふも、うべならんか。さりければ大化、白雉のころより鎮座ありつる神にして、延暦のころほひならん阪上將軍ぬさとり給ひしを近き世に八幡とあかめ、いまし世になりて蝦夷平(むけ)の八幡なともとなへ奉ることしかく。）、その世々とは河筋も流れかはりて渟代もことところにうつれは、神籬もいまの能代にありつる大森の濱にうつし、たまくしげふたゝひ、眞住吉の神籬をもうつしあはせ祭れり。八幡はかんさねにましませと、いまは、やはたのおほん神のおましませりともしれる人まれに、たゝ住吉の神の御名貴(たか)う榮へたてまつる。此ことゝ、やつかれつはらにさきにしるしたれと、ふたゝひこゝにのせつ。中隖は浪にうちこぼれ、はつかに名のみ殘れり。川瀨長閑に舟のつきしかは、ともしひとりて渟代にいたり、伊東なにかしのもとにつきたり。

四方展望

夜余避の七日はかり、渟代の岡邊によちて四方やもを見わたるに、遠かたのをちこちろう雪の

大伴の塘
古四王の堂
檜山の梅
櫻の眞盛り

まだらにけのこりて、

　やまひめの花の面影それならて霞て遠き雪のひきまゆ。

安子の森の小松をはしめ、こゝらの松はらのみとりふかう霞渡り、萩野の沼も汀ふかう風情ありげに、かく行〳〵て坊か崎になりぬ。そことなういたり〳〵て賢所(かしこどころ)を妻手に、大裡田(おほちだ)をゆみてに潮乾田(しほからた)、田家(たや)をへて大伴の塘といふに至る。うちめくれば大にして、いくちまちの田に水ひきぬらんかし。大伴たれか築きたりともいはれをしらず、その形の瓢(こも)のまかれるに似たるもおかし。水をへだてて、新田、中澤、今泉といふさゝやかの村〳〵見へたり。此やかたをへてくれは、梅の咲宿あり。

　袖籬のすかひに見ゆる梅のはなつゝむいろ香のあらはれにけり。

野をへて靈龜山の濵に出て、いや茂りたる古四王の堂にまうづ。杉淸水は、大椙の根より流れて神さひわたれり。檜山の里になりて、やゝ櫻咲つるなとおもしろき春なり。

八日。季忌宮の御前にいたりて、家々のそのゝ梅咲たるを見つつ、

　梅か香もひとつにさそへをそくとくやかてさくらの木のめ春風。

と、神のおきつきの杜にかいつけて出づ。

十日。つとめて、とにいづ。むかしこゝに三芳野のたねを殖たりといふ物語もありて、うべ

も芳野櫻の多く、けふを眞盛に松杉のなかより見へみ見へずみ、雪か雲かと見やり、「淑人の良と吉見て與之といひし芳埜よく見よ良人よ來三。」とすんじかへしつゝ、さながら芳野を分行こゝちして山におりのほり暮て、夕月夜おかしう、

惜しみつゝ暮るなかめもよし野やま花のをほろ夜月の朧夜。

とたくへなかめて、

日暮らし

十二日。雨なごりなう晴れてけしきよければ、獅絃師をいざなひ近藤傳吉といふあげまきをぐして、新坂にいたりて休らひ出こし日山のかたを見やりて、世にしか櫻の多かるかたやあると、こゝろほこりかに、ところ人の猶うちなかめあくかるゝも亦おかし。小牧の坂、大牧の澤など、花に日ぐらしてふ名あるもおかしきところ也けり。うべもむかし、秋田統のこゝに榮へつるころ、この山谷ともいはず櫻の多くありて、歌ながめ詩をふして日を暮しけるゆへとか。

花をよみなかき日くらしうちむれて月をかさしに人皈りけん。

さくら鳥

いまは此あたりには花さらになう、田づらのあざ名に聞へたるのみ。大森のやかたのほとりなる譽田の神籬の杜より入て、その村もはつれば、花の林にあさる花椋鳥、ひはのむら鳥に飛まじりて櫻鳥といふは、ひへ鳥をこそいふならめと、花の春に呼ふ名もおもしろけれ

志戸橋の山
茶毗の澤
長面の村
宮野目姨櫻

は、

春の日は花のむく鳥さくらとりむれる羽風も匂ふ山ふみ。栗澤のひとつ家あり、杉澤のひとつ家あり。はた、あるひとつ屋をへて谷てふ谷に、鶯のあるしかほに鳴ぬ。志戸橋の山路のなかめ、潮瀬、水海なとうら〳〵と霞て、森岡のやかたなと見やりつゝ分る。砂子澤の沼には雨いのるなとかたりもて、茶毗の澤といふ太谷あり。いまなかむかしのころ龕ひとつこの澤に在りて、むくろは、いくきだとなうきれてありし。烏帽子長もをりとして、人の頸なと草の中に在りしことあるてふ、あやしの物語どもせり。峯のしたつかたを過て、やはら達子のやかたになりて、あげまきの宿近藤のもとにしはし休らひて、常樂寺の藥師堂をへて、刀淵、日の澤川なと古城山の邊を流れて、櫻咲たる風情いふへうもあらじ。長面になりて、相知りたる近藤氏のもとにつきたり。三とせのむかし見し、明の高玉堂かうつしなしたるしげ山の繪のありつるを、こたひ、くにのかみの入らせ給ふのをりしも、奉りしなと人のかたれり。

十五日。つとめてうはそこ嶺眼をいざなひ、童ひとり、例の人々とともにいつたりむたりうちむれて、長面のやかたを出て宮野目にいたりぬれば、年をへし姨櫻の大なるか發たり。見し日山の山居の庵に在りつるうはさくらとは、としもめくりも増さらじや、いづらや〳〵な

小町村

と花あらがひをしつゝ、見寄る木のもとに、堀出たるなもあみたぶのいしふみを立て、堰の神とせり。小町村に來けり。ゆへなん、三とせのむかしつばらにしるしたり。小野小町のゆへそありける小町清水の、いと清げに岩河のひんがしの岸に落たり。鬼首山權現の杜の櫻もやゝ咲たり。

春風の吹も渡らはさそふ水かけてとゝめよ花のしがらみ。

梵定山址

梵定山なにかしの古寺の址の、はる〲とその山のいや高う見ゆ。こゝなん、從五位下源義家のきみ出羽守たりしとき、此寺をおほろげのねがひならず、建給ふふるきものかたりをもはらせり。高杉山を見やり、落合の村を弓手になして行に雲雀いと多く、菫は小菫のことく咲たる面白さに人々休らふ。

あまつ空に霞む雲雀のおち逢てつまとすみれの床にぬるらし。

鍬笊、馬虱

小雨降り來ぬ。いさとて二本杉の屋形にかゝり、砂子澤（いさご）のやかたにかゝり、かひらげふちのやかたなと（天註――加比良部淵といふ名は比内、淳代なとに近く聞へ、亦ところ〲に多くそありける。）、桃、李の花多く咲て春ふかう見ゆ。田毎に鋤の柄に籠をあみ貫きたるは、遠つあふみぶりのこゝにもありき。さりけれと、鍬笊てふ名もおかし。大切り、小切りとて男女のうちかへしぬ。花の林にくろつぐみ、瑠璃小鳥にましりて囀りとひ行を、花むくにや、野良椋鳥にやとあらかひ、あれ馬虱よと童の礫うちやる。馬

神馬澤

中山の觀音蓮

師走長根

松瀝の敲

じらみはむく鳥のあた名と聞て、みなはと笑ふ。増浦といふ村に來て與五右衞門といへるもとに晝の中宿をして、一通の村（天註―以登利は一通ともいひ、一鳥、一取なとの方言にして、山の名にも村の名にも多くそありける。蝦夷辭にてやあらん。）をすぎ神馬澤のやかたに至る。このあたりはなへて大なる梅の木いと多く、花はなからも過ぬれと、香をかくばしう山風に吹ちりぬ。桃、梨、李の枝をましへて、やかた〳〵に咲たるもおもしろう行かてに分て、中山といふ山路を行ば澤水の面に、雪のいまはた殘るかと觀音蓮の花のひし〳〵と咲て、けにやあみだほとけのならびましませるかことし。うべも佛の御名にこそおへれ。若艸山にすかたことならぬ高尉といふ山のあり、けにもいや高し。いたり〳〵て師走長峯といふに攀て、鯉河、三鞍岬、高岡山、杜山、河代のやかたの外山のかげに見へ、菜種生の盛りは、こかねをしくかと日のうら〳〵と照り渡り、遠近の山〳〵湖水の面に影おちて、ながめにあきたらねど風いや寒く、うべ師走なかねの名こそしられたれとて、みなおりはてて山路を行に、腰に槻の皮の桶をつけて手に鑿やうのものをもち、これもて松の木をうかちかいやり松瀝を採りて、しのゝ笹に包み敲といふものを作るといふ。松脂蠟燭と越路にていふものにこそあなれ。この長坂といふを下るに坂中に赤石脂あれど、比内の郡なる沼舘に産るとはしなくたれり。種澤といふ村あり、苗代はすさていさなうそ見へたる。

小田のたねさはにもゆらし水温れてこゝら蛙の聲聞ゆなり。

市野邑

市野邑にいたるに、大山、こごり山（天註――陸奥の津輕路の千歳山のあたりにもこゝり山とて炭かまのけふり見へたり。）など木々のめふかし。桃の白きも緋なるも咲ませ、櫻やゝ咲、そのの椿のおもしろき齋藤清三郎といふ宿にしはしありて、

笛吹の觀音

觀世音菩薩の堂にまうづ。木の根のごときみかたしろの、御戸代のうちに見へたまふ。此ぼさちに、笛吹なんとおもふ人は千本の笛竹を切て奉り、そのちもとのうちに手にふとさはるを一管とり來て、よく孔を作りて吹きにふけは、かならす妙なる手をも吹出る誓ひとなん。たとへ十本、はたもとにてまれ、これをちもとになすらへて、こゝろなほうひたふるにまうつることとなん。けにやこゝらの笛竹の手向てそありける。こは菅生の埼のあら潮のほとりなりける、笛瀧の阿遮羅明王にひとしきちかひにこそあなれ。かくて日のかたふけは、

十八坂

十八坂（天註――十八坂の名此あたりに亦も聞へし。鹿渡の山中にいふは、むかし十六になりけるまゝ子、十七になりしまゝ子あり。此はらからのむすめに、此山坂越へなんうちに十八むすひの麻苧の糸なうみそにすへし。うみえすは家に皈りくなといひしかば、なくく出て、うみつかれて妹ふしたふれて身まかれり。そこをうば坂といひ、姉もふしたふれ死せり。そこをあれ坂といひ、なへての名を十八坂といふとなん。妹をたばといひ、又ここにてうばてふこともくにこと葉なり。）といふを越へて瀧の澤といふあり、寺のあとやかしこならんか、瀧の細く落たり。

浦の城の址

三浦兵庫頭義豊の在りつる浦の城の高やかに、いまは田となり畑となれと、そのむかしのさまはかはらす。本廓、御坐の間、うまだし、おほがねかけたりしやくらの址はあしこなと、つばらに人のをしへぬ。からめてのほとりに田井の水ひく大池のあり、堀なとのあとにや、なにくれとむかしを偲ぶ。

城主三浦氏

あはれ義豊は三浦介平義明ののちにして、鎌倉を出て飽田

浦村の村々

方言三ツ

常福院
高岡權現に詣づ

路に來り城介實季につかへ、この浦の城にすめり。逆意ありけるをいさめ、腹かいきりて死をかろうせり。その子三浦の五郎丸義包は、人のさかしらにて、すへなう北野の原にてうたれし。はた湊の町にて正月のはしめ、ひやに中りしとも聞へたりし。そのなきたまのしこめとなりて、あまたの人をとりころし身の毛のいよたつわざごもの多かれば、義包かなきたまを神といはひ、社を一日市のうまやのほとりに建て尙あり。坂を下りてんと見やる。浦の梅とて名たゝる花もちりはてて、桃、櫻の夕榮梅にいやまさりなんと見つゝ、柹のその多く、秋は實の色づき葉の紅葉ぬなかめの、たくふかたなけんとか。日のやゝ暮て浦の村におり來つ。こゝに今いふ矢橋、元町、浦大町、浦横町、小鍋鼻、鐙澤、白水澤なとの村こそ、その在し世の町〳〵にやあらめ。かりわひて宿しあらねば、浦横町の村に來て兒玉嘉兵衞といふかもとにつきたり。ちか隣より女の來るを童のしたひよれは、この童よ、留主居せよといふ。いさとき、夜居の僧なとぞありける、册子物語めける詞もいとおかし。人々、いさねなん、あなこはしといふ。こは、こうじたるてふ辭也けり。とに出れば、森山のそひらのかたに月のさしかたふきて、霞かゝりたる風情ことに、寢おしまれたり。

十六日。つとめて宿を出て、盛嵒山東國寺常福院とて古義の眞言の寺あり、花ことにおもしろく咲たり。高丘の神にまうでんとて分のぼる。一の鷄栖に入れば羽黑權現を齋ひて、此

祠にぬさむけまつるは彌陀、藥師、觀音の種字のありけるいしぶみを、ほり出たりしをひめ祭るといふ。大槻のあやしのうつほのもとに、ちいさきほぐらのあり、山祇の神を祭ふ。四方の見やりのことにおもしろし。梅の眞盛を見たらましかは、柿の赤葉やいかならんと人人たゞずむ。桃、櫻、梨花、李、なにくれと見もわかぬ遠園の花ども、めもあやに見やられてのぼりもはてず、峙つさかしのみねをはる／＼と二の鷄居になりぬ。この高岡權現と申奉るは、なかむかしのころ、副河の神社のいはくらのいつこともしらず、添川のほとりを尋ねわびつるに、此山より獨鈷花皿をほり得ることあり。こゝや神の鎭座のあとならんとて、副川のかん社とさだめて、保食神を齋ひ祭るゆへしか／＼となん。このもかのもの、いはねいはむらの松杉の中に、雲とかゝるはみな櫻也。

縁起

　奉る花のしらゆふ花のぬさいさとなかめはそひ河の神。

石塚長峰の眺望

ぬかつきはてて、こたひは石塚なかねといふをつたふに、猶おもしろく見やられたり。三浦義豊のありし城山を弓手に、五十野目内記秀盛の城山は木々の中にて見へこそわかね、安藤季村の在りし岡本の古城は、まのあたりに見つゝ、田面の業するは繪なとを見るやうに、さゝやかの馬、さゝやかの人、花の林の中にかくろふ浦のやかたどもをはじめ、麓の里そいと多かる。めてには恩荷の浦山なと、しほせも水海もひとつに霞て、眞帆に片帆にひきつらな

直坂村

天瀬川村の高齢者

因幡國の高壽者

りてこぎも離れぬは、釣の小舟ならんなどうちながめつつ、

海士ころも霞の衣うら〳〵とそらにもなびくつりのいとゆふ。

かくうちたはれて、麓に下りえて直坂のやかたになりぬ。林に、觀世音堂のあたりはとしふる槻の木あり、はた神明の杜に櫻多し。こゝにしばしと休らひていづ。天瀬川の村に來り、こゝにすむ萬助といふが母は元祿の庚辰の年に生れて、百六となりて、くにのかみよりかつけものありて淺からぬおほん惠にあひしかど、去年身まかれりと、その子六十あまりにして此萬介がかたるを、因播の國のすきやう者の聞て云、あかくにうご松原村に住む鎌部義左衞門は、文化二年になりて百八十三、この翁の室小夜がとし百七十三、こたび大樹公よりおほんたつね上られて、かれらにしろかね廿五枚、五十人扶持をそへてたうはり、松平相模守のおほんしるよしの生れなれば、そこに門ひろう作るべきの料として、くにの守よりこかね百兩をたまはりて、足輕下部五人をめしつきとして、それにくさせて、武藏の都をたちて因播に皈りける。鎌部義左衞門が子淸左衞門は百三十七、妻の岩かとしは百三十一、孫の萬之助百三、それかつまのかねは九十九、彥の平五郎は六十、そのつま石は五十七、曾孫源之助三十七、その妻のとし(マヽ)　玄孫の源太がとし九、その妹いくは六にして、世にたくひなき齡なりけりとて、その淸左衞門夫婦より源之助までしろかね三十枚つゝかつけ給ひ、としこ

鯉川村

鹿渡の浦

松庵寺

との正月十一日にはむさしへ参り、としの祝ひを申上へきよしを仰たまひきとなん。人々聞て、あやしうめつらしきもの語を聞しものかなとて、別て鯉川に來けり。翁の田より皈るをいさなひつれて、このとし高き人の物語に、五百とせのむかし、なにかしどのとか御名は忘れてさふらふ、中納言のひとところこゝにさすらへ來給ひて、いま外館（とたて）（天註――戸館、或外舘の名みちのおくの金成、あるは津輕郡なとところどころに聞へたり。）と字にいふ山陰に栖みたまひしをりしも、此里の副河の淵より大鯉を網して、これをまさなことにたてまつる。こは、この秋田路にはなき魚なり、君のみうつくしみ淺からぬゆへにや、かく得かたきものもとり得しと申しかば、めでくつがへり給ひて、添川の名をいまより鯉川といひ流すへしとのたまひしより、いまし世かけて村名とはなりけるとなん。そのころのすんさなとにてやありつらんかし、ふるき家にて、藤原與重郎とて賤しきものありとて、ことみちに入りき。山屋のやかたをへて鹿渡の浦になりて、こよひは、こゝに相知りつる人ともあれは、そこに宿りせん。

十七日。鹿渡に在りて、くすし青山玄丹、近藤忠右衛門なといさなひ、いつたりむたりかたらひて瀧見なんとて出たち、高嶽山松庵寺は、いつの世にや野村といふところに在し庵たりしを、天文二十三年にこゝにうつして、補陀寺の十二世なりし察心壽鑑和尙を開山として、大寺とはなりぬと。橋木尻（せのきしり）といふあたりより一本樹をへて、かねふるあとを擧て古屋

猿田の山里

小瀧

正安寺智雄

鋪のあと、むかし專右衞門といふか栖家のあと、あなたに遠く古館ありなと、猿田(さんだ)の山里にいたる。こゝなん、維平は小鹿の大社、山毛、左ッ田のほとりに馳せむかひ防き戰ふことふたときに及ひて、維平うちとられぬなとありつるところにして、大方といふは八龍湖、鹿渡(かど)は志加の渡にして、山毛は山屋にてやあらん。そのいにしへの軍きみあまたほろびたりし世を偲ぶに、袖かつ沾れぬ。左ッ田の桃、櫻やゝ咲て、十あまりの家居埋れて見ゆ。かくて小瀧といふか、さゝやかに落る水のもとに來りけり。寶永三年丙戌五月、正安寺十二世なりける智雄了察和尙とありて、兩瀧てふ碑あり。こは中御門院の御代のころほひ、僧智雄木を伐り巖をうがち、水をつたへて瀧を作り、あたかもこの僧のをこなひは、興福寺の仲算大德にひとしかりけるとなん。むかしの正安寺をいまの正庵寺となして、弘治のころにて二百五十年をへたりといふものかたりをせり。やはら苗代澤といふにいたる。智雄和尙の瀧をおとし、水を流しけるより井堰にひいて、いくはくの田を作りて人住ぬと、智雄の德をになうたうとめり。うへも、かたしけなき法の師のこゝろさしにこそ。

　時もいま小田に苗代澤水をまかせていとと榮ふ民草。

大瀧のもとにいたれば、咲いづる櫻のなかよりしら絲をくりかへすかとおもはれて、

　くたけちる色も雫も匂ふらし花のしなひにかゝる瀧なみ。

閑居山

閑居山といふによちのほれば、ながめいとよし。石のみほとけを三はしらすへて、かの僧の伽利を埋み瘞せしものかたりあれば、山の名をもしかいふとなん。

鹿渡の火事

くら〳〵になりて鹿渡の村に皈り、三四人しめやかにむつかたりするをりしも、聲高うのゝしりあるくはいかに、すはや火のことなりけりとてなか〳〵のさはぎ、風さへ吹にふけば、草ふける家ともの三十あまりも時のまに灰となりぬ。ふせぎはびつる人々は足を空にまどひ、女のなきわめくこゑ、いやうつかねの聲もやゝしづまり、鶏も鳴なんころ、在りしあるしの宿は殘りつれど、とりあばれてさらにふしどもあらねは、正安寺の御佛のかたはらにふして明たり。

出土毘沙門

かくて、ふたゝひとてたちいづる。こゝに左田（きんだ）のほとりより堀り得しとて、鐵銅の毘沙門天王のみかたしろあり。御形のそこねて、河伯面なとはさたかにそれと見へこそわかね、たふとかりけるみほとけとて人のまうでぬ。

牡丹の村

十八日。かくて鹿の渡の浦を出て、はる〳〵とかへり見やりたる風情のことにおかし。牡丹といふやかたに近つきて、

　こやあかぬ春の日數もふかみ草やかて咲てふ里に來にけり。

ふたつ森を經て杜丘のやかたにいと近う、みちのかたはらの塚櫻はいくはくのとしやへつらん、あはれけに咲たり。

檜山

桃の名所牛野首戸

横長根

苺のしたに春やしのはんいく世々をふる枝のさくら花もまさかり。

やかて、豊岡のうまやより入てふたゝひ檜山に來る。菜園の櫻とて、いまを盛の花の夕榮ことさらにこそ。

十九日。けふ淳代にいたるとて、

山風にちらはちらさくなかめ捨て皈らんものかこの花のもと

夕つかたになりてつきぬ。

二十一日。宿のあるし伊東なにかし、近となりのあるし、かれこれ人々ともに牛野首頭の村なる桃見てんとて、鹿之尉の舟渡りして廣野の中路をふたさとはかり行ば、そのうしのくびとこそいふなる。栗種る里の家は十あまりそむき〳〵に立て、こゝらの桃の紅のこきもうすきもこきまぜて、盛なるかいく千もとならん。畑のまち〳〵をへたつ畔垣てふものは、みなちもとといふ八重櫻をひし〳〵と殖たり。この花もいたく咲て、こや、いぬ人のふし見の山にいやまさりつらんと人よみぬ。めては月星のやかた、ゆみ手は荒牧、小手萩なといふあたりへよこたふ横長根といふ岡にのほりて、あやにしきしくかと霞て遠も近きも見やられ、雲なす櫻、李、山梨の雪とむきまでに、桃李千机錦、江山一畫屏とすんし、まほに仙人の栖家たらんかし。牛を桃林の埜に放つや、牛首積といふ名もいとおかしう、この桃の園をめく

りくて流のもとに出來て、

これも亦とめこし河のみなもとや世々避くもゝの花の一村。

さをとゝひ相澤光武こゝになかめて、

やま人の栖家ならましいく千本枝をつらねしもゝの花垣。

照井象賢の、

みちとせの春をこめてや仙人のこゝに殖けむ桃のはなその。

伊藤祐友の、

やま人のかさしならましいく春もこゝに來て見んもゝの花笠。

となん聞へし。かくて月星の村にかゝりて、如月に見し所ながら、こは山のすかたも水のすかたも桃櫻に風情かはり、酴醾花に咲埋れたる垣根など、ことやかたのこゝちそせられたる。朴の木瀬村に出なん林平など、弓手妻手の畠のくまくく桃多く、くね垣てふものに櫻を殖て、牛野頸戸をまねひたらんとほゝえまれたり。

月星の村

二十四日。相澤光武にいさなはれて日山の花のちりなんも見てんとて、宿のあるし伊東なにかしなと、つとめて渟代を出て仁井田の村に來つゝ、倫勝寺の船繫の大槻、あるは千世ふる齋槻なとにへたてられてあさき櫻、山櫻など、をくれ咲たるをしはしとて見ありき門を出

仁井田晩櫻

れは、むかしは嘉樂院といひ、いま播磨寺とそいふなるうはそこの宿の井のもとに、八重櫻の大なるか眞盛なりけり。

誰れもかくなかめつつ井のそこ清みこゝろうつさん花のした水。

とかいつくれは、相澤光武も猶、井もとをいにかてに櫻うち見ていへらく、

花の影ちらまくおしみさと人はいとひつゝゐの水や汲らん。

大伴の坡にしはしかたり休らひて、とみのことありとて伊東はいにき。山つたひ檜山に出たり。けふなん季忌宮の祭とて、霧山のあたりは人さはに群れありけば、あなかま、こゝにといひて淨明寺に休らひ、夕附かた古城にのほれば櫻はなからちり、過る谷かけに鶯のこゑおもしろく、

山の名の霧にむせひてうくひすもむかしを偲ふ春の花その。

猶あきたらずそのふかうわけ入て、あたら櫻のうつろふをとなかめわひて、

花の枝の色こそわかね左九良かり春の日やまの暮行はおし。

こよひはこの麓寺にやとりなん。

二十六日。ひるつかたより馬にて出たち、橋のもとにさくらのはら〱とちりくなん、落花如雪馬蹄香、幾樹黃鸝欲斷腸、行到小橋春影碧、一溝清水浸垂楊。」といふ、くしのこゝろはへ

に似たりけりと馬の上にすんし、とくはせて日もくら〳〵に渟代に來つゝ、光武にあすとて別たり。

霞むつきほし









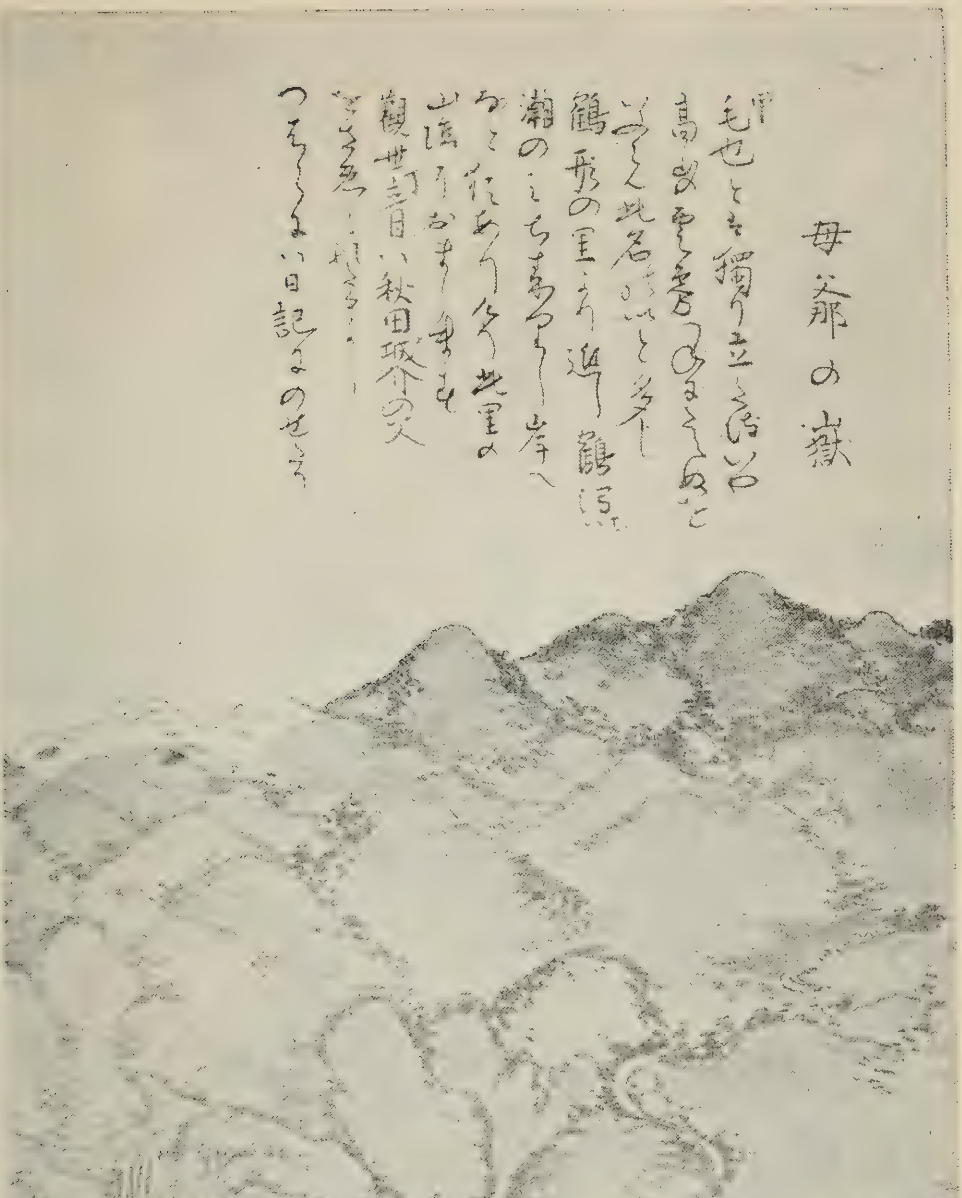


霞むつきにし

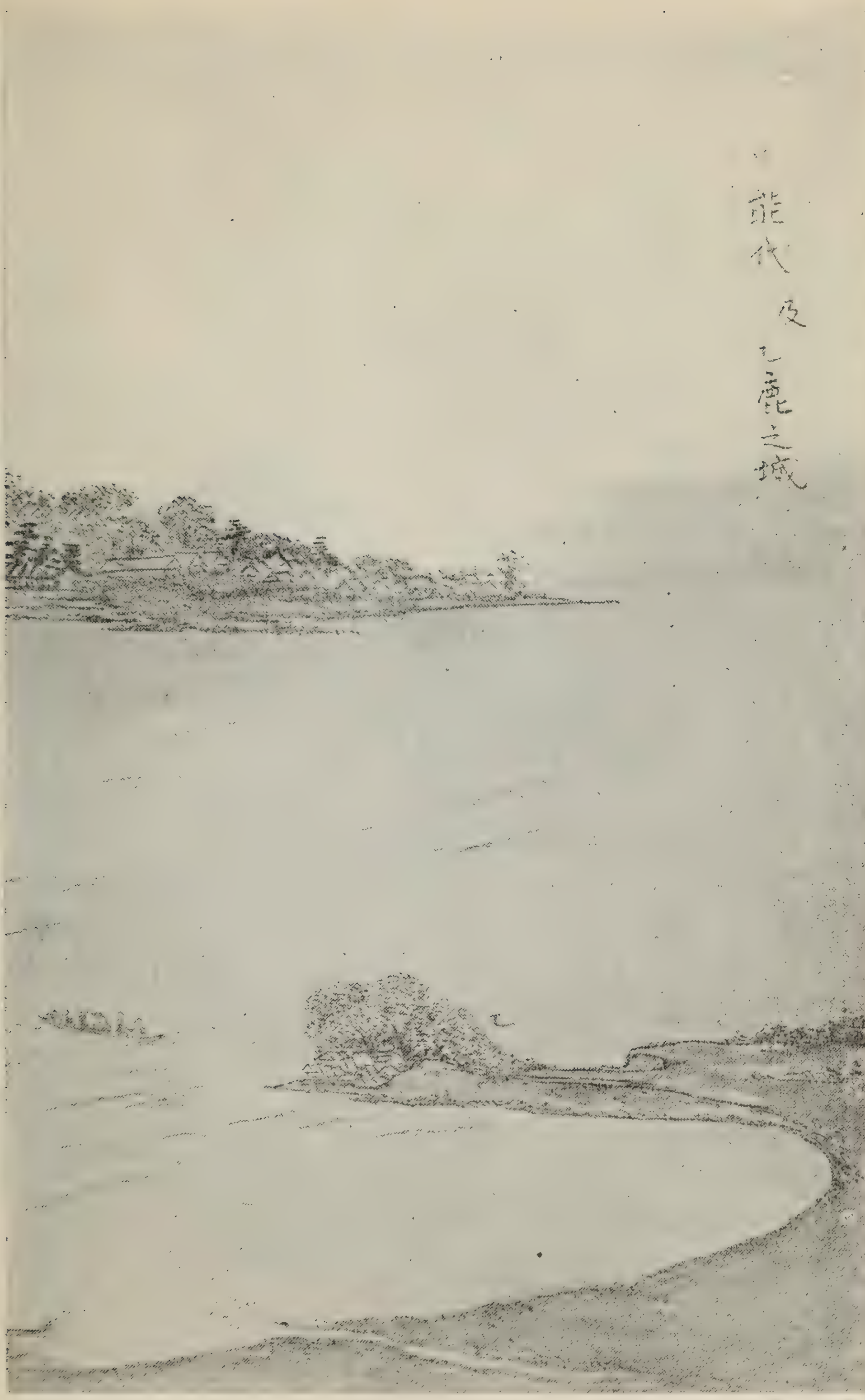


霞むつきほし





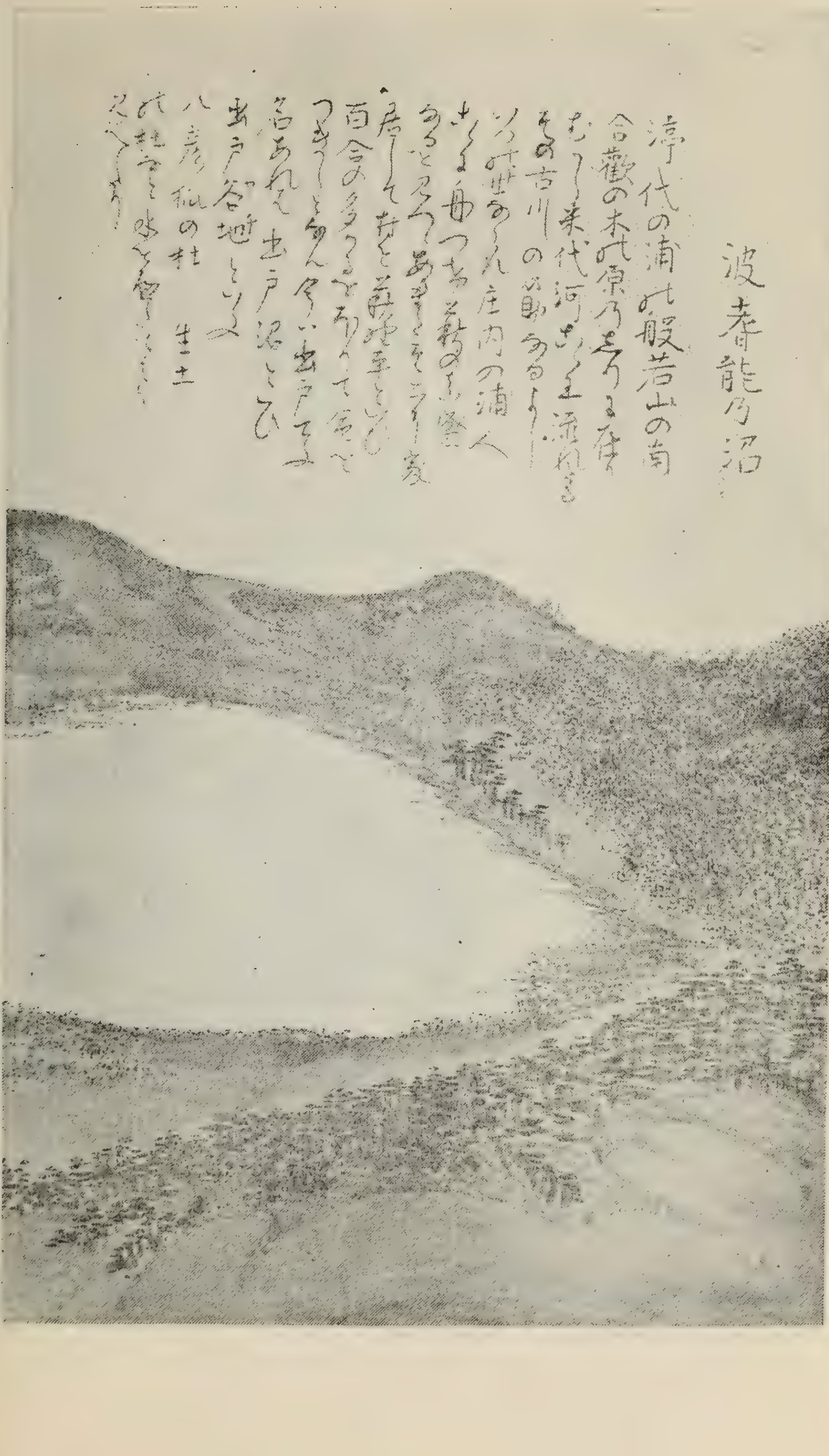


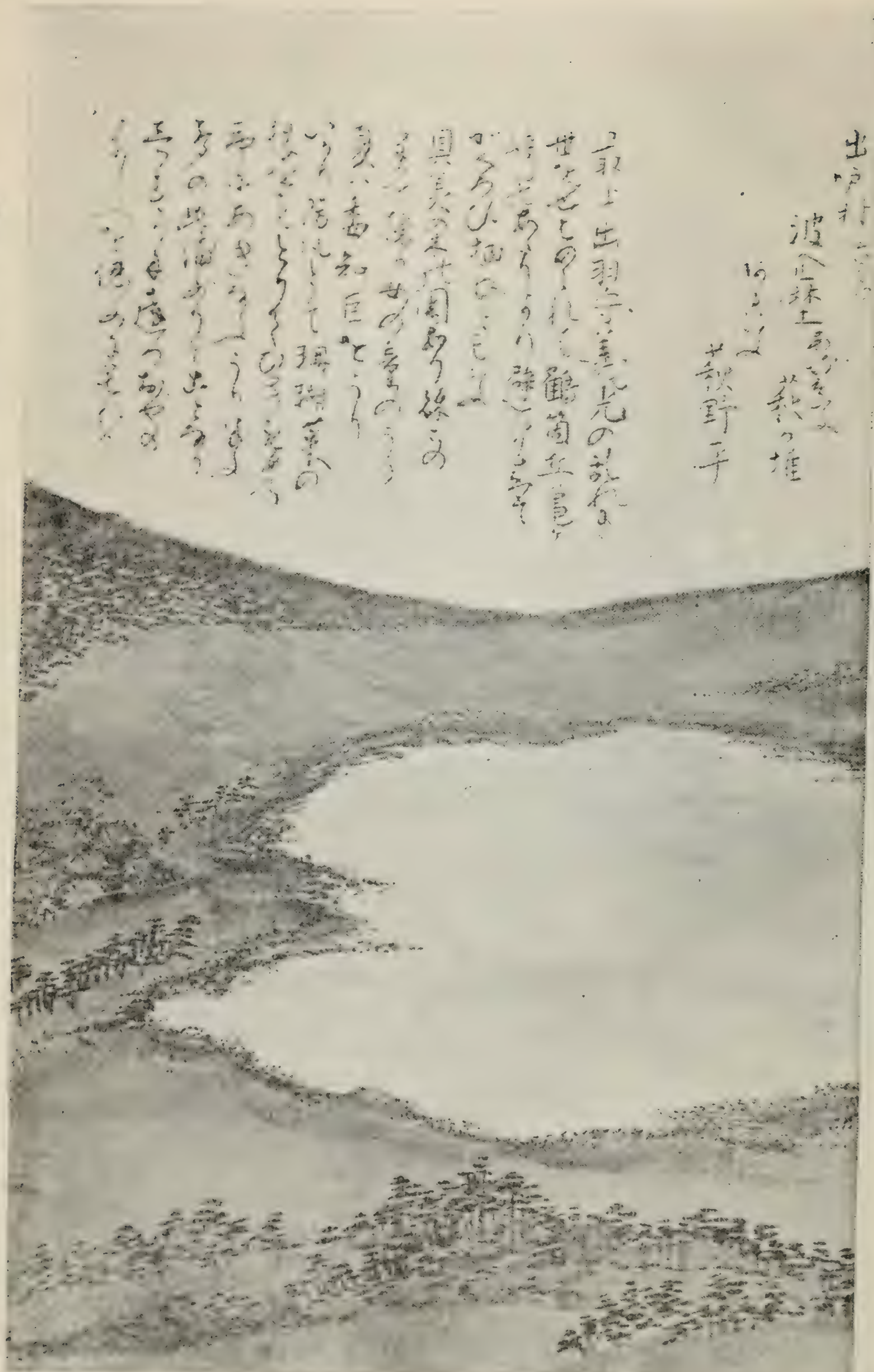

能代及ヒ鹿之城





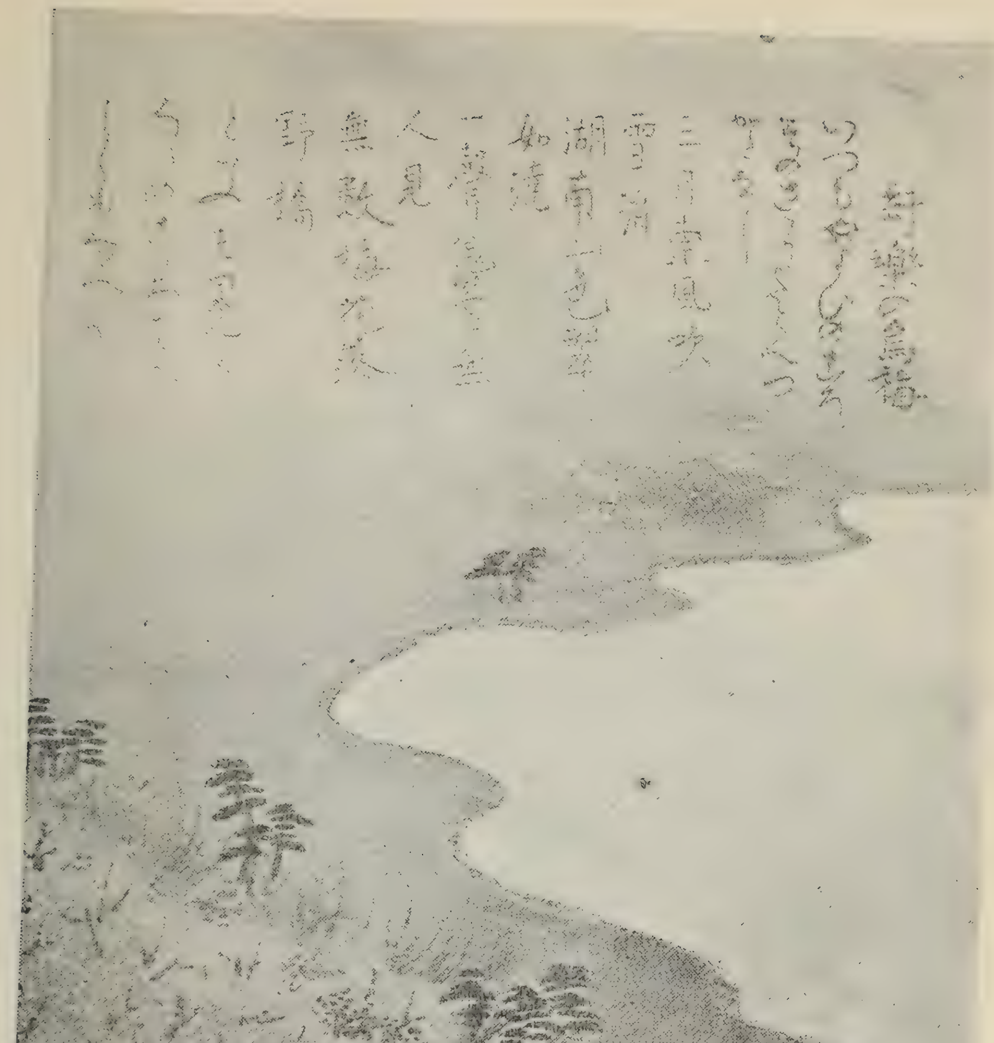

呉安清水



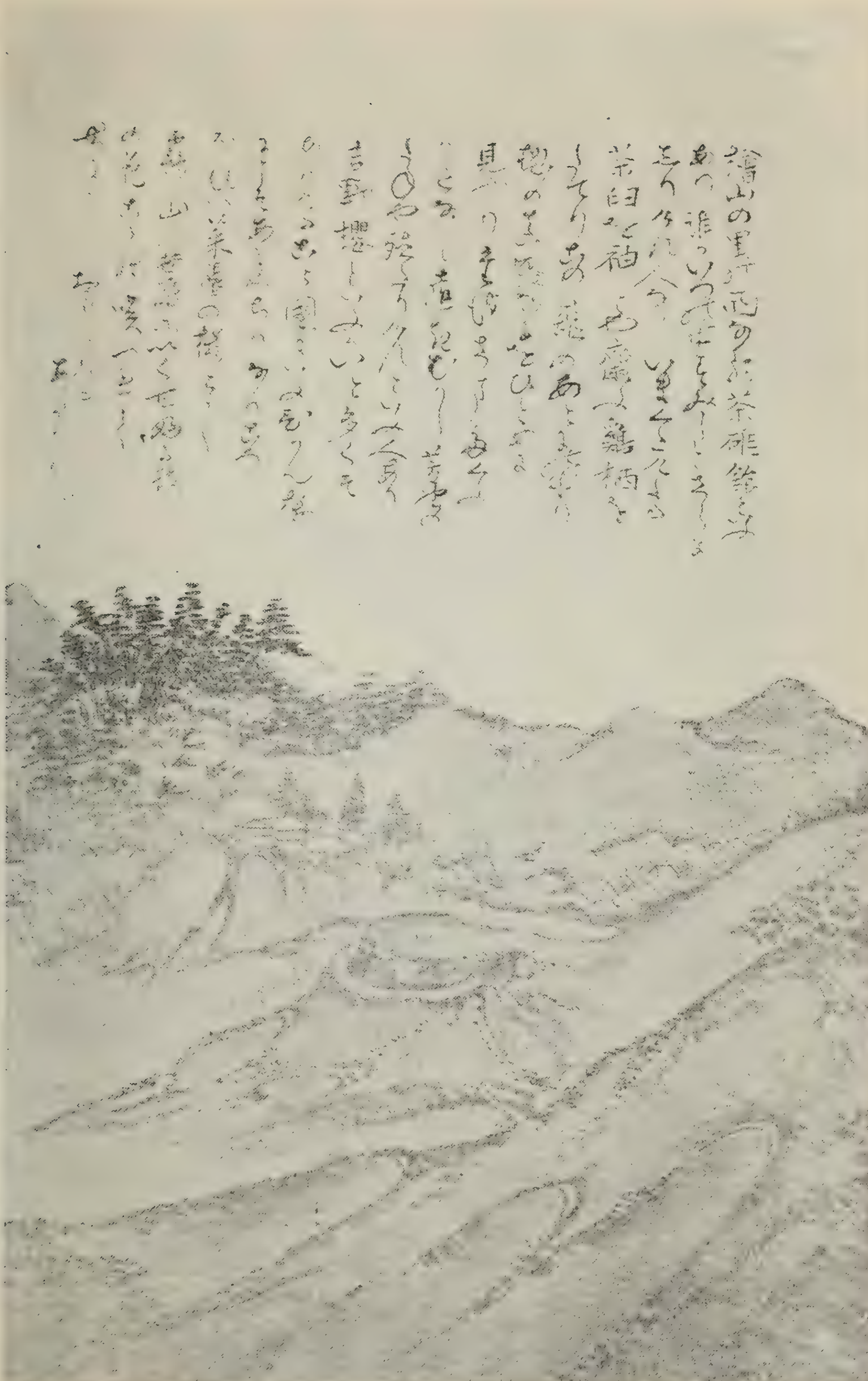



大友の坡
泉澤
新田
中澤





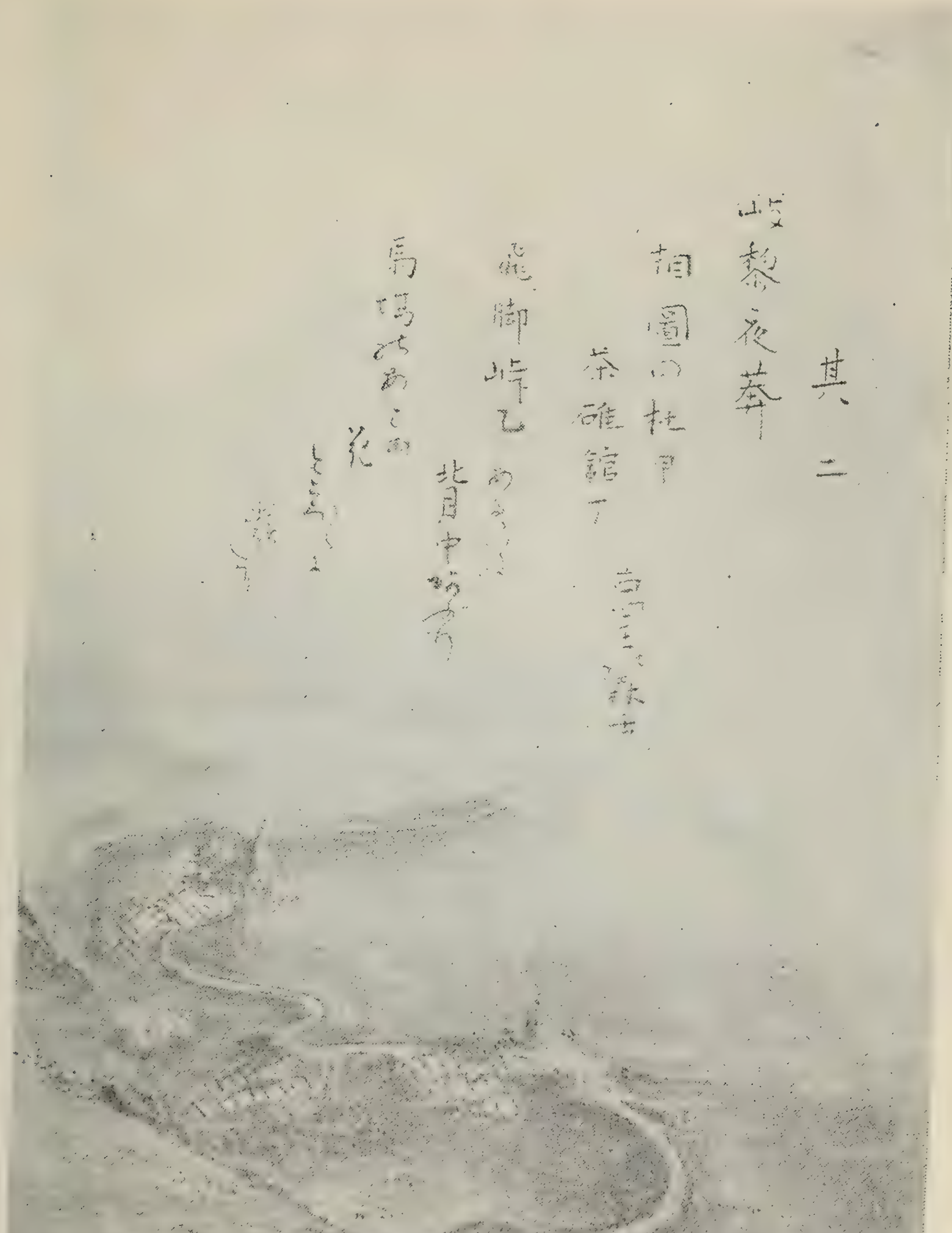







霧山の古城








岩河の庄達子村の藥師
常樂山梅榮寺といふ

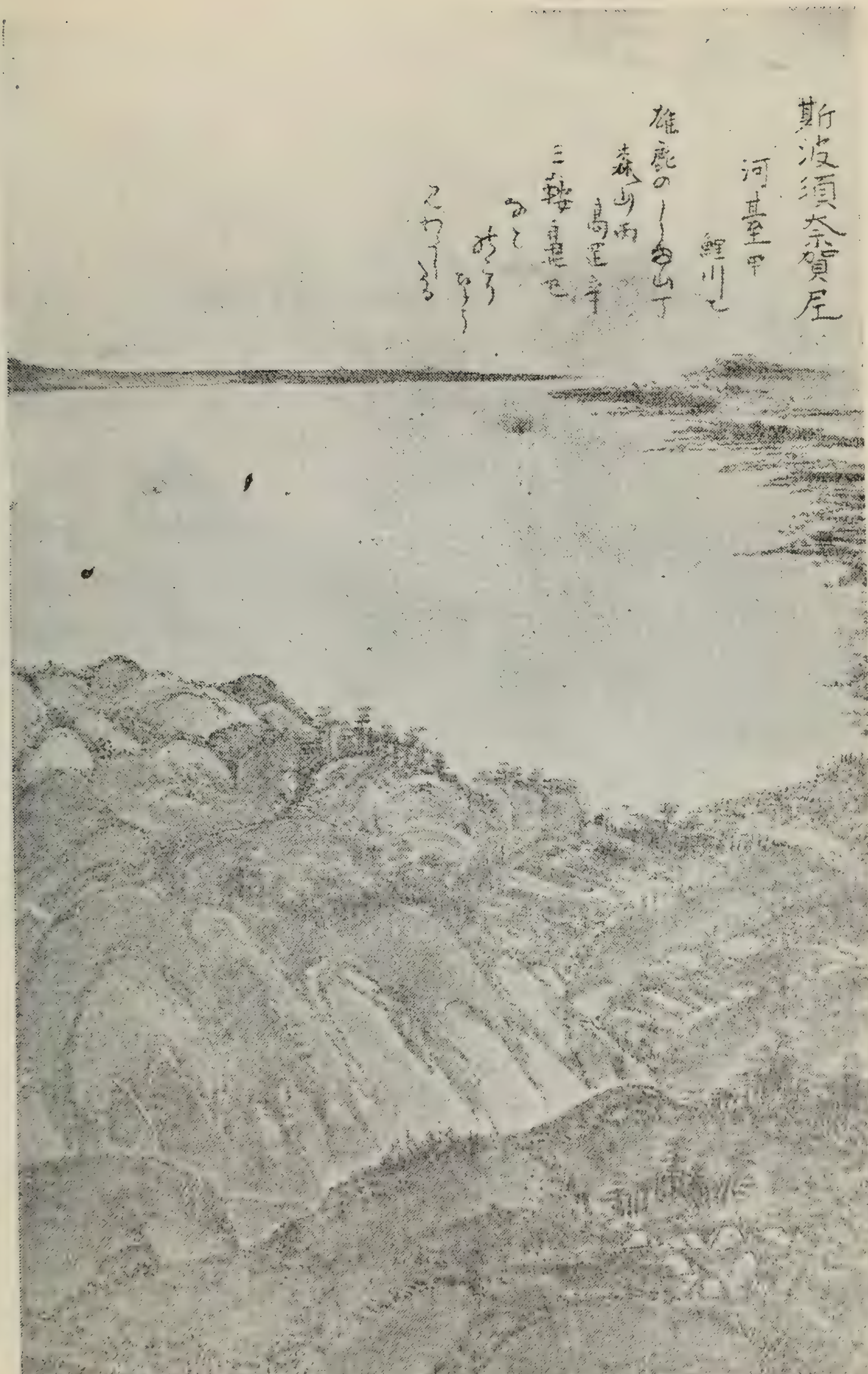




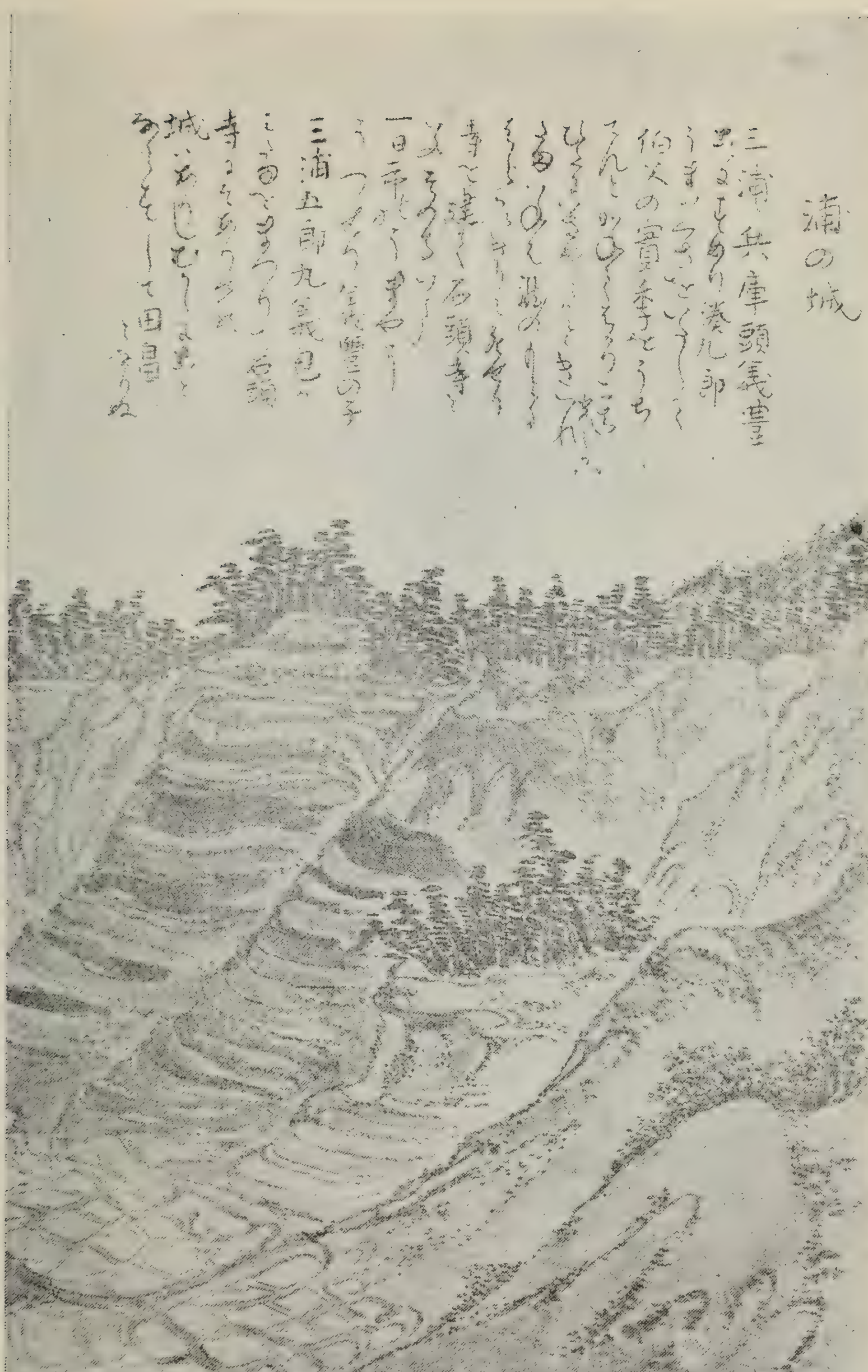


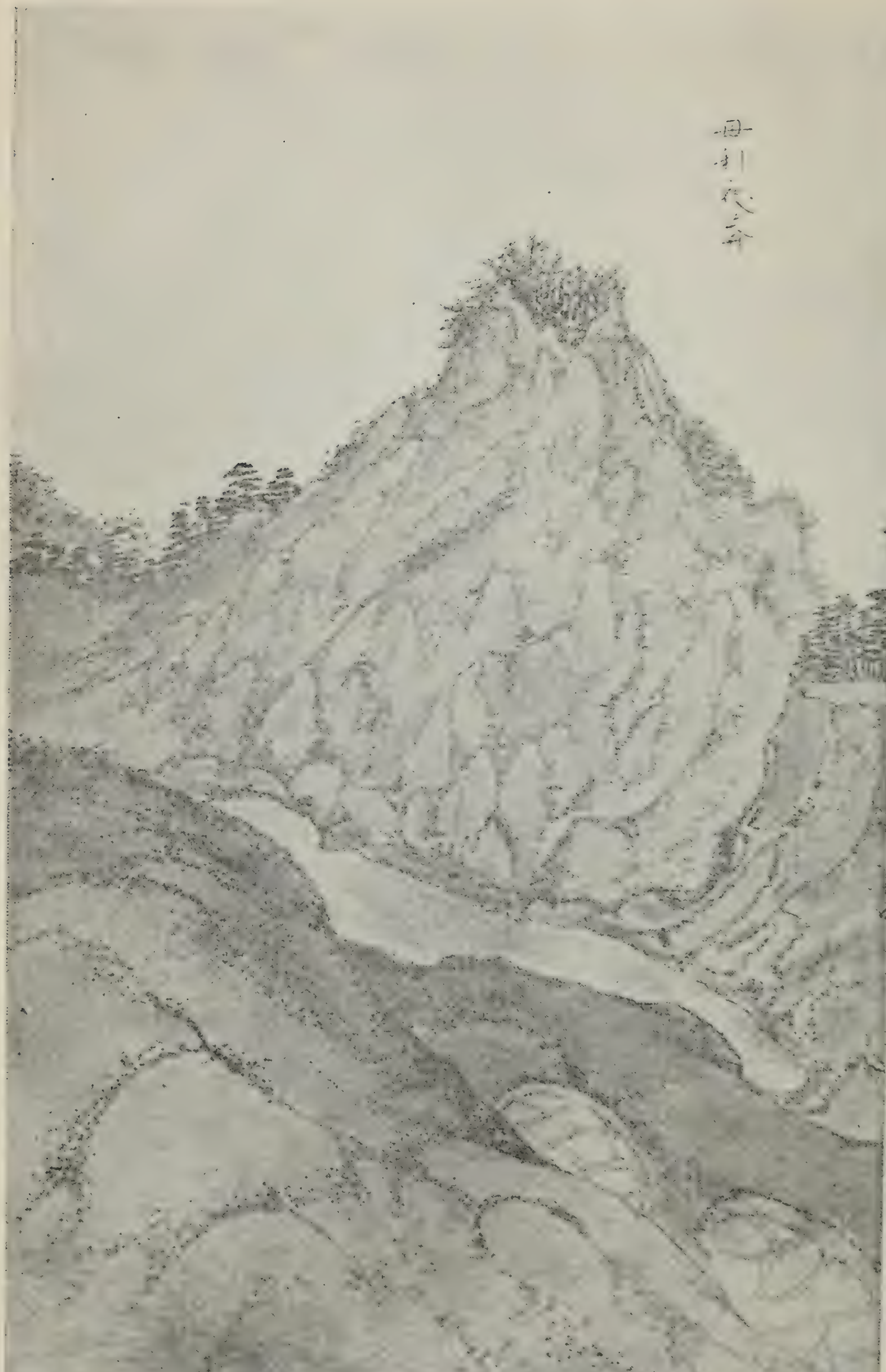





斯波須大奈賀尾




浦の城



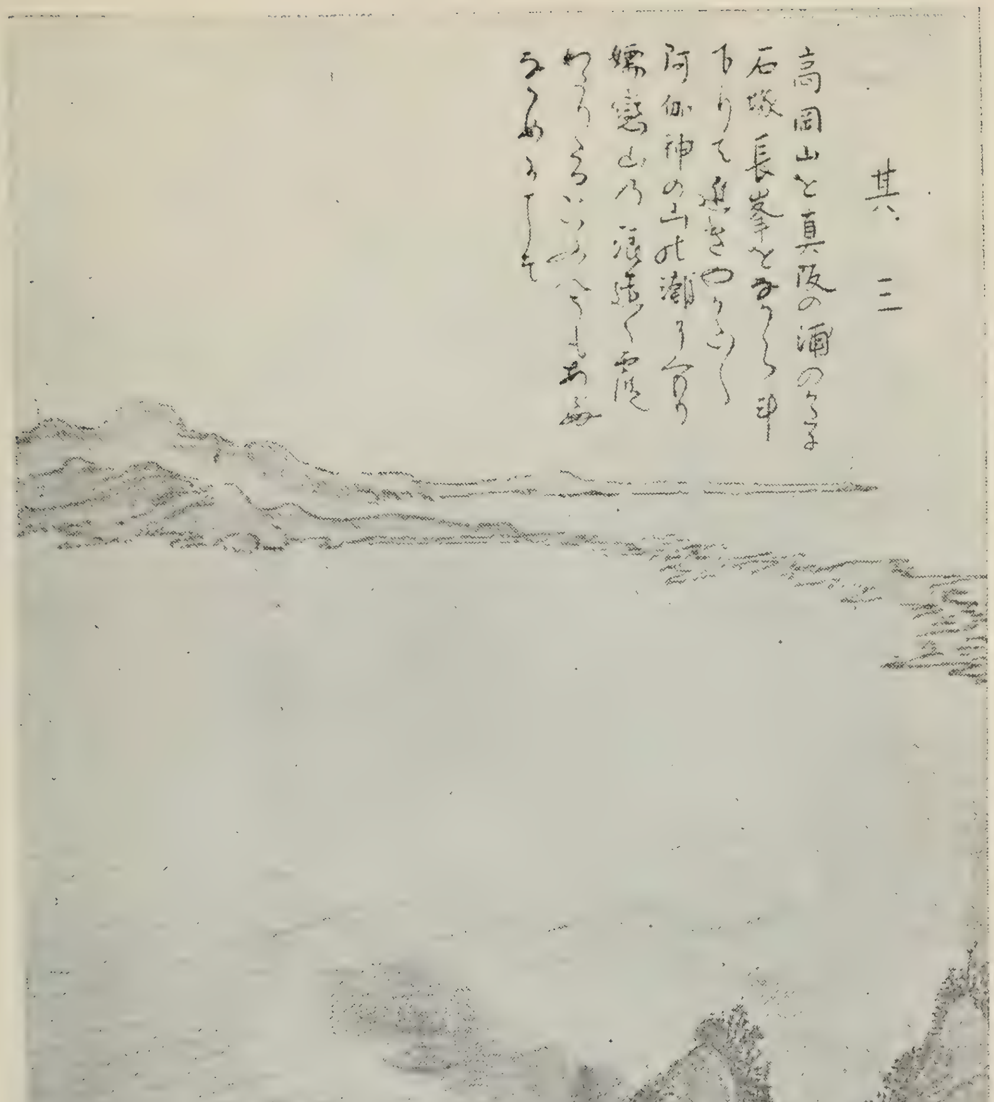

鷹丘山

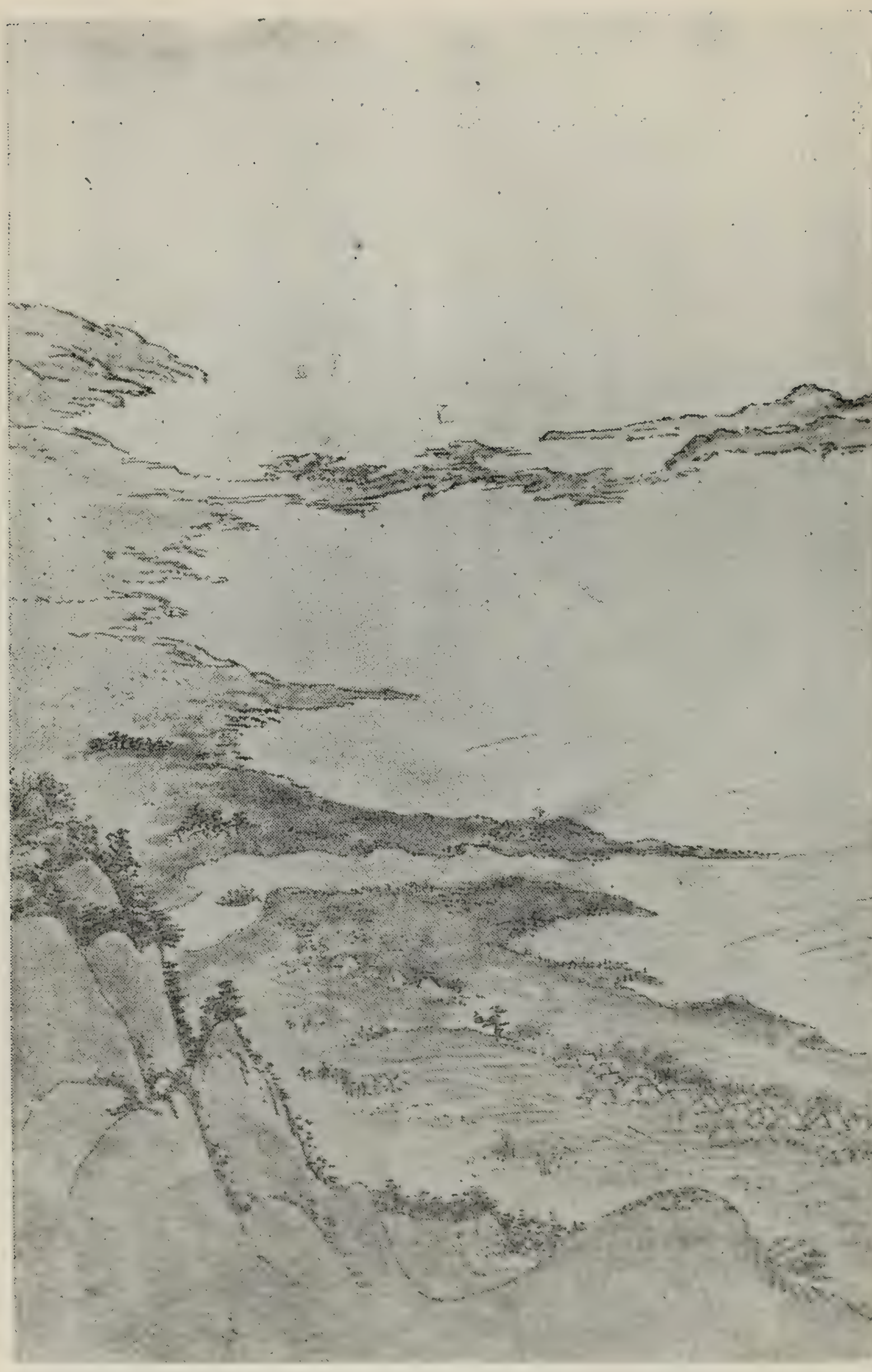


霞むつきほし


其二
五城の目 野田小池の村々を
八龍の湖 潮の洋べに



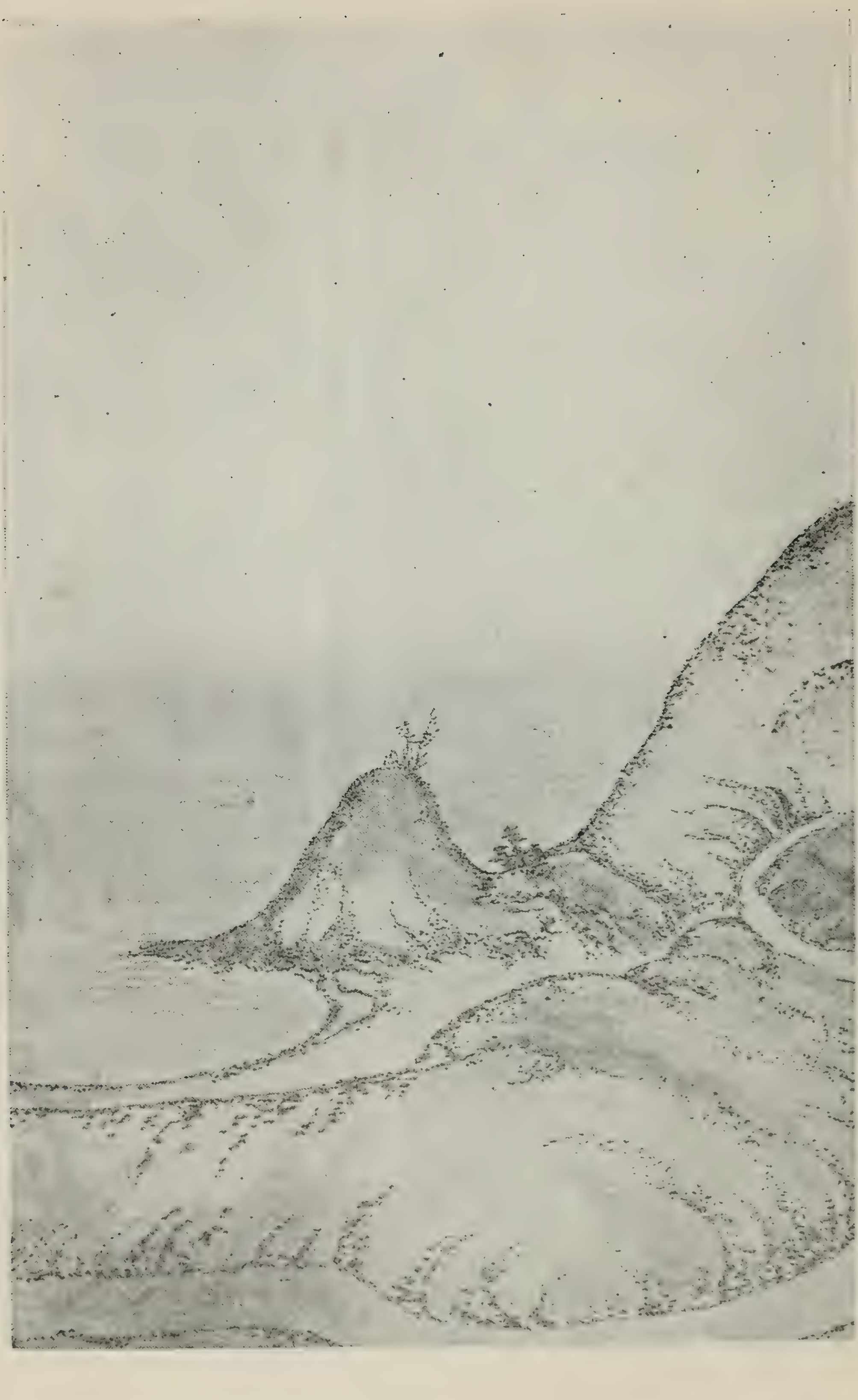

其三

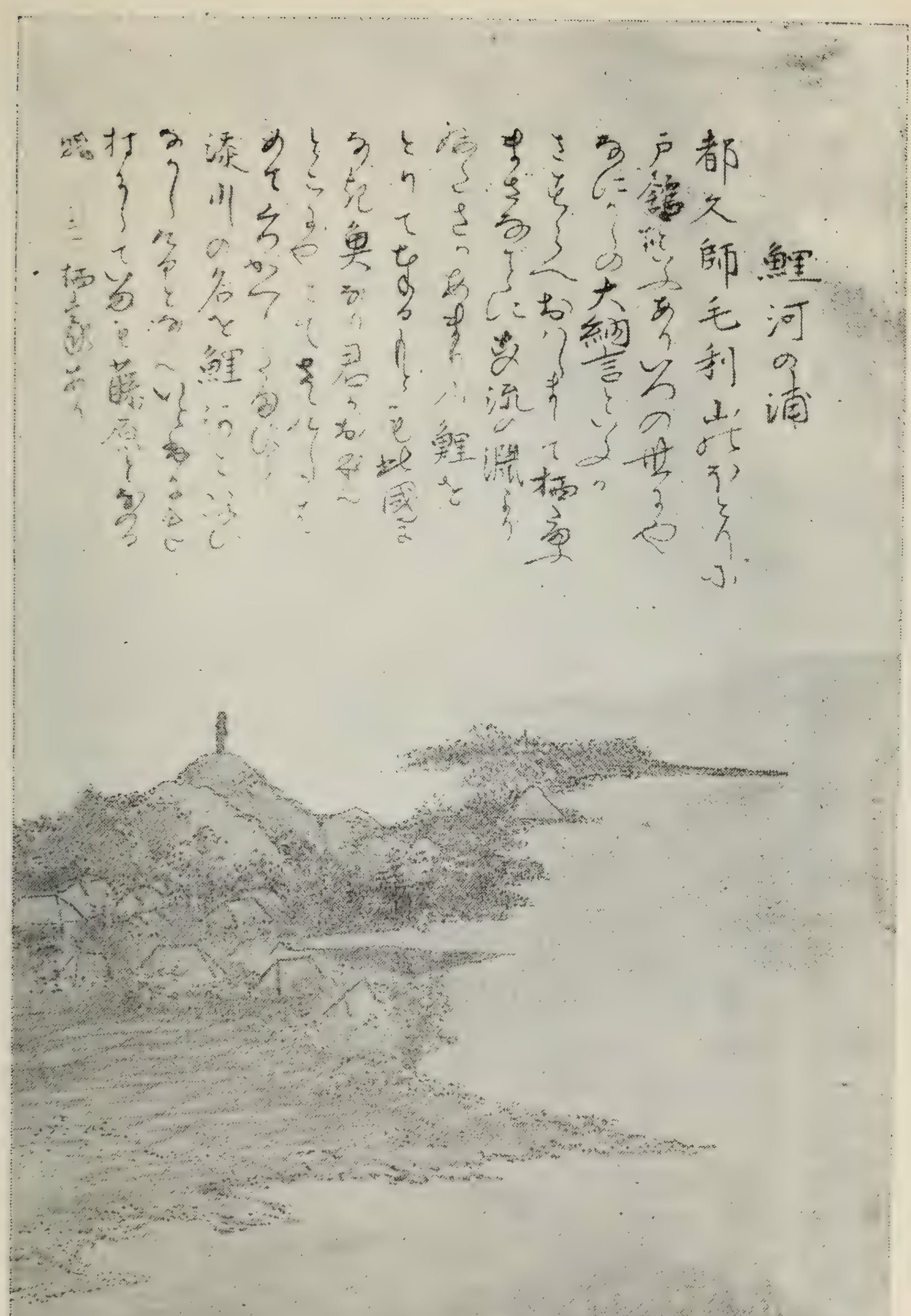


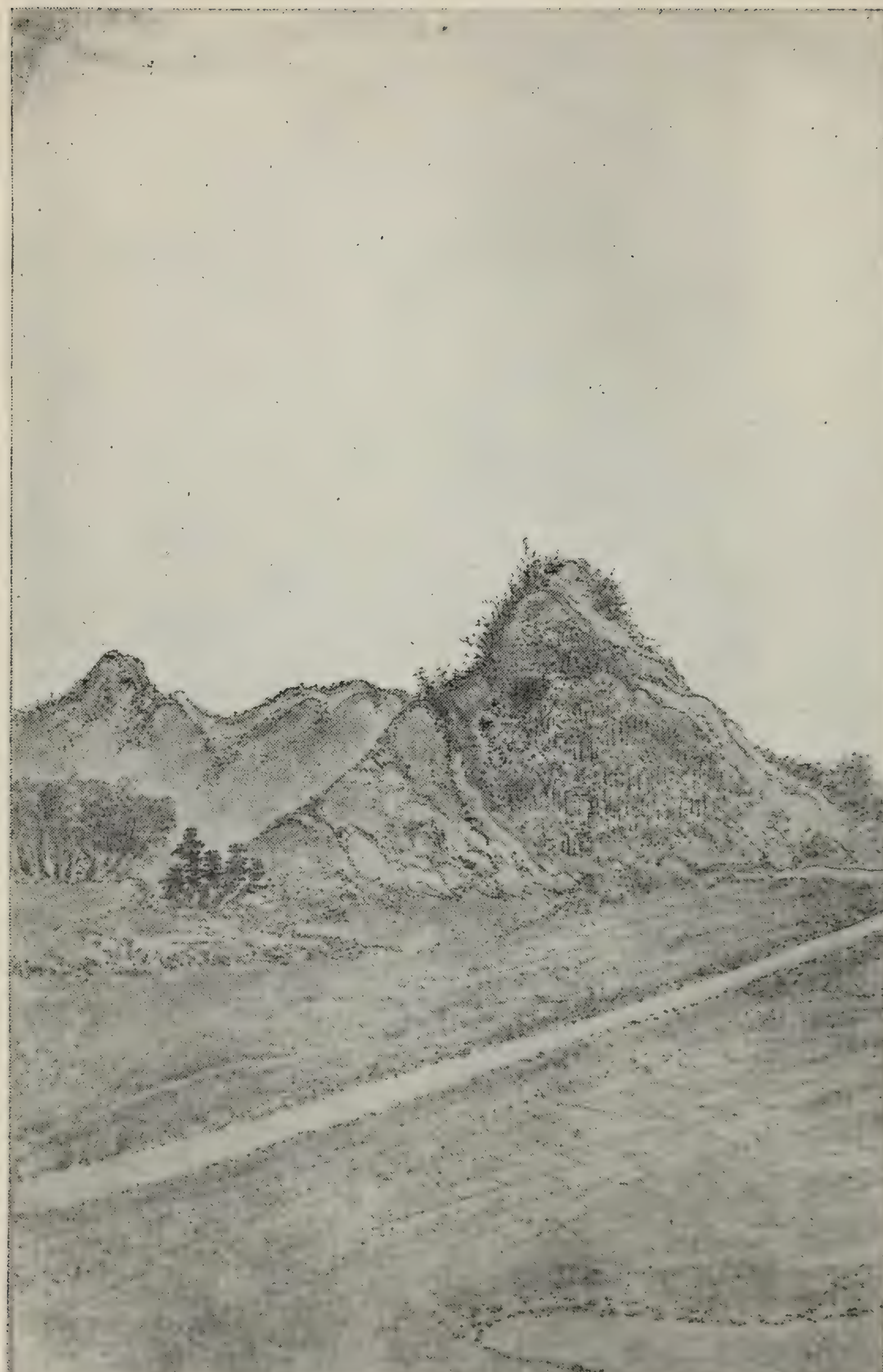

花見山




三鞍波南




鯉河の浦

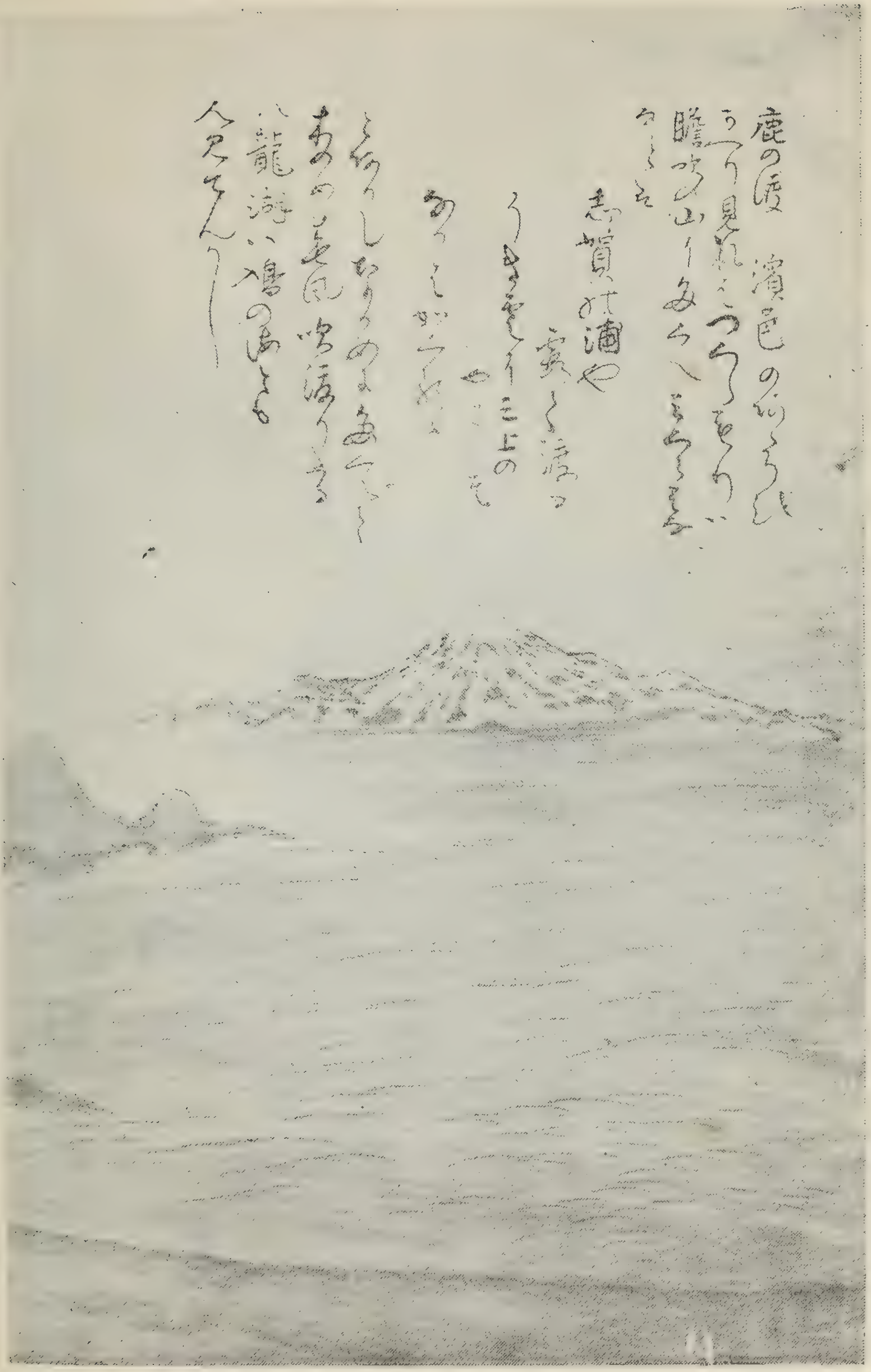





飯形の社
桃李櫻


苗代澤乃多氣
猿田の村よりちかく小瀧あり
閑居山の麓に大瀧
高嶽山正安寺の十二世
了察和尚のひらきたる
寶永の瀧の碑あり

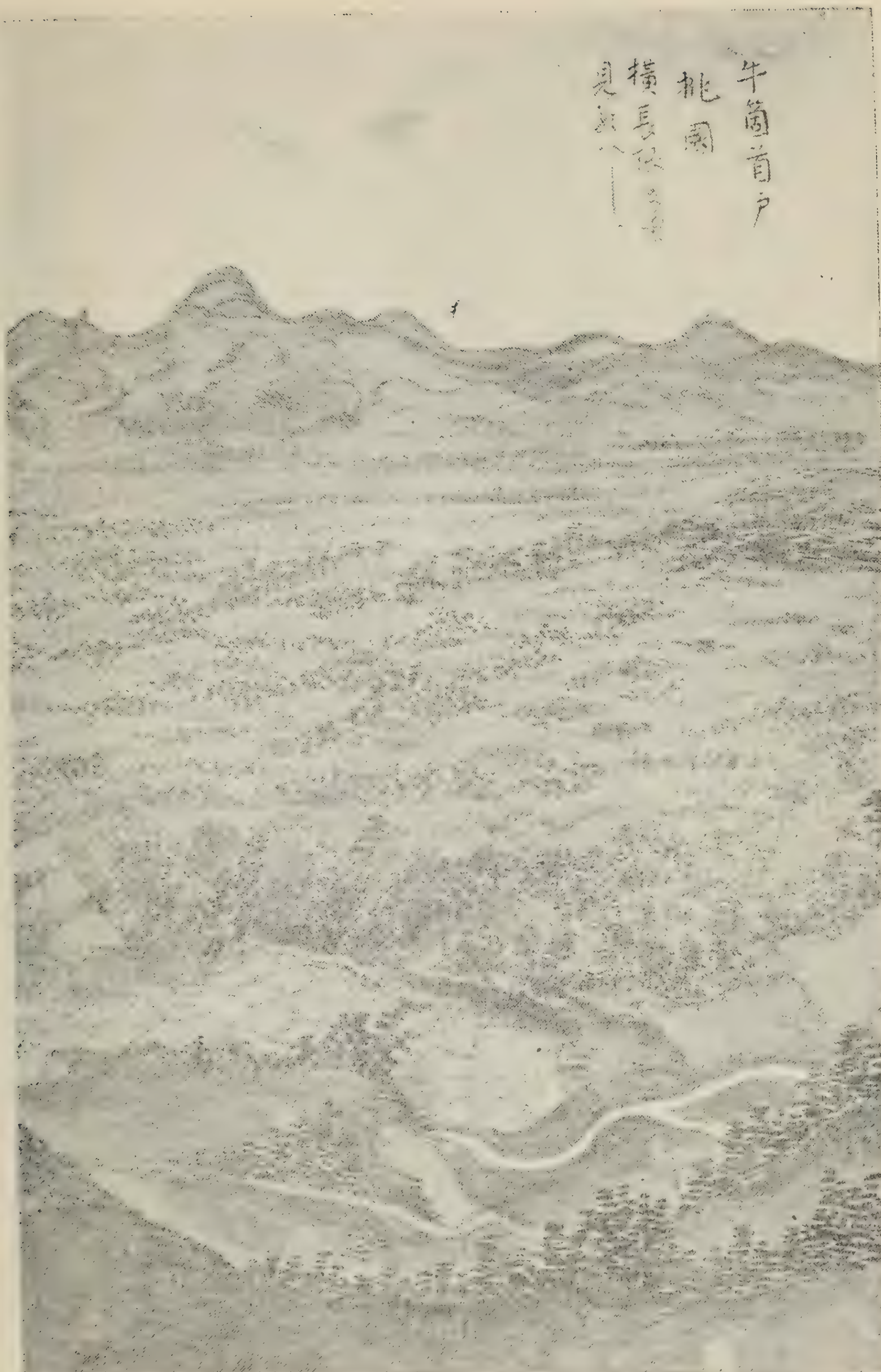




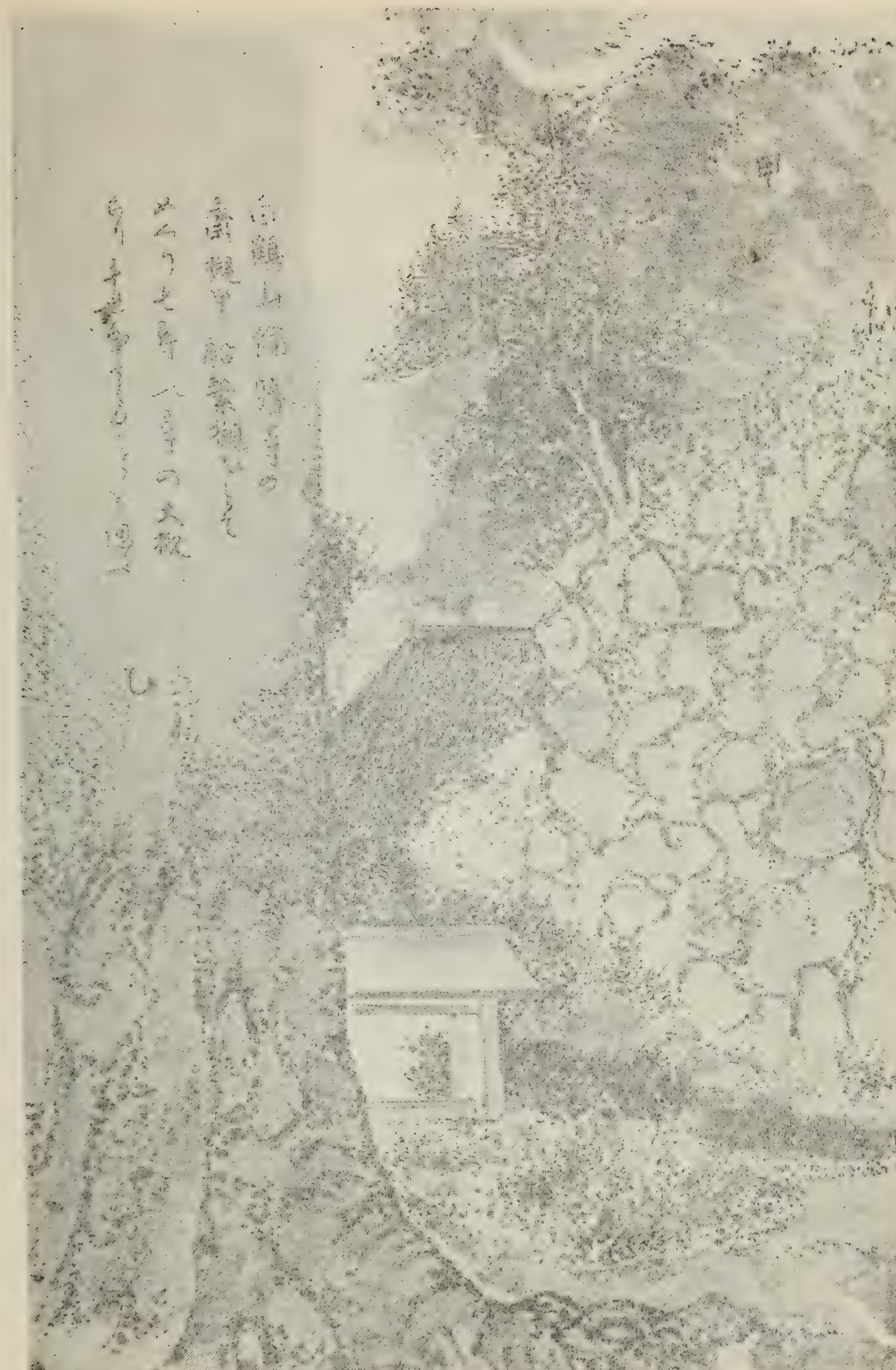



杜岡の龍櫻




牛箇首戸
桃園





雄賀良能多奇


山本ノ西

「去年に見たりし笛瀧の浦をはしめ、「八杜山の阿遮羅明王瀧の由來、及母爺の藥師佛、「澳州にはなたれりしといふもの語、「むこのごき、よめがはし、さくら董、「餅のおのはしめ、「人形生む石、「大柄、あるはいふおがらの溫泉、「藤卷のしがらみ、「肉入籠のふる事、「しゝもりやま、天鼓、小鞠會の淵湍、雪澤なとのあらましをしるして、此册子の名をおがらのたきとせり。ころは

文化四年丁卯の春より、おなしき夏のなからはかりまでのことをかいをはれり。

山本郡岩楯

有右衛門碕

須藤氏末裔

やよひのはしめつかた、出羽の國河北、いまはいふ山本の郡なる岩楯の浦を立づる。高山の末、みしかやまのいたゝきも、いまたに雪のいさふかく殘りて、谷の戸出る鶯の聲も冴へ渡るこゝちそせられたる。闕のあら垣の外に、雄元のすかたなせる石のみかたを、この海士のうふすなとあかめ齋ふ。こは、ちまたの神にこそおはしまさめ。

梅の花折りて手酬む春はいつまた袖寒き幣の追風。

あさひらきのなかめたくひなう、浪の遠近うちなこみ、め刈らんとこき行小舟しはしとてさしまねきよせ、これにたぐへのりて、去年見たりし笛瀧のあたりまてとて舟おはせぬれは、有右衛門碕といふかつさし出たり。そのむかし、須藤有右衛門なにかし世の亂れを避て、陸奥の津輕の郡猿賀(さるか)の村にかくろひ、とし月を渡りて、しかこの崎に來つゝ流れをもとめ浦田を佃りそめ、こゝに栖家せし。それか末の子の、いやつき〳〵泉郎となりてそありける。この須藤の家に、遠つおやより持つたふる親鸞聖人のなもあみたかいたまふ、なもあみたほ

能祁曾利山

高巖多し

さけの畫なとは蓮如上人の御筆、實如上人のおほん手なとあり。此こと「雪のみちのく雪の出羽路」といふふみにしるしたれば、つばらにはせじ。遠からす近からす笛瀧を見やりたる、ことにおかし。

春風に梅落るへくと吹しらへ聲おもしろき笛のたきなみ。

此まゝに舟にてゆかまくおもふといへは、よきことなりといらふ。さらはとてさしもとし、出こし岩館の磯もこき離れ小入河のやかたになりぬ。小川のみなかみにしろかねほりし山あり。馬手に峙たる山あり、名を能祁曾利(のけぞり)といふ。むかしさがみの國に、のつけぞりといふ坂ありし、金澤の浦〳〵なこりなう見渡しのいとおもしろさに、のけに反りかへるてふあた僻にいひわたりし。そこに堂建つれば、それすらのつけ堂といふを、ことこのめるやからの能見堂と、よしありけにつけたるとなん、荻生氏のいへり。さりければこゝも、のけにそりて山をあふき見る名にや、ところ〳〵にかゝる山の名ともの聞へたり。磯にいくはくならん高き巖あり、越の浦輪なる根笥の鉾立に似たり。岩館の名や、この石よりおふてふものならんか。天狗岩、懸り瀧なとこきすぎ、瀧の間の浦屋形、横間のうらやかたもへぬる。このあたりは、かんな月のころほひは、鰰の漁すとてにきはゝしかりけるところなり。一とせ見にまかりて日記につはらにしつれは、かいもらしぬ。馬背打川(ませうち)雪消して水いと深かりける岸

につないて、ふなてとらせぬれはこきいぬ。三内の浦におりて、相しりたる五穀山宅藏院の優婆塞をとふらへは、ねもころに聞へて、ひとつのこりたきをおしひらいて、これをとてをかましむ。こは、圓仁のものしたまひし大日如來、藥師佛、觀音菩薩をひめおけるなり。かかるみはしらのほとけたちは、羽黒山の神籬を上の山にいにしへうつし奉りて、とし久し。吾かとをつおやは、もと天台の僧岩兒(こ)山の泉長坊とてありしか、岩子村の寺〳〵みなこほれうせて八森の浦にうつり、はた三内にうつり來て羽黒山をもり、千町に水ひくその堰神を祭ひ奉りて、罔象女命(ミツハノメノ)につかへて澤倉院と呼ひたりしかと、世かはりてのち、はらからたりし常樂院に、もゝとせのむかし羽黒山をゆつりて立石の村にすましむ。さりけれと、このみほとけはわか家の寶と殘りたりしと、家のむかしを語られたり。佛のみすかたは、春日なとの作りなしたるともこゝに、淡海の圓空とおほしくはあれと、陸奥糠部の郡鵜靏山の菩薩、迦羅陀山の地藏大士にひとしかりき。慈覺大師、うへもきさませ給ふものか。濱田の泊川の瀧に立給ふ不動尊は、八森の浦山の瀧の阿遮羅明王とを大柱の本末をもて、これをも圓仁大德の作りたまふのよしを傳ふ。雪の深かりけるころ、濱田の岩屋戸に鹿の群れ來て、あさりとほしくてやあらん、不動尊のみくしよりはしめひし〳〵と嚙もて、そのみかたちともおもほへす。まして瀧の明王は雨露にぬれ、ほとばしる水けふりふかうかゝりて、つねにそぼちた

まへば、朽にくちて株(くゐせ)などのやうにて、貞享のむかし鑄奉りたる青銅の不動明王とともに、むかふ瀧の左の巖の上に立せたまふを、かんさねはこれにこそと、まふつる人とらかしこまりたうとみ奉るなれ。この宅藏院のほぐらなる羽黒の神の本地佛は、仁壽のむかしを偲ぶに

花いろ／＼

たれりとやいはんか。たね蒔櫻やいつを盛ならん、田打櫻はちりすぎ、花肉桂てふものゝ今を時とや、櫻の莟ぬる片岨にかたかごの多かりけるに、紫花地釘も花のあへかに見へたり。

　こきうすき咲むらさきの色わきて菫にましる堅香子の花。

辛荑を田耕(たうち)櫻といひ、猪心を肉桂といひ、披岸櫻にやゝ似たる、紅ふかき山櫻の初花を種蒔櫻といふか、くにつこと葉なりけり。椿は海榴のうへも名におふらんものにや、雪の中よりあらき磯山かけの寒風にしぶかれても、さむけなる色もなう今を盛也。みちのおくの津輕の郡山内(きんない)、あるはいふ三内の村は、遠きむかしは寒苗(さむなへ)とこそやまとふみにも聞へたれ、こゝもおなし名にしあれは、おもひつゝけたり。

　きのふけふ蒔としすれと冴へかへりまたさむ苗の生ひもたゝなく。

風のこゝちしてこゝに日をへたり。

山内を出つ

二十二日。けふを餘波と出たつ。あし垣のうちに梅の咲たるを行かてに見たゝすみて、

　いつまても袖になつさへたひ衣なれきしやとの梅のした風。

雄賀艮ノ能多奇




岩館と小入川の浦との
あひだに大なる巌あり立石
根箭の鋒立に似たり




横間の浦より大糠森
小糠杜
甲
甲



雄賀良能多奇


八森の東 元舘と
いふ山里の岨より泊川
を臨む 濱田の浦
不動尊 尼子堂

雄賀亙能多奇




此大竹目名形の濱に寄来しと
北海に多し
七曜星の形
諺文
陸奥の
手木

かくてませうち河の高橋を渡れば、弓手の方に篠杜ちふ岡の見ゆ。笹森勘解由左衞門なにかしの栖り。津輕の大間越の關屋のあたりにも、さゝもりといふ名あり、笹森氏の城あとのよしをいふ。立石の浦、藻浦のあまのやかたは軒をつらねてたてり。一本杉とて、ひともと立る巖のかたはらに經堆あり。圓仁のこゝに行ひ、ほくゐ經、千手陀羅尼など小石にかいをさめ給ひし物語りは、浦人の口に傳ふ。土かいやれは、梵字ひとつある石のさゝやかなるを二三得たり。あなたふときのりの師の、ふかきこゝろさしをうへも思ひ、しらぬいにしへをしのぶ。村に出て初櫻のありしを、

けふこゝになかめくれなは浦の名の藻くすしきねん花のやとかせ。

椿の浦に來けり。恩荷の浦輪、津輕の田澤、おなし深浦の艫作の岬なとを椿崎、椿山てふ名ありて、椿もとも多し。こゝもむかしは海榴の杜ありしかど、けふりのためにこりつくして一もともあらさなれど、浦の名におふ春もおかし。

時もいま花咲椿うら〳〵と霞むしまやゝま霞むつりふね。

鹿浦の坂とて寒水流るゝをよぢ、雨形の磯のあたりより雄嶋雌嶋のふたつ、鴛鴦のうきたるやうに浮たる波の上に霞ぬ。おり得て畔神に手向し、泊川に渡り濱田にいたり、三左衞門といふかもとに休らひしまゝに、日のたけしかは此やとにとまりぬ。

八森村

二十三日。湯澤のうまやちにあさとく出て、野はらをわく。なへての名、この湯澤をもはら八森といふは、大母爺杜、小母爺杜、狐森、小糠杜、大糠杜、祖神杜、佐々杜、種津(たなつ)杜、しか、この八をこそいふなれ(天註――亦いふ八森山の名、大母爺毛利、小母耶毛利、大糠杜、小糠杜、額杜、狐杜、祖神杜、鷲杜。)。瀧の明王堂にまふてんとゆみての徑を行に、鋤かたけたる女の「八森のもやのとんけの八重櫻、枝ははちもり葉は能代、花は久保田の城と咲く。」と、聲おかしう山唄(天註――山かせきとは田畠をいとなむをいふ。山唄もしかり、山田、山畑よりいひうつりしにや。三河、遠江にて山畑うつをさへ野良かせきといふもならはし也。)といふものをうたふ。祓川を渡りて不動尊の堂にぬかつく。

不動明王堂

此阿遮羅明王は瀧の御堂をもとゝして、圓仁のゆへすてにかたる。いにしへはこゝらの堂たゝりしを、朱雀院の天慶七年甲辰の秋に地震(なへ)大にふりて、あまたのいらかみなうちたふれふして、地藏菩薩は土のうちよりほりいて、觀世音は瀧のみそこにうせおはしぬとなん。四條院元仁甲申のとしに大檀那山邊朝臣藤原氏時、ふたゝびおこしたてりとなん。西の寺めくりにたくへて札うちめくるに、二十八番にあたれり。男女瀧のもとに聲をそろへて「岩を立山をかこみのたきつほは唯觀音と唱ふこゑのみ。

瀧峯山松源院

此明王に遠きむかしつかへ奉りしは、天台の僧侶にして瀧峯山不動院といひしが、此寺、秋田の郡松原村の龜象山補陀寺の八世、察心壽鑑和尙を開山として曹洞の流をくみ松原院といひ、のちは散水を書副ふ。寺は川腑(また)村にうつる、今いふ濱田の村也、瀧峯山松源院しかり。かくて白雲山正覺院に傳へて守奉り不動院といひしを、近

瀑布山天瀧院

不動尊緣起

慈覺大師

き世となりて、種津森に栖たりし修驗者をこの瀧の明王につかへまつらしめて、瀑布山天瀧院といひき。むかしはこゝかしこに坊もありしか、慈光坊はいまいふ喜法坊とて新屋敷の村にすめり。泉長坊は三内の村にうつり、宅藏院といふにこそあらめ、今瀑峯山天瀧寺といふ。此寺に傳ふ「瀑布山天瀧院不動緣起」は、寛文十一年辛亥六月花園末葉新州叟記」といふうちにいはく、不異于廬山之瀑布、寔飛流直下三千尺也、故形之號山於瀑布、名院天瀧從爾以來、天台相續之山也。」とあり。亦「天瀧院不動明王記」といふあり、これもまなにて、白鷗主人洞天和尚の享保十一年にかけり。はた「八森山不動尊緣起」といふ一まきのふみあり、ときの關白のかいたまふのよしを傳ふ。その書を見れは、「出羽の國山本の郡八森山の瀧の不動尊の像は、いにしへ比叡山に慈覺大師とて智行かねそなはり、いとたうときひしりなんいまそかりける。おほけなく、うき世の民におほふ袂にあまる大慈大悲にやもよほされ給ひけむ、我たつ杣の八重霧を出てはる〲とあつまのかたにさすらへ行、此國にいたりたまふに、遠つさかひのかたくなゝる所なれは、かたちは人にして心はへは猶鳥獸にことなる事なし。まして、ふかきみのりの妙なる道は、つゆはかりもおもひわかす。大師此ありさまを見たまひ、いと心うくかなしくおほしめし、かゝる衆生の、いつれの時にか六のちまたのよるの雲晴れ、みなき法の曉の月をみるへき。あはれしかるへき靈地もかな、佛像を安

八森に至る

尊像を彫む

置したてまつり結縁させはやとおもふ心の山ふかく、こゝかしこたつねもとめ給ひて、この八森の瀧の下に至り給ふ。蒼蒼たる山色は清淨身、冷冷たる瀧水は廣長舌、老槐風にむせんて青苔の露なめらかなり。峯の嵐にふるゝ人は妄想の雲忽きへ、瀧の流にのそむともからは煩惱の垢即清し。幽邃寂寞の靈地なり。大師歡喜の心淺からす、百日瀧の水にうたれ身を潔くし、百座の護摩の供を修し御たけ三尺の不動の像をきさみ、此瀧つ瀬の岩の上に安置し奉り國土安全を祝し、又衆生濟度の結縁に殘し給ふそかたしけなき。しかるにこの像、靈驗日々にあらたにいまそかりければ、遠近の里人たうとみあふくことかきりなし。賤山かつのおろかなるは、只あら神とのみ思ひてあかめたてまつりぬ。いつのころにや別當なともありて、尊像のおはします岩かねに形はかりの庵むすひて、香花をさゝけ持念をもなし侍りけり。かくて尊像のいます岩ほの上には、わつかに草ひきむすふわさもあらされは、嵐はけしき秋の雨よな／＼御はたへにそゝき、さへまさる曉の霜朝な／＼御くしに置あまるを、別當のそみかくた見るに心うく、かなしくや侍りけん、かたのことくなる御堂しつらひてうつし奉りけるに、一夜かうちにもとの岩ほに飛歸りたまひぬ。およそ、かくのことくし奉ること三度にをよひけれとも、つゐにとゝまりたまはさりければ、さては御心にかなはさりけるにやとて、其後はかくもせさりけり。やう／＼とし月のうつりゆくにつけて、ありしみす

かたもあらぬさまにかはりはて、あさましく木のはしのやうにてなん朽のこらせ給ふを、みる人涙をなかし袖をぬらさぬはなかりき。今の國の守佐竹右京大夫義隅朝臣と申奉るは、忠義上にふかくして、君につかふまつりたまふこと天のことく、仁惠下にあつくして、民をあはれみ給ふこと子のことし。甘棠の政のあまり、佛の道に心をかけさせ給ふめれは、この像の廢壞をいたくなけきおほしめし、都の方に仰ことありて、慈覺大師のきさませたまふ不動の像をたつねとひて、その御かたちを露たかはすうつしとゝめ、これを模として、青銅をもて三尺の不動尊を鑄させ、卽本山の大僧正をたのみ奉りて開眼供養をとけ、貞享五年辰の三月の頃堺の浦より船にのせたてまつり（船主は松木、船は歡喜丸）、津守の浦のゆふへのあらしにまかせて、西の海をきか原をはる〳〵と漕はなれ、那古の海の霞の間をわけ、北のうら〳〵とをき浪間をはしり行侍りけるに、はしめ船出せし日は類船十艘あまりありけれとも、みな風にさへられ波にあてられ、ところ〳〵にとゝまりぬるに、尊像のらせたまふゆへにやありけん、この船はかりは八ほのつな手のたゆみもあらす、浪風いとしつかにて日數わつかに十三日かほとにて、野代濱につかせたまふを、見聞入ことにたうとく、ありかたきことと感歎しあへり。すなはち此所にうつし奉り、かの、くち殘らせ給ふ木像の御かたちを、今の青銅の像のうちにをさめまいらせ、岩をきり地をたひらかにして、その年の七月といふになん瀧の下に

數々の利益

安置したてまつりぬ。仰是不動明王者毗盧遮那如來の化身にして、一持之後生々加護の本誓むなしからす、あゆみをはこひ、たのみをかけたてまつる衆生は、或は疫病、瘧疾をのそき、或は富貴長壽をあたへ、戰場にのそむては怨敵を千里の外にしりそけ、國中に災難いたらんときには魔障を十方にはらひ、水難、火難、盜賊難みな消散し、一切諸願滿足せすといふことなし。しかのみならず十二因緣輪廻の里をはなれ、一佛乘の花の臺にみちひかせたまふ御事なれは、誠にたのもしく有かたき尊像、たれかあふきたてまつらさらんや。爾は則太守再建の功德くちうせす、國家和平にして黎民うへす、こゝえす、あしたに無爲のたのしみを擊攘の歌にとなへ、ゆふへには太平のこゑを樵笛の曲にうつして、未來永々そのめくみをかうふらむものしかりといふ。」とそありける。めてたきふみてのすさひなりけり。

藥師峰

おほかねのかゝる岨よりよちて、母爺の藥師峯にまふてんとてのほる。弓手の木々のめふかき中より瀧を見おろしたるは、まほにふりあふき見たらんとはけしきことかはり、こゝかしこの櫻の紅ふかう、たくひなうおもしろし。

　おちたきつ瀧のかけろふたきの花いつらを神の俤と見ん。

そかひの水のみまたに渟るところを、提の明神とて水の神ませり。山ふかく入れは、四十八瀧といふもあるてふ。

大鐘

山のなからにおほ鐘をかけたり、こゝに至る人まつこれなん撞けは、

母爺大權現

四方展望

山上處々

沖べはるかに鳴りとよみぬ。路は九曲にして山いとさかし、行かたはらの芝生の中に、こきはなたの蔓菫あり。粉紫色(こむらさき)の菫の花は櫻にことならず、苔路に花の散たるやうに咲ましりたるは、世にことに多からぬものか。うへも櫻菫の名そゆかしかりける。此草のもとも品多く種(くさ)〱の化(かはり)あれは、これをはしめとして百菫(もゝ)といふ册子をかゝはやとて採りつ。かくて嶺になりぬれは、木々ふかき中に破れたる堂あり。母爺大權現と唱へて藥師をおけり。母也とは、蝦夷人の辭に靄(もや)をこそいふらめ、獨立(ひとつ)山のあれば毛夜とそいふめる。蝦夷こと葉のうつり來て唱ふこと多し、みちのく、いては人もはら、いと高うしてつねに雲霧のたへさるをいふに、うへも霧霞(もや)のこゝろそしられたる、此山の名いと多し。四方やもをのぞめは、乾ははかりもなきあをなはらの霞わたりて、はかりかたし。子丑のくまは横間、瀧の間、岩立のうら〱、菅生の岬など、津輕山はわきて高けん。白神か嶽の雪はまたらに、赤神山は、こなたさまに海の上に浮きたゝよへるかことし。杜良の岳は遠う、みねの雪は霞こめたり。むかしの堂のあとて石たゝみあり。こゝに居て、山のそひらの母夜の澤といふを見やる。さはかり深かりける木の中に紅のこきうすき、あるは雪か雲かと迷ふこゝらの花の林あり。山のすかたもたゝならす、いろある雪もふりなんこゝちせり。香灶石といふあり、慈覺大師巖をはらひ香をたいて、行ひたまひし峡あり。櫻の多く、見へきところなり。

紅に霞むも花よ木々にふるゆきとさくらの匂ふ山かけ。

いのりの池とて、をろちすみていと大きやかにてありしも、むかし語りとあせはてて水はつかに見へたり。此かへさの夕榮ことによけん。麓になりて季忌宮の花、神明の杜の櫻なとかりくらし、溫泉澤の村に出てくすし細田の宿をとふらひ、こゝにやとりしたり。

元館村

二十五日。あるし細田政興にいさなはれて、成田元泰なとあけまきもあまたいさなひ、元館といふ村の櫻見にいたるに、ところ〳〵の梢發さかぬか、松のふる枝にへたてられたるなとことにおかし。

松のもとたてる櫻のうすくこく霞なかるゝ河つらの山。

武田の館址

なまよみの甲斐の國のみたれたるころほひ、こゝにしそき柵をかまへ、たよりよからねは母爺の梺に栖つる武田重右衛門尉源（マヽ）おほんたからのたくみにおちてほろひたりし、もやの館にうつられしゆゑやありて舊館の名はあらん。その家の子とて、山ノ内和平治なにかしの末今もすめり。山畔をわけ井堰をつたひ谷ふかう見わたせは、濱田のいはやと、尼子の窟なと、泊川のあら瀨をへたてて櫻咲たり。

そひへたつ岩根の梢かけおちてちらぬさくらの色そなかるゝ。

松源院

此かへるさ松源院に入れは、武田重右衛門の木主に、大檀那萬昌院殿青山玄心大居士とそあ

伊豆森

薊摘み

寄木の中に

新屋鋪の吉太郎の物語

りける。しらぬむかしの君なから、袖かつぬれて雨もふり來ぬ。毋爺の麓いと近う瀧つ流の末を堰入れて、砌の櫻影おちて、林泉のあはれ雨にことさらふかし。

　ひき入れし松の源水きよくいまひとしほの色もうつりて。

くれて細田のもとにつきぬ。

二十七日。日をふりし雨もなごりなう晴て、細田のやどをたつ。村を放て伊豆森といふ處あり、むかし蝦夷村ありしを、よこなまりてしかいふとなん。此あたりに石弩多し。女の童こゝかしこに在て、さがり葉、のこぎりば、なつみそ、へらあさみのみをつめとよばふ。いつこもむかしは薊やたうひたりけむ、延喜式にもしるしたまへり。こゝを濱邊に出れは、海つらのことにおもしろし。此あたりの寄り木にましりて、松前の嶋人のいふ小人島の網浮(あば)てふ、これをかゞなへて紅毛の企由流巨ともはらいへるもの、いと多し。何の木の皮としさらにわいだめあらねど、湯やけ、火やけの藥とて、くろやきとして油もて傅(つけ)れば、黄蘗(きはだ)ならんとあやまれり。みち行僧の、もろこしの潮のすちや行通ひなん、八森の新屋鋪(あらやしき)村の海士にて吉太郎といふか、松前の嶋渡りすとて、沖べにて風にはなたれし物語をして云、寛政七年乙卯の冬十月二十八日、あらしほのからきおもひを偲びて、又のとしのさつきのころほひ澳州といふしらぬくにゝ漂ひついて、五とせを經て、己未の師走はかり命いきてわか國に皈り、此

澳州官人の詩

ふる里につきたりき。なにくれとその國の調度ともをつとにもらひもて來ける中に、その沛の官人やそまりのすんさをひきくして、着ける涼帽の上にはかゞよふ玉ふたつをいたゝきよそひ來て、譯辭にことまづとはせてのち、辨扇にくしをかいてその官人の贈られたり。しか、そのしゐんいとあはれそふかゝりける。

驚濤怪浪捲洪波。愁殺篙師喚奈何。數命只憑殘板片。浮游幸得傍山坡。
崎山越水路迢々。歷盡華夷魂半消。不是一番磨折處。諸君那識浙江潮。
四載乖離客路難。幾回春夢到鄉關。休言異國凄涼甚。猶有同人話可攀。
故國囘首路漫々。料爾鄉心思萬端。此去定知波浪穩。一帆風順保平安。

日本
吉泰郎偕義兵衞、定吉、萬治郎、於乙卯歲浮海遭風渡入中夏、今於戊午冬日、附送還鄉詩以贈之、時在小春二十有三日。
姑蘇徐　陸　源□□

それがてぶりは董其昌にたぐへてめてたし。その印は源の文字上に在りて、下の印は厚培のふたつとそ見へたる。かの詩ありし裡表には、芙蓉を畫かいて亦くしあり。

江上芙蓉映水紅。還從筆底笑秋風。臨岐莫可相侍贈。聊當長條不計工。

吳門蠡瓢氏張梅

姑蘇城外
漂流奇譚
目名形の智積院
輌遇突智神
日揚の明神

とそありける摸書を見せられたり、もともめつらしかりけり。此吉太郎にそこのくにうど、かたみにものかいてわれにたべ、かれにもたうびてとひたいへば、をさなう松竹梅花鳥風月のたくひもはつかしければ、童のとき手ならひに書て天滿宮に奉りしをおもひ出て、姑蘇城外寒山寺となん、ところ〳〵にかいやりしかは、送りしける人の、汝(いま)しかつねに書なしてける姑蘇城はこゝにこそあれと、ある縣を通りしときをしへたりしとか。おもふに、陸奥にても仙臺の石の卷の佐五平は福州にいたり、松前の一二印シの船は廣東に流れ、津輕船は委斯婆椰、萬年羅をへて來しことなとかたりもて、目名形の村に入りてかの老法師に別れたり。こゝなるうはそく、智積院のやとに咲たる櫻のしたつかたに、ふるき種字の碑に康安のとしの名しるしたるかあり。岩子の村、御山權現の阪下のほとりより、ほりうつしたるとなん。こよひは此宿にふしぬ。

二十八日。此村の人々にいさなはれて、御山(をやま)にまうてんとていづ。村はしに輌遇突智命を齋ふ社のうちに兜の形し、又嚴瓮(いつえの)おきもの、祝瓮(いはひへ)にも似て、重さ一貫泉零はかりなるかあり。これをかんさねとなして智積院のつかへ奉るなり。稲荷の原といふ野末に日揚(ひあけ)ノ明神といふ社あり、正觀音菩薩を安置(いはひ)たり。まことは、天御中主尊にてそおましませりける。このひとはしらのおほん神を齋ふのゆへは、そのむかし、秋のみとしをやゝかりをさめなむと

源養院尊道

上梵場、下梵場

き、ひしけて雨の日數をふりにふれば、こは此秋はなりわひみのらずして、やはしきとしにあひて、うからやから命しなんとなきさまよふ。なみたの雨もはるゝ空なければ、圓仁ゐはれとおほして、天にいのりたまふこと三日はかりにして晴たれしかは、おほんたからよろこひのあまり、神を祭ひて日上の社をたてたりしとなん。村の名を目長田といひしむかしや、天の長田を祝たりけん。軻遇突智の神と日明の神とを、此村の雨產沙となんあかめたうとみ、日上のおほん神には源養院尊道の遠つおやなる、三覺院よりつかへ奉るてふ。山祇の祠、藥師堂、馬頭觀音を安置り。はた、たけ三尺あまり厚三寸、濶四寸はかりなるつや〳〵としたる石の柱あり、世に在る材木石、柱石のたくひにはあらす、をのつからなれるものにして、これをあめのみはしら、つちのみはしら、くにのみはしらと唱へ奉る。

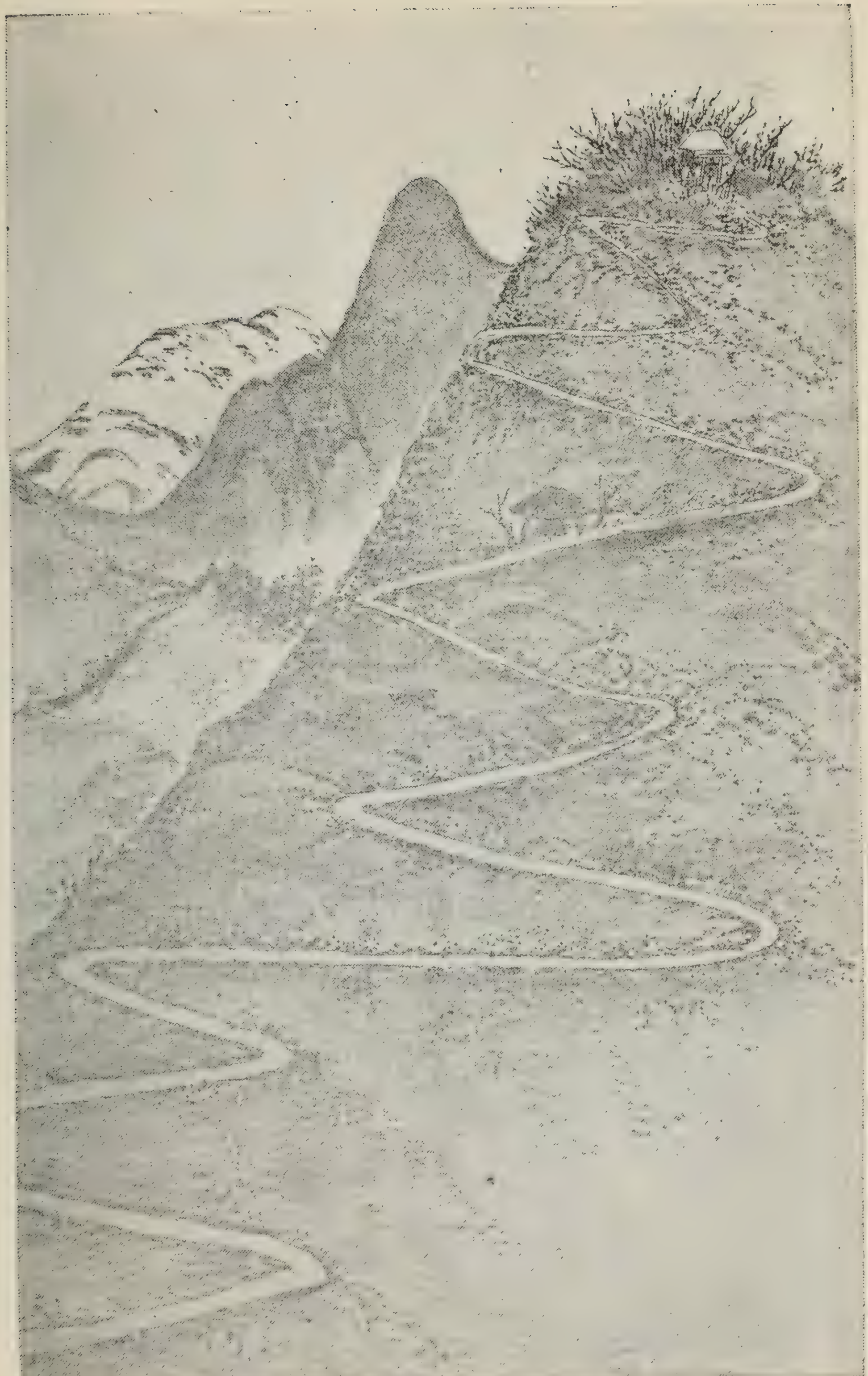
　こへはふりいのれははれてあま傳ふひあけの神の空に尊き。

となかめて、日揚のみまへに奉る。又、

　あめつちとともに榮へんたてそめて國うこきなき石のみはしら。

かくなん石の柱の社に奉る。高間の岡の金狐の館を稻荷のふるやしろと見やり、蝙蝠淵の高橋をめてのしたつかたに見なし、この川のへつたひにのほりて池の平といふ處も過て、礎の殘たるあたりは、ありしふる寺のあと、ふる井もありつなと、川をへたてて天台、眞言の寺







母節の藥師峯は


母爺の麓より山岩楯の岬で雄嶋
濱田八森目名潟水澤の
館恩荷の赤神山寒風山も
遠近の元館の村




八森山の不動明王の瀧を

御山權現　應安應永の石碑　大窪平　手遣坂

ありしを下ッ梵場、上ヘ梵場といひしか、今は畠の字となりぬ。御坂はる〳〵このほり得て御山權現にぬさまつる。そのむかし役優婆塞小角の闢きたまふ、三熊をうつしたる社にこそあらめ、あやしの獅子頭を御前におけり。慈覺圓仁大師のなかごろこゝに行ひたまひ、きさみたまふたるよしをところ人のいへり。遠きむかしは、このあたりはゆきかいせしすちにてもやありつらんかし、ふる道とおほしき處あり。川越して槻の木、櫻のしたに種字の梵形ある石、光明遍照十方世界、あるは志者力者、あるは立ふしまろひたるをさくりもとむれは、應安、應永なとの、としの名しるしたるかやゝ見へたり。もとも四百とせのむかしそしられたる。岩子村の梨の花は、雪のふりくかと山風に散まよふをよそに見なして大窪平(たひ)にいたり、村長のもとに在りて、なにくれと語り休ふ。この村に宇治てふ姓のいと多し。山城の國兎路の人、總角のむかしこゝに世をしのひ、田を墾(ひら)きてすめり。その末のおもやは田村なにがし、きうぞうは、みな宇治をしかよへりとなん。そか兎路人の上祖の齋し、内外の神垣も木々ふかく老たり。桃の盛と聞て、しはしゆけば手遣坂といふ。家四五、河くまの桃の花園にかくろひてそありける。此坂の上に立て見やるに、まことや流にさかのほりて、洞のうちのかくれ里をもとめたりしもかくやありなましと、しらぬもろこしのいにしへをたとる。

こゝに誰れ世々さく桃にかくろひておくゆかしけに栖るひと村。

常陸の國にも手逗坂といふところのありて、もとも呆かしく、むかしはいくはくの軍にあらそひしちまたなりなと語り、夕榮やよけんといひつゝ、やゝくれなんと坂をおりて水こひぬれは、濁れる酒を提してすゝめぬ。老たる男女しはふきわたるさま、ことさら仙人めけることちそせられたる。大久保平に皈りて一夜をそふしたる。

目名形發足
稻荷神社
阿月和尙
續橋の藤

四月十日。目名形の村を出て伏翼淵の高橋いとあやうく渡り得て、高間の野良、金狐の館をめてになし、水澤の村に來つゝ皆川のやとにしはし休らひ、送りし人々に別たり。金狐の氏神稻荷の社をこの村に祭ふ。むかし御山の坊舍たりし淸識坊やゝとし老て、この修驗法幢院にこの社を授たりしかば、坊を遠つおやとせり。社もはつかなりしを多賀谷將監隆經、寶永のころふたゝびおこしたてられしを、亦近きころ、多賀谷氏の家士窪ノ谷八右衛門なにかし三間四面に社を建て、田畠をも寄られたりしといふ。つばらかには、この村の河北山盛澤寺の四世阿月和尙の、正德のころかゝれし合割の譜に在り。やはら出て續橋とて、さはかりひろき野はらにこと木、こと艸はさらに茂らず、こき紫の藤のいやかうへにはひかさなり、いまを眞盛なるに夕陽かゝようなと、世に又たくひやはある。わけたゝすみて、高屋敷村をへ

鳥潟の村　山神祭り　十五七山唄　強坂村の村木秀菴

て田中のやかたを弓手に見渡は、千本(ちもと)とこゝにいふ八重櫻の花の夕はへてひし〳〵と咲て、暮にし春の色を殘したる杜には白幡の社あり、譽田天皇を齋ひ奉る。鳥潟の村につきぬ。むかしは通方と書なしたりとか、うべも往來(ゆきかい)のすぢそ知られたる。木の高枝に弓を引まかなひ、わらのはぎまきに箭一筋、なにくれと調度ともゆひそへたり。はじめて杣入りやうのことして山に幾日といふをいねて、つま木こるますら雄、山つとにしか持來て山の神を祭る。この日山下酒(おり)といふを飮てうたげし、「十五七がやい、ことしはじめて山のぼり、かたにまさかりこしになた、いたやはなの木伐りためて流しとゞけてまきそろへ、これを見せてちやわが親に。」とうたひ、「十五七が澤をのぼりに笛吹は、峯の小松かみななびく。」「十五七が、澤をのぼりにうとのめかいた、うとのしろ根をくひそめた。」十五七といふ山唄、みそよそもあるてふ、津輕路には、になうめてうたふ唄なり。強坂の村にいたり村木秀菴といふくすしのもとに宿る。あるじの親は、やそばかり年たかき人の、こしゐのことく、いねてのみ在りし病をしけること七とせに及ぬ。いとまあれはこれをなでさすり、藥とゝのへてけうをつくしけれは、このとしの春ふと腰たち、杖をちからに、とに出て隣に音なひなとそせりけるを、女子をはじめいたくよろこひ、聞ときく人、けうの心やあめに通ひけんともらいふを公に聞へて、そのすちのえだちにあつき仰ことありつとか。うへも翁のふしつか

ぬ間は腰なて、世のさまをかたり笑ひなとして、夜更てみつからはふしぬ。まことや、ひとりのおやにつかへまつる村木氏の孝、世に又たくふかたやはある。

長泉寺

二十日。此ころの雨の空よけなれば、村木のもとを出て木ふかき禪林あり、仲峯山長泉寺といふ。此寺に、空海のおほん手にて小諸の紺紙金泥のほくゑ經、みきはかりの駒の角あり。此角なん、鳳來寺のひとつの寶といふにひとしからん。此ふたくさに、しづくら、なきなたなどをそへて、栗山といふ村のふるき家ぬし、利右衛門といふかをさめたりしといふ。狐崎の弓手、山崎といふ高き坡（そは）の芝生の上に居て、四方八方（やも）の見やりいとよけん。畠谷にいた

畠谷の後藤長右衛門

る。村の長後藤長右衛門の栖家は、斐陀人の作りなしたるといふ。うべも家のすかたことに、むかしびて、なにひとつも眞鉋もてけつりしところは見へす、いくそはくそや、としへたらんことそしられたる。今の長右衛門まてことふき長く、二十代をへたり。家譜なとはいつか失せたりしかは、誰か末としらす。あやうかりつることと幾度かありしを、いさゝかも火のわさはひにあはさなることを話る。棟札はあれと高うふんじて、その世より八束のすゝにまみれて、建そめし年の名はゆめ知ることあたはじ。礎高くかさねあけて、今の世の人のたくみなすとは大にことに見へたり。家のたからとて、かねよきつるき太刀持つたふとなん。

上強坂村阿彌陀佛堂

上ゞ強坂といふ村にあみた佛の堂あり。まうつれば、ふるき墓誌石いと多し。文字はけ

子を産む石

ちうせて、さらに見るへきかたなし。堂のうちにつかねたる、にきての前に、塔の火珠のごとく作りたる大なる石の、ふたつに破れなからすへてあり。此石、人のかたちなせる小石を生り。ところ人、かゝるいしなごひとつを申うけて家にいのり、子なき女の守りとし、又孕めるも守りとそせりける。さるゆへならん、近となりの村たりとも、産のなやみ露はかりもなけんと。このうめらん子石の多かることあり、すくなきことあり、いまは十あまりも親石のめくりに在り。すくなきときは外にあそひす、多かれば、みなもとり給ふといひならはしのあり。うへもさなりなと人のいふ。うみづる石の面ともおぼへねと、あやしけなることなり。

猫森の觀音

横内といふ村に出たり。白鳥甚兵衛といふかもとにしはしと休らひつゝ、人々酒飲む。家のしりより、猫森の觀音十一面菩薩にまうてたり。初瀬寺のほとけにおましまして、けふをいつも此堂におほみきをさゝげ、ぬさもとりむけて神のことくにいやまふはならはしにして、國ふりもおかし。男女醉しれて順禮歌を高う唱へ、手をうち、さうかをもしつゝ唄ふ。堂のうしろに穴あり、むかしは大猫はらばひすめり。ほとけは圓仁の作りなしたまふ

深浦の間口の觀音

たるか、此菩薩は陸奥に行おはしまして、深浦の間口の觀音とて船人ことにたうとめり。そのつかはしめの野良猫も、みあとをしたひ、なれもつかろちにいにきなとかたる。

館趾と遠望

此ほとりに寺館、小館、大館、古館とて、むかし殿のありつるあとをおしゆ。出て遠かたをむかへは、

大信田

河内の近右衛門

あとふき

犁の五器 嫁か箸

正子にあたりて見ゆるは船が澤の兎雪、亥の方に見へたる上の字が嶽は、消へ殘る雪の形の上文字をなせは、かれをもて白上山の名におふことにや。（天註――世のなりはひのよしあし、或田佃のときの占ひに富士山の布雪、農男、釜臥山の牡丹、岩木山ののぼり龍、くだり龍、耕田の嶽の蟹子のはさみ、種蒔法師、此舟が澤山の兎雪、あるは上文字山、又白上、あるは白神といふもおなしためし也。）これをためしに早苗とるころとて、田うちの心いそきし。浦の海士は、はや鰯の來べきころほひと漁のまふけをせり。大軸の原といふをはる〳〵とゆけば、嬉し坂といふあり。こゝに圓居して、したつかたに大信田のやかたともあり。齒朶などのこゝろばへもやおもふといへば、大下をしかいひしなといふ人あり。おりはてゝそこも過れば、赤倉、一の倉、二の倉なとを見やり地藏倉といふあり。菩薩の立ませるにそ似たりける。乘倉といふいや高きいはがねあり。山ふかうわけ入り溪川をさかのぼりて、河内小元といふの近右衛門といふ。長木山（天註――比内の山奥にも長木山の杉群のあるてふ、こゝはさのみなる木立なられと、おなし名はありけるものか。）の麓に大なる一家のあるしの名をしかいふ。こは、山をさにてやあらんかし。家の刀自西の寺めぐりにいにし、そのあとふきてふことのいはひとて、馬に酒つけてさふらひ行しかば、田より家の男女みなむれあがり來て、あなめづらしとて、あるじめけるわざをして、なによけんとて篠のたかうな、水蕨、鮓のほじゝ、七葉樹菜といふものをもさかなとせり。この草は矢車、犁の五器なといふ、それがから名は鬼臼ちふものにてもやあらんかし。此草の莖をもくふなり。澤の耳菜、岩蕗、うくひす菜は老たりといふも、なれか鳴音の、

夏にふりたりけん詞に聞なしておかし。こは山路、澤の邊に生ふる草の名にして、こゝころにはもはらとはたうひさりけるものか。むかし田殖るその日には、はつむこがねに、此草の廣葉の上に飯を小山のやうに盛りて、せめつゝくへとてたうびさせ、嫁には草の細莖のいとよはげなるを折りそへ、それもてものたうびてとあまたの早乙女に進（しひ）られて、すべなう手をすりてわふれば、さらはその代りに酒のめとていたくのませて、野原にふたりを醉ふさせて皆家に皈りたり。これを田殖の祝ひとしたりしか、今はさる事はなう、行かふ人に泥苗をうち付るをいはふとはいへり。そのむかしより、むこのごき、よめかはしてふ草の名におへりとなん。この日は萱の折箸、蕗のひろ葉のめし、いたどりの皿などの槲膳（かしはて）に似たり。かゝるいにしへぶりいさゝかのたかひはあれど、嫁聟に、さるつらきめの祝ひはあらじとなん。

人々醉て、西の寺めくりの歌を、みそまりみくさをみなうたひはてて盃めくらし、又唄ひさつとてうたひ出れば、男女の聲をそろへてうたひうかれ、おしきのそこを叩き皿をうちて、これをほうしにこゑとよむまでにきはゝしさを聞て、青物採るてふ山ふみも來集りたゝすめば、八ッ斗なる女童、藤布衣にみじかき布の黑染の前垂をして、つゆ人にはちらふけもなう踊なんしたり。これを肴にとて又飲み、立はとて又のみ、映山紅（やまつゝじ）をとり來て枝ながらむちや〳〵とくひつゝのみぬ。酒のむともがらは、つゝじ花を好（すき）けるものとか。此かへさに、行み

塙村

仁義野

强坂を出て

んとて乃利久良山に醉人等とともによちて、物見なかねといふにとひうつりて、高岩の末のあやうげなるをましらのやうにこと岩にたちて、はなうたうたふを身にあせして見つゝ、からくして埜にくたり、山河いく瀬渡りて塙村に來つきぬ。武隈の花輪の松のそれならで、みちのく南部路に花和あり。津輕の郡大馬越の闔屋のほとりにも、はた此處にもおなしその名の聞へたり。櫻樹のみ茂りあひたり、なかみちを分て、

風薫る梢に來鳴けほとゝきす散りし花わの里の中路。

水木彌五右衞門といふ家(やど)にしはしかたらひて、中澤を出て仁義の野良を日くれてわく。此あたりに、むかし、すきやうさ栖居し、をこなひたり、たうとき跡たりなと、たとる〱戯れて、

ふし拜む禮智いつこそ信のやみ仁義のはらをわけまよふ也。

人々わらふ。甚祗といふ、そみかくだともいへり。

二十三日。强坂のやかたを馬にて出たつ。石川とて烟酒(たばこ)の名だゝる村を弓手に、小手脛(こてはぎ)の山里を見つゝ裂文平(ひゞきれたひ)といふ野中あり。遠つあふみの味方の原に似たり。國見てふ村にかゝり、めてに鰶魚(くき)の澤のやかたを見やり、坂をおりのほりて常盤の村はしになりて、

あらを田に早苗はとりつ霍公鳥なか鳴くなへのときは來にけり。

十割田村

避病の齋事

大柄の鑛泉

この一村の業とて、人の古る家を買こぼち、それを里の前なる川舟につみて賣ぬ。さりければ、軒ごとに桁、棵、柱、古板戸、すいかい、すのこ、切垣、かはやのこぼれまでそありける。宿に泊る。

二十四日。けふの空晴れて、雄賀羅の温濤の奥におもしろき瀧なんありと聞て、見にいなんとて出つ。假橋、眞面、長埼なとの村うち過る。馬手の方は十割田といふ村なり、むかしは尾張田といひてし處なと、さかしき山賤のいへり。獨木橋うち渡るとて、小墾田の板田の橋の壞れなば」と、こゝにそらたくへしてふみすぎ、羽の木平をへて砂子田村になりぬ。藤のところ／＼におもしろし。弓手の岨よりはしめ、尾みねともいはす松のしけう生たるに、藥師堂とて見ゆ。山谷村にいたらんに、河そひ柳のいと多かるに、まつはりかゝる藤の盛りいふへうもあらしかし。谷底に見おろせば、小田のくろみちはつかに、しりくへ繩を軒はの木々の枝、あるは中垣の隣の苑よりも、蛛の糸を八重引にひきはへたらんやうに、ゑの病を避れじといつも春ごとにぞせりける、さうじごとてふ事となん。こゝを大柄となべていふ村におりぬ。大杉の枝葉も見へわかぬまで、藤の眞盛ことにやよけん、此藤の下陰に藥師佛の堂あり。堂のほとりに寒泉涌て水硫黃の流れたり、試れは礬石の氣あり。これを樋に流し、ふねにおとして、柴をたき温湯として、田殖へはつれば人さはに群れ來て浴すといふ。（天註—

此山に浴そめたりしは慶安、承應のころ、しるしは痂をいやすと、ところ人のしかいへり。）日も谷の戸にかくろへば、佐左木八兵衞といふかもとにやどかりたり。

大石村の淸右衞門

二十五日。つとめてあないをたのみて、觀音淸水のほとりなる家の前をへてしばし行は、河のべに栖家五六有るを大石村と字いふ。淸右衞門が家あり、それらが遠つおやは大柄勘助といふ。亂れを避れてこゝにかくろひ、田畠を墾き作り始しは明應文龜のころほひにして、みつもゝとせを經たり。大柄勘介が末、今も大柄勘助とて尙あり。此淸右衞門か家のしりに大石の二あり、一には足手の形あり、雄鹿の小兒石、陸奥血鹿の母子石にたくへけん。むかし蝦夷のをさや栖つらん、鬼神の在りし處とて正月の朔より五日まで、此二ッ石に神酒すへ餅手向て齋ひせりとなん。山陰に阿遮羅尊の堂あり。かくて分入れば、いまだ雪殘りてふかし。

鍋子鳥

下々瀧といふもとになりぬ。瀧はさゝやかながら、岩どものすかたことにおもしろし。霍公鳥の聲、さけるまて山彥にひゝきわたるを、あないゝ「鍋子鳥が能くさかぶ事は。」といふ。こは、松前の小鍋燒てふことゝ葉に似たり。

　百千反こゑも涼しきほとゝきすおつたきなみの音にましりて。

上瀧

上瀧にこゝよりのほり見てんことなか〳〵かたしとて、みちなからはかり分出て高岨の柴手をとり、さかしき岩づらにつまがけして、眞木の平といふにのぼり、からくして太溪のそ

岩豆

岩坂村に

方言の別辭

こにおりぬ。石の不動尊たてり。瀧は西さまに提、はんぞうの水をこほすがごとく、山かせに吹みたれて、軒の綴水のごとく岩面にかゝれるもあり。窟のうちいと間廣くして、千人ばかりもやふしかくれなん、越の角田(かくだ)濱のいはやどにこそならず。瀧は裏見ともいひてんか。あまどりの群れていと多し、こゝにはあまつばといふ、胡燕(あまつばめ)てふことにや、ありとある岩のはさまごとに巣作れり。知母、支連なとの藥まれ〳〵に採り、山枇杷菓のやゝ時なれり。淡海なる三井の山などには、岩梨子てふことをよこなまりていばなしといふものゝ、實の熟(うみ)たるを鐵漿(かね)付たるなどいふ、その國こと葉そある此あたりにては、岩豆とこそ、阿仁山、大葛山にてもいふなれ。からくしてのぼり得て眞木の平を出て、まはにの山あり。かくて、ふたゝび佐々木かもとへいたり休らひて、ひるよりたちて山谷村に皈り來て河を渡り、林の澤より分てゆく〳〵雨のそほふるに四方くらく、輪金(わきん)坂、芝山を傳ひて廣野にいづ。幸の神平(たひ)といふ。やゝ岩坂といふ村に、はる〳〵とおりて泊たり。

二十六日。大風よべより吹て、雨はたうち頻りぬれは得出たゝす、宿の翁とひねもすさしぐみに、日はかたりくれたり。

二十七日。あまばれのあした市之介かもとを出なんほりに、あるしの婦(め)のいふ「於陀志以人と泊め申て、須委旦のみおませて於本利奈以事よ。於左以南良奴蚤に、さそ此一夜他してやあ

鬼が窟

梅内

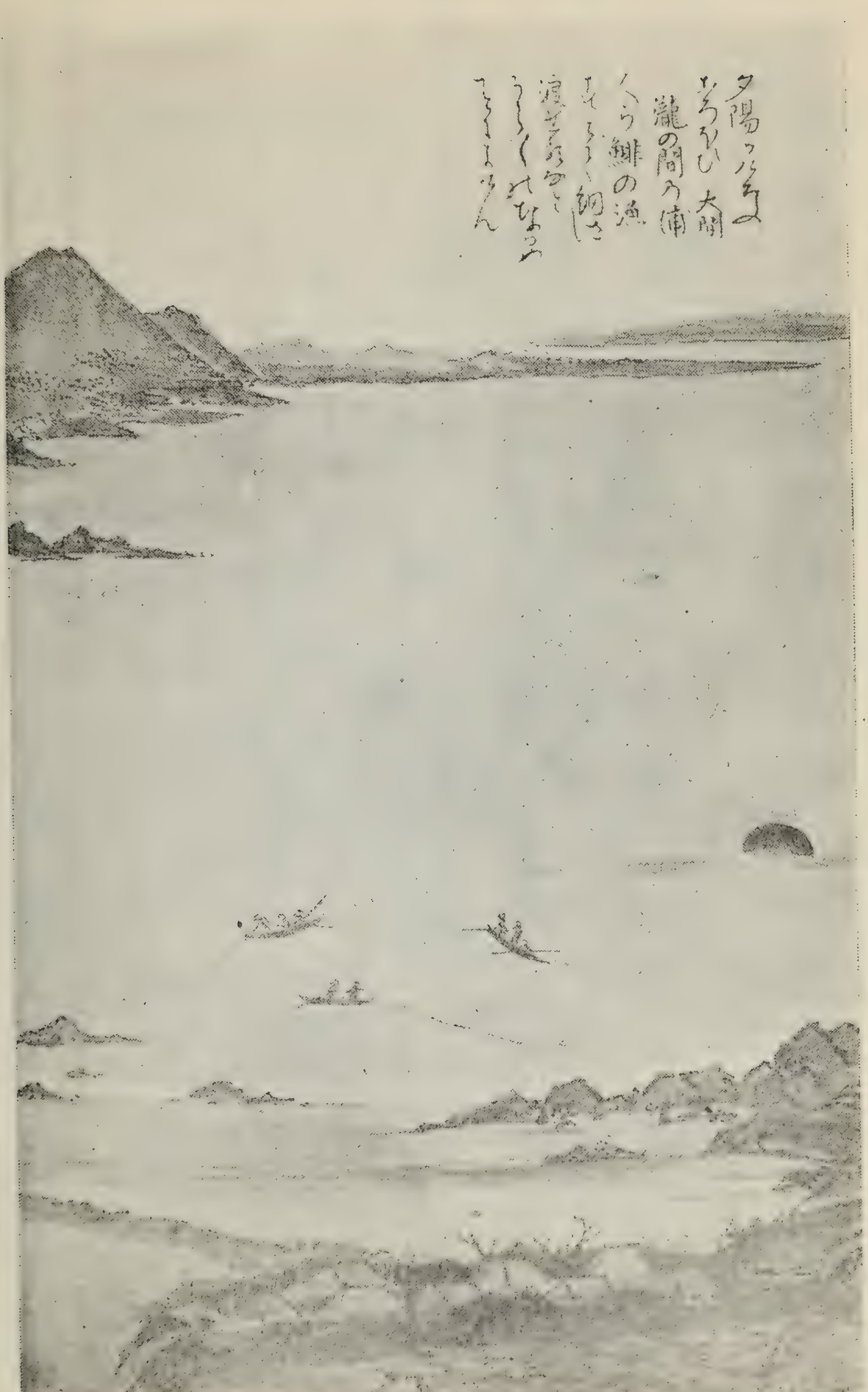
和光院石磬

敬月堂生地

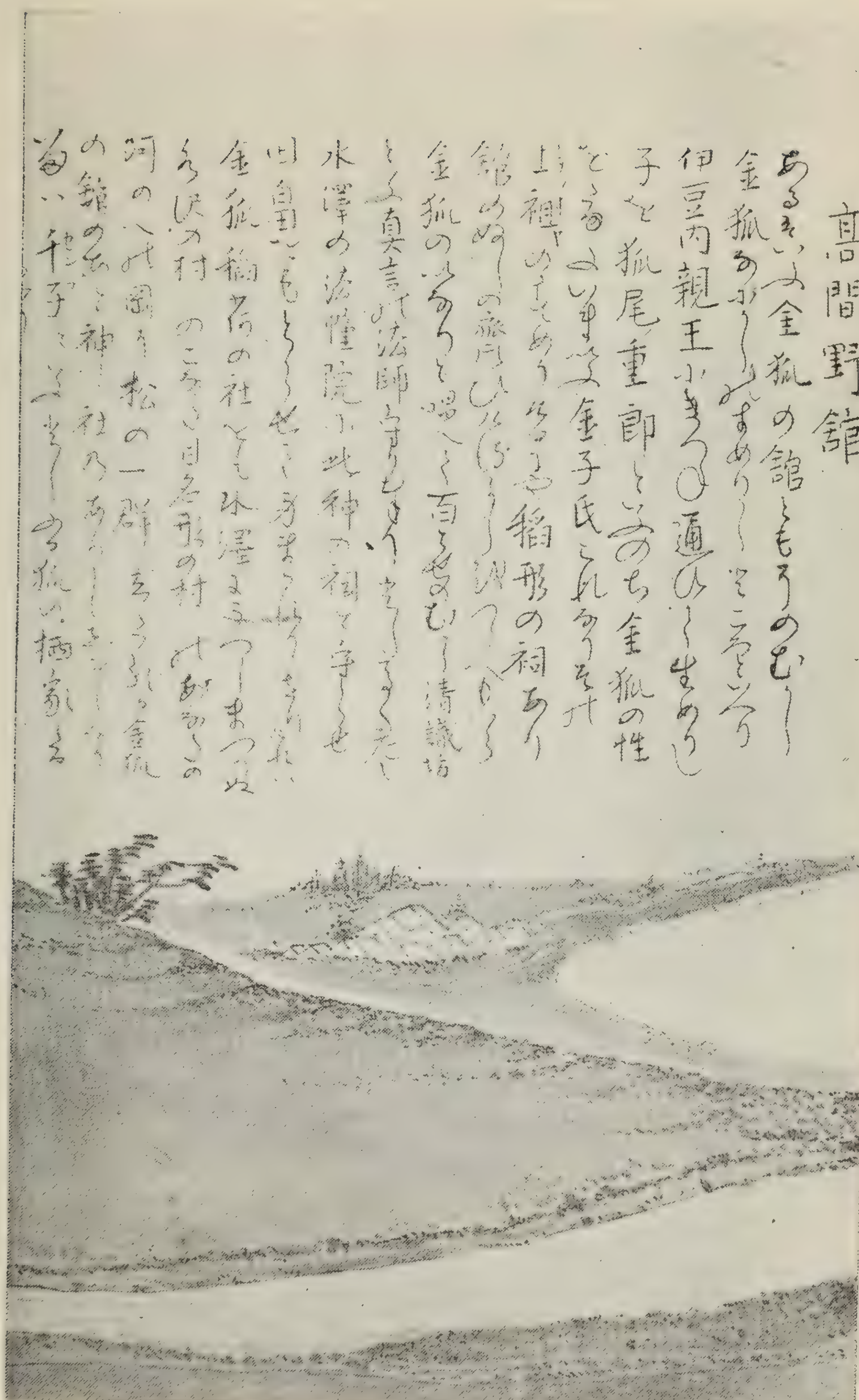
あやしの槻

らん。うくとも又來ませよ。」など、翁も門の外まで送りぬ。(天註—なへてオタシイとの詞は重くしきなり。ところにていさゝかのこゝろたかへることあり。スイコとは豆の烹汁に鹽を加へて、香煎を入れて、なにくれと浸し物にかけてそくふめる。オザイナラヌとは、ものゝ多かるをいふ也。本利奈以は本意なきにや。)間戸山(天註—間戸山、磨砥山にてや、はた窳山にてや。ところところに此名そ多かりける。)、小瀧をへて、奥山にむかし人の栖めりとおほしくて、鬼が窟といふあり。そこに大瀧といふあり、白瀧といふもおつとか。いて行かまくおもへど、耕にいとなうあないもなければ、せんすべもなう止ぬ。姨子澤、土呂野木、大淵、田野澤、源助などいふ處を經て、梅内といふやかたになりぬ。中昔こゝに湯泉ありて、その名湯目内とこそいひつれなと語る。和光院の驗者あり、庭中に三尺に二尺ばかり重さ卅貫零の石あり、これを敲けば金鼓の聲をなせり。あか栖る國三河の額田の郡乙見の莊、岡崎の旭山の神の前にかな石といふあり、その音におなし。美濃の國赤坂山に、石磬のさゝやかなからいと多し。和光院の石をこと處へ移したれば、その響止りといふ人あり。こや、もろこしの光政寺の石磬のたくひにして、和光の砌を戀るにてやと、ひとりこたれていづ。(天註—歴城縣光政寺有磬石、形如半月、膩光若滴 扣之聲及百里、北齊時、移於都内、使人擊之、其聲杳絶却令歸本寺、扣之聲如故。土人語曰、磬神聖戀光政。」見于酉陽雜俎。)村中の堰ひとつへたてて、樋野口といふ家五六はかりある處あり。小倉圭水敬月堂高貞とて、高名の手かきは此ところに生れたるよしをいひ、あか舊鄕とて、手ならひに書けるものいと多かりけるとなん、所の人語る。種井殿の柵の址とてありけり。そこにて驗者千光院、三とせのむかしならんとしふる齋槻を伐らせけるに、樹の中





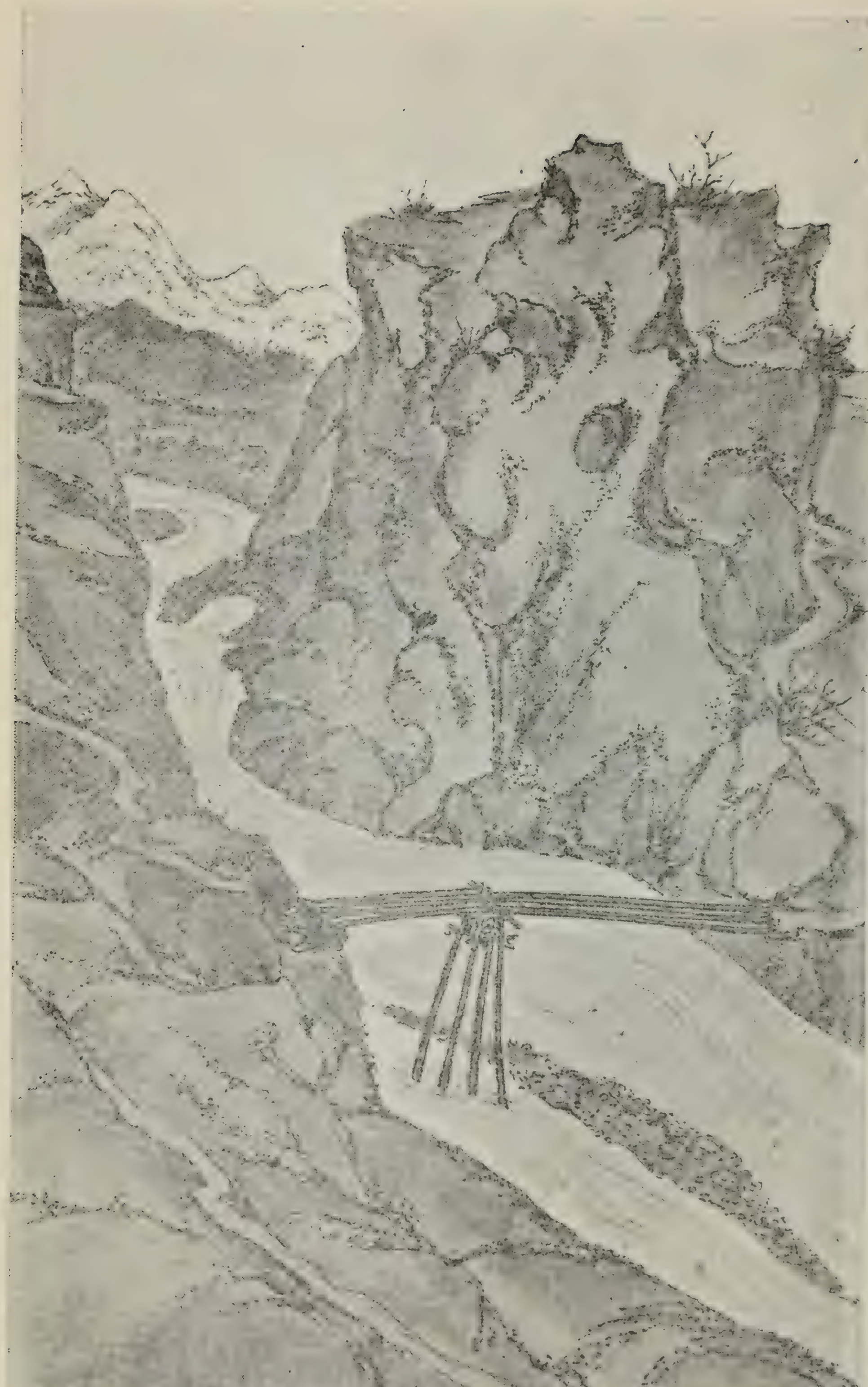


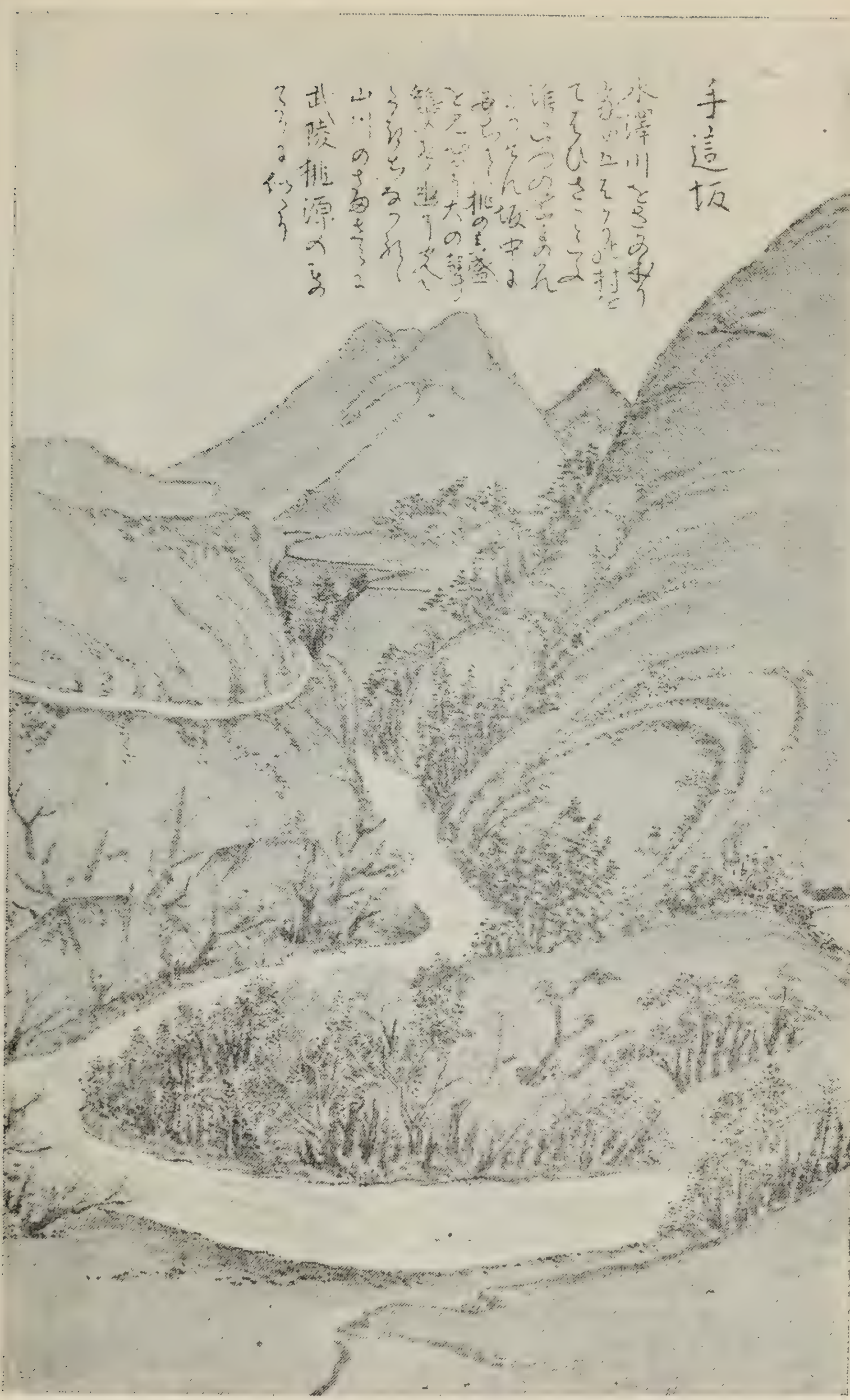

高間野館



雄賀良能多奇

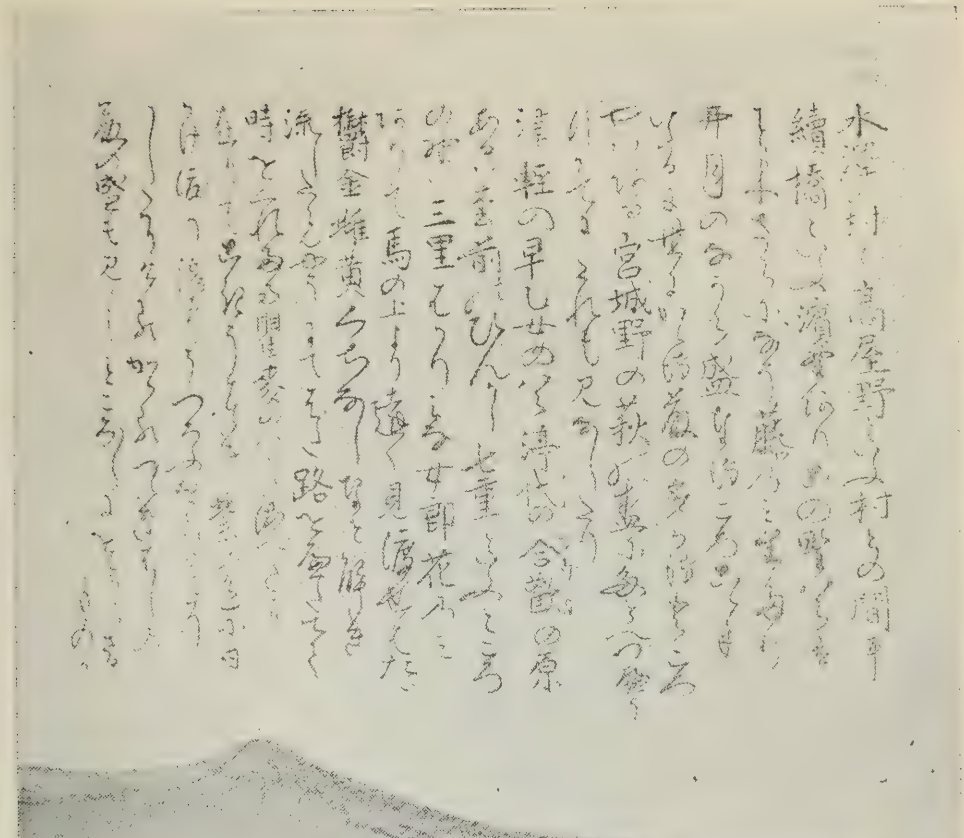

蝙蝠渕
桂の澤




手這坂



雄賀良能多奇



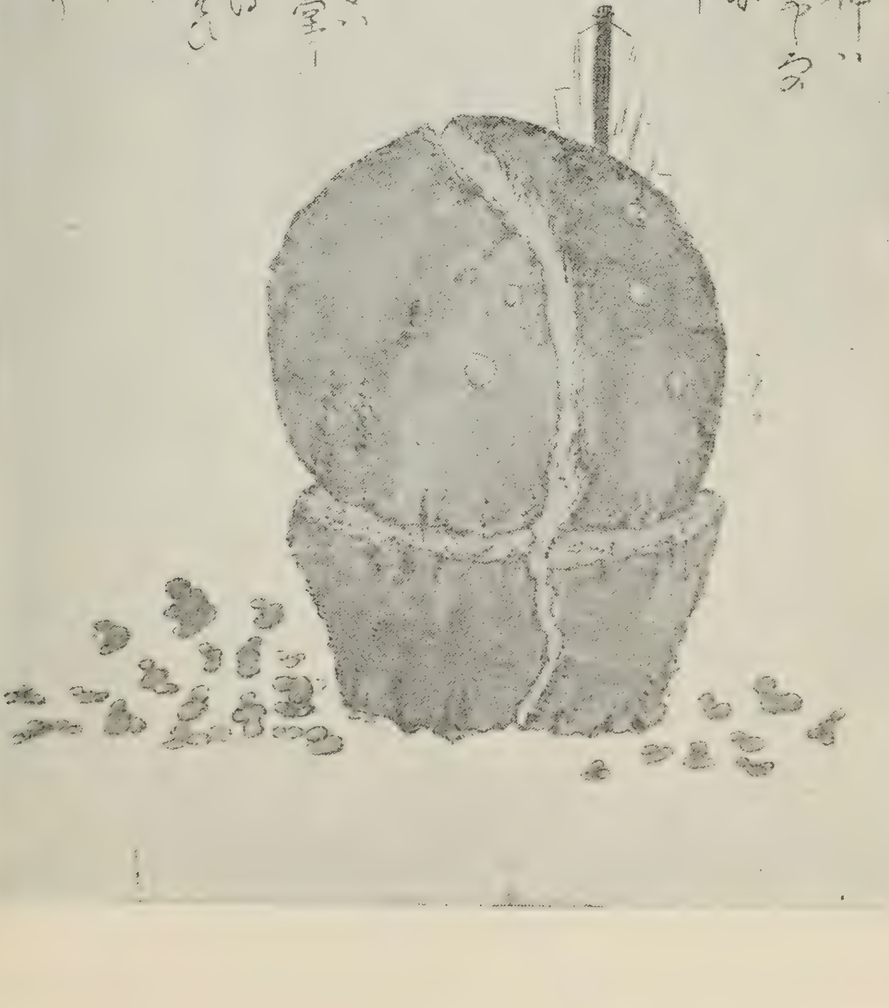


雄賀良能多奇





上強阪村のかみさ堂の石神は
陸奥の國栗原の郡なにの切んでなる
ひたちは遠流志郡石の神か
糠部の郡の石神村なる石神
こゝは大石を親としていめり
津刈のは母衣月の浦の
舎利子の母石まおとなして〇
すなはち其人の形なりして
うるはしき石をまつれるあり
此あたりの村より雛を造りてもて
きつゝ女なる人は子なくて女なるが女は
まうでものなりみつけし石を此堂に
帰りて祈り守りとせり
伴ゆく日ごろりきたりて女の多くは
しとありなにはしるきは外にあそこ
あまねくと遠くあふみの荒井の浦の
引佐郡中の合村なる石神といへ
曲玉を奏る社といふなりのかたちあり






大柄山下瀧之圖

雄賀良能多奇




大柄の上瀧及岩屋戸穴圖




貴利喜志渡

より酒の流出たり。人みなあきれたるに、亦祝瓮ひとそなへ出たり。いにしへ此槻に空穴ありて、参供とて米をうち入れ、御酒、糕なとを神の木とてたいまつりしか、その竅生ひくはりて、をのづからうちまきの木のうつほにてうるほひ、酒と化れるにてや。さりけれど、その木のとし經たるはいくそはくそや、あやしうめつらしきことにこそあなれ。胄明神の杜のあたりに雨のふり來て、切石の舟もぬれ渉りて、兜の社にぬさとり、飛峯の驛を出れは、鈕かたけたる男なにくれと話らふを聞ば、駒形の山里も小馬潟とて潮なんみち入たり、鶴潟しかり。その、つるがたの奥なる櫻下ダといふ處に船つなぎたり、新井田の船泊の大槻も見たまへ、渟代の浦近き潮辛田の村などみな海邊たらんかし。鶴潟の崩とて、いにしへの浪うちし岸邊にや、川筋のほとり、いつこも〳〵牡蛎なと、なへて貝多く付たる岩ありなといへり。此あたりのふることは、過しころ記してゆきかひたび〳〵に及ぬれは、みなこゝにもらしたりき。

豊岡まで

五月朔のあした、岩河へまかるとて渟代を出て金光寺野にかゝりて、たゆげなればしばしさて休らへは、行かふ人もおなし松陰にひちつきまとゐし、あな風らかなと、ふしてはなうち

ならすもあり。

　誰れもしか涼しき風を松かねの露もひるまの草枕して。

豊岡の里にいたりて、くすし神馬敬益善繼の宿を訪ひ、かねて相しれる人にてめやすく聞へたり。あるしのもとに、阿倍愛季の公のもとより眞照寺坊中へ賜りしもんしやうあり、花押なといにしへさまに見へたり。なにくれとかたらひてくれたり。

藤卷の古柵

二日。夜のうちより田子のよそひたち、うちむれるこゑ／＼に霍公鳥も鳴きませたり。早乙女の笠しろ／＼と明にけり。善繼にいさなはれて藤卷の古柵のあと見にいなんとて、むかしの根岸、いまいふ豊岡のうまやごを出て野路はる／＼とゆけば、毗沙門天王の森も過てその處になりぬ。在りし世のぬしこそしられね、外堀は沼と荒れて千町田の隅に殘たるに、いにしへをおもふ。三本トの大槻のひともとと生ひまじり、うれは千枝と茂れるあり、偲田の杜の楠にたとへつべう。此木のもとに神祠あり、藤の井權現とて、ものとかめなし、いのりをかなふ事いちしろきおほん神と人のいへり。

藤の井權現

　世にかゝる神そ貴き藤の井のふかきめくみやくみてしるらん。

と、鳥居のはしらにかい付て奉る。亦は淵卷の館、淵の井の神とも申となん。むかし田佃藤七といふ荒雄のありて、田に水ひくとてこゝにいたれは、八尋はかりの蛇の槻にかゝりたる

を鋤もてうちなやし、頭を鉏してうちきり淵になけやりたりけれは、その淵より夜ごとに光り出て、藤七をなやましくるはしむ。人々おそれて神と齋りて、ゆめたゝりあらさりけるとなん。つはらには知るてふ人もさらになけん、かんさねは罔象女を祭ふにや。こゝを出て、山口といふ村のこなたに在る青龍山といふに、阿遮羅明王の堂あり。南に向て五尋あまりの瀧ありて、したに立る石の不動尊のそひらのかたに落かゝる、風情ことにおもしろし。

不動尊の瀧

かくて木戸澤の村に來つれば、森岡のうまやよりこゝになりごころありて、嶋田なにかし仙風といふあるし、けふはうまやに出てむなしき庵に休らふほとに、馬艸刈るあけまき、蜀魄の鳴をひたにまね戯れ行を、

木戸澤村

　霍公鳥をのか五月はいたりきとさはなくこゑのしけきやまかけ。

やはらこゝを出て大日如來の堂に休らひ、升澤といふ村に來て北林與七郎といふもとに休らふ。宿のぬしの上祖は阿仁の莊升澤の村より來て、ちまち墾しよりしかいふ村名となん。山路しまらく來て、女達子の岡によぢのぼる。石佛の地藏大士ふりたり、圓仁のおき給ふよしをいひつたふ。こや汗したまふにや、露のかゝりしにやと、手して頭を拂ふ人あり。戯れて、

升澤村

　三度までみぐし撫てもつゆはかゝりおはら達子とならひ御誓ひ。

長面村長傳寺

岩河の莊長面(ながをもて)村に出て神馬善繼を別れて、相しる利教院長傳寺に入りて、こよひはこゝに宿りぬ。

三日。けふなん御嶽の神にまうてんとおもへど、雨もよなれば得いてたゝず。

四日。この夜枕に菖蒲をものして、ふすほどなうひまのしら〳〵とせり。

あやめ草かりねのやとにしきたへのまくらも風もかほるしのゝめ。

節句の慣例

五日。とはまたくらきより、祖神にこゝらの馬曳てまうてて、此かへさ、みなはだかせにうちのりはしらせ、めをとゞろかせたり。けふ一日は鍬とらす、柄に手ふれても稲の出穂に村雨のかゝらじとて、ゆめぜざるためしいつくしう、むら君のふれ渡す村もありとなん。茶尖粽(せんまき)、角巻(つのまき)はものせず、小竹(しの)の廣葉にて蔆巻(ひし)てふものをし、水蓬巻(かつぎ)とて粽をそ作る。おしきの上なる薯(いも)、牛尾菜(しほで)をとりもて、吉祥事(よき)きけとて耳さしつゝきぬるためし、いつらもおなし。

この日季忌宮齋(きのみやいは)ふ神籬にまうてぬ。わらはやみする人は、男にてまれ女と名のりて、ひろまへによね、しとぎ、みきなん奉りて田唄(うた)の一ふしをうたへば、なこりなう瘧のおつとなん。さをとしのころ見し處なれば、かいはふきぬること多し。此社は天正三とせのはしめなりけり。

山本郡名物往來

六日。雨やふりなん、朝ひらきの空うちくもりぬ。手ならふ童の机の上に在りけるは、嶺眼




の柵の跡又
青龍山



雄賀良能多奇


青龍山の瀑布

驗者の祖父なる翁、淸應院堯慧の作りなしてける山本郡名物往來てふものなり。おしひらきて見れば、近隣の名物心に浮むところあらましかきしるし畢。そも〳〵水澤の米、鶴形、飛根の大豆、小豆、小懸の小羽板、荷揚場の鮎、切石の眞根餅、常盤、假橋の川雜魚、石川烟艸、花輪の火砥石、梠澤の水、八森鰰、岩館鮑、朴木瀨の鱒、大久保平の鮭、吹越の胡蘿菔、羅別の牛房、能代の酒、饅頭、川戶河、棒箇崎、鹹淵の大根、蕪、大內田、二井田の瓜、西瓜、機織の草履、檜山納豆、中澤、新田、犬伏の根花餅、豊岡、森岡の乾鰯莚、岩河の栗、田代の炭、濁河の薪、大口、濱田、蘆崎邊の潟魚、釜谷の鰯、その外の名物際限あらされば、仍略之畢。」とそありける。しかすかに、ところ〳〵の面影の見るにしのはれたり。けふこゝを出て、嶺眼優婆塞とともに逢子の村にいたり、常樂山一應院賢峯の宿の軒よりはる〳〵と坂のほれば、堂のうちに阿彌陀佛、藥師佛、觀音菩薩のみかたしろをおけり。往昔、鷹城の坂の南に在る芹澤村のほとりより移してし寺にて、獨古山といひし。村名も獨古たらんを、今逢子てふ文字書けるはいつの世よりかなと、賢峯のいへり。過しころの日記にいへは、こゝも委しからじ。日はしたなれは、一應院に一夜をへたりし。

大湯に向ふ
蝦夷の騷擾
六文坂由來
一里箱

おなしさつきのはつかまり六日、陸奥の狹布の郡の溫湯（いてゆ）にいなんさて能代のみなと へを立いつる。このころきく、蝦夷か千嶋の洋に火箭の音して海面とよみ、魯齊亞、肅、愼なとの舶こゝかしこに搒ありきて、人もをひやかしそこなひしなと聞へしかは、浦〳〵にいつくしう軍を足し給ひてんとて、鰐田のくにべよりも物部あまたさもらはせ給ふとて、八衢をはせちかひ馬人さはによそひつれ、渡〳〵には川船とところせきまて岸によせならべて、こゝらの人其儲をせり。うまやのをさは袴のそはたかう、そのゐたちのひとりも來いたれは、つちにぬか付るにいとなう、あをひとくさは耕を捨てこれにたつさはりて、なか〳〵のさはきなれは、此あたりのすち〳〵往復のところなれはみちよぐなと、やゝ七蹌の渡いと涼しくこかれて、小繋のうまやを經て六文坂といふあり。あか父母の國にて、むかし今川の軍やふれて、もののの具ぬき捨て遁れたりしところあり。そこの名を八貫坂といふ。こゝはさも貨のかろかりける坂よと、ひとりこち戲れ越るを、さいたつ人のきと耳たてかへりみて、こゝにはものかたりの昔さふらふ。ある人雪路に行つかれ、あな困（こは）し、ものとらすべし我を負てあいべといへば、貨たもらば負（おぶ）ても行んとて、大の男を肩にかけて、寒き冬みちを身に汗しておひのほりおひ下りしかは、それ錢とてたゝ六文投やりて、あしとくにけ去（ゆ）きたりと。さりけるときより坂の名を六文とはいふなりと、一里箱（天註――一里筥は、めくらし文を入て首に掛て、うまやうまや村々にもてありくもの也。そのかた凡國風土器の

綴子の來由

修驗般若院

螺貝吹長根

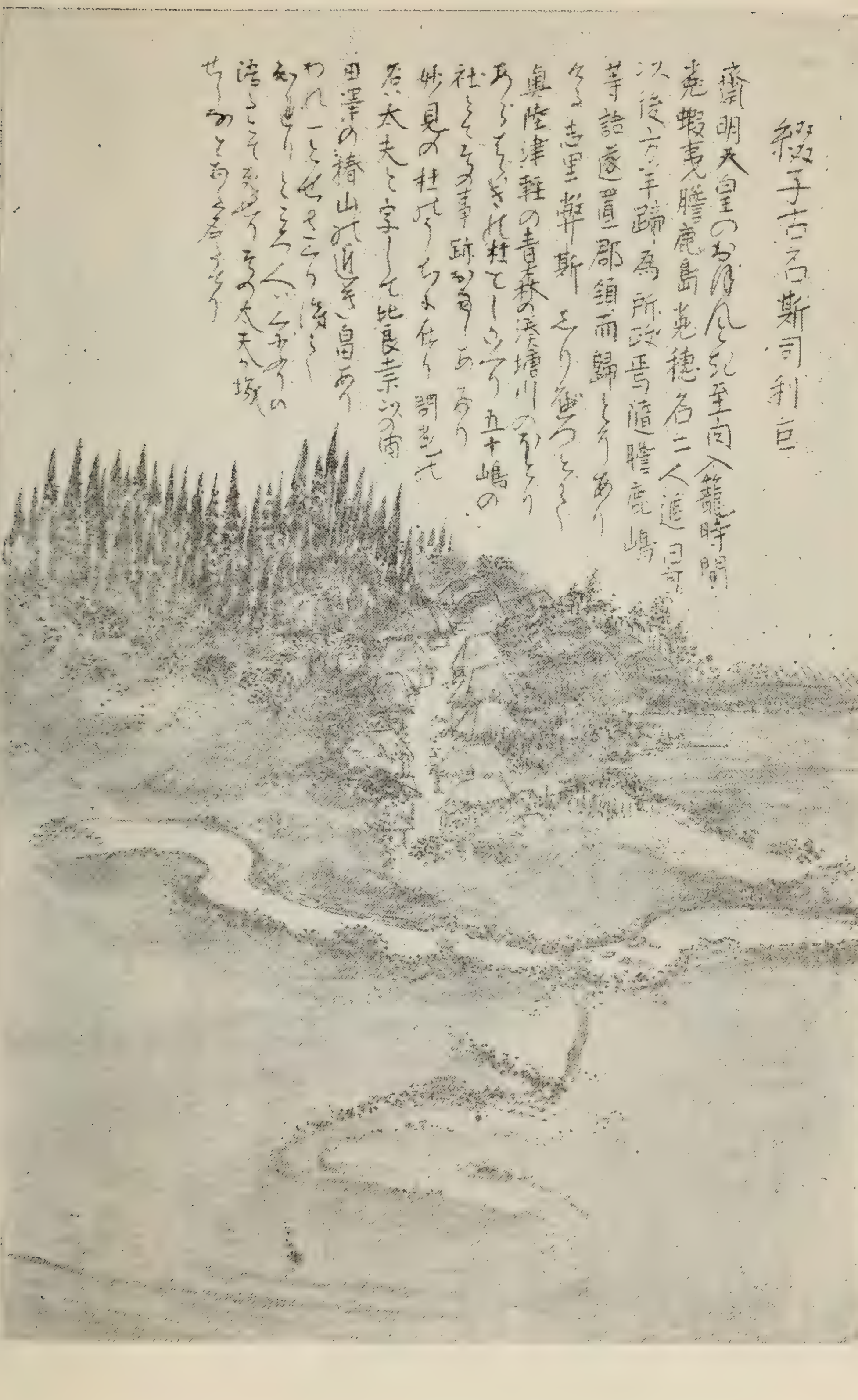
大館の里

（うちにくはし。）を頸に掛たる男のしかいひつゝ、行ほともなう松おもしろく生たる池あり。辨財天の祠ある小嶋なと作りなしたるさまして、水鳥なとは放ち養ふに似たり。かくて今泉のすくにつきたり。うまやのをさ成田のもとにやどかる。

二十七日。つとめて前山、坊澤をへて綴子の驛に來る。こゝはいにしへ、天豐財重日足姫のすめらみことの、あめかしたしろしめすおほんとき蝦夷の亂れを平て、阿倍臣、飽田、渟代、津輕郡なとの蝦夷みなしたかひたてまつる。その虜よたり、膽振鉏の蝦夷はたちあまり、おなしむしろにみあへし、祿たまはり、船一隻と五色の綵帛とを賜ふをもて、かの地の神を祭り肉入籠に至れりとある。その肉入籠をよこなまりて、いまは綴子の文字こそ書りと、もはらいへり。こゝに栖める修驗者般若院といふか、佛母大孔雀明王經のよき原本を得て、醍醐の光臺院の文庫なるとてらしかゝなへて、やかて櫻木にゑりけるとなん（天註―孔雀明王經跋曰、予師英泉歸于此尊信于此經篤矣、所謂非不空之譯基淨嚴之校而鏤梓印施之遺志而已。寛政八龍集丙辰季商如意日。羽秋田龍峰。」とそありける。そのいさおし、むなしからさるものにこそあなれ。）。その甥なるうばそこ神宮寺とて侑あり。馬手に螺貝吹長根といふあり。淺利と秋田の戰ひの、ときをあはせしたかねとなん。道のかたはらに丹土あり、外か濱の赤丹澤のたくひにして、ぬれ色眞朱し。早口の村に出つ。此小川の源に五色瀧といふありと、蜆だつ瀧にや。かくて岩瀬河口をへて、餅田の二ッ山、沼館のやかたなと見やり大館の里になれは、かの麼追蕃幣の嶋渡りの人々、

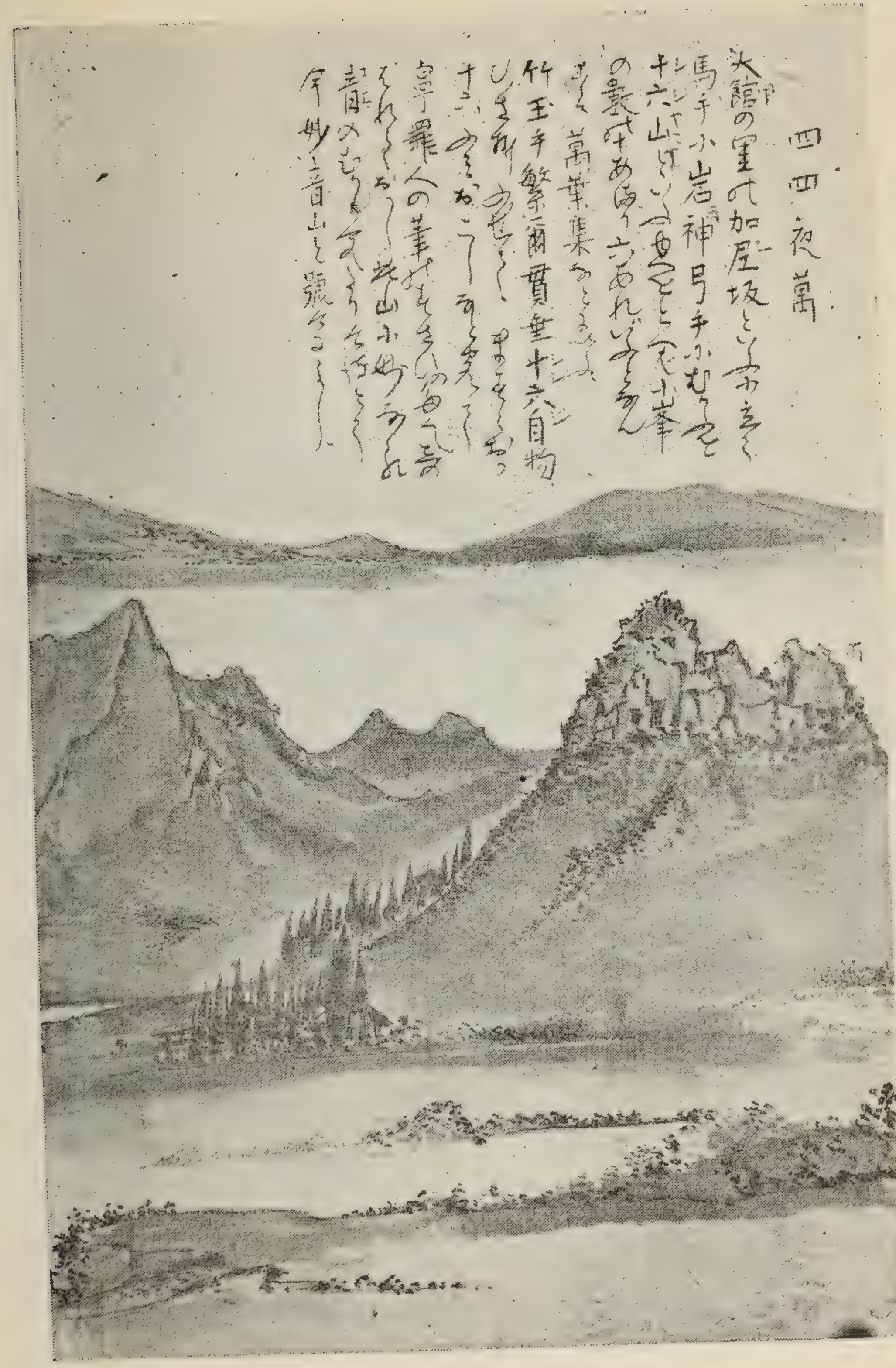
小雪澤の關
避疫神
大明神

うまいくさのよそひしてこゝらのり來て、これにしたかひ馬ひきちがへ休らふ。やともあらねは、さちに馬の飯らんにたぐへのりて川隈の路を馬にまかせて、金坂(かねさか)より弓手に獅子森山なと見つゝおりて、いと高やかに岩神てふ巖の山あり。此したつかたに立石といふ村あり。宮袋なと河をへだてて二ッ屋、茂内(しけない)を見わたしぬ。此川は、長樹のもとつ瀬までつゞいてふかし。いく瀬を渡り天鼓、小鞠相、四十八瀧、立石、多太良、穴渡、あるは鬼箇城の兩渉なと分るに、山迫りてたきちながるゝはや川也。さらに行かふ人もなけん、たゝ川音清く涼し。ゆき〳〵て小雪澤といふ處の關屋を越て、みちのへに、大木をもて人の形二ならへ作りて丹塗(にぬり)、つるぎを持せていさみおのことし。これを小舍(やかた)に入て艸芻造るにひとしう、おほんたからの疾疫(えのやひ)を避のましなひとて春秋造りかへ、あるは丹ぬりかへなとせり。中羽立を經て大明神といふ村のはしに、大なる岩の薯蕷(たていも)のすかたして二三、河岸のしげみの中につとたてり。人にとへば大明神といらふ。何の神にやといへば虛空藏菩薩といふ。佛も神とあかめ奉る吾國風俗(ぶり)の、しかすがにおかしう雪澤の里につきたり。（天註――雪澤の村名、新澤と近き世はいふ人もありけり、長木山の山脚にこそあらめ。水神、山祇の杜ありて、いとふるめかし。）



雄賀良能多國寄







雄賀夏能多奇


妻波賀美夜高



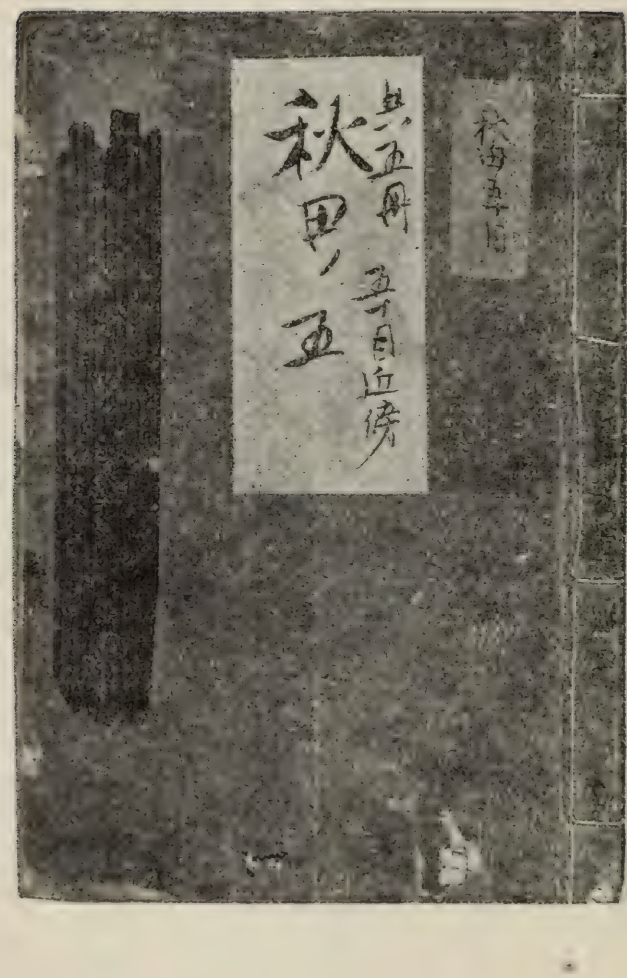




雄賀良能多奇



夷舍奴安裝婢


秋田ノ五

此一册は五城の目の近きとなりの郷に在りて「花の眞阪路」といふ日記にかい次たり。寒苗の里に大宮の神の在すよしをいひ、うまばの砦の跡、今戸のいしふみ、蕃樂の辭、乳槻のみやところ、あるは延慶の佛、小池の石碑、了賢寺の御書、岡本の屋形なる天文天正のもんしやう、藥叉か谷のふる事、及種槻のいはれ、柳の宮のよしをしるし、馬場の目季宗の書、あるは一日市の名たゝるいはれ、織田信雄の卿のふるあとをたつねてなにくれと記し、亦浦の梅園てふふみにつばらにしるしたる、承和の石佛のいはれもふたゝびのせつ。はた、このあたりのふみ月のてふりをももはらとかいのせたれは、かゝるふみの名をもて「夷舍奴安裝婢」といふ事しかり。

文化六年己巳秋

又いふ、あか友かき如泉齋のあるし嵐兒なる人の畫もひとつふたつはかいのせて、そ

のてふりもともふるめけるさまを、見ぬ人のため是をしらしむるのみか。かゝる戯れのあそひにも、けうのこゝろあらんことはまれなる事よと、こゝろにしめして蕨折の女なとを作りたれは、見る人もおやおもひのこゝろをあらしめてよと、をさなき人にかたりぬるそ。ほかは如泉齋か三足踊を、かのたまの繪(かた)にしるへかりけるものか。

山內村和田

飽田の寒苗の郷なる輪田といふ處に夜經よりありて、このあさひらき行空のいと涼しう、千町の面に風白う吹たちて、（天註―「滿奧に寒苗といふ名は書紀に在り。そのこゑをのみ傳へ山內と書るにやとおもふのあまり、その辭を假りてかいやりつ。山內は津輕の郡をはしめ、この飽田にもところ〳〵に多かる名也。かれもと那章は澤ちふ蝦夷の辭なり。此事蝦夷の手風俗といふ册子に記したれは、こゝにはそきて精しからし。」）

いつしかに夏はいな葉のつゆこほれめにもさやかにわたるあき風。

田の神の塚

やはら日のほの〳〵とさしのほりぬ。

富美通喜の朔のあした。ひと夜旅ねし伊東の屋戸を出て田の中を行、みちのかたはらに小高き、塊のことく葦生ひたてる堆あり。こは、此あたりに霹靂すれは钁鉏を立ず龍し、かんとけまつりして田の神と齋ひ、あるは柳をさし、あるはこと木をも殖て、いなうるひの塚といふかたもありき。なへて陸奥、出羽の國の風、いにしへさまに吹傳ふ事の多し。内外の神

大宮權現

籬をうつし奉らぬ村郷もなう、はた、此和田に大宮權現といふ神おはしぬ。權に現るのみなは近き世に唱へ奉るにや、大宮といふは、ところ〳〵の郷の名にもいと多し。かゝなへ思ふ

に、遠きむかし祭ひ奉りし神にして、古きふみに、大宮賣の神を御前に侍らはしめなどそありける。この神は内侍にして、今の世は内侍典と申奉る女官たり。さりけれは、皇太神の神垣近うこそ仕まつらしめ給ふものならめと、ぬさ手酬て、かしこき遠つ世の手ふりを偲ぶ。（天註――大宮賣の神は太玉の神の息女也。今の世にいふ内侍の官なり。高皇產靈、神皇產靈、魂留產靈、生產靈、足產靈、大宮賣神、事代主神、御膳神、この八はしらの神たちは所謂神祇官の八神とて、みかうぬしの齋ひたてまつれり。）山内の小川橋より渡れば、

晝鹿野

晝鹿といふ野はらに出つ、（天註――此野莨の名をいひて廣岡埜、或云蒜香野、日午蚊野、晝鹿野なともかいなし聞へてこと處にもある名とも也。かうかへおもふに比留加奈爲にや。なゐは莨澤てふ蝦夷辭にもやあらんかし。似たる名は科野の國に蒜嚼といふ名ところも聞へたりき。）馬櫪神の祠あり。弓手にやはたのみやところの神門高う、群松のなかにしづもり給ふとぞ見得たる。あな暑とて木の下に立て、

分ぬれし露のたもとをもひるか野の草のはつかの風たにもなき。

野には麻刈りこきちらし、みちもさりあへす。里は、これを蒸し剝きにたつさはりていとなうそ見へたる。馬場の目の小川渡りてひく小流に、麻の葉よりたゞよふ柵の音涼し。

餘波なく夏はきのふのみそき川はらひすてけん麻の大ぬさ。

高埼のやかた上埜のやかたを歷て、出にし鄕につく。

眠流し

六日。眠流しとて、こゝらの火ともしさゝげもて盆良雄の祭、いつこもおなしふりながら、桐の廣葉に歌かいて流すけふの夜のためし、いさゝかことにこそおほへ侍つれ。

今戸密嚴寺

古碑多し

七日。五十日の盆市とて人群れ行く。此夕つかた、今より亂橋まていなん、をそかむへとふりあふき見て、はや宿鴉かさはくはと、足とく語り過ぬ。

夕風に渡るつはさも吹みたれはしやかくらんあまつかさゝき。

いな葉のつゆ涼しう、あまの川霧目にたてり。

十日。今戸といふ湖の濱村に到て、熊野山密嚴寺實相院といふに、行基菩薩の作れるすゝつけるあみたほとけを此佛舍に習て、ひめたるのりを行ふ。此寺のしりより、前なる小橋のもとまて八の石卒堵婆あり。みな康永、曆應のとしの名をしるし、いつらも梵字をきだむ。大槻のあるを見て、としふる寺とはしりき。しはしこゝを離れて小今戸といふ村に、いやさしふる槻の八もとたてる杜のありて、藥師佛の堂あり。そのめくりに十あまりの墓誌石あり、それにも同う曆應、康永のとしの名をしるし、はた忠隆といふ人の名も見得たり。想ふに五城の目高性寺に元亨の碑あり、岡本の林に康永の碑あり、川埼の鹿嶋の森の内にも康永の碑あり。濱井川の荒屋敷にも康永の四碑あり、亦曆應、建武、貞和の碑ともあり。こは、いつらも五百とせに近き石碑のみかく多かるも又あやし。おなし今戸に皈る。道のかたはらに十王堂の前なる碑も、曆應の文字やゝ見へたり。みなこれ南朝のころほひにあたれり、そのゆへしらまくほし。

圓通寺歷世

古建築

觀世音像

重寶

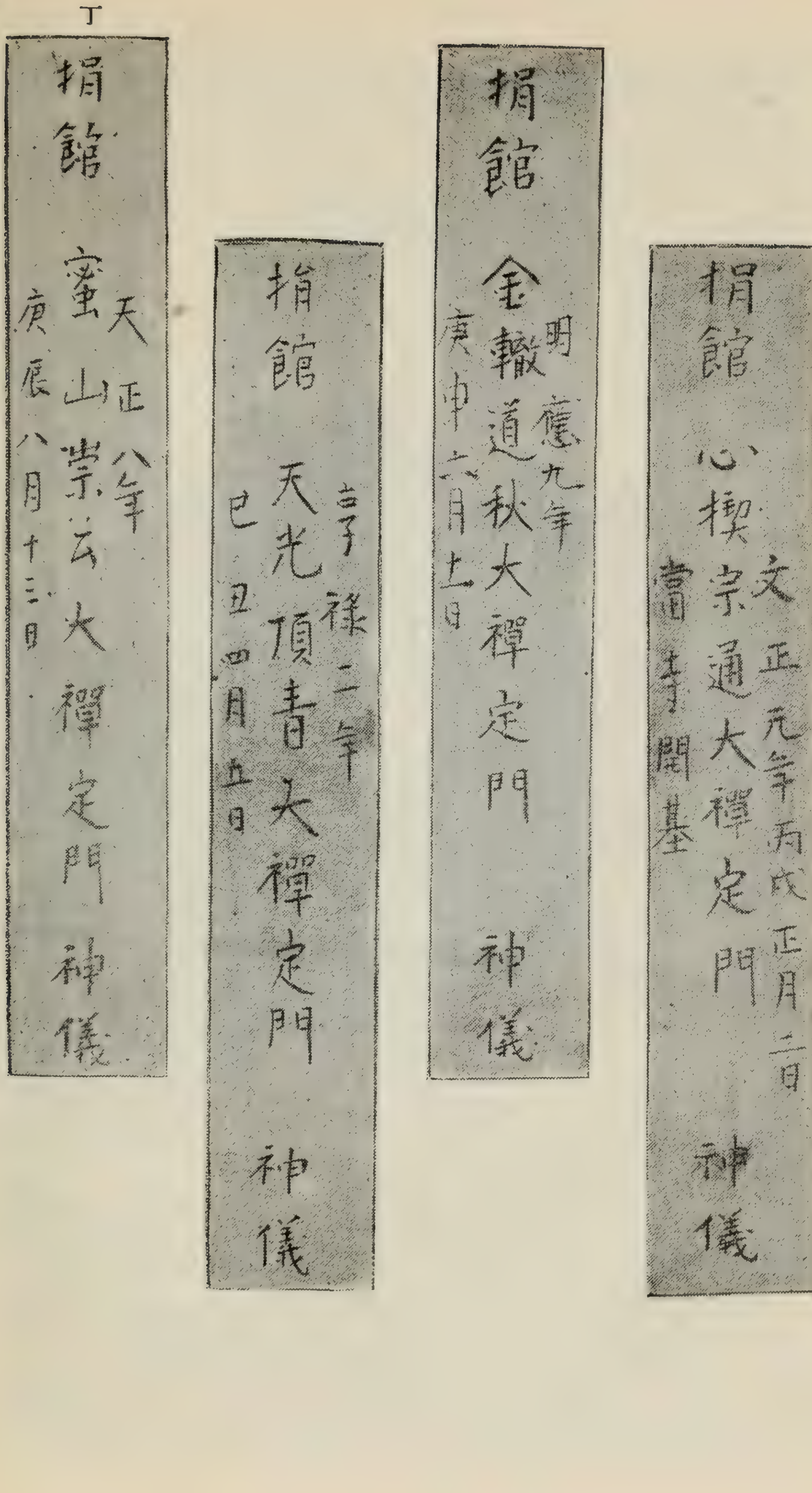
五十の目のほとり山内の村なる、楞嚴山圓通寺は平城天皇の御代に建り。（天註　一とせ春のころならんこの寺にとひしかと、あるしの僧たかひてむなしう皈りて、こたひ再ひ楞嚴山に入りて、住僧のものかたりを聞てつはらにのせつ。光室源瑞和尚の遷化は天正八年七月八日といへり。二世の笑山珊哲和尚よりは開山遷化のとしの百十年あまりそをとれる。）舊は天台の行ひたりしが、なからはすたれたるを、松原の補陀禪寺の十一世にあたれりといふ光室源瑞和尚の亡靈(みたま)を、開山とうつして齋(いは)ひてけれど、光室和尚は天正八年の秋身まかり給ふ。二世にあたれる笑山珊哲禪師こそ文明二年二月廿七日に遷化(かくれ)給ひて、二世は、もゝとせ斗も源瑞和尚よりふりたり。三世は、文祿四年乙未の冬十月二十九日にかくれたまひたりし月巣壽泉和尚也。この壽泉和尚陸奥松前に渡り、福山の麓に大洞山法幢寺、福形山壽養寺を闢けり。大洞山の松とて大松のあり、此松は壽泉和尚の手つから栽へ置れしとて、かの寺の軒近う蘚生(こけむし)て今尙立り。この圓通寺はまことにふりたる寺也、板戸、柱なとはむかしのさま也。わきてめつらしかりつるは、十間の長押の本末わいためなういと少(ほそ)く、竹のごとなる椙杉(あやすぎ)をもて作れり。胎内籠りの本尊とて、觀世音のみはらのうちに、さゝやかのほさちを作りをさめたり。この佛作りはいかなる人にや、いとめてたし。はた地藏菩薩、多門天王のたてり。このふたはしらのみほとけも、になういとめてたし、おなし人してや作りもしてんかし。すみの上に木圭四枚あり、その世に在し、城のあるしのやからのなきたまを祭れるにこそあらめ。此寺の寶とて、舌さきうすく鳩胷の高げに作りたる櫻形の鐙、こぼれたるしつ




山内右衛門尉、其姓藤原なり、
五十目内記秀盛同兵庫秀兼
の一族なり、天正十六年のなか、



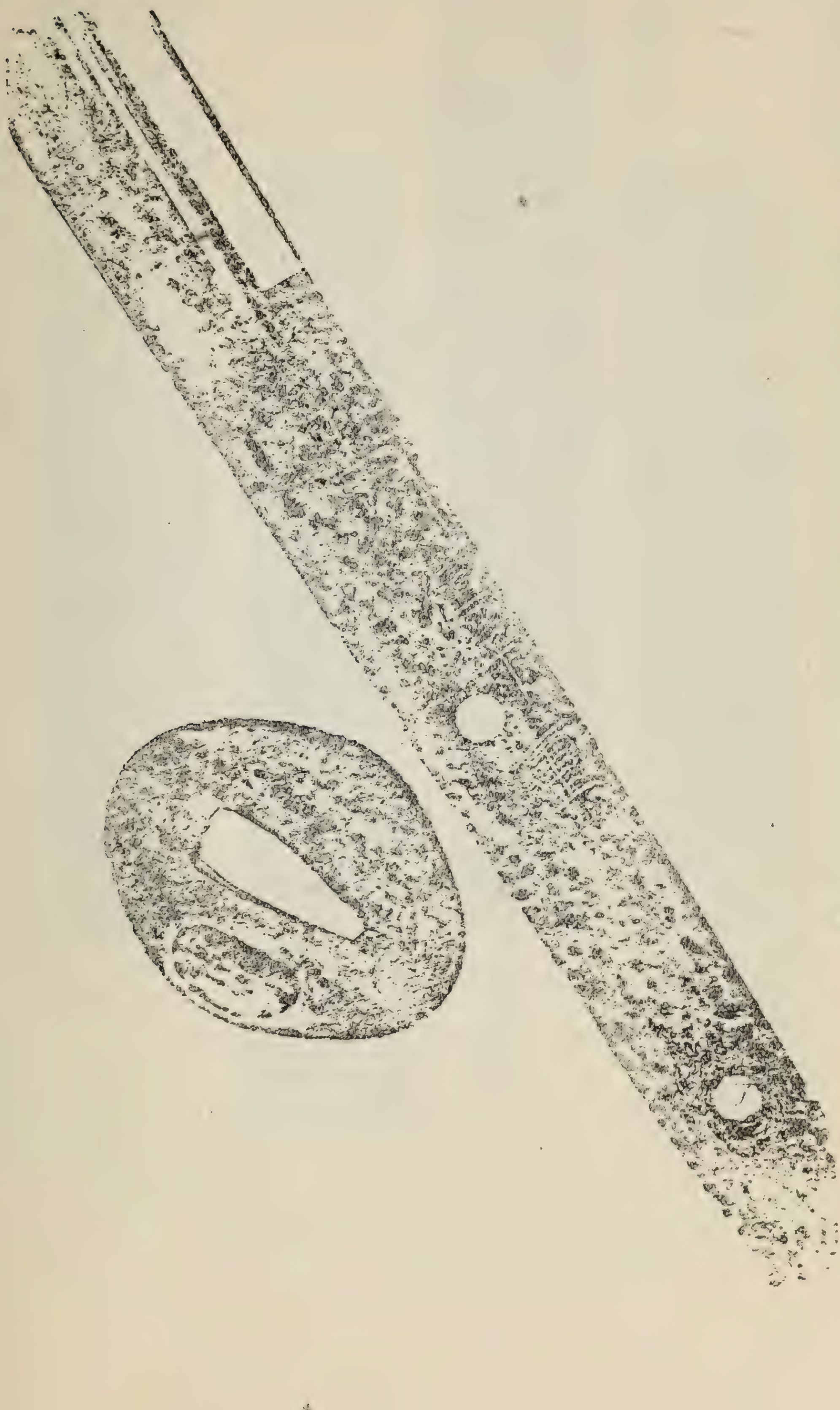
楞嚴山圓通寺に三浦統と齋る木主の四牌あり。



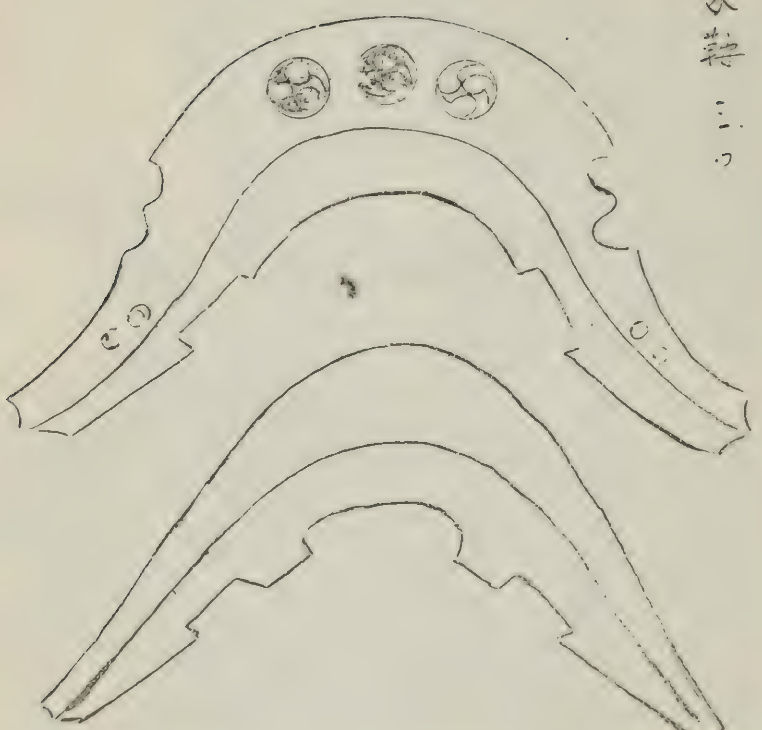
丁、三浦支番　廣森

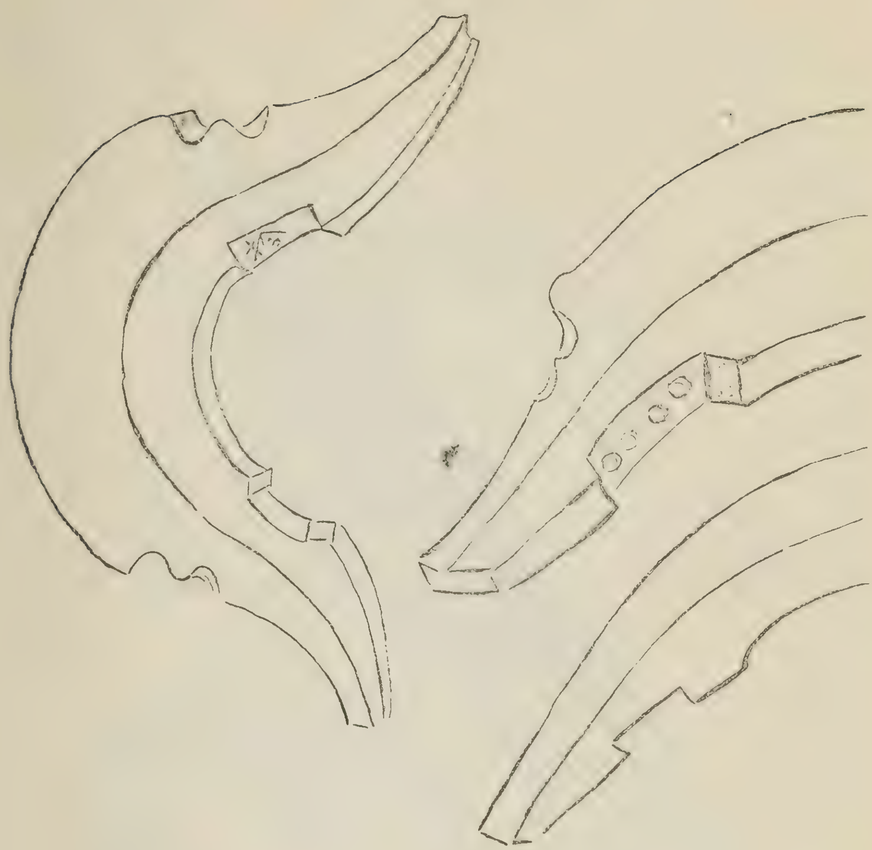


楞嚴山圓通寺寶物上州守重ヽ作ル鯰尾鋒

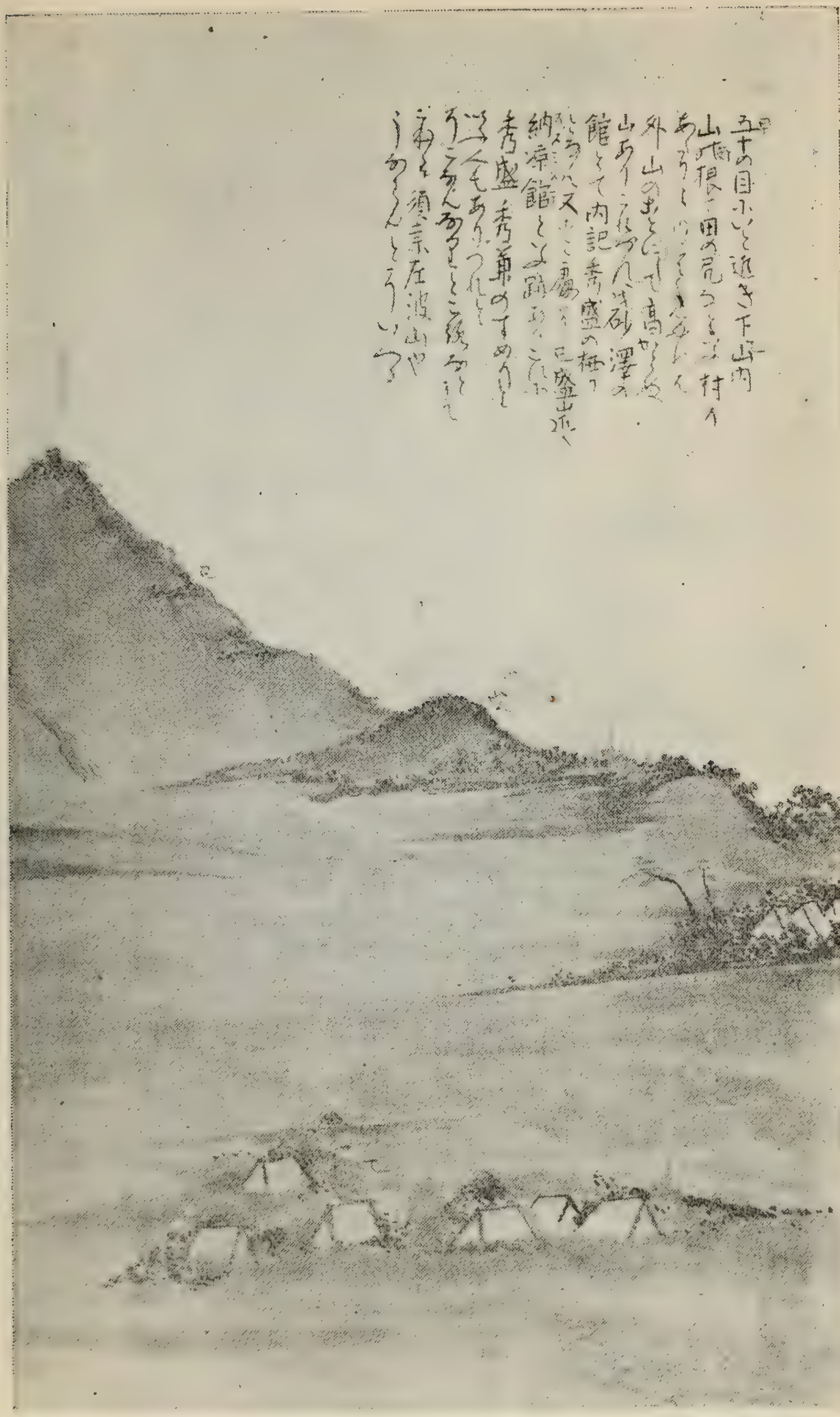


圓通寺藏三浦家鞍 二つ





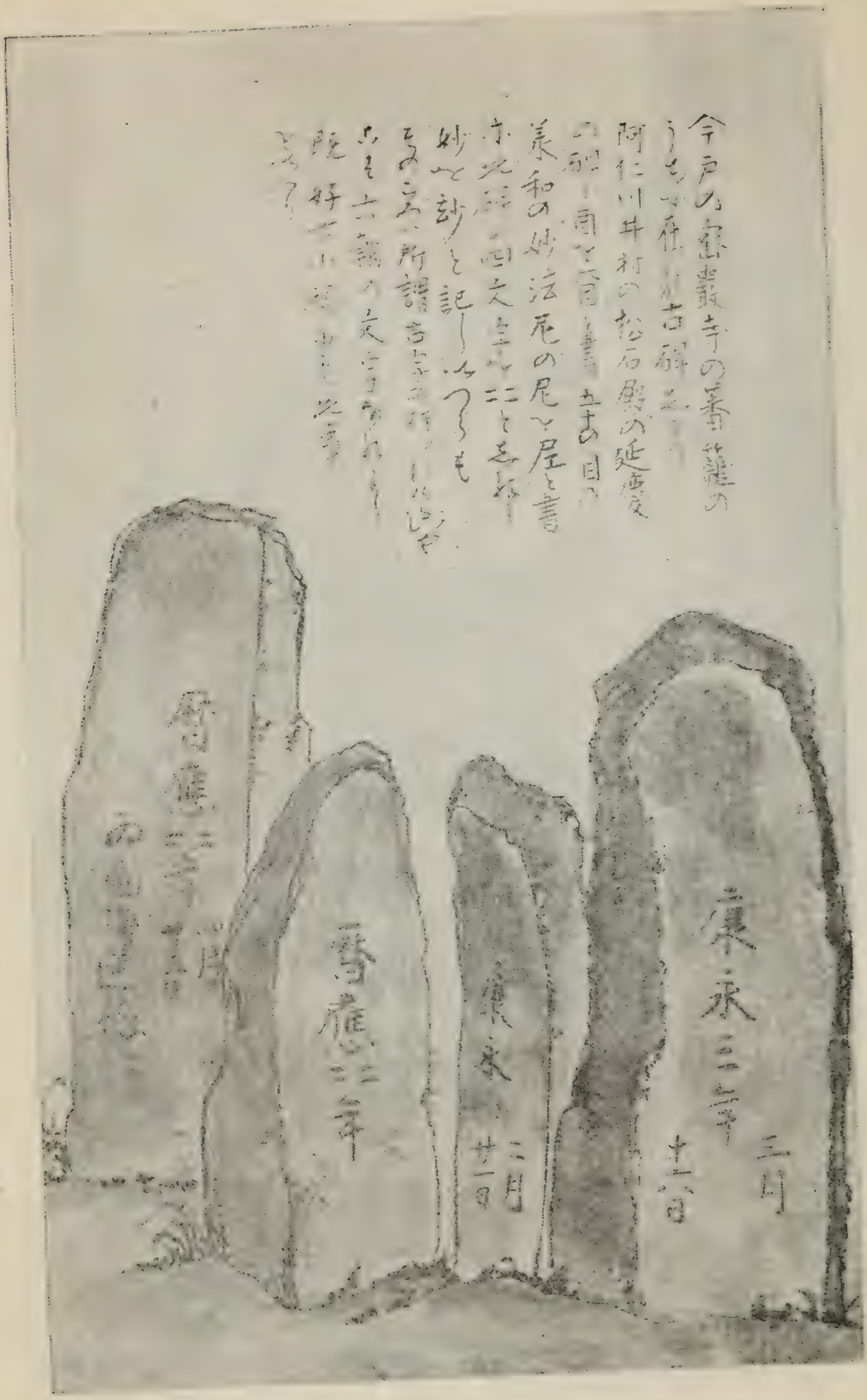


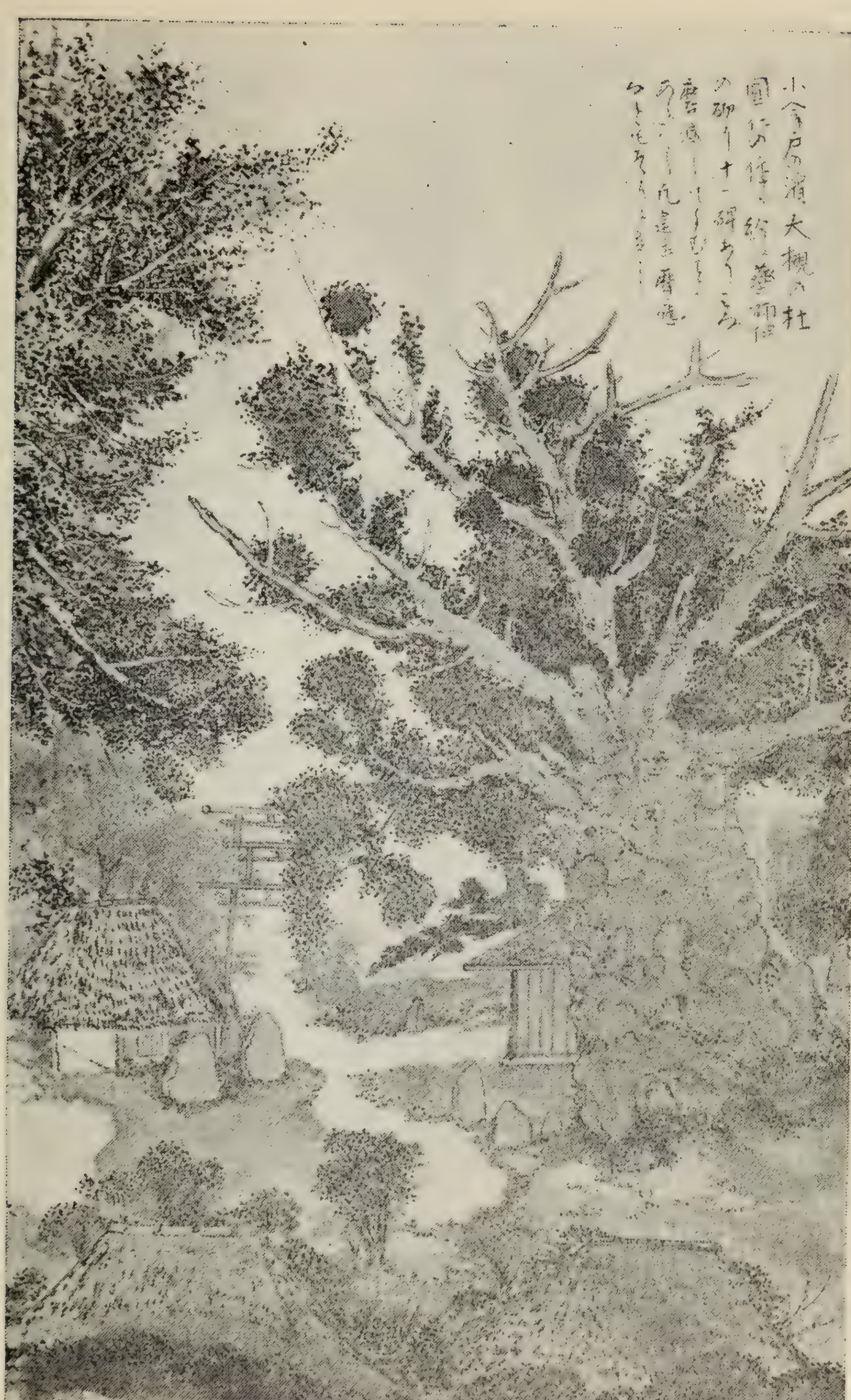




夷舍奴安裴婢








忠隆の碑は大樹の薬師の森にあり、
忠隆

くらぼねの三具守重かうちたる鐔、長刀のありき。具足ともありたりしか、うせたるよしを傳ふ。木主の末のひとひらに、三浦玄番廣森ちふ名をぞ書たる。

此村の保伊藤氏は、その城の君につかへまつりし家たりしとか。をさふねの祐定か鍛ふ鉾なんのこれり。」

金剛寺上祖の妻

おなし下山内の村なる、宮地山三光院金剛寺の優婆塞榮尙に見へたり。（天註―山内村金剛寺一世榮正、二世正神、三世榮春、四世尊正、五世尊榮、六世春榮、七世長榮、八世榮貞、九世榮春、十世榮尙也けり。）この寺の上祖は宮奴の家たりし、その婦みめことから世にすくりたりしを砂澤の館のぬしめてて、宮奴にあらぬ罪を負せてやかて命をめしければ、さまよふ妻をさへとりて、をんなめとしてとし月をへぬるに、ある夜このをんなめ枕がみなる刀をぬきとり、あか男のあたを今こそむくひさふらへ、おもひしり給へやとさし貫きて、おちのひかくろひ、雄鹿にいたりて金藏坊榮正といふけんさをあが夫として、此女ふたゝひ家を興したり。須奈差波の館はやかてほろひたりといふ、金藏坊、しるしある事世に聞へたりき。

二世三光院

二世の三光院正神ひたふるに瀧の行ひといふことをして、身をあら瀧のもとにひちて行ひしけれと、寒にこゞゐず、そのしるしぞありける。淺見内の瀧、伊武南比、そのほか處處に行ひの瀧の名ありけるは、正神坊か玆救咒、みすきやうありたりしところ也。はた、小倉の山里に三光瀧といふあり、行ひのありつる名のみ流たり。その行ひは慶長のころとい

へり、正神は元和に遷化ありつとなん。今十世にあたる榮徇の家に傳ふ、備前長舟祐定か天正八年二月に作る、かねよき横刀のあり。延命地藏菩薩を藏む、此地藏は阿部俊季の寄られたるよしを傳ふ。慶長六年辛丑に、こと國へうつされ給ひし事ともを語り聞へたり。家のしりなる處の木の茂りたる中に、圓仁の作れる延命地藏大士あり、愛宕(をたぎ)の神といはふ。砌に聖無動尊、觀音菩薩の種子の碑ならひて立り、こと文字はありともさらに見へす。」

盆踊の歌

十三日。魂齋(ほかひ)するゆふべより、二十日夜かけて盆踊そせりける。其躍に品あり、「あねこもさ、「袖子おとり、「ばら〳〵おとり、「ちらしおとり、「三脚(みあし)、「打小身(うちこみ)、「三勝」なとさり〳〵なれと、さんかつは、さうがもあらず、たゝはやしのみして踊りぬ。そがくさ〳〵の諷辭(ふし)なと、いとふるめかし。おほつゞみを二ッも三ッも肩に掛てうち鳴らし、こと村に入れば「他郷へ越へて來た、僻(ひけ)とるな、ふしか揃はぬ御免なれ。」と唄ふを聞て、その村の踊子等聲を揃へて、「俄おとりを掛られた、足かそろはぬごめんなれ。」亦「唄の地を聞けふしをきけ、ふしかそろはねてやごめんなれ。」とも答へ唄諷(うた)ふ也。「八重櫻一重櫻を笑へども、八重も一重も一盛り。」「戀し北野のわせつばな、男通へは二度孕む。」(天註――北野は八龍湖邊に在り。秋霧の立野の駒とよめる處にして、近き慶長のむかしまでも牧馬のはつかありつるよし。菅大臣を齋ひ奉りて北野の名におふ。往復の道より此野は北にあたれりといふ。)「空に雲ないはれ〳〵と、わしかこゝろはいつ晴る。」「酒をあからば中見てあがれ、酒のなかにも文(ふみ)かある。」(天註――盞の皿に歌を書てけるふる事に通へり。酒の中にもふみかあるちふ

一ふしもおかし。）又狂言唄ふあり「祖母御死にやらば六月死にやれ、虻が導く蜂が鉦鑼敲く、そこて螢が火を燈す。」なともありき。町里めける處は時におしうつりて、いまめかしきふしあれど、山方づける村郷は風情ことにおかし。又番樂舞といふものありて、修驗者のもはらしけり。ほふり、みやつこも舞ける里もありけり。陸奥の膽澤、岩井、桃生に在りては神樂といひ、糠部の郡にては能舞といひ、この飽田にては舞曲ともはらいへり。むかしふみにも、樂は盤渉にて伊勢の海といふことを、あそぶなどぞ聞へたる。もとも樂といふ詞ふりたり。

番樂舞

番樂は蠻樂といふ人もあれど、十二の番をいふにこそあらめ。想ふに、こは鳴鳳集といふ書の中に聞へし潘岳か笙の譜といふものあり、それなともやおもひよらはよりてんか。番樂十二曲といふは淸淨祓、岩戸開、千歳、翁舞、三番叟、若子、赤間、曾我、機織、御劍、潮汲、山の神」にてそありける。又、仙臺神樂の曲に蕨折、宇賀の珠、榊舞なと品ことに多し。

各地の番樂

「波立た〳〵、榊葉のもとに、をりかけて浪立た。」と唄ふ、並立たのこゝろにとりき。「榊葉の、香をかくはしみとめ來れは、大宮人そ圓居せりける。」といふを、取物にもうたふ。松前の三年神樂とて、三とせに一度行ふにやゝ似てことなり。これに山の神唄なとあはれふかし、注連切といふ曲にて舞はてぬ。奴加乃布の能舞に「玄番之尉」「いな田刈」「世品舞」なといとおかし、津輕郡も大同小異せり。此能舞といふや、俳優、さるがうのいにしへさまなる

が、遠き界にかた斗殘るにこそあらめ。それを舊(もと)として觀世小治郎の作れりといふ三十二番、はた彌治郎の作るてふ、二十五番なとの曲もいてたらんものか。その道のはかせたらん人にとひて、尙精しからん事をおもふ。世の諺に、能、猿樂、物見といふ事あり、能と申樂のたかひもやありけるものか。」

「番樂舞辭」「名取川 橋掛女出幕」

「來ては寄りそひよりかゝり〳〵、いささらは出て橋をうたふ、みめのよいてや〳〵。沙門の詞「かう前にまかりたちたる沙門の女を、いかなる女とおほしめす、われはこれ、橋かけ女郎の代官にてさふらふか、こゝに名取河のほとりに、名木の杉三本ありけるか、まづ一本の梠の影、七日さすによて、七日杉とは申也、又一本の杉かけは、八日さすによて、八日杉と申也、今一本の杉かげ、二十日さすによりて二十日杉と申也、そのむかし、乙鶴御前の、若宮參りの下向のとき、村雨一さはらさらりとふつて、かの木のもとに立よりて、雨はらしをそなされける、その因縁によて、ひる伐れは夜る生ひ、よる伐れはひるはひ、かの木は今埋れ木となりて、終に成佛なかりけり、これによて、此木成佛のために、三日三夜の神樂をあけたまふ也。

「橋掛女幕出の辭」「やう〳〵いそき行ほどに、いささらは橋をかけよふ。「中諷」

「こぞの六月十三夜のことなるに、乙鶴御前の若宮参りの下向のとき、かの木のもとに立よりて、あまはらしをそめされける、あらうつくしの名木やな、此樹人間ならば、一夜のはたもふるへきものを、鳥の身ならば、玉のみどりに巣をもかくへきものをと、七の枝に七の歌をよみ、八ッの枝には八の契りをこめられて、雨はらしをそなされける〳〵。」

「櫻子の母幕出辭」

「やう〳〵いそき行ほどに、さくらのみやへつきにけり〳〵、ナ、かう前にまかり立たる女をは、いかなる女とおほしめす、我はこれ櫻の宮の氏子也しか、去年の三月十三日の事なりしか、筑紫の國の人あき人に、我子の櫻子をぬすみとられ、かやうに狂亂にまかりなり、櫻川に出て、さくらの花をすくひあつめて見はやと存候、さくら花、さくら花、すくひ集て見たれども、わか子櫻はいまた見得す、あらなつかしの佐久良子や〳〵。

「櫻子幕出の辭」「やう〳〵いそき行ほとに、さくらの宮につきにけり。櫻子中入「かう前にまかり出たる男をは、いかなるものとかおほしめす、われは、さくらの宮の氏子なりしか、こそのやよひの十三日のことなるに、つくしの國のあき人にぬすみとられて候が、母の狂亂となり候よし聞からに櫻河へ出て、母の恩をもをくらはやとそんじ候、ことはり聞はなつかしや〳〵、そも〳〵御身はいつくの人か。「筑紫の人かととひたまふは、なにのために問ひ給

ふぞ、ナ、わが子の花櫻子をつくし人にぬすみとられさふらふゆへ、我子のはなさくら子かとたつね申て候、もしもわか子の櫻子や。「ナ、その花櫻子とこらんせよ。

「さくらごや〳〵、うれしながらもなみたなりけり、さくら子や、よく〳〵見れはわか子也、あらなつかしの櫻子や〳〵。

「天女幕出の辭」

「やう〳〵にいそき行ほどに〳〵、いささらば出て天女の舞あつて、日本の神〳〵は、善光寺の如來堂に集りて、今夜、如來をなくさめおはさんとかや、寶殿の庭に座をかまへ、韓神、催馬樂うたひつゝ、中にも諏訪の明神は、年はつもりて老の浪、むかしゆかしき容顏の、聲うちあげてうたはるゝ、はしめは、高天の原の神あそびありて、今日の舞殿の御番は、いかなる神にあたらせ給ふ、嚴嶋の明神の御番に相當りて舞さふらふ、いつくしまの御番ならば、ひやうと拍子を調へて、しんづしんづと御囃しさふらへ、大鼓は祇園、笛は熱田、次には三嶋ぶしをうたふ也。

「蕨折諷幕出」

「我はふたりの親を持、としたけ齡かたふけば、きしのひたひの根なし艸、御身のいたはりつきて、かきりとならせ給ふほとに、四方山に出て蕨を折に來りたり、今は是まで來りたり、

おそろしや四方の山邊を見渡せは、こそふりし雪の消へのこりてまたあるに、氷のうちのかぎわらび、ひとすぢ折るも親のため、子のためとはおもひわくる人さらになし、子に又親は孝行あり、子は又親に孝はなし、山一重越したるに、此川や、雪消の水のいやまして、舟はあれとも舟人なし、舟人あれとも艫棹なし、何とて此川を渡らんやうはさらになし、岸うつ波は行てももとれど、何とてわれらは皈らざらん、いさこの川に身をしつめん、わか來た里を見渡は、霞かゝりてはる〳〵と、あらなつかしの見わたしや〳〵。

「尉幕出」「いや、あい〳〵〳〵、あら〳〵みめいつくしの女郎の姿かな、そも向にたゝせたまふ女郎は、機織の女郎にてましますかや、又は何女にてましますかや。「さやうなるものにてはなし、われはこれ親の願ひを滿（みて）んため、蕨折の女にてさふらふ、それにましますは、尉殿にてましますか。「さんさふらふ。「尉殿にてましますならは、その舟一竿さしてたひたまへなふ。チ、「尉は若きときは、花の筏をもつみくだしてはさふらへども、今は七十にあまり八十に及ぶ事なれば、舟越すことはなりがたし、餘人のわかきかたを御たのみさふらへ。チ、「わかき方に賴み申べき人もなし、舟越してたひたまふ事ならは、尉殿のながき妻となりまをし、上にめしたる麻の衣をもそゝぎてまをすへし。「それはまことか。「さんさふらふ、それはともあれかくもあれ、舟越れん事のうれしやな。「いやあひ〳〵、この

渡陪莊介の履脱石

舟にとく〳〵御めしさふらへ、舟か行か心か行か、心をしつめて御いのりやれ。地謡「なひく嵐にさそはれて、向のみぎはにつきにけり。「舟をなんなくつけまゐらせてさふらふほどにこれより、尉かやかたに、しんづ〳〵と御入りさふらへ。「ノチ〳〵尉殿に申へき事の御座候。「それは何事にて候。「七日七夜のいとまをたびたまへ。「それはなるましうさふらふ。「さやうにてましまさば、三日三夜のいとまをたびたまへ。「一日二日三日はなるましくさふらふ。「さやうにてましまさば、一日一夜のいとまをたひたまへ。「チ、一日一夜のいとまならば、うろんはさふらふまし、天竺の大天狗小天狗も、親の願ひをみつるときく、尉は是にて待あかすべし、さう〳〵御皈りさふらへ。「うれしやな〳〵。地「おやの願ひをみつへき事のうれしやなと、雨にぬれ、つゆにぬれたる衣の袖をしほるなり。」

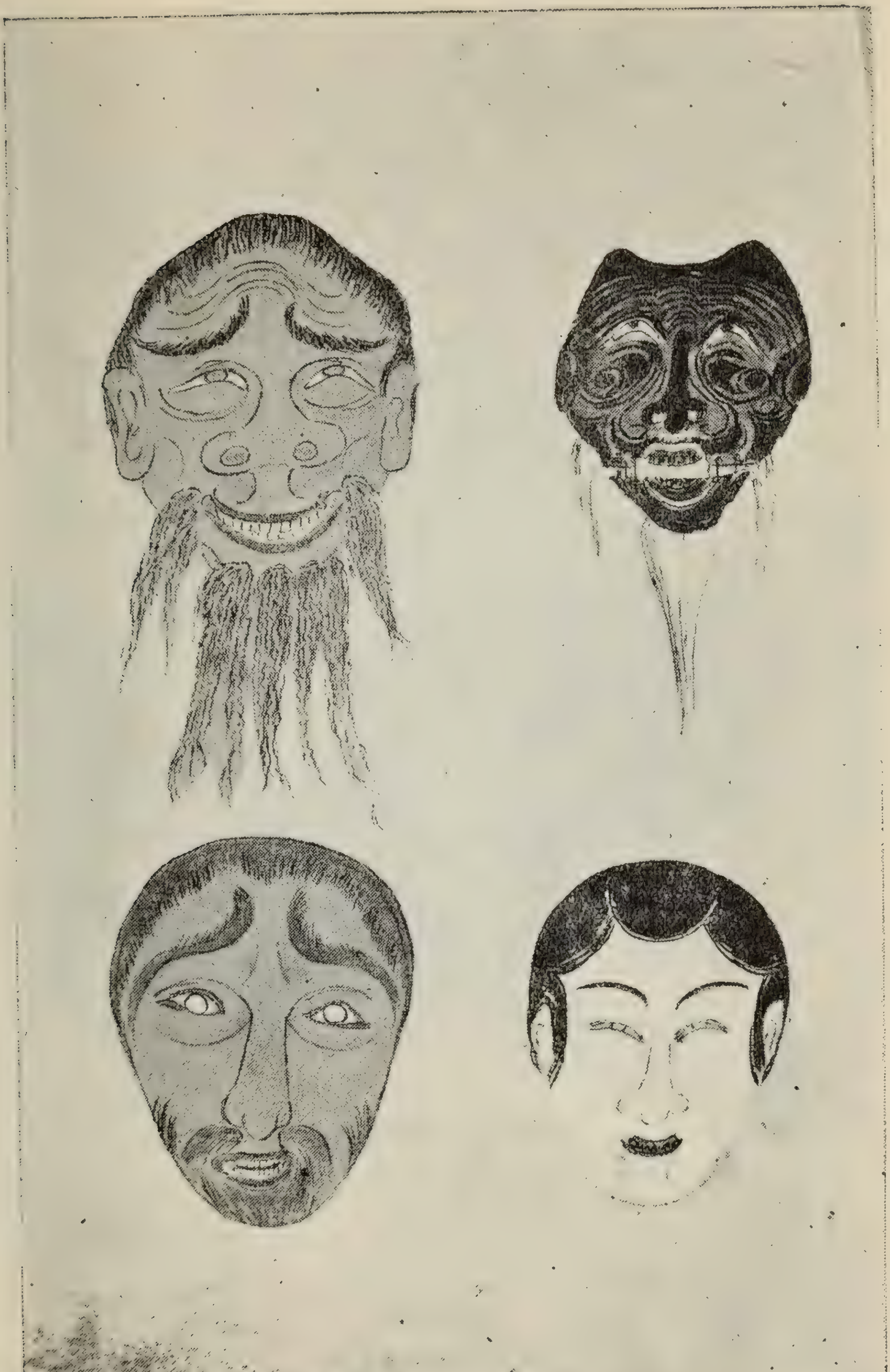
石佛地藏大士の記

此事前にしるしたれ、こたひ末なかくとゝめまく書なしてと、一ひらの板の面にふたゝひ是をのせり。

鰐田五城の目新河町といふ處の阡の堂に、石佛あまたあるか中に、大なる立石の面に半軀の菩薩あり。この石は杜山の麓よりとりて、渡陪莊介綱治の屋戸の砌にまろはしたるをもて、履脱石としたりけれは、これをふむ人をりとしてはたふれふし、身もそこなひやふる事あれと、ひたふるにひんかしの御寺のをしへを守る家にて、さのみやはとてとし月をふれば、い

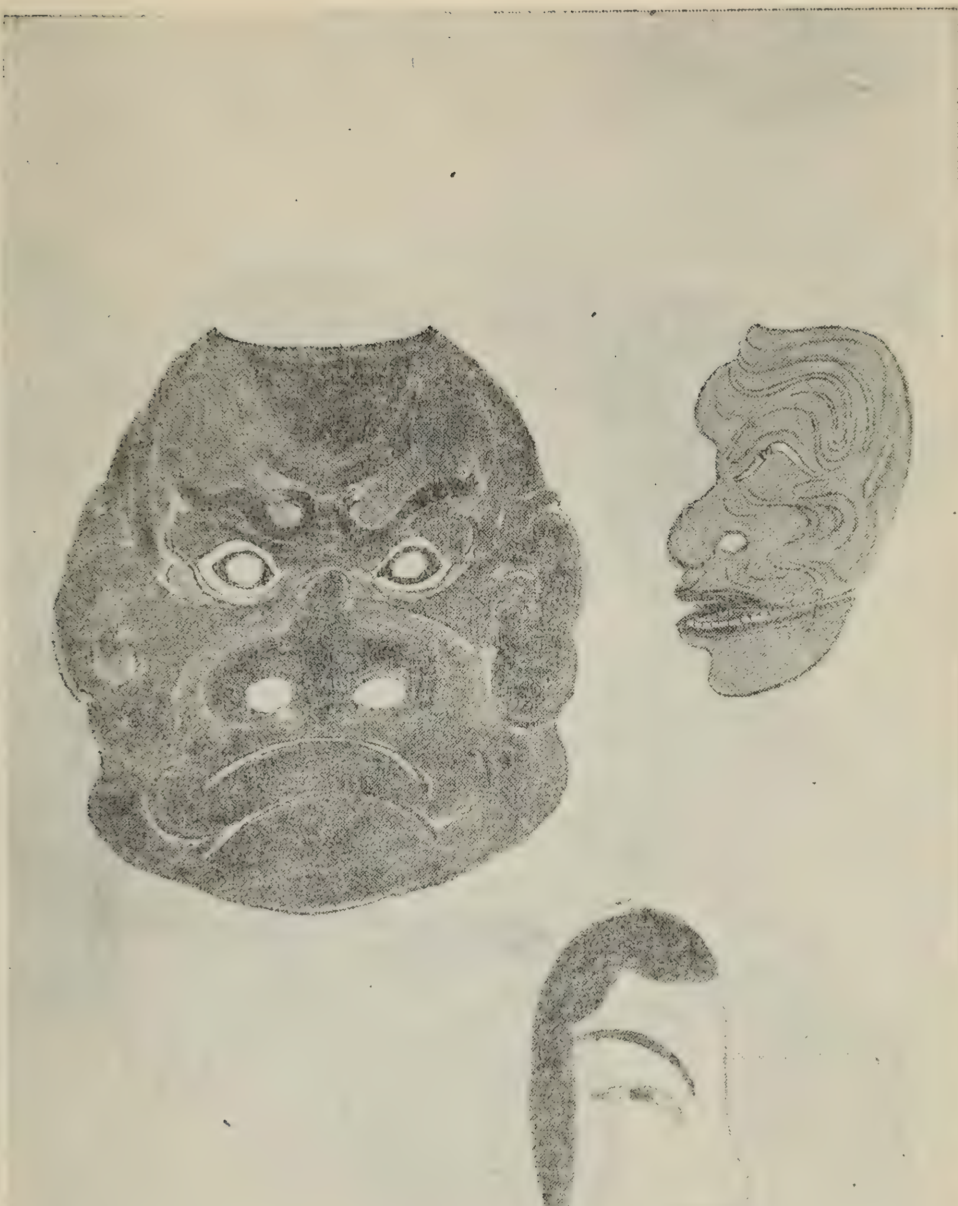






夷舍奴安裝婢



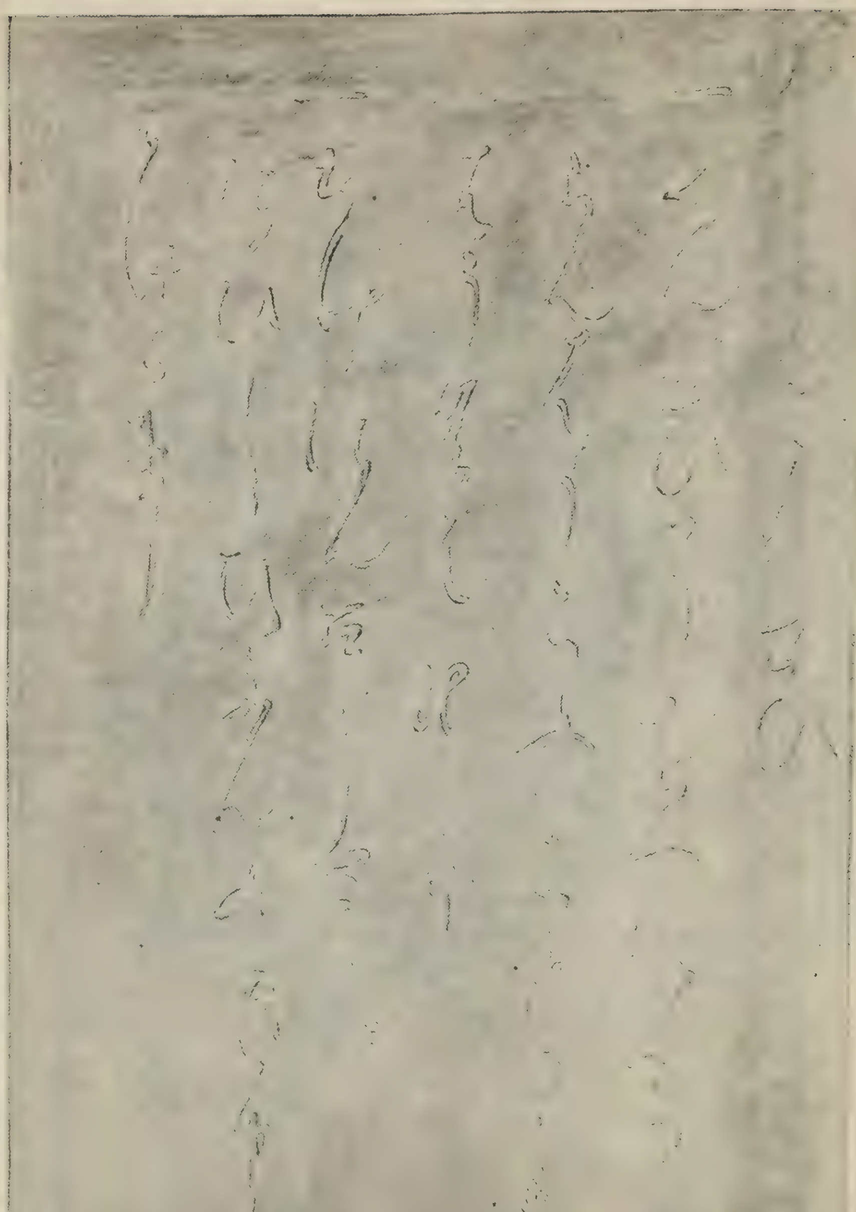




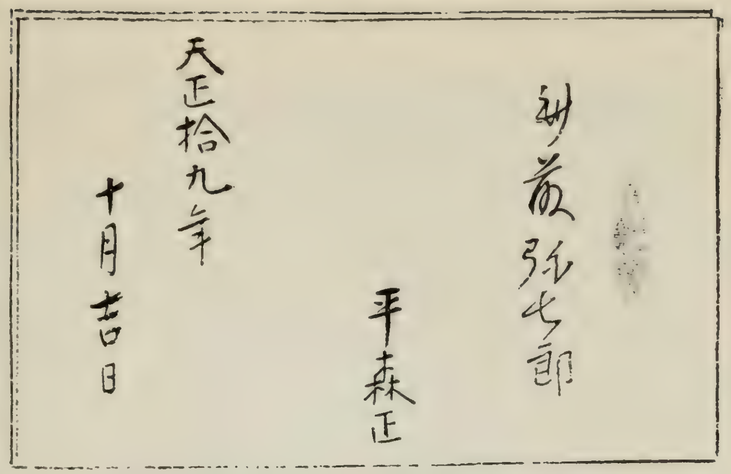

延慶二正廿八日向陀敬白
發菩提心

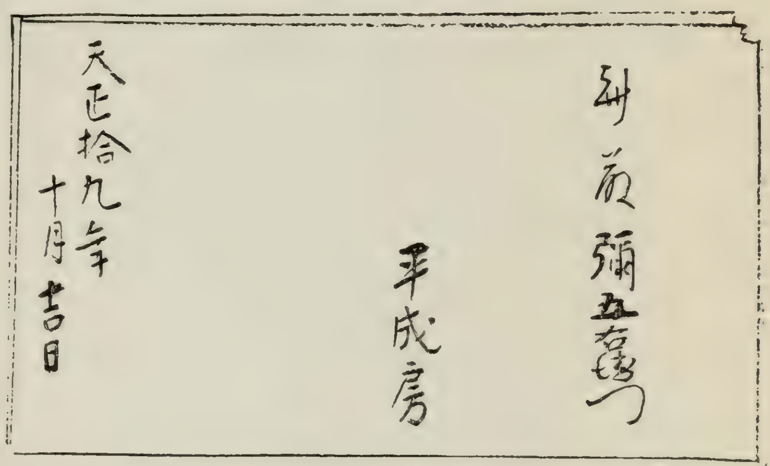


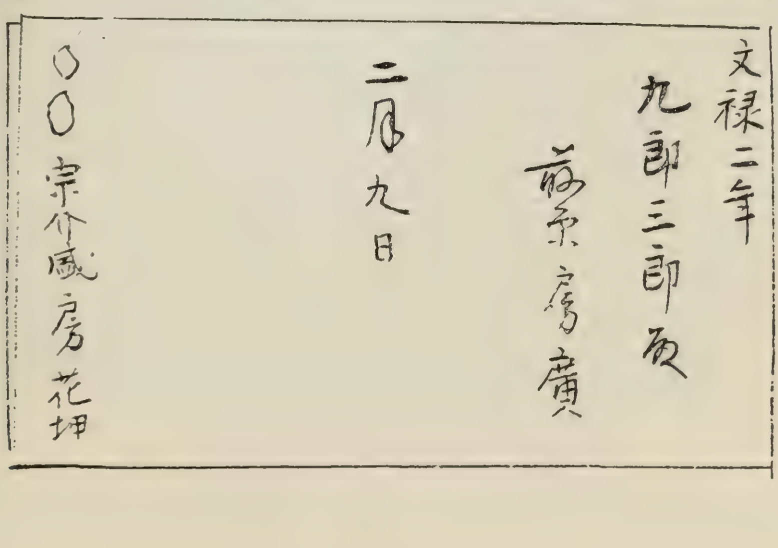

小平池村
御前拝の社



馬場目城主安藤五郎季宗の筆跡なりとて、馬場の目の莊、町村なりける齋藤傳七の家に傳ふ。元龜のころはこゝに六齋の市人群れて郷饒ひ榮へたりし。天正の末文祿のみたれに、市神ちふ八角の辻柱を盜みもて押切の陌に立て、市人さはに集りぬと。その夜かの柱をぬすみ、五城の目に市立て今もしかり。さりけれは、押切に一日市立しとて一日市の名ありとなん。

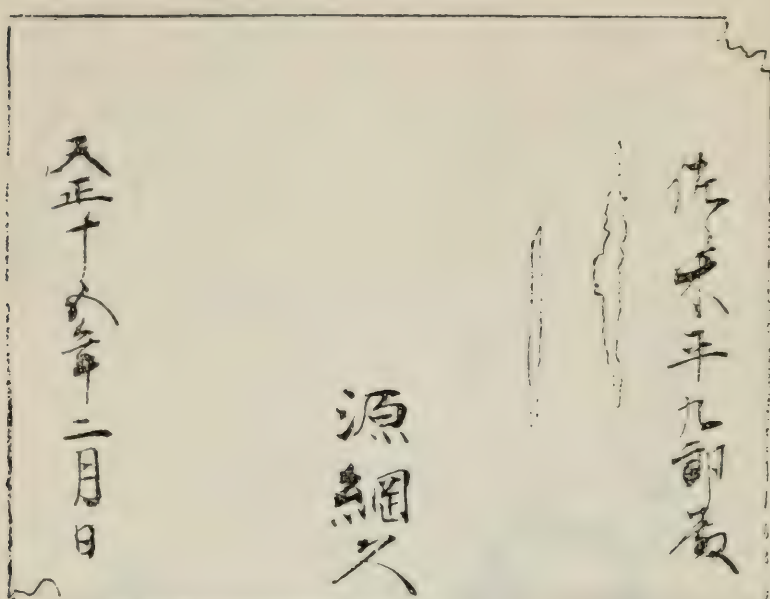






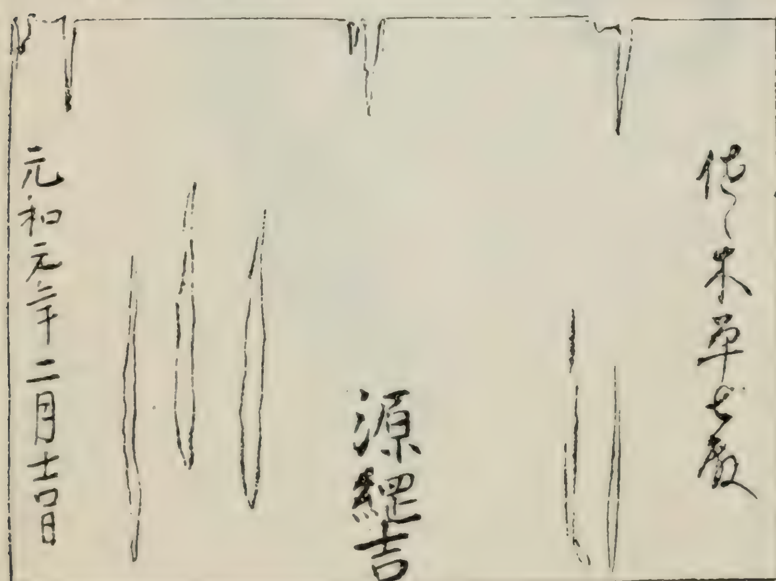
齋藤傳七の上祖は馬場目玄馬の家老たりしよし。家譜とて一巻の書ありたりしか、末のはみほろぼしたるとて、棟にをさめて、たゞこの三ひらを家のしるしとしたり。

其一


佐々木平九郎殿

源綱之

天正十九年二月日

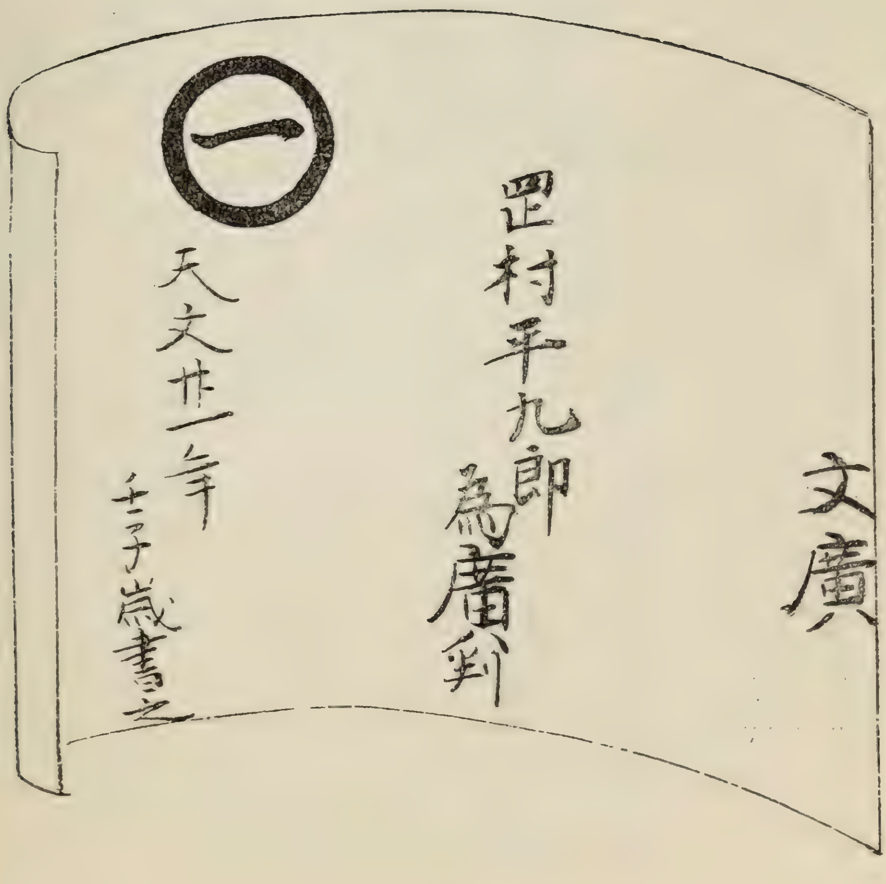

佐々木平七殿

源綱吉

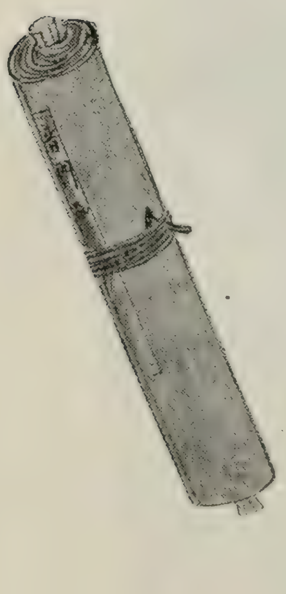
元和元年二月吉日

其二

此三枚の書ハ岡本村
佐々木仁兵衛家蔵
ありしをこひ申して
うつしぬ但しそ
家譜ハわすれやみぬるよし
なむいとをしくきゝりせぬ
のこしつる



小池村の保　齋藤甚兵衛家藏とて
紺紙金泥小楷寸巻の普門品と傳へ
巻表に
文正元年三月日　信時
と云九字あり有ける




秋田郡野田村長加藤七重郎家藏瀬戸藤四郎作陶祝瓶的一口
大同三年
油小路大納言隆前卿
清閑寺中納言益房卿
風早前宰相公雄卿
富小路形部卿德直卿
正親町前大納言實連卿
滋野井中納言公麗卿
御前栖大明神
口亘二寸四分　高一尺五分

法然上人おこたりの御書

羽州秋田郡五十目松林山
了賢寺一向宗家藏

雖日處よとも鬼の處へ參會遁れ佛つけて誦讀し
行ぬまりつぶして不善に餓鬼となりて見えたる自力
根性ぬ他力にて念佛を唱ふれば源空か阿彌
陀佛の門徒と稱する人その中より不思議とやさしく
源空か教をまもり念佛すれば極樂に必ず往生すべし淨土
宗の心は機を十方衆生心は動詞[illegible]行は一念
も十念も決定往生也佛の願に順ずる故なり
外金剛の諸佛も見てはる父母の素懐の中より
生ある生の三毒の一の意は[illegible]火の車の現ずる
ときも一念唱へて五逆の罪の重き十惡も
も逆も一念の罪にて滅して火車の轉じて花臺

寶曆の末つかた五十目村の了賢寺の住僧……
……長樂寺の僧……秋田より……了賢寺の知風上人……江戸より來……
……此書を了賢に……

長樂寺のりしへ秋田路阿仁
山より出る水包石とて水の
みなかも石ひらへと語しかい
を潜龍のありとて其石を日て
隆草ニ庵して石龍庵と
しりく紗善天とまつりなし
身とのくらうくく風の次第
すれる幸あり福德自在
身とをりぬさりえれ只高て
うしこつら咒の縁石の
集りてうの數十七ま
多いしと人みかえそう

三な滅罪の時の起請文只一念南
の来迎有
阿弥陀仏と申せは極楽世界の七宝の甚尊庄也
正定聚に入不退の位に成て二度輪廻のきとへ帰らじと
剃髪せは六親亦乃悪名に陥しても済度
まつるなれは是は何ゆへ可りと申せは他方の取もの也ふく
書きつけても置の立ても不知君識に困りて門人ても
聖光坊　勢観師　禅勝師　善心坊　熊谷入道に
いつもあなをさなき人とさるも向后をいはまぬ
頼くちかひて海と記ありし

善心坊
　　　　源空

梵字ありき

承和五年建

妙法尼

よゝさる事のみいやましにしげ〳〵なれば、のりにそむいて、こと人の占とひ梓ひかせなとすれば、尊き石をふみやりて、かしこしともしらてなさまさしういへは、掘り上るに三の梵字ありつと、ことふみはよみもとかれしなと、あらましにかたらひ、法の師の教にまかせて、此石のそひらのかたに地藏尊の像をきらせ、三そとせのむかし、この舍（みあらか）にはをさめ奉るとなん。やつがれ、さくりもとむれば梵形、ことふみも淳古にして、いまし世の人とらの、をよふへうことやはある。「承和五年七月二十日右爲妙法尼（マヽ）ゝゝゝゝ」といふのみそ、さたかに見ゆる。こと文字はえこそ見わくへうもあらね、承和のとしの號は　神日本磐余彥尊　由、五十四代仁明の御代にして、やゝ千とせに近きものから、かゝる石のあるしや、誰ならんと苺の下までもうち偲（しのは）れ、この地藏ほさちを作り奉らずは、承和のむかしもさらに人しらてや過なんと、石佛の後にむかひ手酬して、

亡たまの埋れし名もあらはれぬかゝらさりせはかゝらさらまし。

是をかゝなへておもふに、そのいにしへの事になん、太宰帥從三位高成章の女にして、具戒精進世にならひなき法華經の行者にて、八十一にして身をふるまて、すてに六萬部をそすんしける妙法尼といふ人のありたりしか、その德をしたひて、こゝかしこに墓し碑を建て祭るにや。又その人すきやうしありきて、こゝに身まかれるにや。さりけれと成章の女のこ

し月を精しからねば、さたかにそれともいひさためかたし。尙後に見ん人、これにかうかへをそへたうはりて、またからんことをほりし侍るものか。」

圓仁手蹟か

此梵形ふみてのすさみは、圓仁大德のみてならんといふ人のあれと、慈覺大師は承和五年に、東大寺の實慧上人の從弟にて惠雲といふ法師とともにもろこしに渡りて、おなし十四年に十とせを歷て皈朝ありしと聞へつれは、いかゝあらんかし。」

文化六年己巳春。

夜叉か袋

野舍箇爺はそのいにしへ、蝦夷か湊といひてゐみしらかすめり。淳代の大領沙尼具那なとにやつかへつらんかし。むかしはこゝの川門(かはこ)もいとひろかりけん、今は古河の名のみさゝやかに流たり。取手酬(とりむけ)なといふあたり、鄕(さと)のしりにも曆應のころほひなる碑多し。中嶋といふに屋形あり、晝寐といふに屋方あり、いつらも羽立(はたち)といふ名あり。此ひるねはもと比留奈爲にして、比留は良(よし)といひ、奈爲は澤ちふ蝦夷辭也。うへも蝦夷の在し世そしられたる。中嶼(しま)といふに辨財天女のほくらあり。田頭(たつら)に、一向堂といふが古河のべ近くあり、此佛刹を大川の浦にうつして大福寺といふ。その一向堂のふる跡にも庵ありて、尙一向堂といへり。

諏訪神社

此馬手に內外の神垣あり、弓手に寄木を觀音薩陲と祭りて堂あり。そか中に諏訪の社あり、もともかんさねにして健南方富命を齋ひまつる。かみわさは七月二十七日也。二十六日の忌夜(いみや)よりして、木に作りて二ッの鎌を家每に掛そなへて奉れば、むれまうつる人とら、みな木

木鎌祭

鎌祭といふ。こは須和の御射山(みさやま)祭をやうつしけん、みさやまの祭りとて、科野の國の穗屋野のほとりにてある也。「信濃なる穗屋のめぐりの一群(ひとむら)にしはし里あり秋のみさやま。芒を刈り葺て獵館(かりや)をそ作(た)つめる、此日に鎌鵤、あるは鎌隼鷹ともいひて逸物の出る也、これなん洲輪の贄鷹といへり。「雲の上にかまはや鷹の飛と見て林の鳥や草に入るらん。須々岐刈り菅のゆゑをもて、しなのゝくにうとおしなへて栖羽の御神をいたゝきまつり、みさやまの日は蒸飯に芒の折筋(をりはし)をして奉り、尾花を刈て神にさゝけまつる。さりけるよしをもて、しか、この野叉符(やしやふくろ)なる諏方の神籬に鎌なん挂るにこそ、尾花刈り葺くいはれもうつすならめ。此みやところに、むかし苗槻とてとしふる齋槻(いつき)のありしか、枯たるもの語りのありき。

　八束穗のなひく田つらの苗槻もかるやとかまのかゝるみやしろ。

かくなんなかめて奉る。

芭蕉の句碑

「月以都古」といふふみを見れは、八龍湖のひんかしに在る一向堂に、芭蕉の翁桃青もゝとせのあとをとふらひ、壟をついてその石の面には、「月いつこ鐘はしつめる海の底」とい

ふ句をきためめり。それの詞、「羽の八龍湖の東濱、一向堂のほとりなる水底に、寶鐘のうつもれあなる事むかしより人の言傳侍るに、はせを翁の一百年の遠忌に、越前かねか崎にての一句を鑄りて、晝寐の里の三子、彼境内に碑をいとなみ建る。其眞情を册子のはしめにあらはす。小夜庵　五明。　水底の鐘も鳴れ碑のはつしくれ。」といふ序あり。其二、「海の鐘世にあらはすや翁塚(ひるね)　素大。「槻の木立の庵□ふる霜　埜丁。「裝束の飛たつ馬をのりすえて　五明。」なとそ聞へたる。うへも、湖の底に鐘のしつみありつるよしをもはら傳ふ。

天瀬川の能布巨畠

織田信雄

天瀬川の村なる山岨の能布巨畠といふあり。そのゆゑは、天正のむかしの事にやあらん、信雄卿こゝにさすらへのよしを傳ふ。能布巨は、信雄公ちふことをよこなはりて畑の字と呼にや。この卿は、上總介平信長公の男信忠公の弟にして、北畠の信雄とまをしき。その伊勢の北畠と聞へしは、かしこくも村上天皇第三の皇子具平親王の御末流にして、准后源親房卿の三男權大納言顯能卿の御末にて、曾祖雅家卿伊勢の國司たりしころ南北のさはきありけれとも、ほとなう北朝の御代となりて、顯能卿の男大納言顯泰卿の後小松院につかへまつ

信雄卿舊蹟

御文瓜

木瓜の鐔

血の藥

り、本領安堵せられき。かくて六代の後中納言具教、その子新意に國讓られてけるか、織田家とのあらそひありて、終に信雄の卿をもて北畠の家を繼せられて、天正十四年丙戌の十一月廿一日といふに、內の大臣に昇られけり。此信雄卿に、國移しかふへしの仰をいなみまをされてけるをねたしとやおほしけん、下野の國那須の郡へさすらへ給ひて、そこにて入道して常眞と名を呼ひてけり。それより、はた伊勢の國へうつされ給ふ。亦出羽の國へ左遷さも聞へたり。此事なん、藩鑑譜なとにねもころにかい聞へたりき。眞坂へさすらへ給ふさいふ人あり。眞坂はもと坂の名にして、其邊りを流るゝ水を天瀨川といふ。人栖家して二村となれりしかと、むかしは一村にこそあらめ。さりけれは、眞坂にさすらへといふもうべ也。この眞阪の村の土毛とて瓜あまた作れり。この瓜生の中になへて御文瓜（ごもんくわ）といふあり、この瓜の切口の織田家の表（しるし）に似たり。さりければ、そのころ信雄の君の御紋なりと人これを尊みて、御紋瓜ともはら言ひしか、しか瓜の名となりて、今はところ〳〵に佃れり。宮仕への女に、なにくれの御記念ともたうはりしといふ。おもふに、やはしきとしの事にや、眞坂、天瀨川の田作りの家より、木瓜の鐔なるかねよき横刀をよねに代へし物語のありけり。宮仕なさせし、女の家とちにてもやありつらんかし。あるはいふ、天瀨河の織田德右衛門といふ屋戶に、霜（くろやき）の血の藥をいたす。しか此藥ののりなん、織田家よりもとは出つるよしを


天瀬川の浦にノブコ屋敷といふ

夷舎奴安裝婢



飽田の郡真坂ノ村ノ瓜生ハ山城のこまのわたり、宮玉てなし
美濃ノ真桑、武蔵ノ河越、尾張の青鷺
三河ノ赤瓜なとといひしもしられす
此国にも能代ノ藤六瓜、蘭瓜なとし
名高かりし御紋瓜とて世にもあり
此瓜は鶴の卵のおほきさして掌に蔵む色し
ろくも白かりもまかりて光沢あり内のさね鬱く中子
黄なり切口の織田家ハ御紋に似たりとて
なり名付し道紀世となりてもまかりつつしり
いと物かく不なりぬもさ今は瓜と御文瓜と
名まはあさ文梅瓜銀枕なといふあし
作りもとりもしいさすふ坂の名うへ御紋瓜は
飽田は年かしてうつれしまると露あらさ
真坂まく今御文瓜といふも
能代のうりてあ往人つまり阪瓜や御文瓜や
藤六瓜とまへるもよ瓜とうたへりと
八十ノ翁の風物伝へ・ま知れり



傳ふ。そのさすらへの君に宮仕へしつゐ人の末にや。そのゆかり、あるは、すんさなとの殘りて住つゐその末の孫の家にや、横刀、よき調度なとありしか、いまはまちうごとなりしとか。小池の村をさ齋藤宗信か家にもたる、紺紙に金泥をもて小諧にしるしたる觀世音菩薩經一卷の末に、「文正元年三月日　信時」とある。このひとまきも、むかし德右衞門か家より出たるよしを人もはらいへり。（天註――今いふ京師の大炊殿と聞へしは、內大臣平信雄卿の後にして前田家のゆかりたるよし。近き明和のころ前田家へ金の事まなし來けるに、世の中なりはひよからてなと御書にいひて、奥こうち戲れて、「稻の露田から上らのなり〳〵は雲井にあれや夕立の空。」とありて又のとしの春都へおほん使參りしは、大炊殿のかへさのつとにとのたまひて、「越路には金の澤のありと聞は雁にこそやれ春の章。」といふ短册をたうはりしとなん。旅なる法師もの話りぬ。）

柳の社のふること

それのむかし、浦山の城のあるしの公を三浦兵庫頭盛長とて、平盛實の末の胤にしておはしたりけるか、秋田城介實季の君と戰ひ、うち死せり。盛長の孀なにの方、姙める身をもて、小池といふ處の別業にからうじてのかれかくろひ、子うめるに至りてあつかひなやみぬるを、里の女とも集りてたすけまゐらすれば、あなうれし、われこゝに身まからば靈神となりて、女たらん身のかきりを守り、產るに安からしめんと、消へはつる息の下にのたまひて、いはかくれ給ふを、あはれの世のありさまかなと、人々かしこの土を掘りなきがらをかくし、

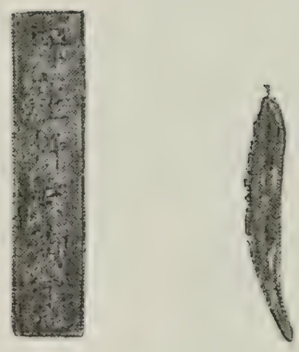
佐竹義路公建立

柳葉の守札

壟して柳を栽て、御前の塚しるしと人ことにたとひ、近き世となりては塚もあばれ柳もとしへ朽ぬれば、こと木の柳を植て御前柳としかいへり。國の守のそのふを出て枝葉四方になり榮ふそのひんかしの館のうし、義路と聞へ給ふのおほん孀(め)のいのり給ふに、平かに生れさせ給ふ。かくて、かんみやしろやあるとたつねさせ給ふに、みやしろを作ればたゝやけにやけて、いまは、さらにみやしろもさふらはぬよしのゆゑをまをせは、義路のうし、われ神にいのりていさみやしろを作りてんとて、明和三とせの秋の末きよらかに作り神門をたてて、二石の稼穡(よね)、とよみきの料(しろ)によせ給ふとなん。年毎の九月朔の日の神事(かんわざ)ぞせりけること、今に懈らず。そのころ滋野井前大納言公麗卿のおほん手して、御前柳大明神の額なん、こかね色の文字して揭りぬ。小池の村保(むらおさ)齋藤甚兵衞盛敦か砌のそのなれは、あさゆさ御社をきよめ幣とり仕へまつる。柳の葉の守札は、この塚の柳葉を採りて護りと負る女は、鵜の羽軒に葺くよりもいとやすく産(うめ)らん。近きころは三越路、陸奥かけてこの社にいのる人あり。遠きさかひの人は、出羽の國秋田の女なりとて柳の社にいのり奉れば、必、子うめるにいとやすけく生れなん。その子の末葉、子子孫孫(うみのこのやそつきや)八十聯綿(そつつき)まていや榮へなん事、柳の宮のみしめ縄うけひきなひく、神垣のいはれを聞つたへて、こゝにかいつくるものか。」

文化六年己巳の秋九月の朔。

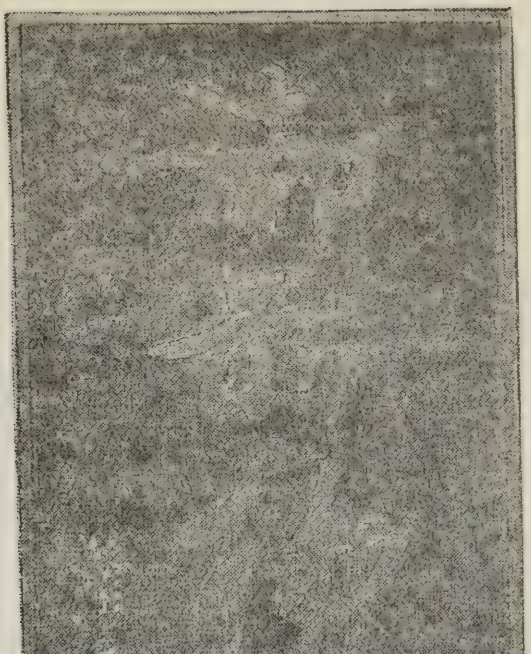
夷舍奴安裝婢



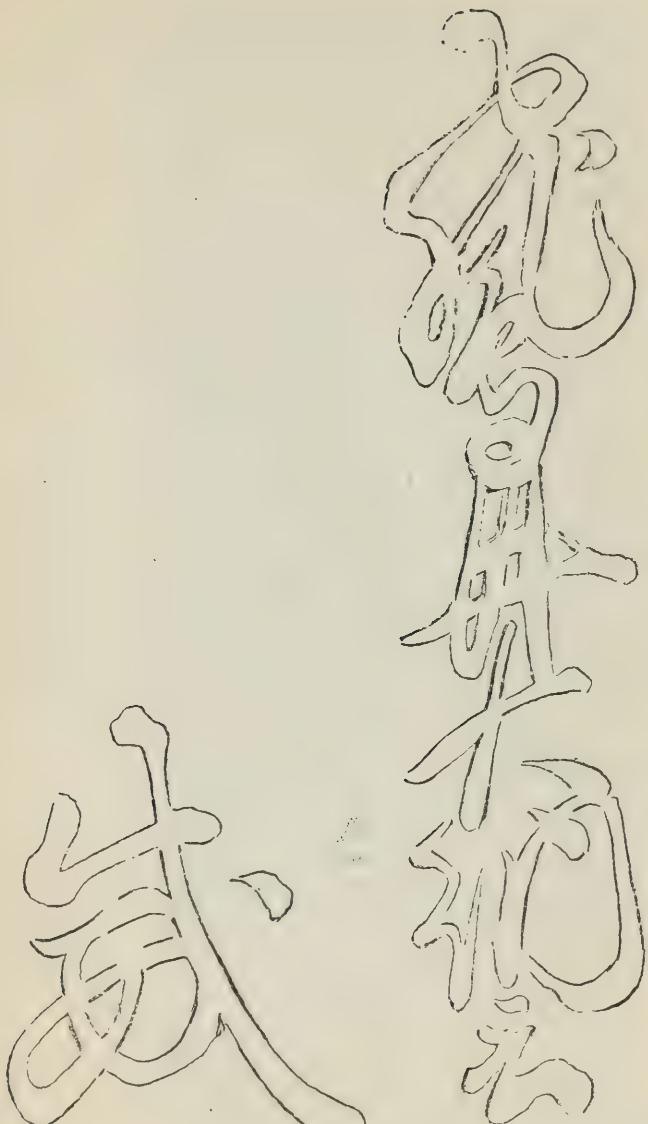




柳社神前額縮臨書

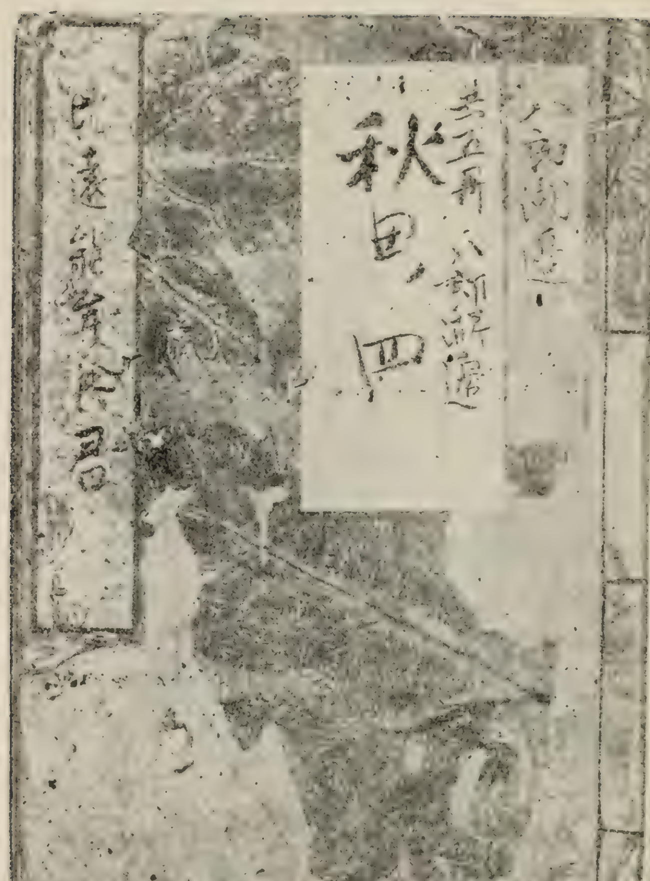






眞翰中ノ大字摹書之

比遠能牟良君



氷魚能牟良藝美

文化七とせといふとしの睦月のはしつかた、飽田なる夜知那迦といふ村より筆たてそめて、冬より春かけて、八龍湖の凍刺てふ氷の上なる網曳を見なんと厚氷をわたり、そのあらましを圖にうつし、沖邊に出て遠く見やり、雪の磯山に山市あるを見渡し、この形の遠画をつたなきふみでのまに〳〵しるし、はた、ところ〳〵の青なはらにも海市てふくに詞にいひかはれど、みな世にいふ蜃氣たつてふ事にこそあらめ。それさへこの册子のうちにかきのせつ。琴の湖水の氷のあひきをむねとし集たれば　ひをのむら君　と、この日記の名はいふなり。

菅江の眞澄

こゝより揚泓呂地乃汙瀰も、美久良波奈、あるは葦名槌のいはやど、波南の岳、文理夜萬といふあたりにもいと近き、（天註やなろちのうみは八龍湖をいひ、三鞍岬（はな）は淡海の毛なし山のごとく湖邊に在りき。あしなつちの窟を俚人夫殿（をとゝの）いはやといふ。花の岳は今、一日市の寺の山の號とうつせり。森山はことに高けん。）椰治寧柯といふ郷なる佐藤なにかしの屋戸に在りて月たち、武都企とはなりぬ。いにし冬のなからはかりより、いそまりの日を雨なんさらにあらて、雪のみいや零りにふりて、軒も埋れはつる、やかのくまなる處に、八船豊受比咩のほくら、さしふる海稲の生るそひらのかたに齋ひまつれるを、ふしをろかみ奉るとて、

　しら雪のしらたま椿八千なかく齡つむへき春は來にけり。

はれたる雪の朝ひらきいとよけく

二日。きのふのごとのさやかにて、遠近の山〳〵ほい霞たるかほ也。

　花ならは方やわくらん四方八方の雪の梢に又たくひなき。

三四五六日は、さらにこそなけん。

七日雜煮餅
萬歳の唄
山鳴らさず
倉開きの祝

七日の粥ちふものもあらで、この日はしめて雜烹とて、根芹、比呂賣、福良紫菜なとつみいれて、餅をそくふめる。夜經より馬場の目のしら山に、七日堂とて夜籠せし人さらいでく。三日の夜の、雄鹿の餢飳の行ひやいかゝありつらん、雪深けれはなと話り、齒の病あるものは、此白山の神に木間掃てふものをさゝやかに作り、芽子の折筯百膳手酬ぬれば、うけひき給ふのおほん誓ひとなん。その夜こゝらの人、夜とともに唄ひすゝしめ奉るとか。

八日。萬歳うたふ鼓うち聞へ、田の神いはふ十萬町のかたゐらに、よねもてはこふに、誰かやともいとなけん。

九日。けふは山鳴らさぬ日とて、雪の山に若木こるてふ人さらになう、斧にみてぐらとりそへて、柚山賤が家に事たつことそありける。

十一日。よねくらひらいて祝ひせり。けふの神酒に醉ひしれて、女とも田唄をうたふを聞ば、「年の始のとし男、掬へたるわか水、白銀の曲桶に、松やゆつり葉かさりつけ、黄金のひさくでむかへた。」又、福の種といふ事をうたふ、「けふの田殖の太郎次郎、なせに鍬をかんづいた、ふくのたねをおろすとて、それて鈕をかんづいた。」このうたけもやゝはつれば、山祇の幣といふものを稾もて作り、それにくさ〳〵の物を附て四手、麻苧をとりかけたるを、處女ら是をとらんとて、深雪ふみしたきあらそひ來けり。（天註――處女等か山神の幣の麻をとりてもとゆひとすれは、髮の長く生ひ頭やみせざ

るてふ。津刈路にて、八目鰻鱺の筋なもて女子の髪な結へば頭痛なく、毛の末長くそだつてふ。科野の國にて女の髪のうれな鎌してかれば、草の如く生ひたつとてしかするためしもありき。）又歌うたふを、

　やますみの神のみぬさをとり〳〵にうたふもこのめ春のたのしさ。

小雪ふりてくれたり。

餅あひの鹽

十二日。けふは餅飯間（もちあひ）の鹽買ふためしとて、五城の目の市にうちむれて行に、雄鹿の嶋邊より、馬も人も八龍湖（かた）の氷渉て來る。

十四日。こゝに齋ひかしこみ奉る内外のみやところに、一夜いもゐして明ぬ。

　ひろ前に雪のしらゆふかけまくもかしこみまつる神のまに〳〵。

十五日慣例

十五日。とにいつれば、この夕くれ近うなりて田殖すとて、雪にいなぐきつかねさし、長竿をおし立て、こもつちをさげて茄子畠、又瓜生をまねび、雪液（なし）の林、桃の園生にいたりて斧うちふり、としぎりのためしをせり。

　いつこにかをのやふれなん雪ふかみなるかならすもゝとつ枝はなし。

更にふけて、とし祝ひに出にし人も皈れは大臼、小臼、磨臼を伏せて、鍬把れは稻に地虫てふものゝ通し、麻苧うめは、麻生（いさはた）に蔓草（からまり）のかゝらぬことやはある。すびつ（天註——爐なおしなべてすびとちふことにいひなし、灰なあくちふことゝいふは、みちのおくの辭もしかり。すひと、すひつちふ名のもとふりしか。）の灰ならせは鴨の苗代におりくなとのものいみして、馬の餅とてひとりに十二を、家の奴僕（わかぎ）の數ごとにあたへ、新穗積（にほつむ）とてみな人寐（い）ねつめば、と

し男火を埋みてふしぬ。

鳥追の歌

十六日。とは、いまたくらきに童男の聲して、「朝鳥ほい／＼、夕とりほい／＼、長者殿の園地さ、鳥が一羽おりた、どうこの鳥だ、鎌倉の鳥だ、頭きつてしほつけて、鹽俵にふちこんで、佐渡か嶋さへぼつてやれ／＼。」一とせ、山本の郡能代のみなとに近き大裡田のあたりにて聞しは、「あさ鳥ほい／＼、よん鳥ほい／＼、長者殿の園内には、鳥もないちやおさる、能代のおかんこは、鳥ぼつてたもれ、何鳥ぼつてすゞみやか、すゝみ、あら駒に鞍おいて、じやほれ／＼、稲こく鳥は、かしらきつてしほ漬て、しよだらへぶちこんで、佐渡か嶋さへほいあげれ／＼、ことしの世中よいよなか、升はおいて箕て斗る／＼。」とか。（天註―鳥追の辭五十年の昔まで、のしじょのおかん子かうたひしかと、近き世となりては能代のおかん子と人のうたふ。われ童の時はのしじょうたひたり、野牛といふ村のむかしありしにやと、年いやたかき翁の語りぬ。）

白粥の祝ひ

やはら追はてて、いなかすの粥にかゆだてゝふ事とて、ひわらび、ぜむまい、羊乳根なとのあはせしてぞ、家毎にくふめる。この郷のあたりにては稲算は、さつきとなりてさびらきの日に、はつ苗殖る早乙女に小豆の飯炊ぎてたうびさせて、採りたる苗を、そのいなくきしてゆはふ。餝松、とし繩も、その日にたきてあたらせなとして、けふはたゞ雪のしら粥して、粥の汁ちふものゝくさ／＼の中に、搗豆といふものを入たり。かくて、みとしの神にそなふ。こや「祝詞」のなかにいふ、「甕の腹滿雙て汁にも頴にも」と唱ふは此事しならねと、辭のみの似たるをもて、奥津御

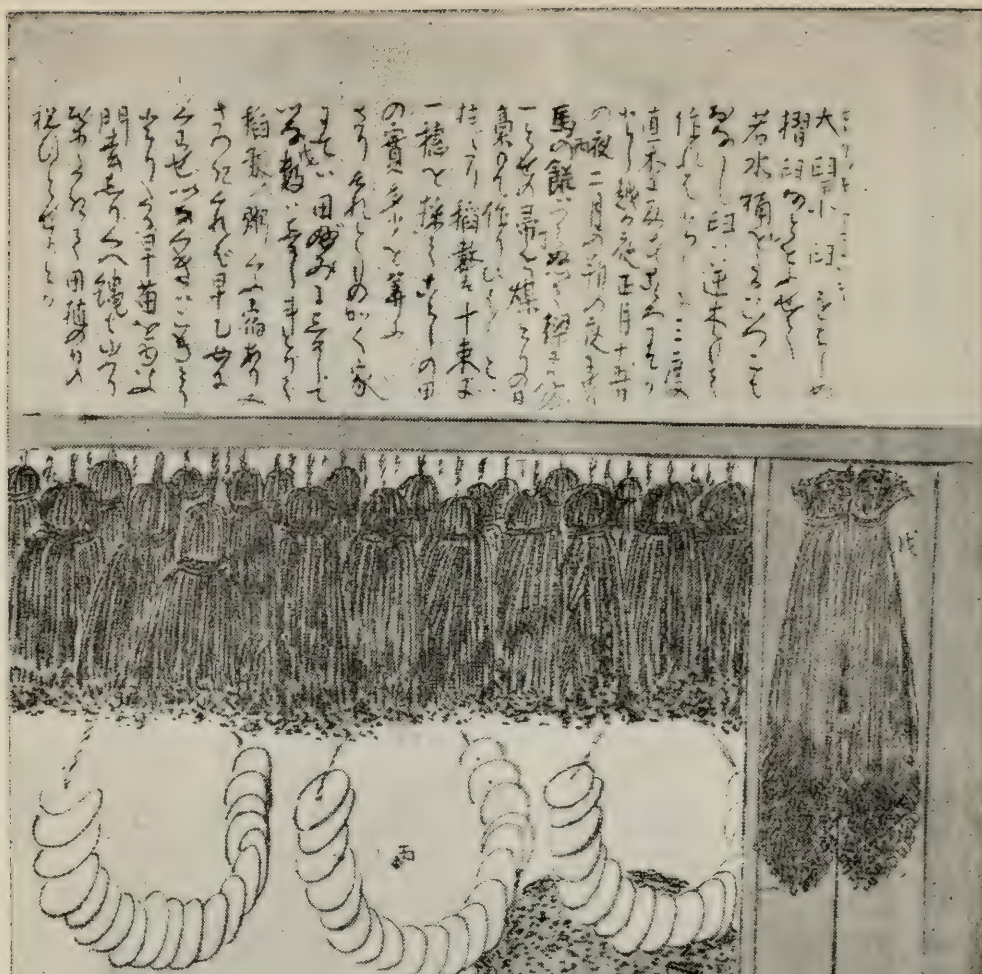
比遠能牟良君




古今和歌集
物名
二條后春宮のみやすん所と申しける時めどにけづり花させりけるをよませ給ひける
文屋やすひで
花の木にあらざらめども
さきにけりふりにしこのみ
なる時もがな
削花









年の神に奉るもよしありげ也。やはら米の粉木、あるは柳なとして、菊のこさき花を削りなして柳の大枝のうれことにさして、鴨居、うつばりなとにおしたてり。これなん、妻戸のけづり花にこそあらめ。科野の國東間の郡にて頭痛花とて壁に掛け、陸奥の磐井の郡なとにて見しは、軒近う金賛木の枝につけて木の小弓をひきまかなひ、麻を弓の本弭に附てたてり。花きよらに工なるは、此齶田路にこそあらめ。きのふ見たりし、幸の神の祝ひ棒とてもてわたりしは、久保田に見しにひとしう、逆制にかいなし作りぬるふりすら、形も、蝦夷の木幣てふものにこそならす。

二十二日。いまた鴉のねぐらはなれざるころ、ありとある松かさり、しりくへ縄、うりふ、いなだも、なごりなう雪かいあばきはてて明ぬ。

一とせ八龍湖の凍の下の網曳見てむと、久保田より新關の浦をはしめ、大久保の浦の沖遠う雪ふみ分て、はる〳〵と行てその漁を見き。はた、こたひ睦月十八日今戸の浦より入て、例よりもふかくふりにふりて、いつこや田づら、いつこや湖水の氷の上とも、いさ白雪をふみしたき、こゝらの人の行しりについていたる。ところ〳〵に雪かいわけて、氷破れ水見ゆる

處あり、網引しつる跡とか。天王の浦より三百町もやあらむ、今戸浦までひき連る通路のあり。これなん去年の寒となるの日を待て、五城の目の月に六たひの市にたつに、馬人のふみならしたるすぢなり。みすゝかる科野の、諏訪の湖なる氷の上の通路はものかは、さはかり大なる水海の氷の上を、重き荷を負せてひきつれ、あるは、うちのりて渉るためしやはある。さをとゝしの冬、市もどりの馬炭俵つけてひとり行をくれ、雪吹にたちかくまれていつこともしらすゆくへをまよひ、すへなう此湖の洋(おき)に泊してんとおもふをりしも、亦ひとりもふみまよひ來つるが、聲をしるべに喚かはしてみな寒さにたへず、命しなばしなんとて、荷おほひの薦ひきやり、わらにほくす火を吹かけ俵の炭にうつし、炭俵三四おこり火としてあたり、こゝちおぼへ、眠のきざしぬれば夜は明たり。あつ氷のひとさかあまりなゝきやきもや、なかくほみぬれど水のつゆもり出ることもなう、命いきていにきと人のかたる。

氷漁の要領

六人して、手力とて柯いとなかやかなる鉏をもて氷をうち穿、大穴を掘り小穴をもいくはくとなう掘て、浮を竿の末に付て通し、それを小鍵といふものしてひき上ては、又棹につけて通し通し引揚もて行て、會窽(あはせちな)といふに兩綱(もろつな)曳出ては外に引ぬ。

獲物の品々

漁の魚は眞鯽(あかふな)、白鮒(かものこ)あり、赤鮒は秋のもみち鮒、鴨の子は鯽の品劣れり。眞鴨鮒といふあり、赤鯽につげり。鯔(なよし)あり、此浦人は名吉(みやうきつ)とのみいへり。鷹の羽てふ王餘魚いと多し。地加てふさものあり、王加差(はかさぎ)者とはこと

狐楯見ゆ

他處に見し蜃氣樓

なれりか、淡海の小鮎のことくさはなり。さし網あり、又延繩のありて、王餘魚釣る桁繩といふ、此漁りの業にたくみなる事、見もおとろきぬ。これを見つゝ居れば、いくばくならん人の行や、ひし〳〵とならびたち、今戸の浦回より森山の麓のあたりに中り花の岳、今いふ鷹岡山も過て三鞍岬のあたりまでうち續たり。網子とも、狐楯あり、あれ見よやといふ。とはかりありてみなかいけちて、こゝにいふ鹵盛とて、田の面の雪の中に雪舟して土あくたなとを引連ねたるが、人のなみたち、あまた引つとは見へたり。こは山市、海市とやいふらんものか。かくてあびきをこゝに見、かしこに見つつ行ほどに、又きつね館あり。こたひは龍のわたかまり、あるは牛馬の臥るがごと、男女の立る、館舎のかたちもさゝやかに見へて、やはらみな山松となれり。これなん松前の白神が岬の化岩、はた津輕の海の權現崎といふを、松前の鳥福山のあたりに見しはあやしう、風によて、かくは山の姿も磯のかたちも化れりとなん。南倍の牛瀧の浦より磯山越して、脇の澤の浦に出る笹長峯、猿飛とやらんいふ處に近きとおぼしくて、松前の奥なる大嶋のすかたをさゝやかに見る〳〵休らへば、大なる篙なとを海中に居へたるがごとし。山賤のありていふ、山背の風たちなん、海のあれ近からんとおもふをりしも、しかありつと話りしなとに類ものか。けふも南めける風の吹をさまりて、花催のやうなる空に似てあたゝけく、近きに雨ならんといふ。日のかたふくまで行めぐり、雄鹿

眞白の山々

の嶋山いと近うまでいたりぬ。このあびきのことなるのみならず、いつこも〳〵たましろなる山を遠う近う見やり、見わたす末のはてしなうおもしろきたにあるを、世にめつらしといふ蜃氣たつちふことすらあらはれて、あな樂しとおもふほとに雷神の遠う聞へて、さと雨のふり來れは人々さはぎたち、いさなひ連て海老澤の村に暮て、八千仲に灯とりて來けり。

湖邊處々

二十三日。またも氷魚のあひきの見まくほりして、大河のうまやとの渡りして一日市につき、夜叉袋、むかしいふ夜砂が谷、蝦夷が湊といひしあたりをはじめ、眞阪の浦やかたも經て御鞍岬のながめことに、脚摩乳の窟山に石のほさちのさむげなるに、糠杜の雪のまたらなるは、やがて梢の花も雪と見なんとて坂越て、天瀬川の浦を經て、鯉河の浦邊よりして奥に行ほどもゝまちばかり、此あたりの深さは三尋に過たりといへば氷もいと厚けにおぼへて、引網のめもはる〳〵と遠う人の見へたるは葦埼、五昧井子なといふあたりならん、そこの凍の上に在て指網すとか。山矢、鹿渡沖べには溫濤の涌出るところとて、薄氷のあやうしと浦屋形の方にむかへば、馬手に鳥海の岳の烟いやふかう雲とひとしう、夜叉袋の浦に武南方富命の神籬のあるは、諏方の湖の邊花岡のほとりより春の宮のあたりを見やるに似て、鳥海の岳は不二の面影ありて、さながら須和の海にことならず。うべもいにしへ、しか洲輪の神をう

鳥海山遠望

つし齋ひまつるにや。漁りは、ここ浦につゆたかふ事のあらねど、水いとふかくして、藻草(もく)てふもの丶なければ、荒手布網に立木(あし)なくてあびきそせりける。魚は名吉のいと多かれど、けふは得もの丶あらざなれば、地嘉てふさものそ多かる。背黒も少しなと此網子ともにいざなはりて、夕附行ころ鯉川の村に出て、ともなふ人の相しりたりける泉郎(あま)の屋戸に泊りぬ。小夜すがら網調(あみさめる)とて、七目の小網をとりをさめ樑、柱に張渡して乾しむ。嬬は、あさ苧の絲をかたまにうみれつ丶話り更ぬ。あるし、明なばとくものしてんとて網たき、纚(くぢり)ちふものにかけてゆひ束ねたり。

二十四日。つとめて宿を出ておなしすちを皈るに、いさなふ人の見ていふ、班毛の狐のひとつ、湖のへたの雪の中をはせりと。これを見る〳〵行は、黒狐の、何ならん雪かいわけてあさる。こはめつらし、松前の嶋にてはまれ〳〵に見る事のありといへど、このあたりにもすめるにか。遠き和銅のむかしに飯形山にあらはれし物語のあり、そのとは聞しらぬと人のいへは、うち聞つ丶、大麥といふ山にもしか黒狐のありと、行つる丶人のいへり。かくて一日市に來つれど、風いやたちて波高く大河の渡ならで、すへなう川碕にか丶り、七倉の麓を經て五十の目にくれて、相しれる番匠の長かもとに一夜明て、

二十五日。ひるつかた雪はれみちもよけなれば出て、日くれ近う谷地仲に皈りき。」

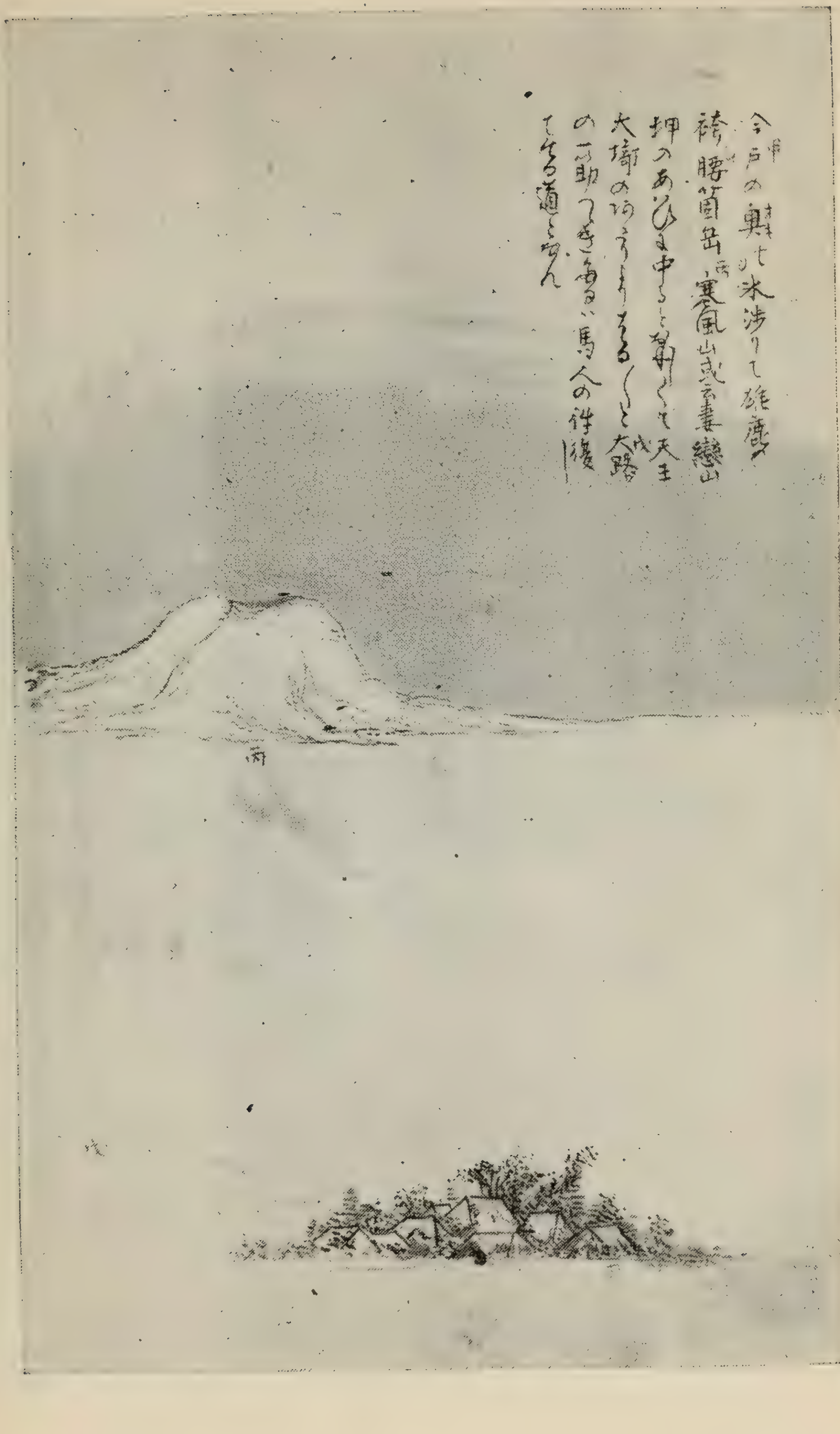
比遠能牟良君



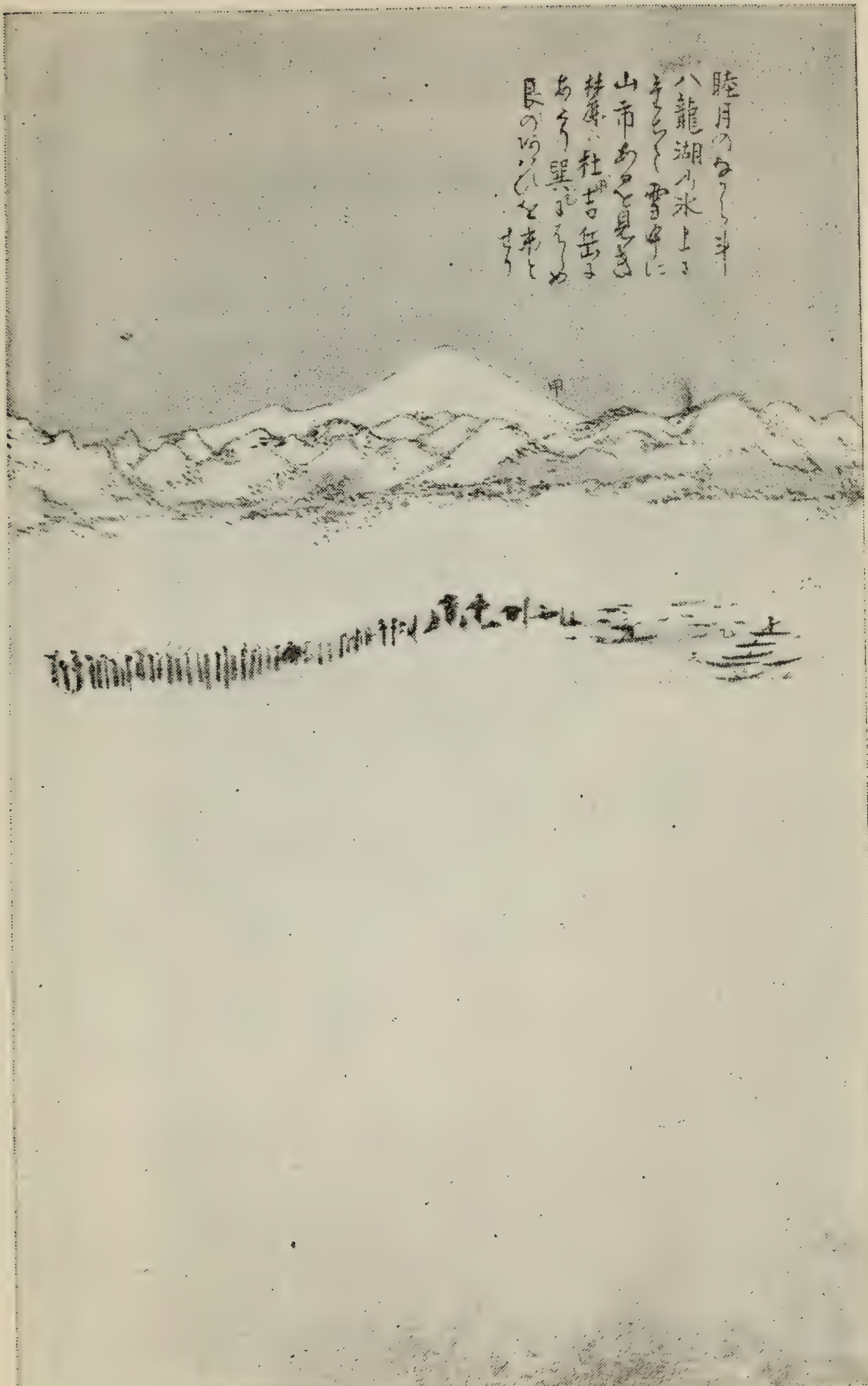


比遠能牟頁君

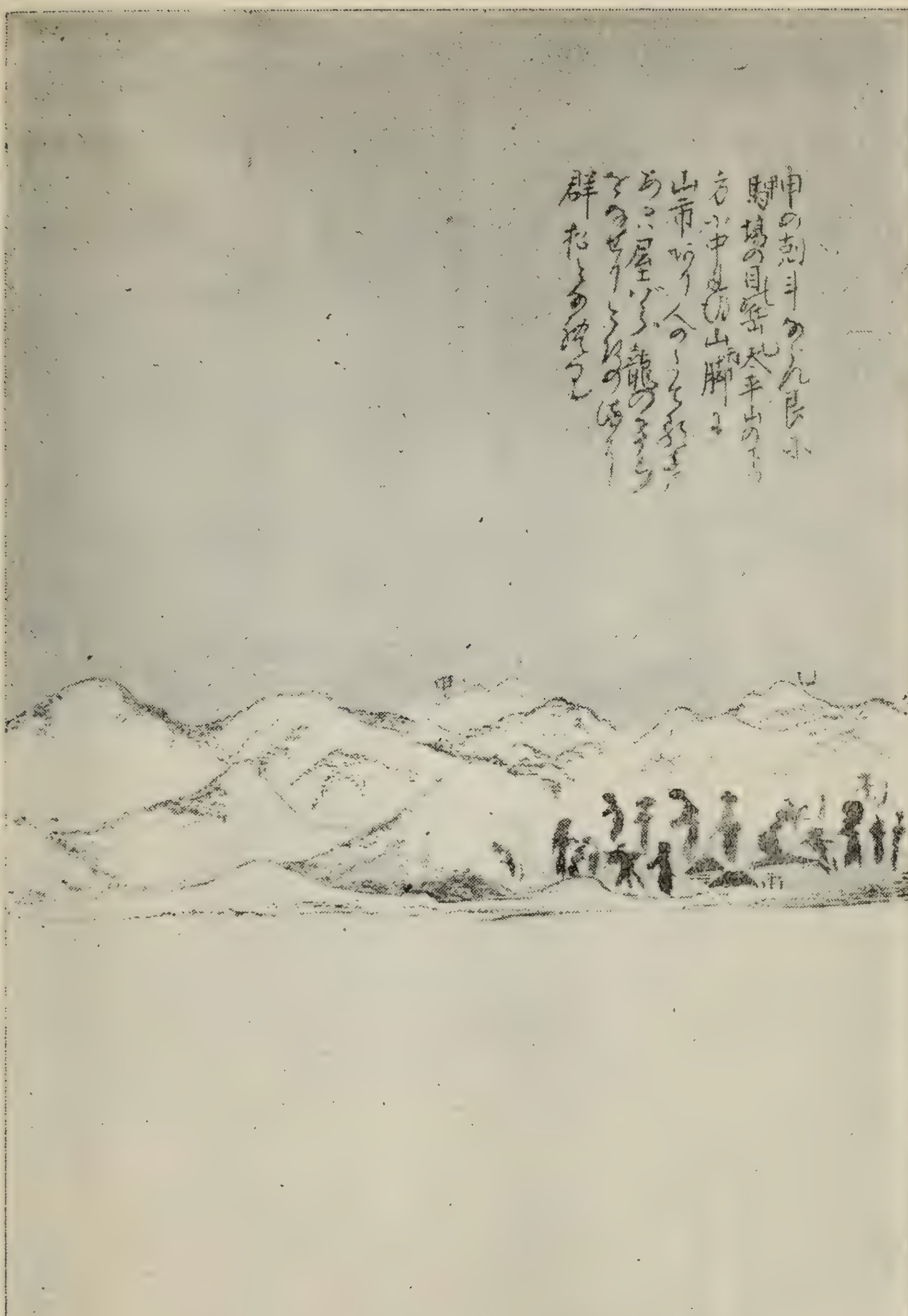




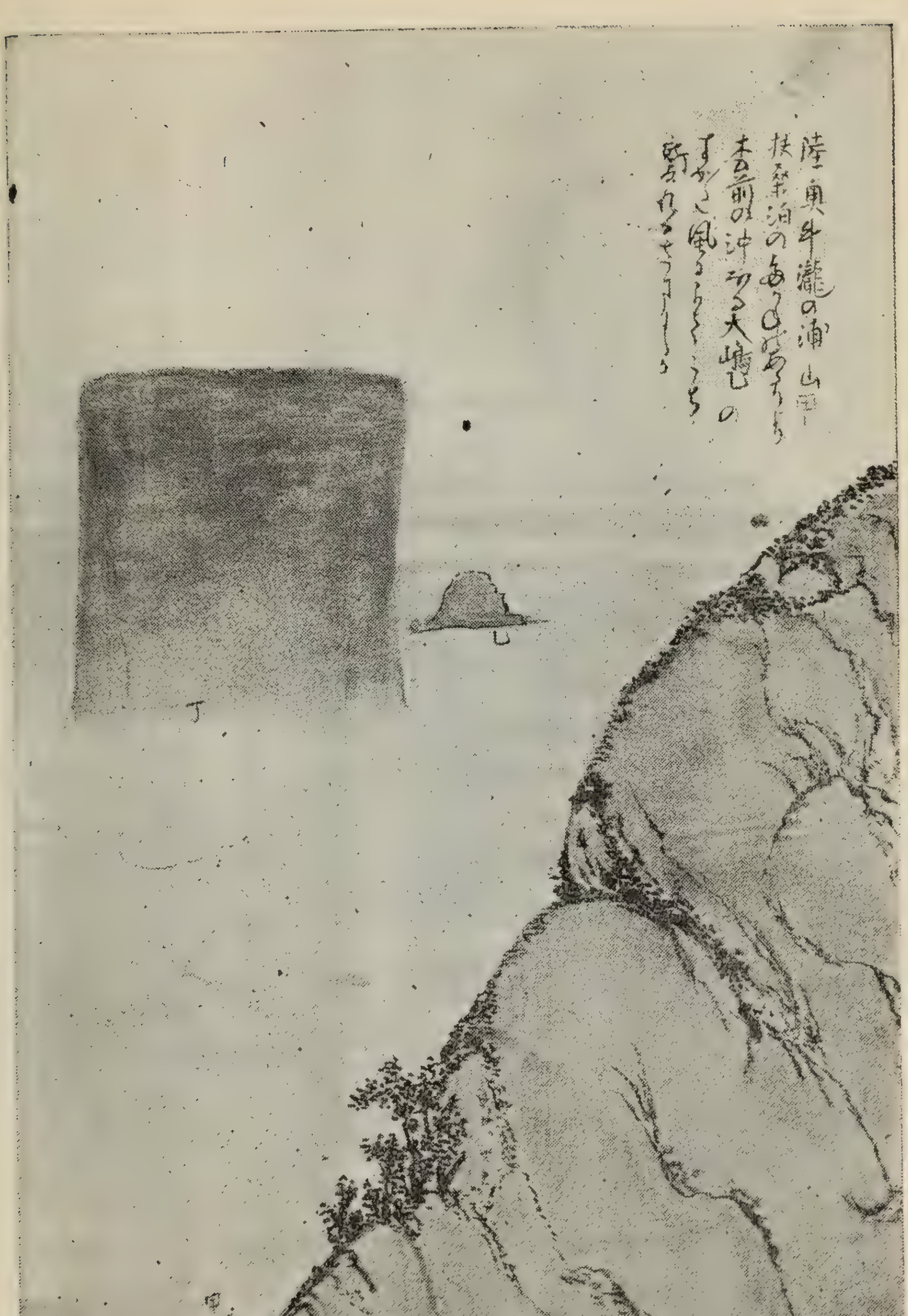




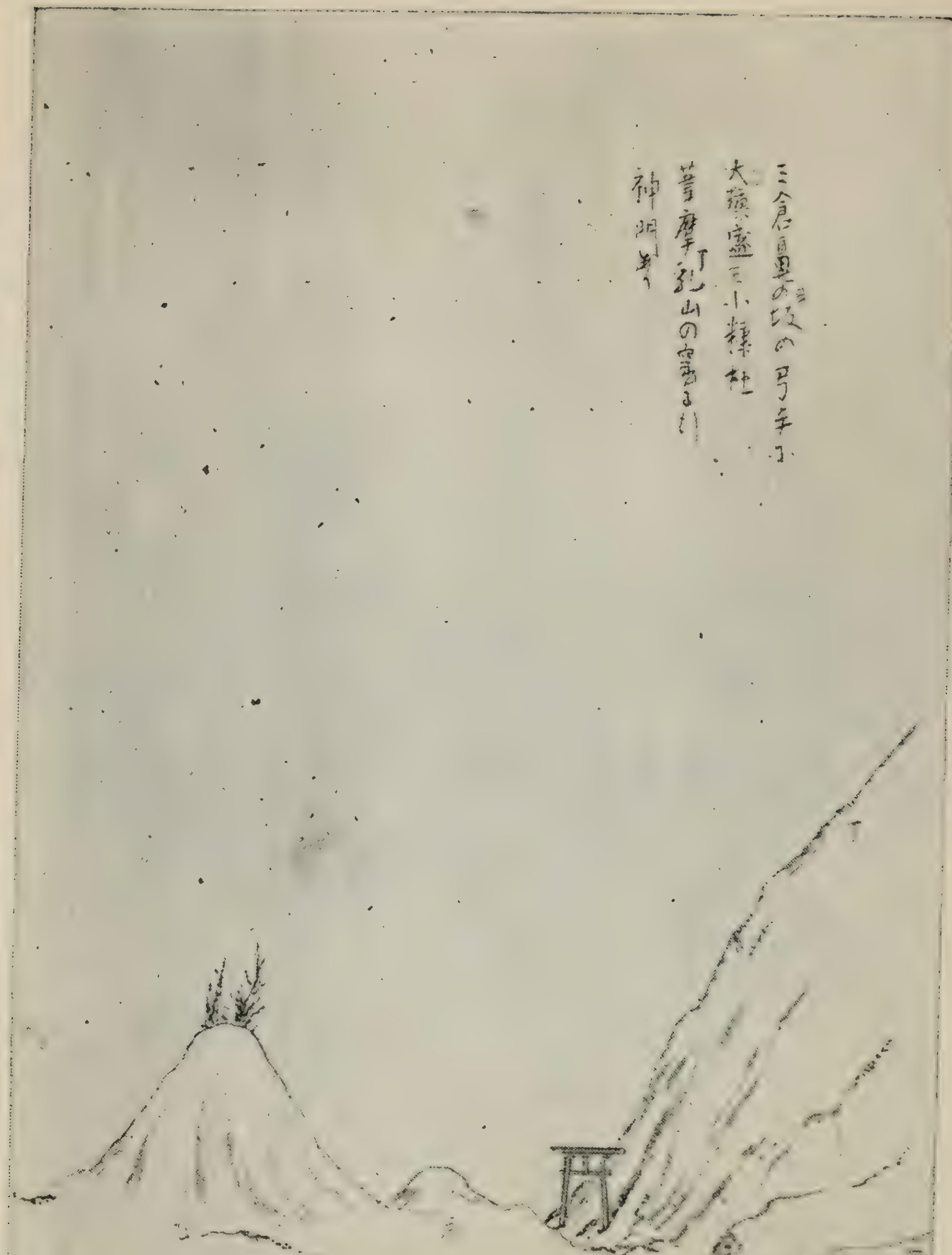

爾雅曰蜃小者珧
是以蜃為蚌屬
一曰狀似螭龍有耳
有角還氣成樓臺
然蜃有二種而海市
蜃樓及許遜所談
慎郊必非珧蛤明矣

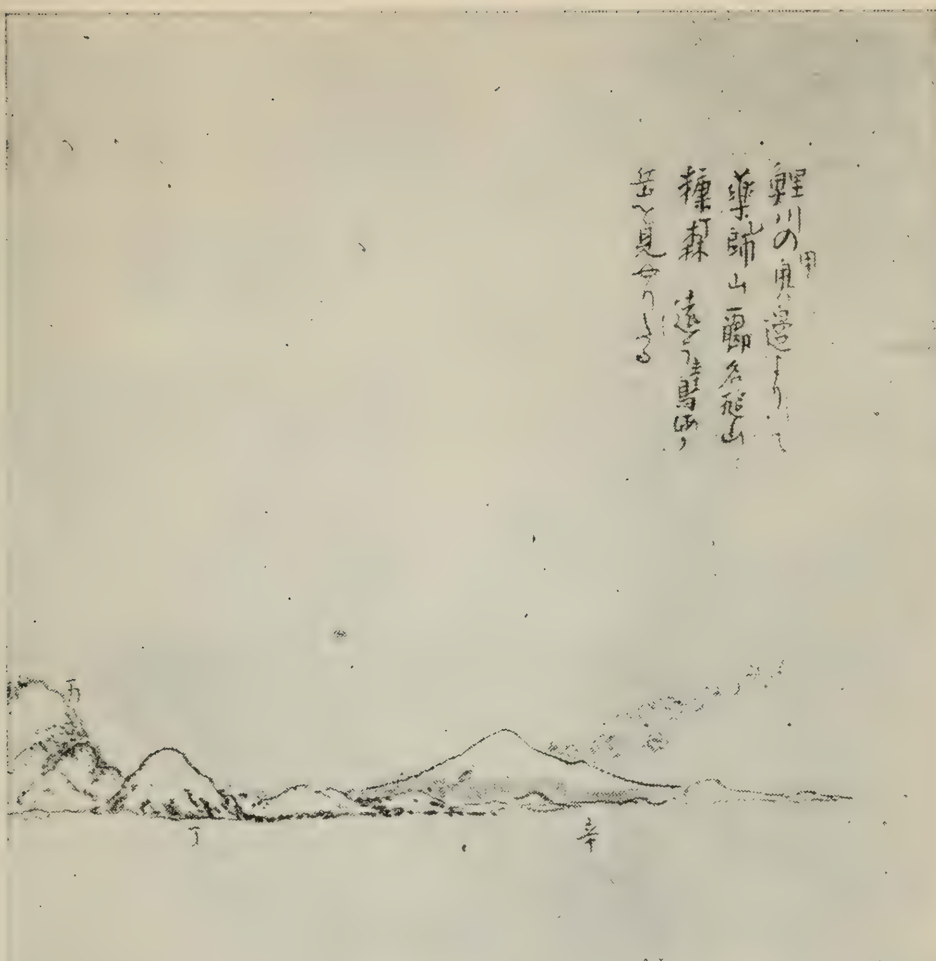




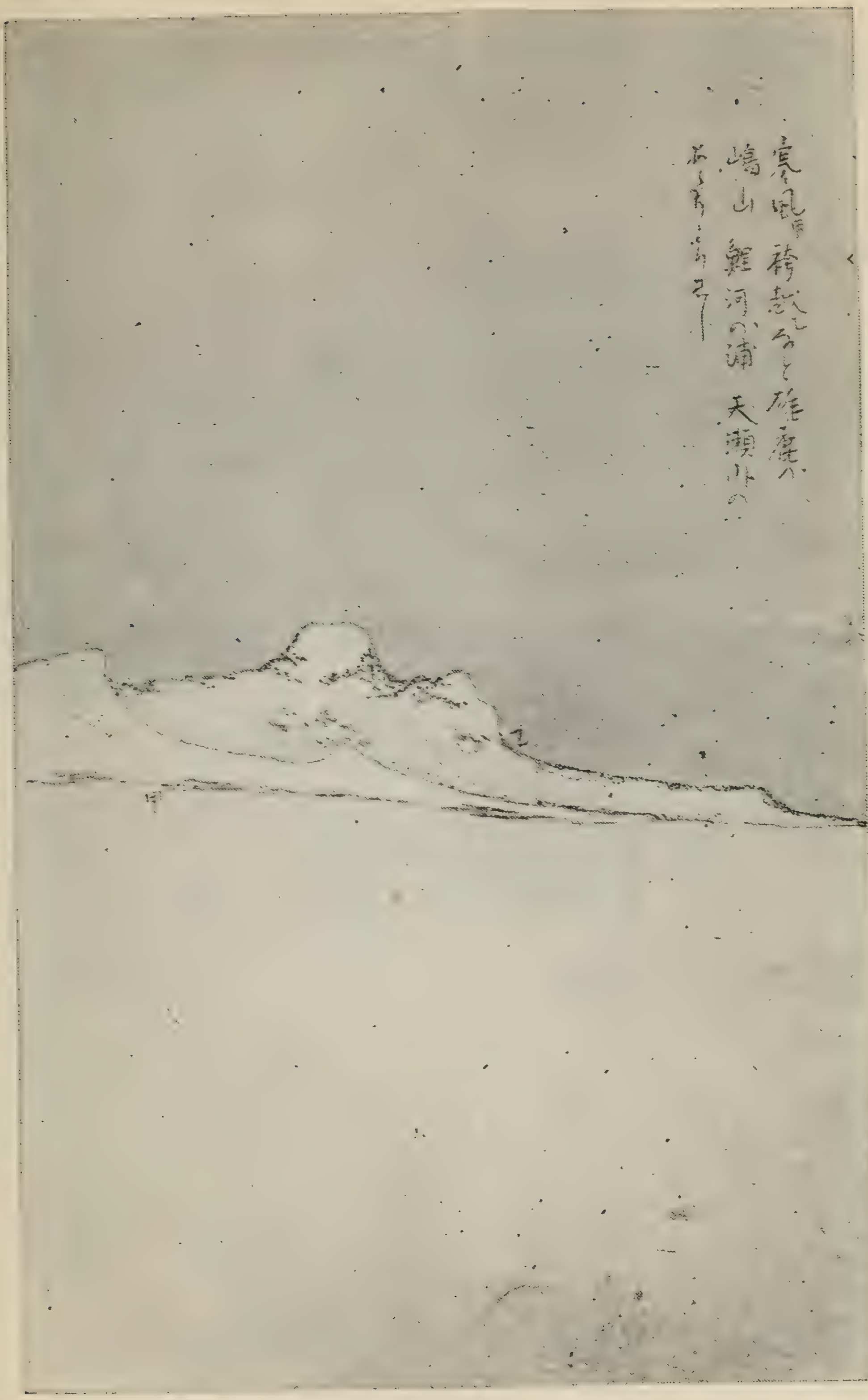

陸奥牛瀧の浦

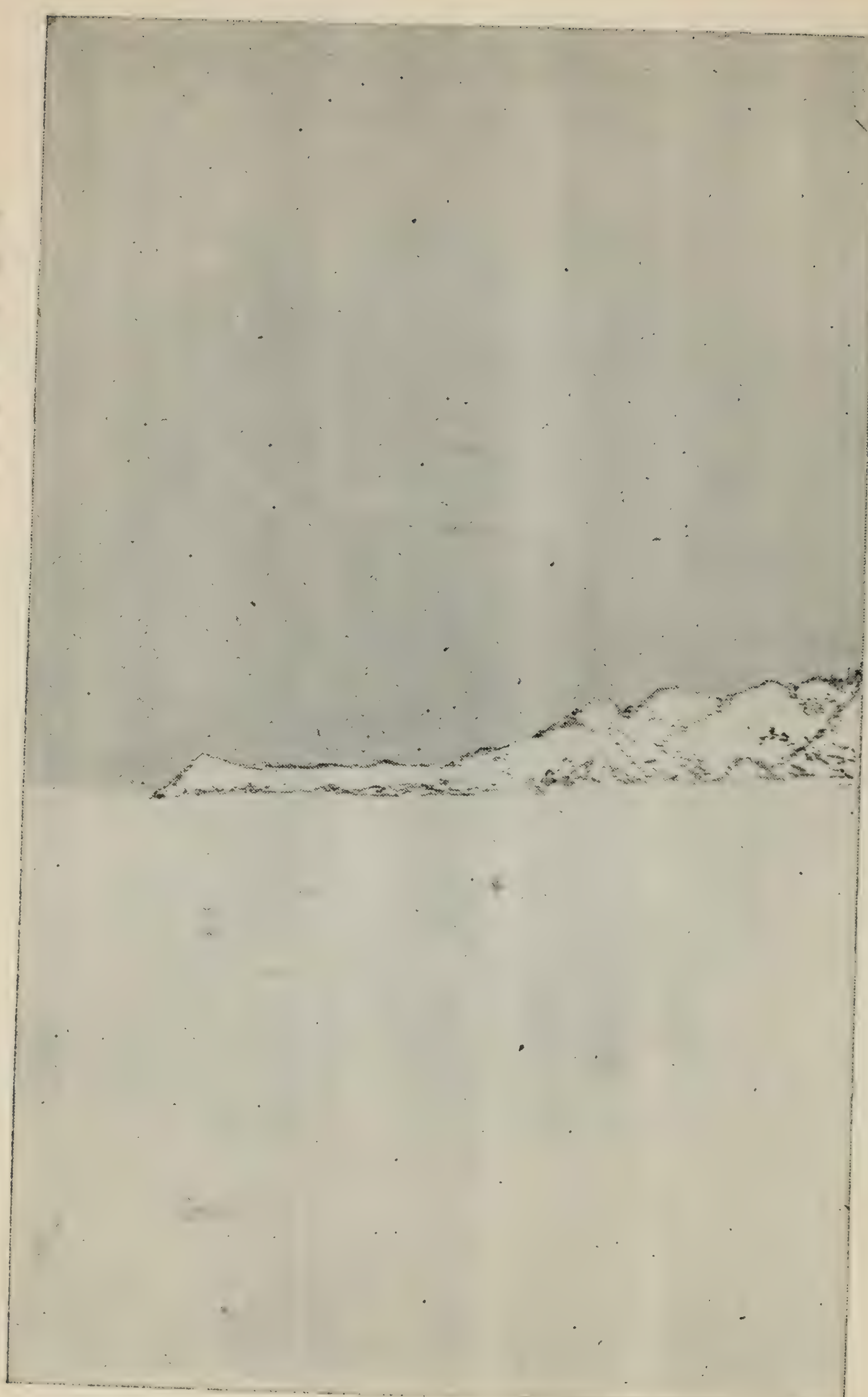
比遠能平夏君




鯉川の奥ハ
薬師山
種森
甲
丙
丁
辛







比達能牟頁君

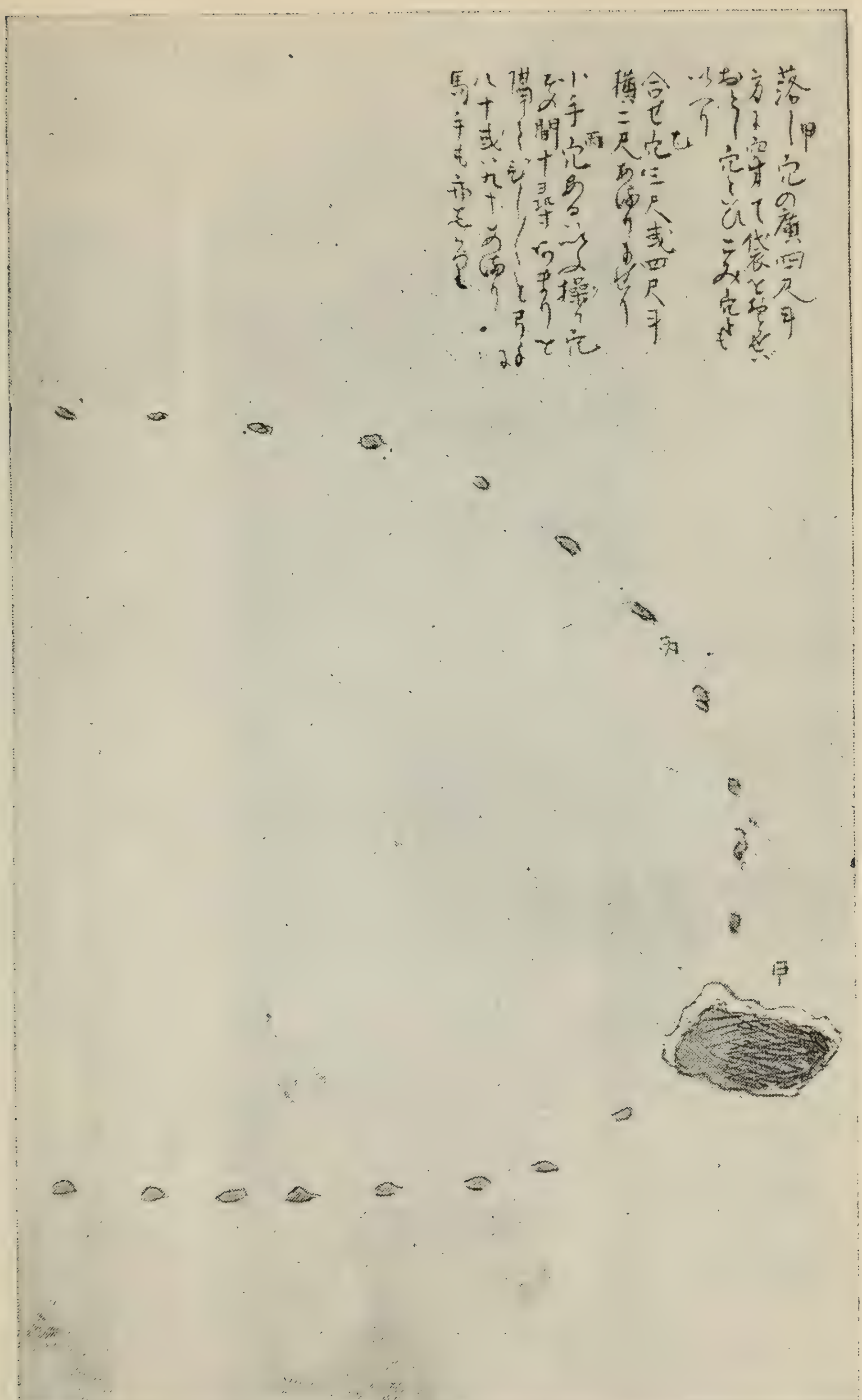

正月二日、湖のあたりは漁の家々より
八郎祭といふ事なして湖の奥に
氷の上に酒を盛しつゝ八龍の神に





比遠能牟艮君




落し甲穴の廣サ四尺斗
乙
合せ穴巾三尺或四尺斗
丙
小手穴あるハ又操穴
八十或ハ九十あまり
丙
甲

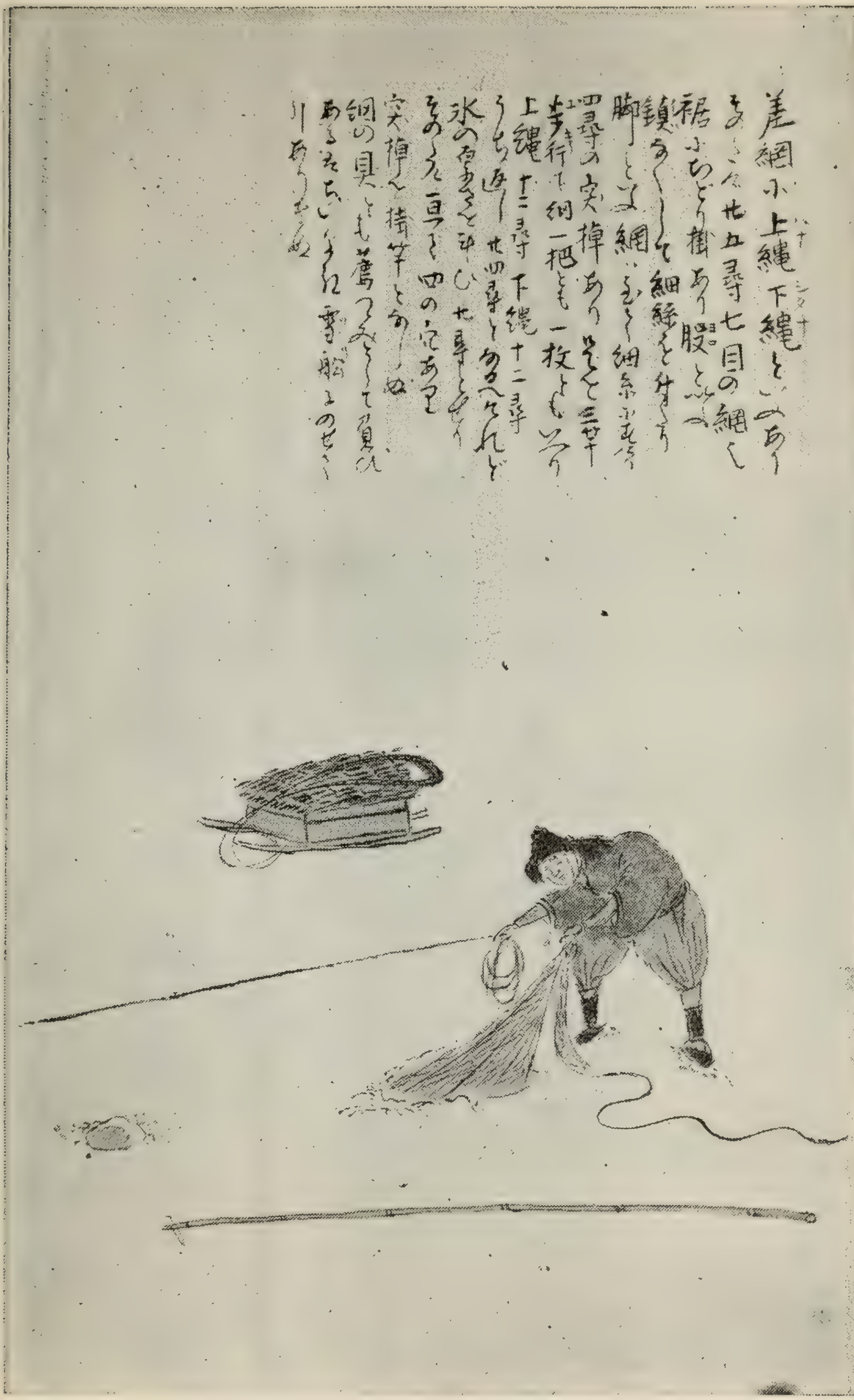


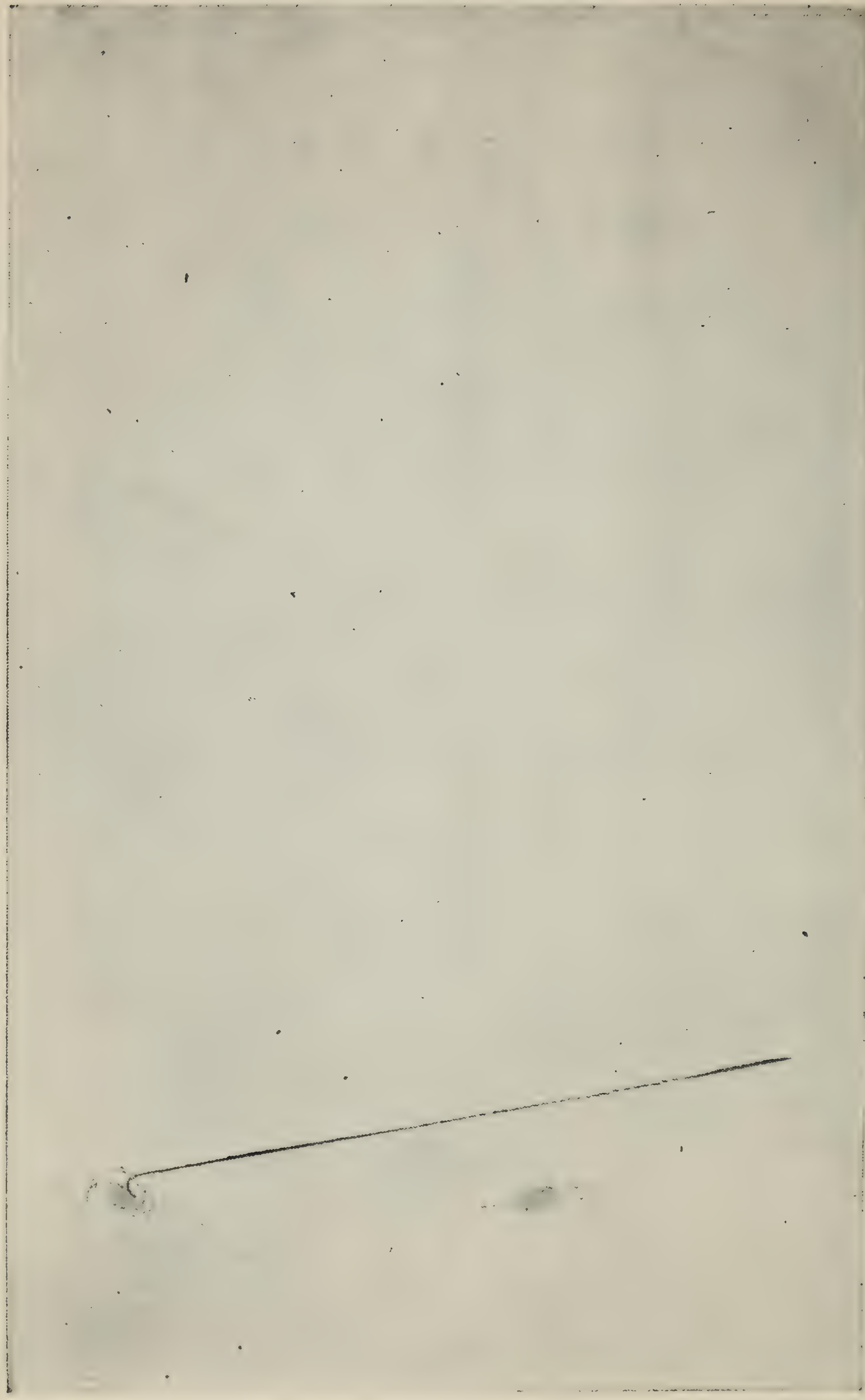

氷魚の網曳は凡七人して
鹿渡の浦 荒屋敷の浦
七人のうち六人を網子と
よひ一人を村君といふ
大口魚 鮭のあひきにて



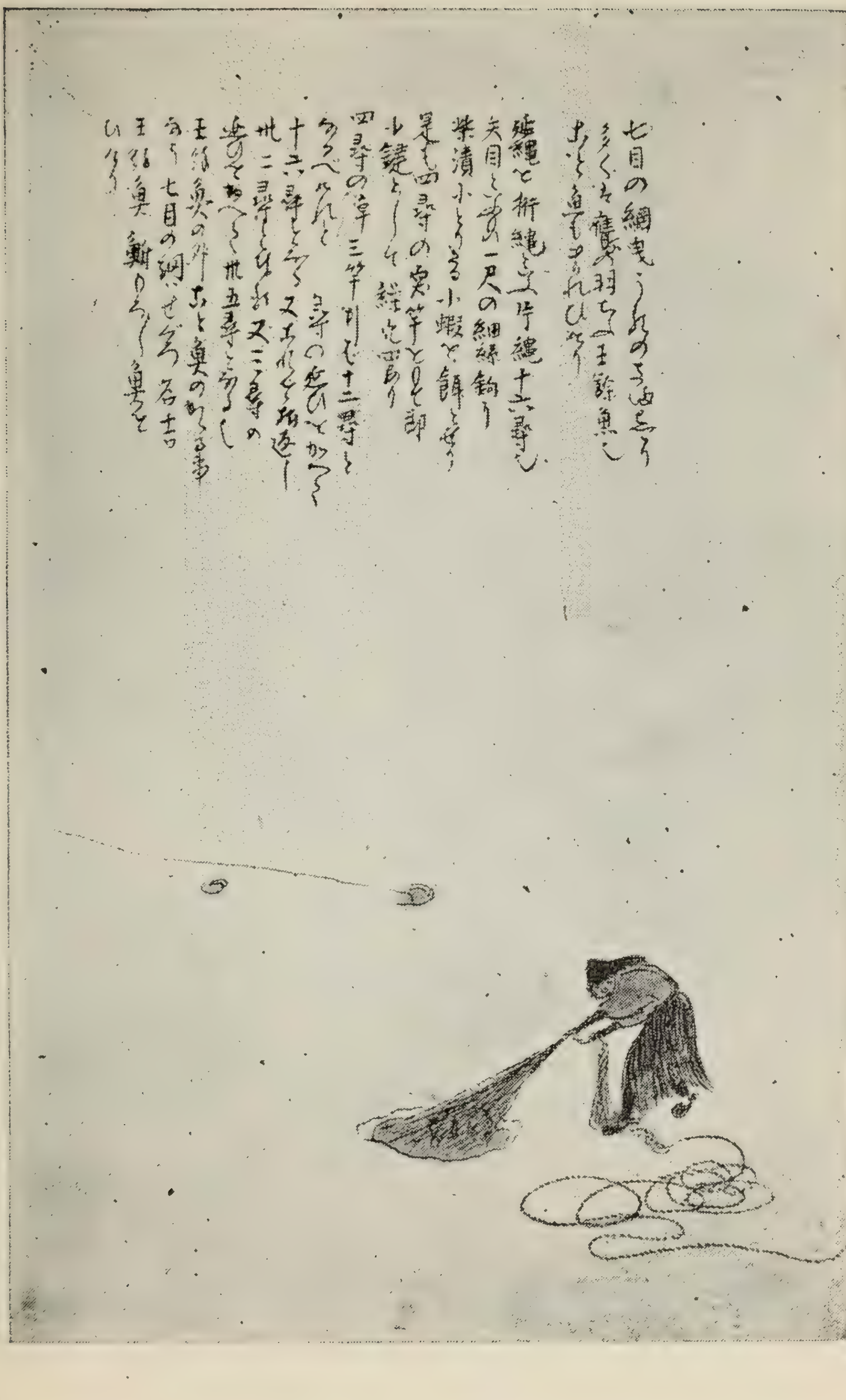



狹提網して魚すくひ





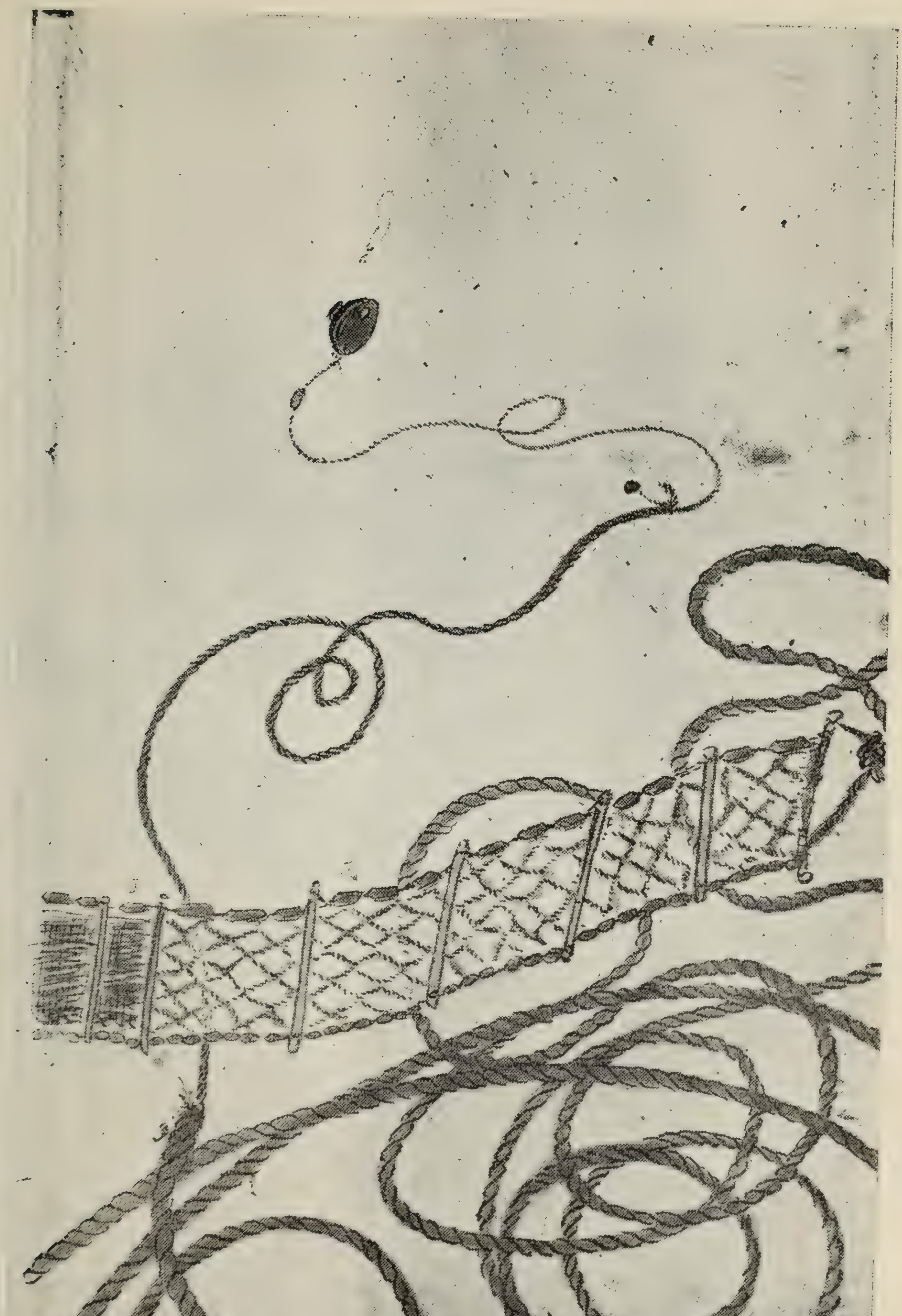
比遠能牟良君



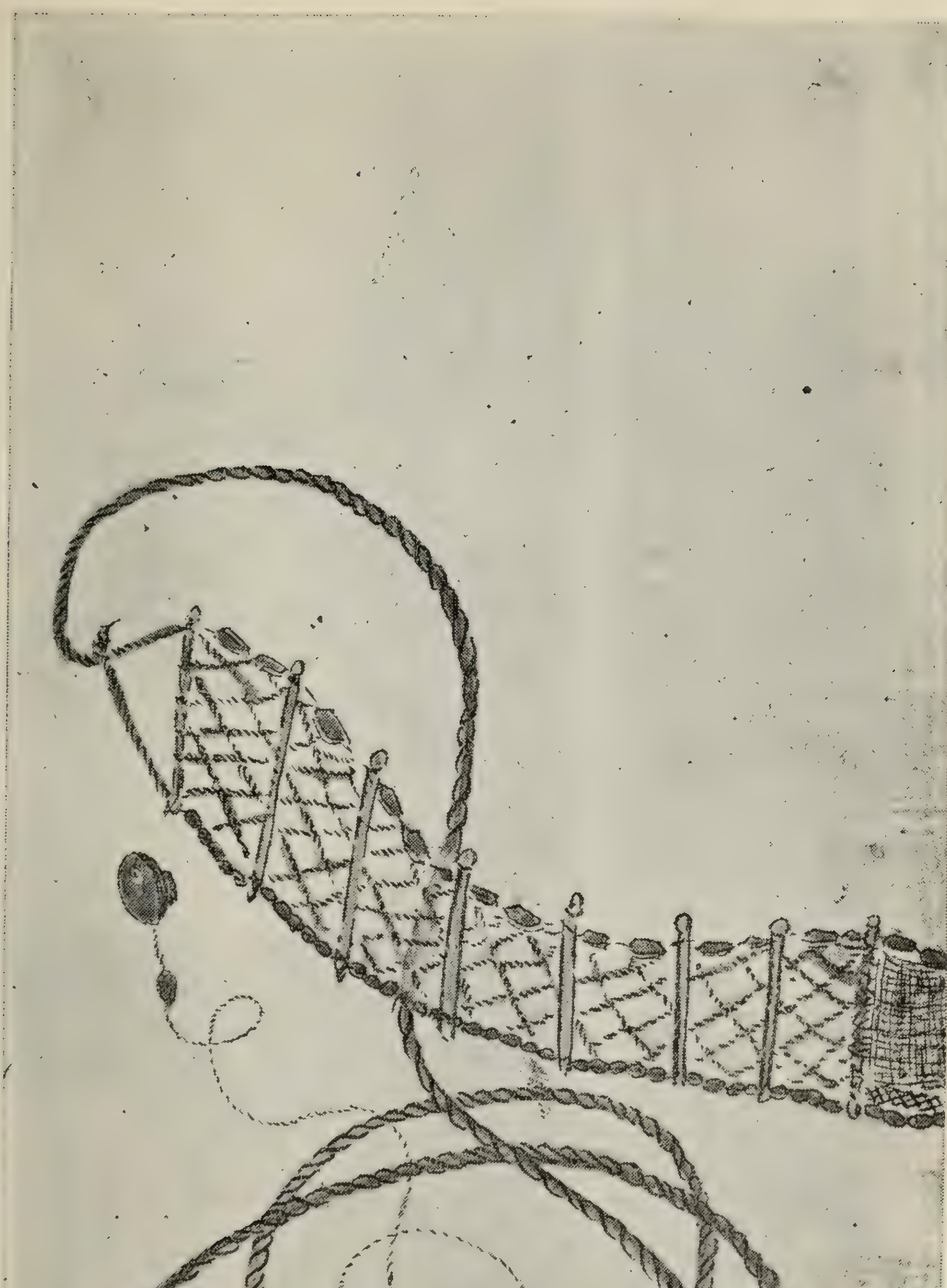




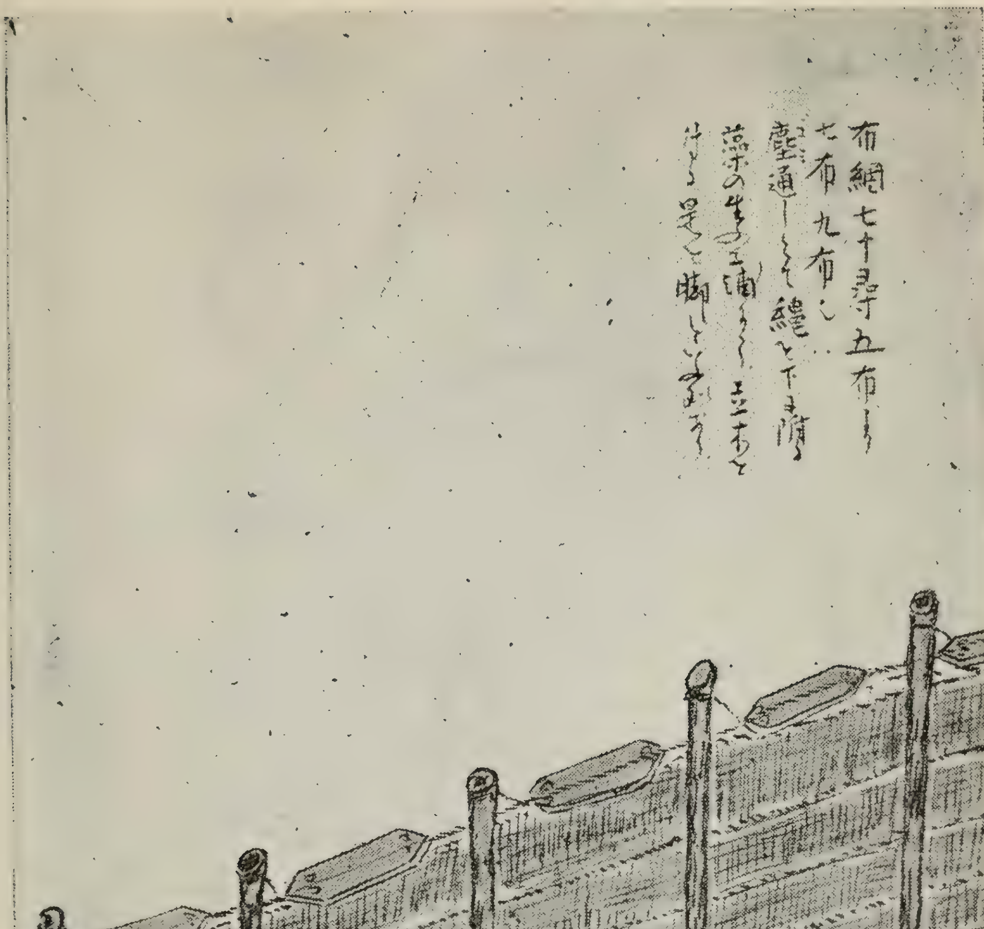




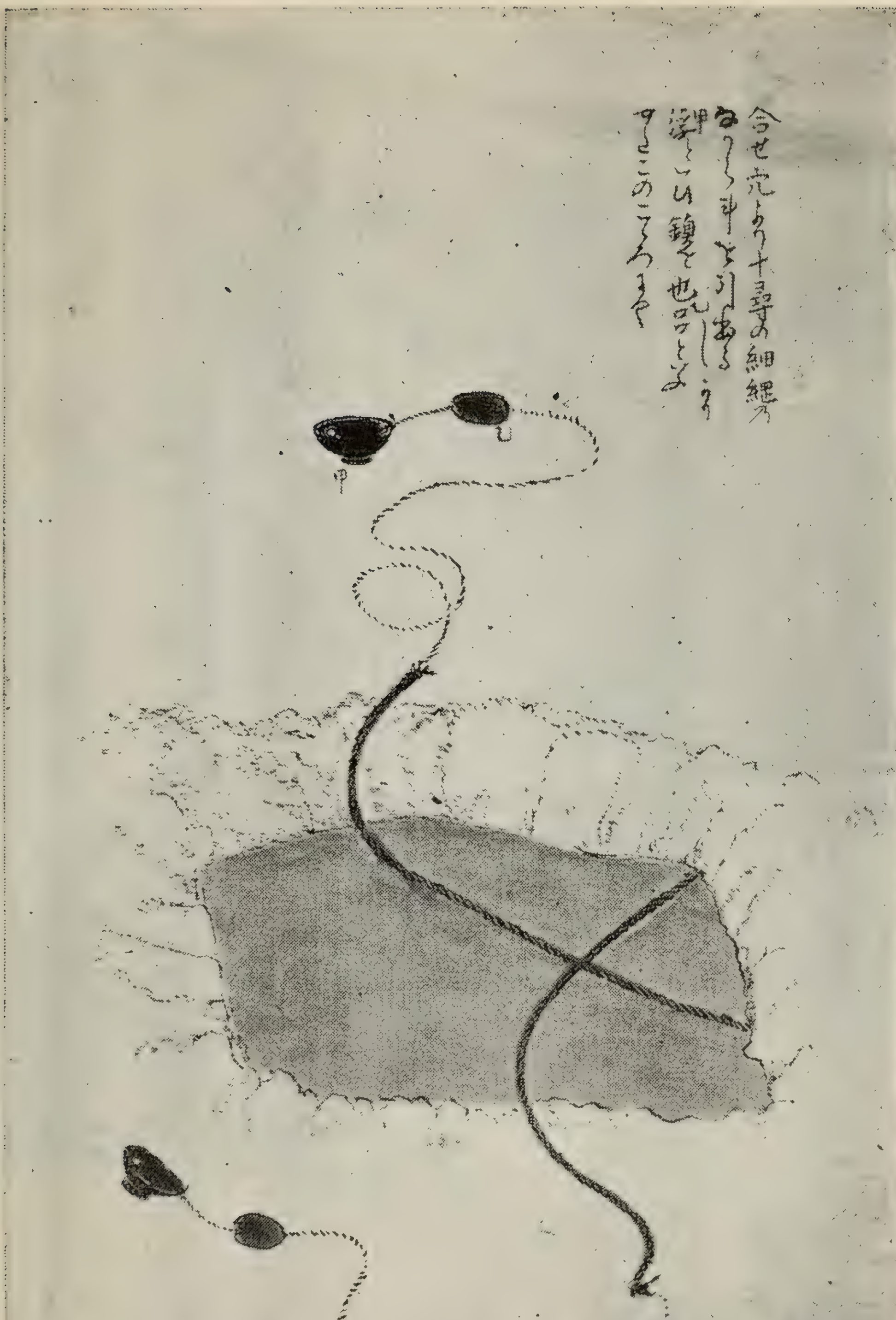

あり一組を百二十尋とせり
十三目
五月
十三目
十三目




荒手 長百二十目
幅六尺の縄網也
新関大久保

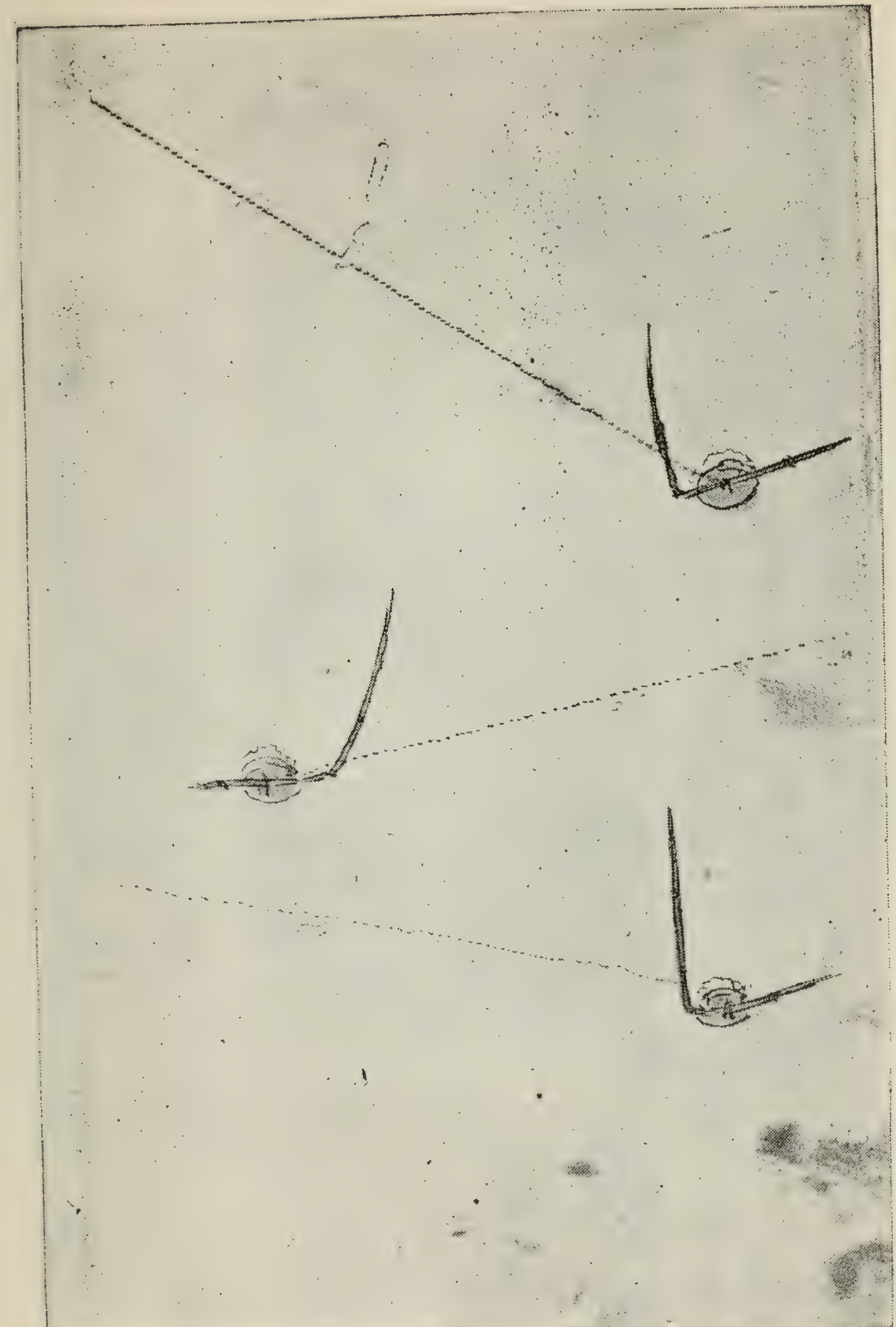

布網七十尋五布より
七布九布に

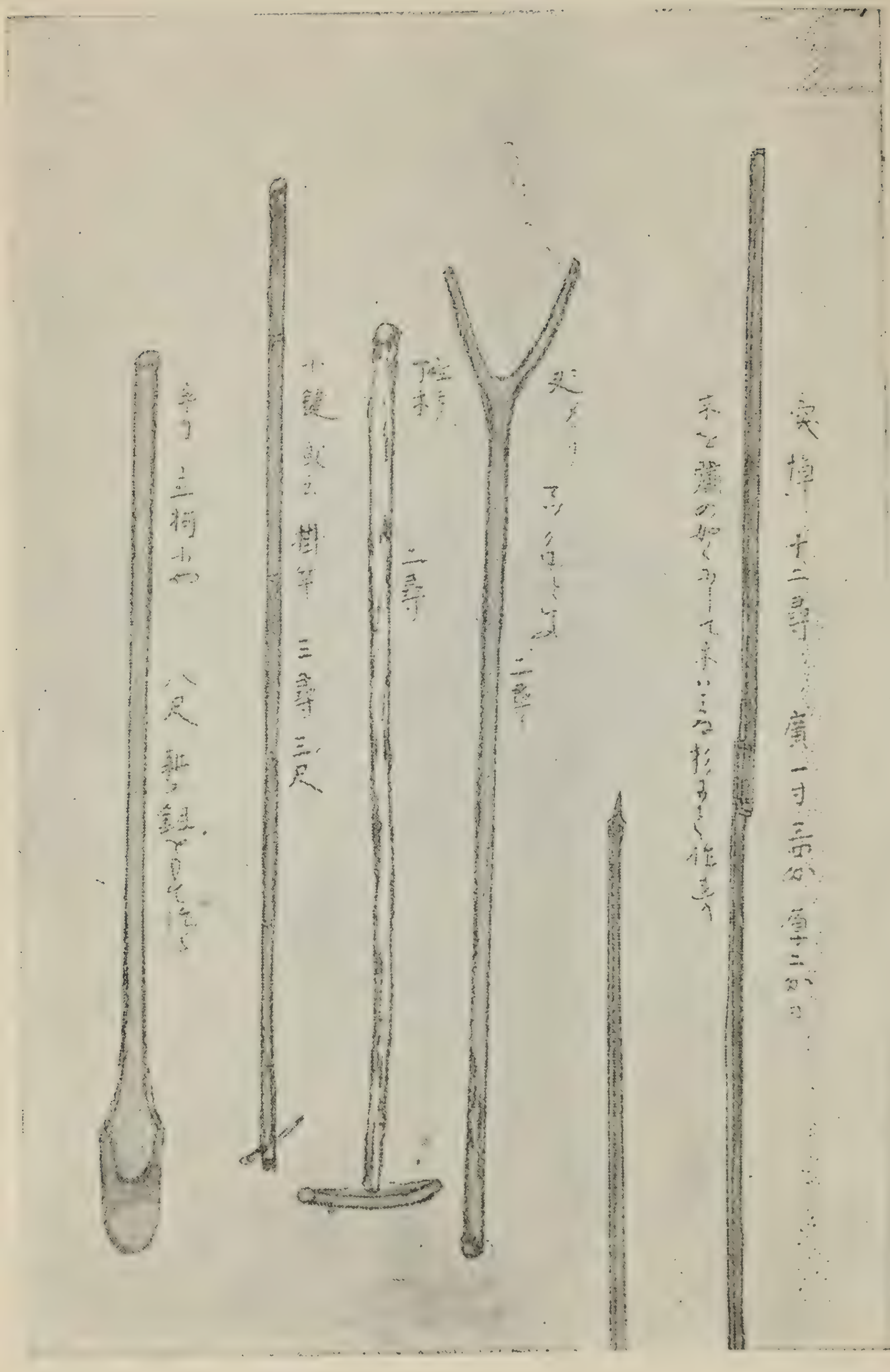



合せ穴より十尋の細縄
甲

比遠能牟良君





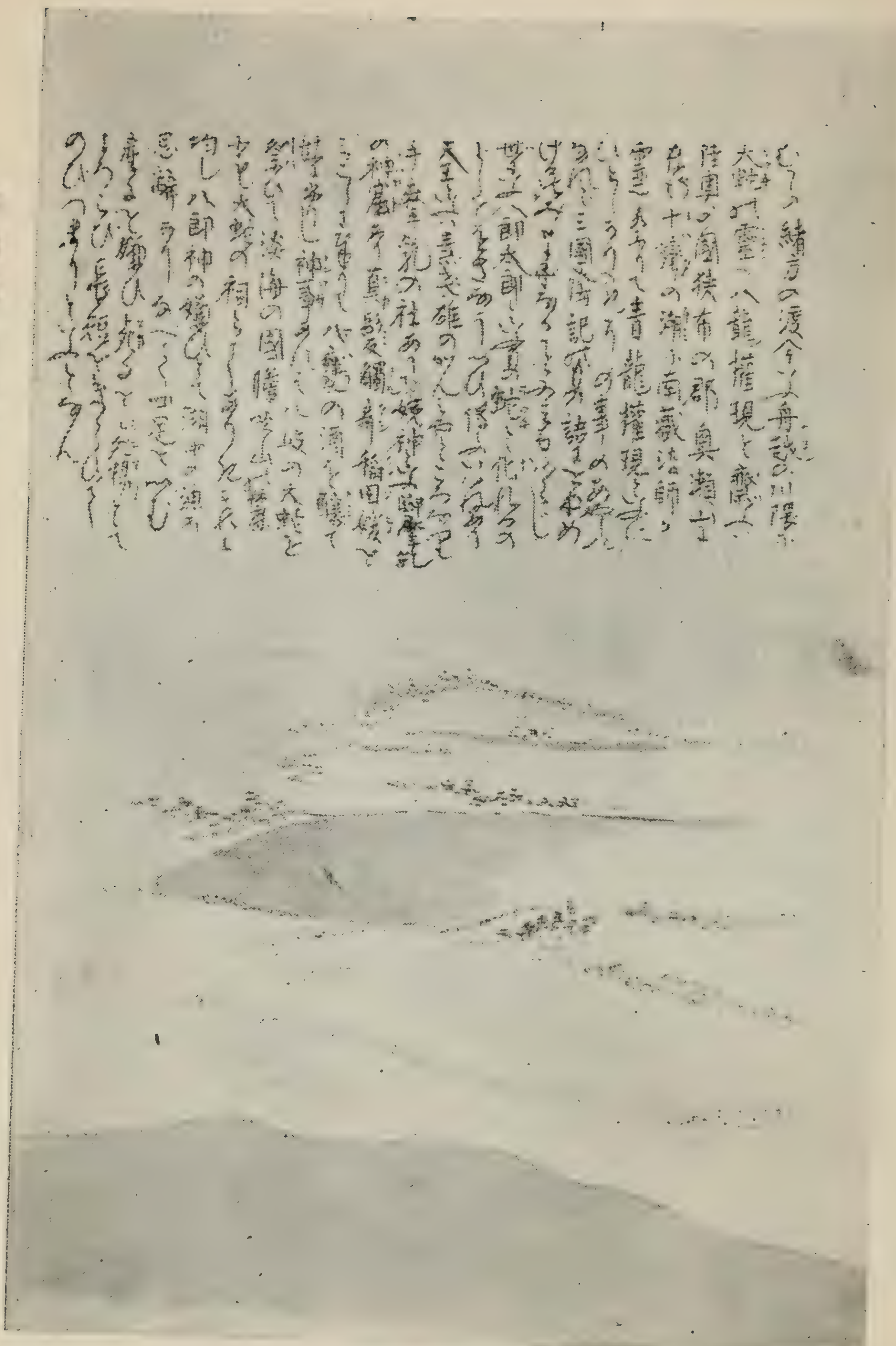


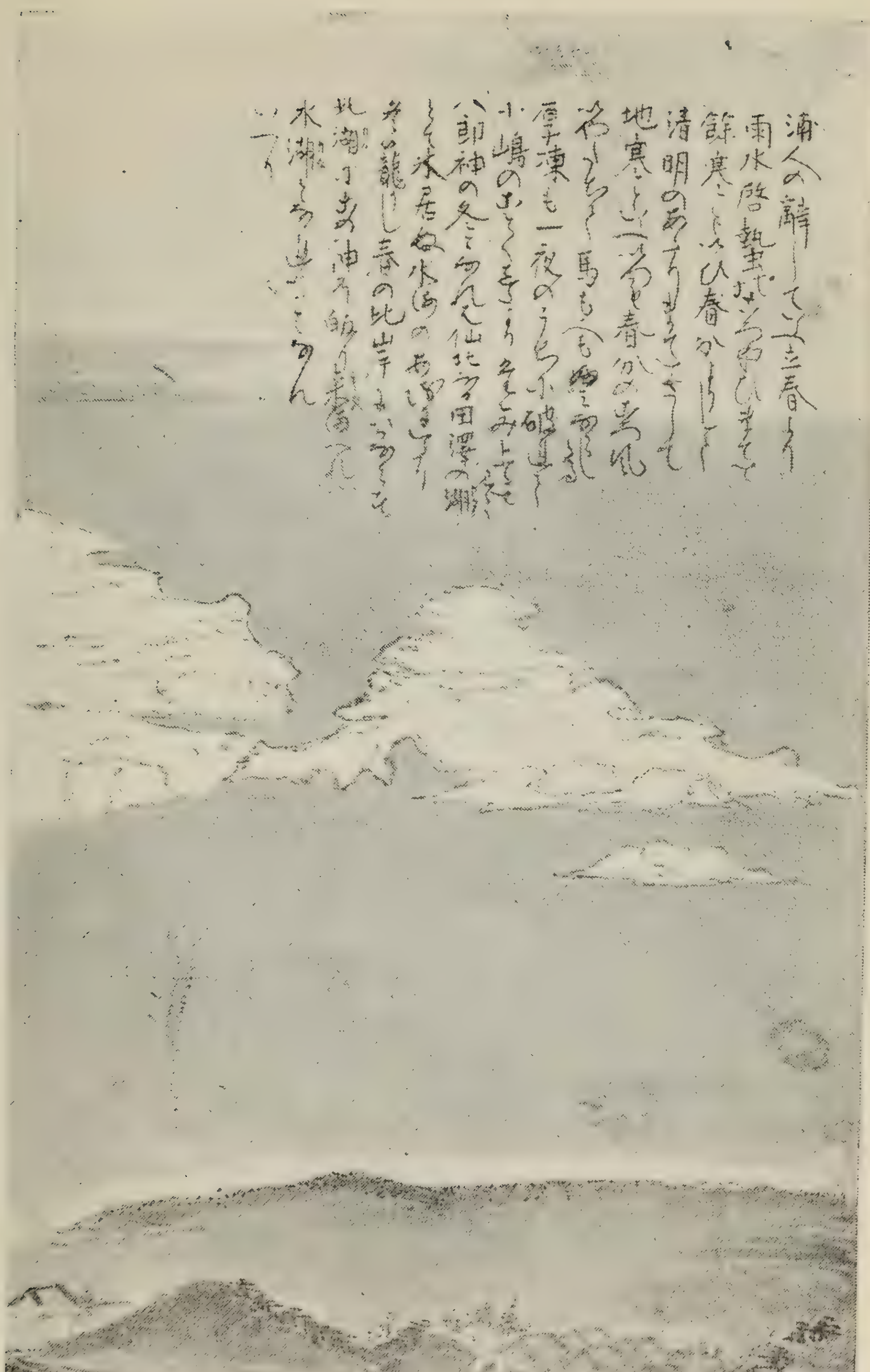
十二尋
廣一寸
二尋
二尋
三尋 三尺
八尺


甲
乙
丙
丁



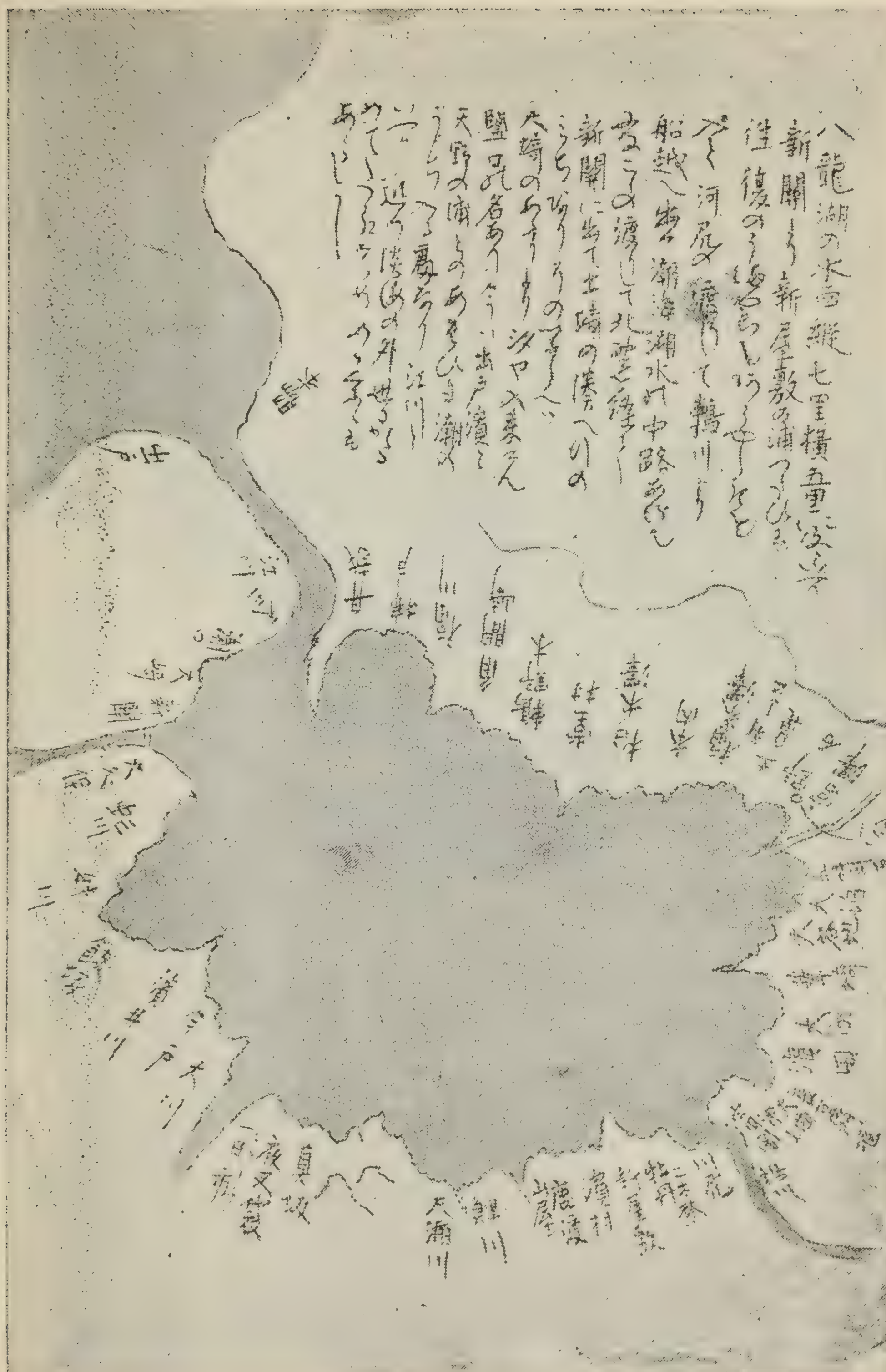




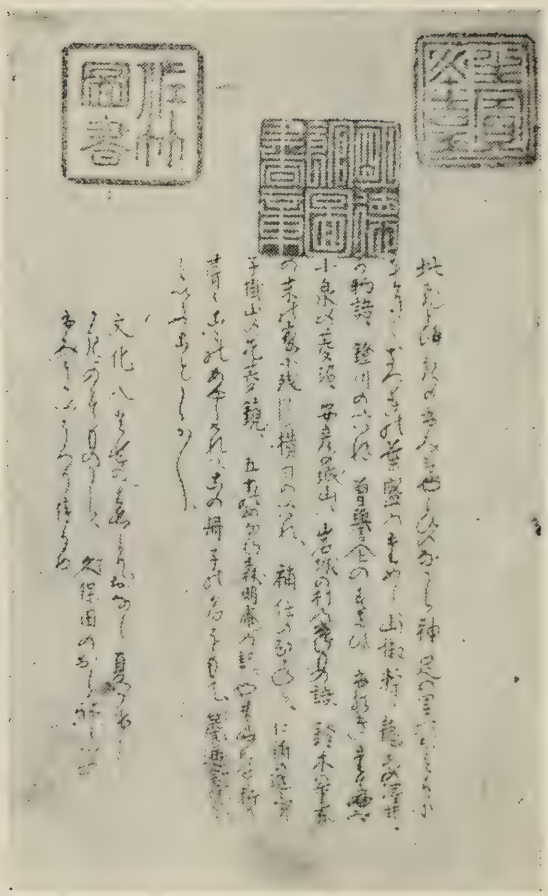




比遠能乎頁君



簷迺金棣棠



此ひとまきのふみは、やよひのなから神足の里のほとりに在りて、さつきの葉盛のためし、山椒粽、龍毛の澤井か物語、鐙川のいはれ、曾礬企のすさひ、ふるきたてふみ、小泉の菱沼、安彦の城山、岩城の村のふるもの語、鈴木の重家の末の家に殘りし横刀のいはれ、補任のひとひら、仁鮒の近となり子掛山の花菱鏡、五十のめなる森明庵の記、やまふきを折り嗇くことのあやしけれは、この册子の名をもて「詹酒金棣棠(のきのやまぶき)といふことしかく〳〵。

文化八とせの春より、おなし夏かけてかきのすものから「久保田のおしね」といふふみにかいうつり侍りぬ。

金足に向ふ

夜擧比のなからばかり神足(かなせ)の莊に行とて、雁の幾つらならん、うち霞たるあたりを見やりてとへは、下莇といふとなん。はら〳〵と雨の零りくるに、その聲の近うなり遠うなりていぬ。

遠かたの雲のした鳫鳴つれて皈るつはさにかゝる春雨。

大籠(おほこもり)、八丁目、佐渡なといふ處を來つゝ岩瀬といふ村になりて、小埜氏なる人のもとに來て宿つきたり。

岩瀬萱草祭

十八日。川を隔て山に堂あり。それに觀音菩薩をうふすなの神と齋ひ、けふはみやつこ集りて神樂を奉り、頭人の家にあるししていとにぎはゝし。是を嵓瀬の萱草祭といひ、大久保の波左巨祭、大清水の茨株祭、下刈の朝原祭、堀内の汁種(くさ)祭、浦山の牛尾菜(しをでね)祭など、祭の數もうちつゝきぬといふは、世にことなるかんわさともことほゝゑまれたり。(天註――「大久保に月山の神を齋ふ、森の島中に在りその島の小径を畑挾小間(はさこ)といふとなん。」「大清水村には稲荷を祭る。往復のわつらはしゝて茨株に火をはなちて、是をひた焼にやくといふ。」「下刈の村に日吉の神垣のあり。朝とく祭りすればものくはてするにや、とく〳〵飯たうひて祭するにや。」「堀内の村には八幡の御神也、ありとあるてふ野の草をつみもて、あつものとして進るよしをいふなり。」「浦山の村には観世音也。此ころは初牛尾菜のいつれば、是を茹とし肴ともしけれはしかいふとなん。」「此岩瀬にて

はかならず萱草をつみて、あは
せとして是をそくふめる。」）

二十四日。夕附行ころ餅舂て、是を枯葦の長串に玉なすはかり貫て、金棣棠（やまぶき）を折りてこれをひとつに、母屋をはしめ、ありとある舍（やど）はいふもさらなり、柴屋、よねぐら、厠の軒までもひし〳〵と葺たるは、あやしうも又めつらしかりき。ゆゑをとへは、むかしより、此かなせの澤の村〳〵はしかりとなん。

軒の山吹

二十五日。雨のふりて、北野の原の菅大臣にまうつる人も、まれ〳〵に行ぬとなん。ひとり軒の山吹を見つゝしありて、

　軒端ふく風なちらしそやまふきのこかねのいろにつたふ春さめ。

ひるつかた風のいたく吹て、さしつかねたるこゝらの山吹のしふかれて散り行なと、風情ことにおかし。

　風吹はこかねの色もかたよりにうつろひかゝる軒のいと水。

軒毎に鴉の羽をふためかして、山吹にかくろふ長串の餅をなこりなうあさりはてて、こかねの花ものこりすくなうこほれたり。こは、よしありげなるためしにこそあらめ。

一日清談

卯月のはしめつかた、涌元の浦にいたりて神ぬし伊東なにかしのもとに在りつるに、三とせ

のむかしにかたらひむつひたりし、檜山の里なる白井なにかしの翁の去年よりこの浦にありて、あな久しともひさしと事なきをよろこほひて、

まみゆるも命なりけりほとゝぎす　霜毛。

といふことをかい贈られしかは、袖にこほるゝ夏草の露、と和句したり。去年の春にてやありけん、やつかれ出こし夜地南可のやとのあるしのもとへ、たかひてあはさなる事のねたしさて、「そのはらや伏屋に生るはゝき木のありとは見得て會ぬ來三かな。」と、しかいふふるき歌ひとくさをかいのこしおけるを、ことし見つゝ、「數ならぬふせやに生る名のうさにあるにもあらす消るはゝき木。」と、おなしさまに返しをせり。その是則のうしのなかめ書のこしけるぬしは、久保田に栖る茂木巽知利といふ人也けり。けふ、ゆくりなうこゝに訪れてまみへし人なから、としころむつひし人と語るこゝちせられたり。暮なん道遠し、ふたゝひとて馬とくはせていにき。なさけ深かりけることゝ、たとしへなし。

岩瀬に來りて日を經たり。ことしは、きさらぎのくはゝれるけにやあらんかし、卯月のなからばかりに早苗採り植る。初田植のためしは、いつらにても事たつことは、むつきよりしていみこと／＼し。あをひとくさのいくへき、五種(いつくさ)のをさたるおきつみとしを祝ふなれは、うへならんかし。保干のひろ葉にもの盛るは、津刈路もおなしかるへき。こゝの下刈のあた

り、あるは天野、潮口などいふあたりは、檞葉をしきにしいて、なにくれと盛りてみとしの神に奉り、あるは田長、早乙女にあるしして、とよみきを進む。又風のましなひのつゝみ飯、文襷などいろ〳〵のためしあり。行かふ人はたかきいやしきといはず、こひちぬりたるとみくさの苗うけかけて祝ふためし、いつこもおなし。ひちりこの衣着てありく人しけし。高岡にのほりて、

幾千町つゝく早苗の末廣みうへも秋田の實のりしられて。

端午の節句

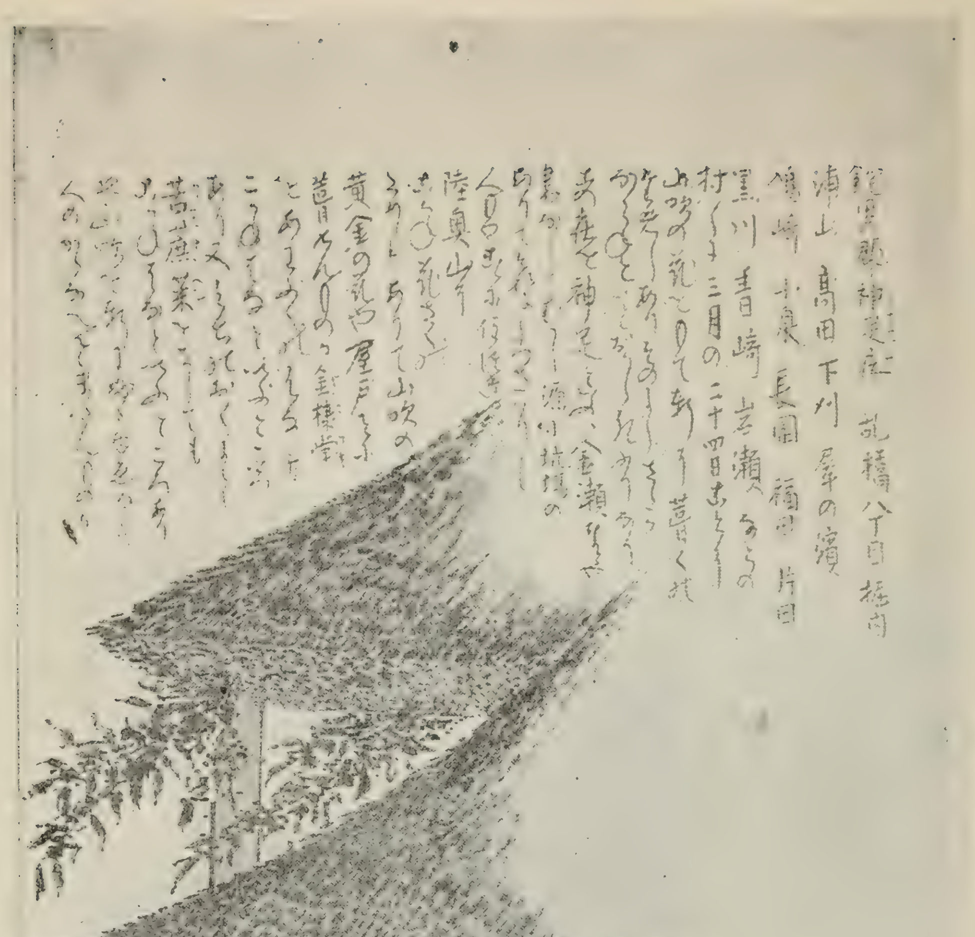
五月五日のあした、賀通者粽ちふものにしほでのわかづら、ながいもして、よき事聞てと耳にかいあつるのためし侍あり。此かつきまきといふことを句の下において、しか、こゝろはへをのふ。

ますら雄かこころもやぬれつ水ふかき野路のおほぬま眞菰刈りにき。

小雨ふりて空晴たり。

小泉行

おなし十二日に、小泉といふ村のをさ奈良なにかしのもとに、茂木知利のありつとてふみしてとひ聞へたり。路のほともいと近ければ、とくいたる。雌沼、雄沼とて、ふたつの大池あ




神足の岩瀬



紆迴金棣棠



り。此汀をつたひて、奈良氏の屋戸になりて茂木知利をはしめ、はた、としころその名のみ聞つる那珂通博のぬし、廣瀬有利といふ人なと居ならひて、ものかいてあるしにとらせけるむしろにいたりて、人々にまみへたり。けふの雨もやゝ晴れて、ちかとなりなる奈良氏のはらからの栖家とて、水に臨て屋の上なるなかめいとよしとて、人々そこにのほりてうち見つしあれば、

雨歇雲飛吟眼濶　菱花出鏡雌雄湖
雙々定是鴛鴦鳥　佳景難詩又叵圖　碧峯老人。

と書り。そのこゝろはへ畫に似たり。碧峯とは通博のから名也、此しるんの末の文字を末にとりて、

とる筆は雲よけふりよたちむかふやまのすがたも水のうつし圖。

人々とともに語りくれて、ともしひとるころ毋屋にいたりて時鳥を聞しかは、おもひつゝけたり。

ほとゝきす鳴音やいつこいつ見ても卯のはな月夜くれまよふ空。

話り更て、こよひはこゝらの人とともにふして、つとめて人々を別て、堀内のやかたを經て岩瀬の屋戸に皈りく。


角黍　角粽　錐粽　茭粽
秤鎚粽　九子粽

大久保の圓福寺

常陸人語る

大同の舊家

五月雨のはれまに大久保にいたりて、圓福寺に久保田の湛然上人のおはしたるを、けふなんとふらひて、あな久しとかたらふほどもあらで、とみなる事とて皈りいに給ふ。この寺のむかしをとはまくおもへど、文化五とせの秋八月十六日あるしの荆瑞長老の遷化(かくれ)給へば、祖確といふ法師のみ寺を守りて、合割ともは、ふかくふんじてひめ藏るなど語りき。此法師のいさなひ、又常陸の國久慈の郡入四間(いりしけん)といふ處の渡邊藤右衛門といふ人、去年より此あたりに在りて、ともにいさなひ語り連れて野路に出ぬ。大なる榎木のあるを、とし久しきものかと人のいへば常陸人のいへらく、金砂(かなさ)明神のかんわざに小祭禮、大祭禮といふあり。小祭禮は七年に一度、大祭禮は七十五年に一度也。大なる榎木を伐りてその切株に神輿を居へ奉り、又こと榎木をその年に植て、七十五年を經れば大木になるよしを語りき。鰤の漁りの事をとへは、むかし佐竹の君のおましまし世には多かりつるよし、今は多賀の郡川原子といふ浦にてまれ〳〵にひくなと、なにくれと語りもて田屋てふ處に來る。春はやよけん、梅櫻のそのあり。泉莊助といふやとに休らへば、隱元せしの書る南無觀世音菩薩を拘られたり。此あたりを、なへては龍毛(りうけ)てふ名に呼べり。沖村といふに至りて、澤井重助の舊家見てんとて訪ふ。此屋戸は大同のむかしに建て、もとものりにふりたる家なから、世に乏しければみなこぼち賣りて、こぼれ殘りたるひとまのおち〳〵ばなる處に、さゝやかの栖居してけり。在

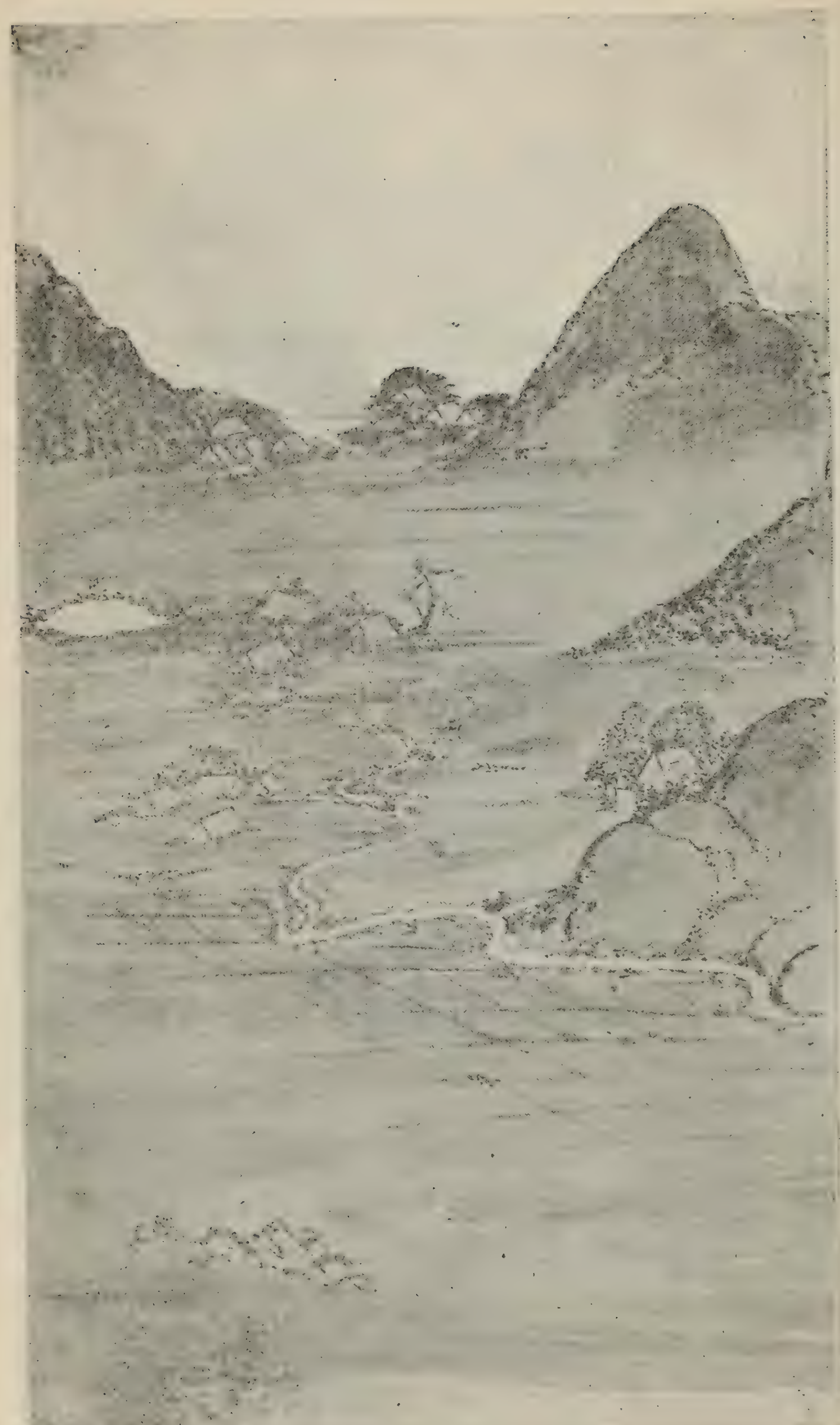
鐙川の由來

八幡獅子舞

りしむかしの宿には躑躅の梁、萩の柱なともありたりしとも人の話る。今は柱かちにて、むかしのかたばかりぞ殘りたる。寛文のむかしならんか、くにのかみ義隆の公とみに入らせ給ふとて、ありとある柱、板戸までも眞鉋もてつや〱とみな削りなして今めかしけれど、こぼれたるくまよりあらはれたる桁なとは、いと大にして斧作りのまゝなり。上祖は加賀のくにうごにして澤井兵太夫、澤井外記なとのむかしものかたりをし、又いつらの御代ならん八幡の御神を守り奉りて、やことなき都人の法師すかたにて、此澤井の家に至り休らひ給ふのときは、二月九日にて空寒く、若背等(わかぜら)あまたうち群れて田に鹵雪車(こゑをり)曳けるころは、いつものならはしとて、なべて白粥をぞくふめる。その都人にも進め參らすれば、よろこぼひて寄りむかはせ給ふに、箸のきよからぬとやおぼしけん、みつから雪垣の萱を折りとりて是をし、やはら松かねに腰し休らはせていてませるに、ひかせ給ふの龍馬、はせて淵に入りてうせぬ。その淵は池となりて、龍馬の池(つゝみ)と呼て今あり。その、かけつる鐙の流出たるより鐙川の名ありき。鐙川もあせて田となり畠となりて、はつか斗水ありて、ところ〱に古河といふあり。都人は廣野にはる〱と出て、千本の杉を植させて森をなし、こゝらの山ちさを植て青ふし垣を作りて、譽田尊を齋ひ獅子頭を置せ給ふ。そのあたりに御館(みたて)の原なといふ名も聞へ、ゆゑこと〱にあり。さりければ、としごとのきさらぎの九日といふには、かなら

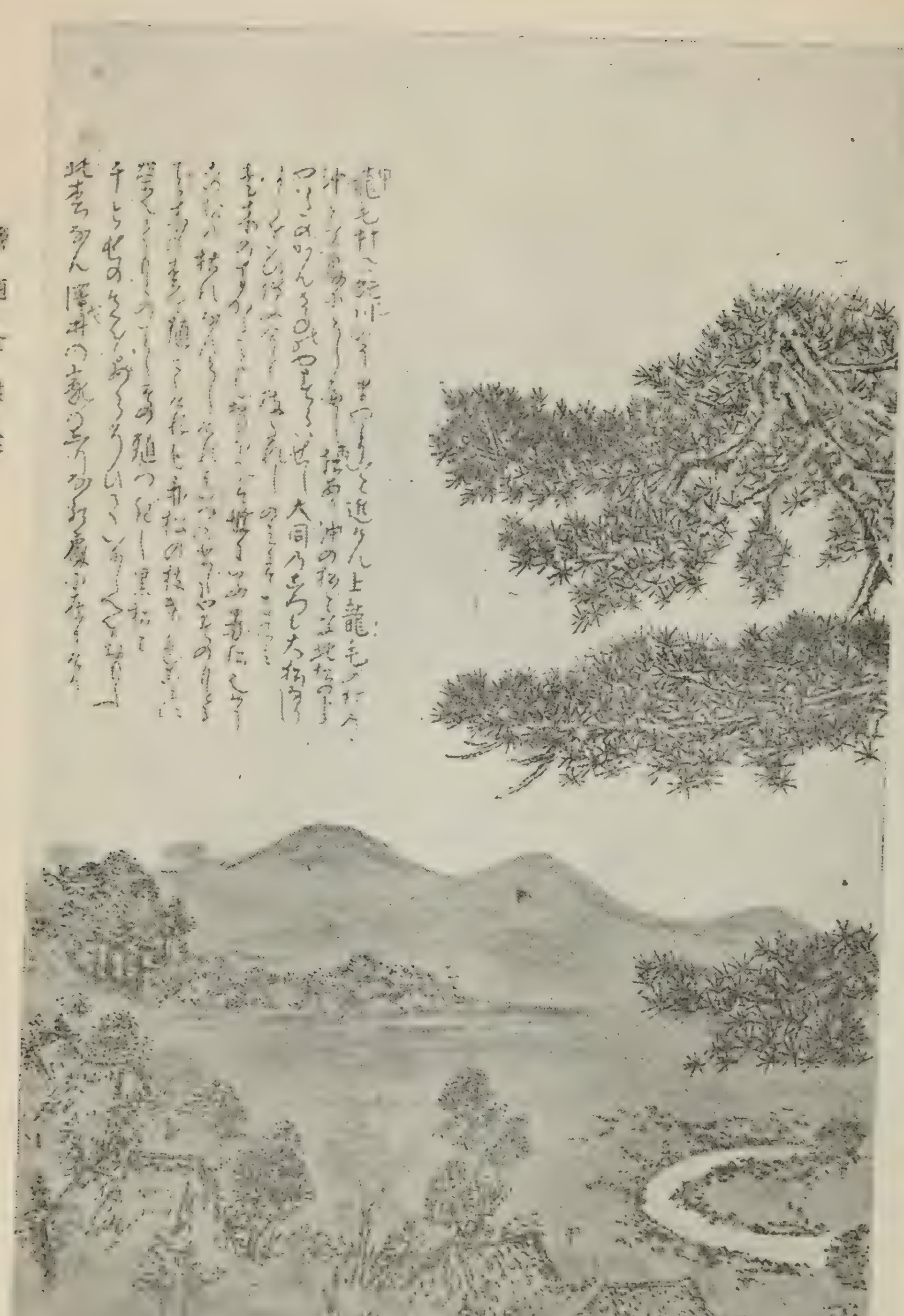


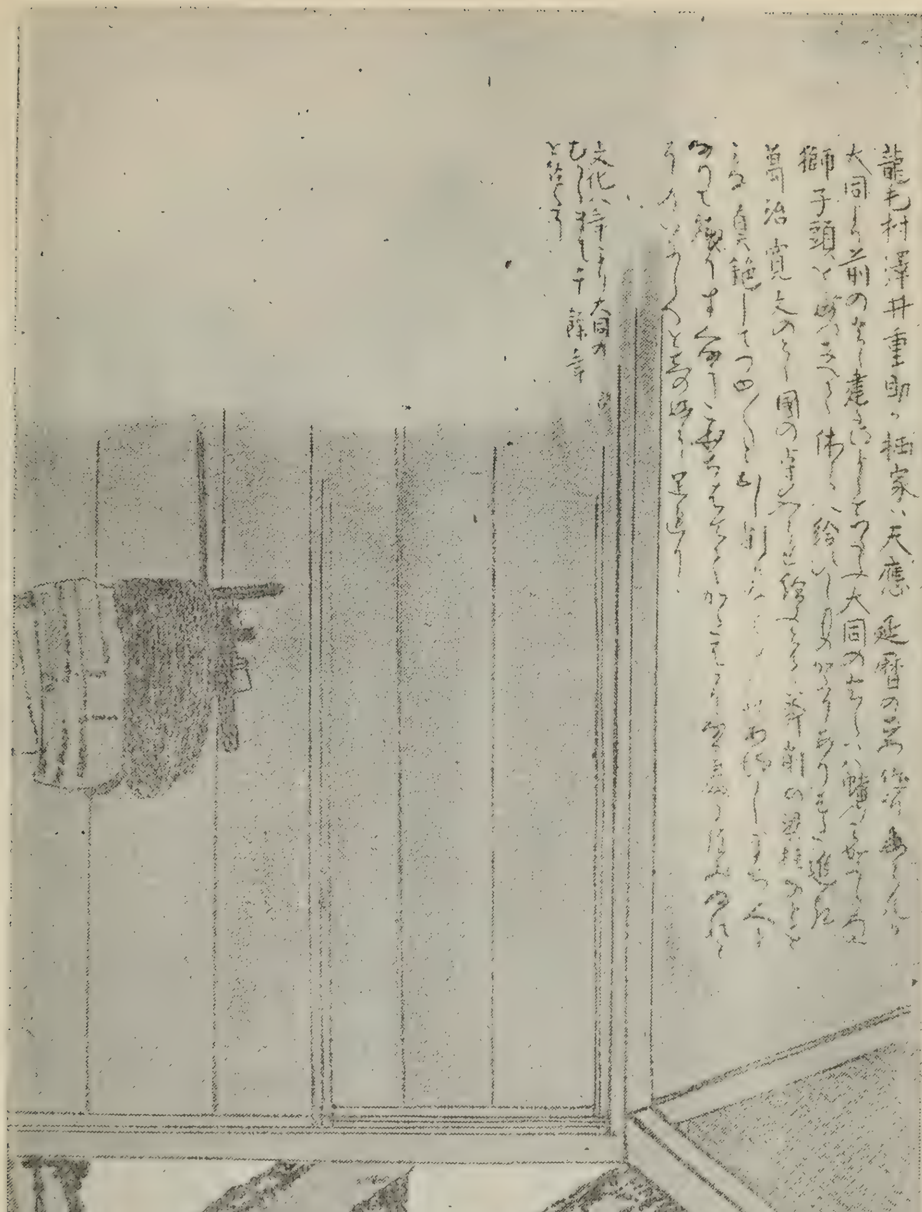




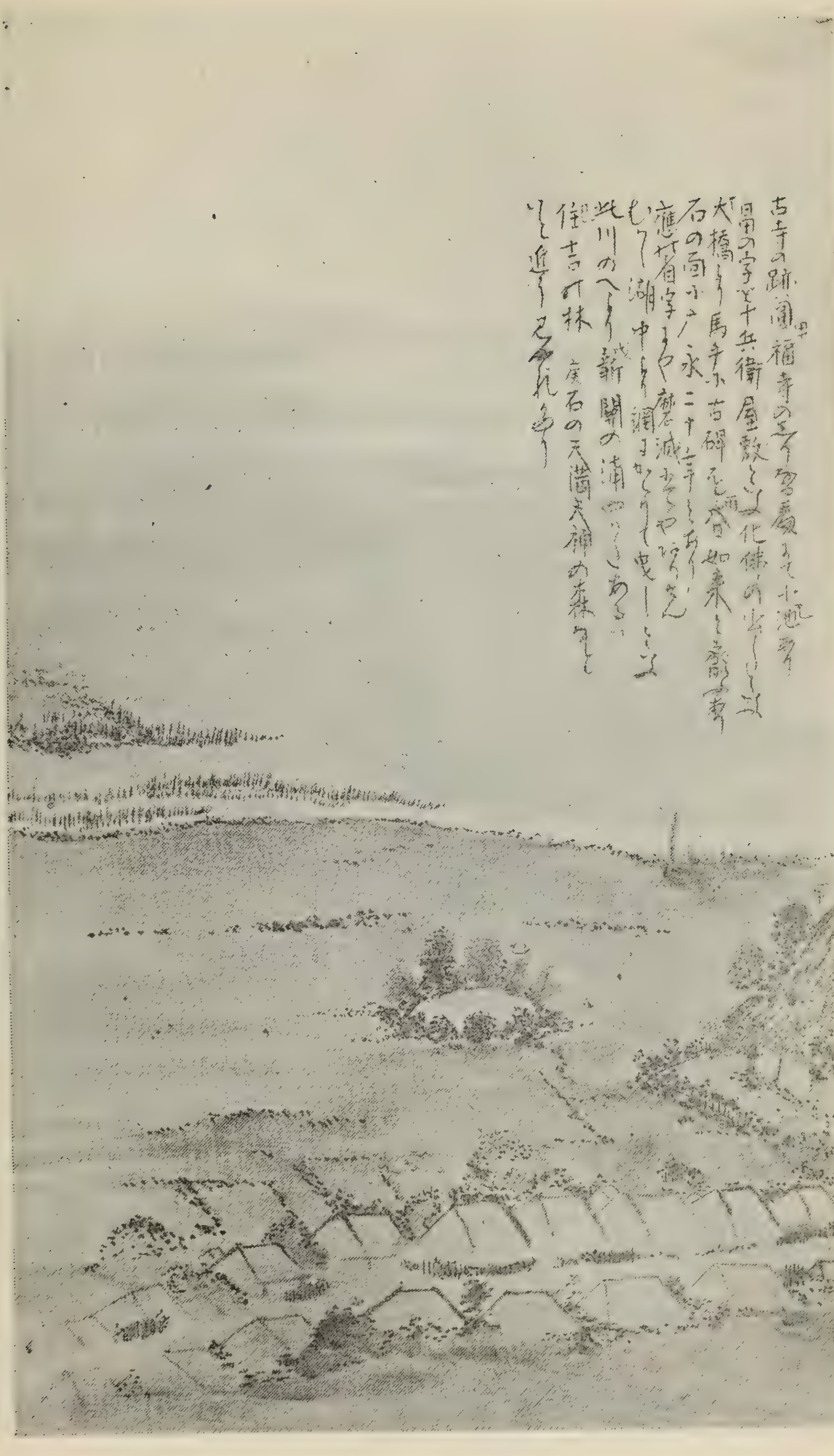
詹迺金棣棠

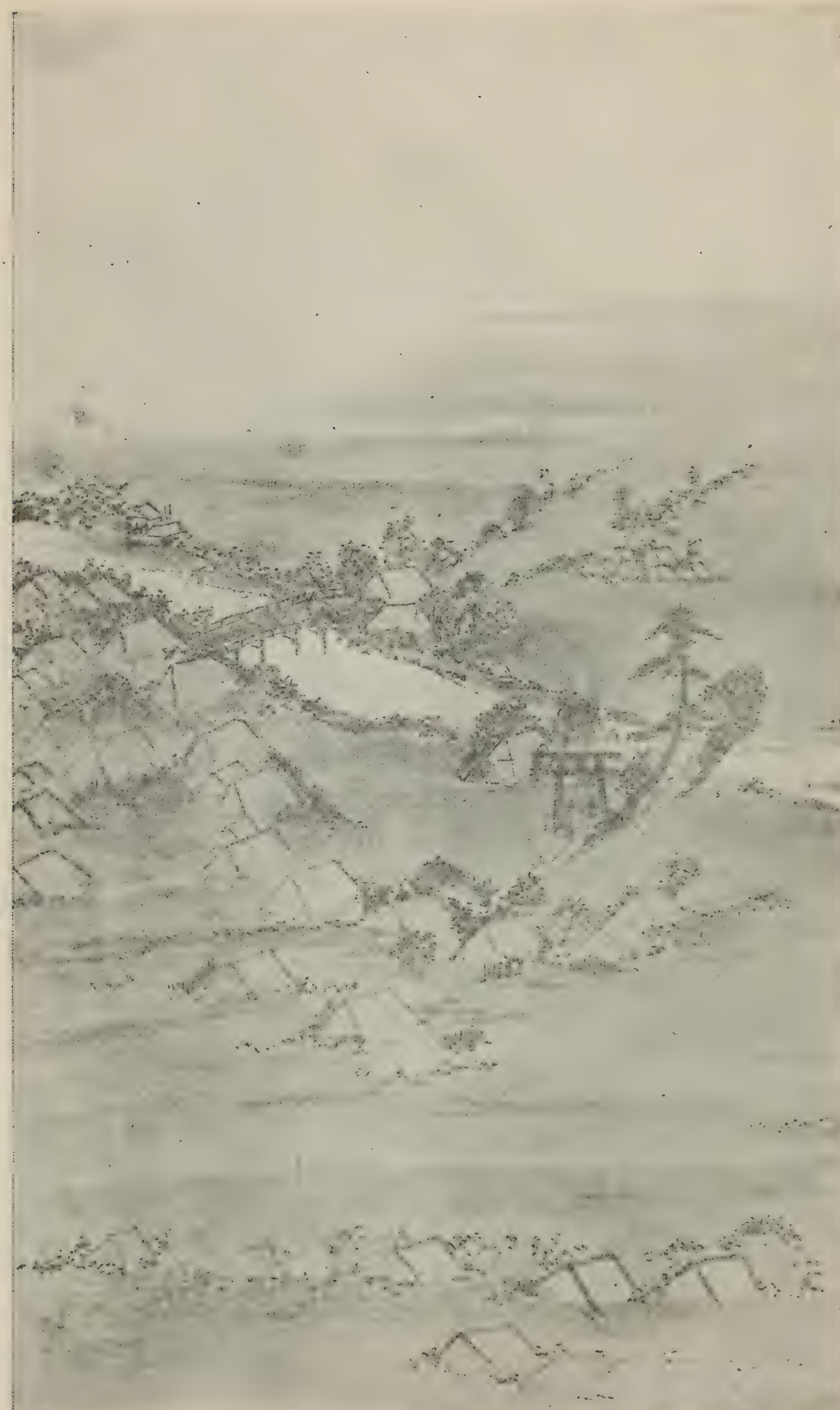


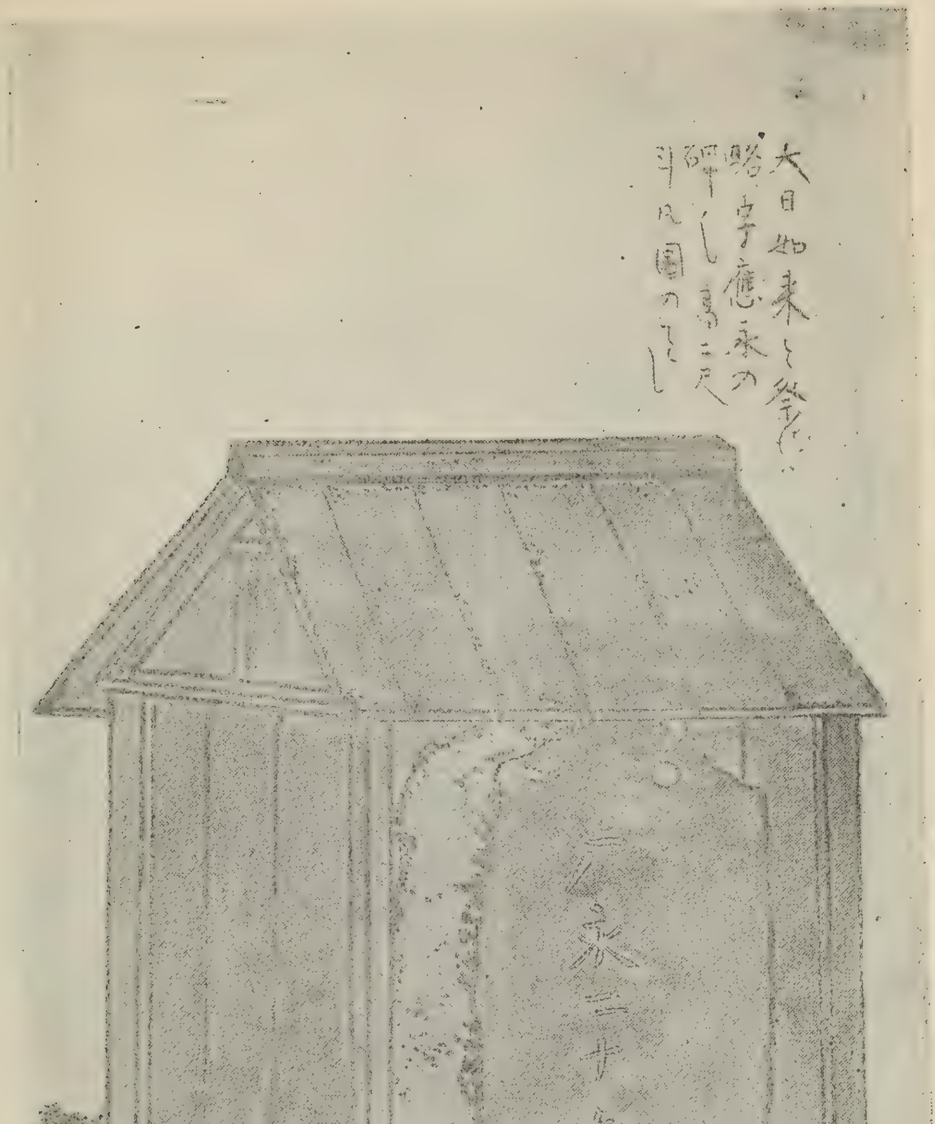



龍毛村澤井重助か栖家ハ天應延暦の


圓福寺家藏阿彌陀佛







竹內八兵衞

槻木照明寺

神明の大槻

義隆公建立

ず八幡の神のみてくらをさゝげ、獅子頭を舞して此家に中宿し給ふとき、いにしへのためしとて、「白粥に萱の折筯を奉る事しか〳〵。」この事なん、浦の梅その」といふ冊子にもつはらに記しおきぬ。はた、此下龍毛といふところの竹內八兵衞の家こそ作りかへたれ、むかしは榮へし宿にて、うみの子のいやつき〳〵ふるきやからとはしらて、天明元年に船橋村の又兵衞か家より聟かね來りて、七十七にして身まかれりなと、家の過去牒にしるしおけりといふ。そのやとに遊行老花の書る、なもあみた佛あり。槻木村に來つゝ、大宮山照明寺とてひめたるのりの行の寺あり、むかし下虻川邑よりうつせりといふ。寺に、ゆゑ傳らずして天正をはしめとせり。此寺のあるし寬明法印にまみへて、圖仁の作り給ふ南無地藏大士をしめし給ふ。此かへさ、うちくもりて涼しければ、姨澤なと分入りわき出て、本木の村なるかなたくみのやと坂本といふにしりうたけして、くら〳〵になるころ、出こし大久保に來つゝ鎌田のもとにふしたり。

五月廿一日。虻川のうまやなる、內外の神垣にまうてまくこゝに至る。このみやところに大なる齋槻の三もと、こと木よりは秀てそ見へたる。その木の枝にわらのはきまきを掛たり。何のよしありてかと人にとへば、やまうどのかへりまをしとなん。承應、明曆のむかしならん、くにのかみ佐竹義隆の公のおほんなりところをこゝに作らせ給ひて、おほんなりも

「戰き」由來

福藏坊鷺舞

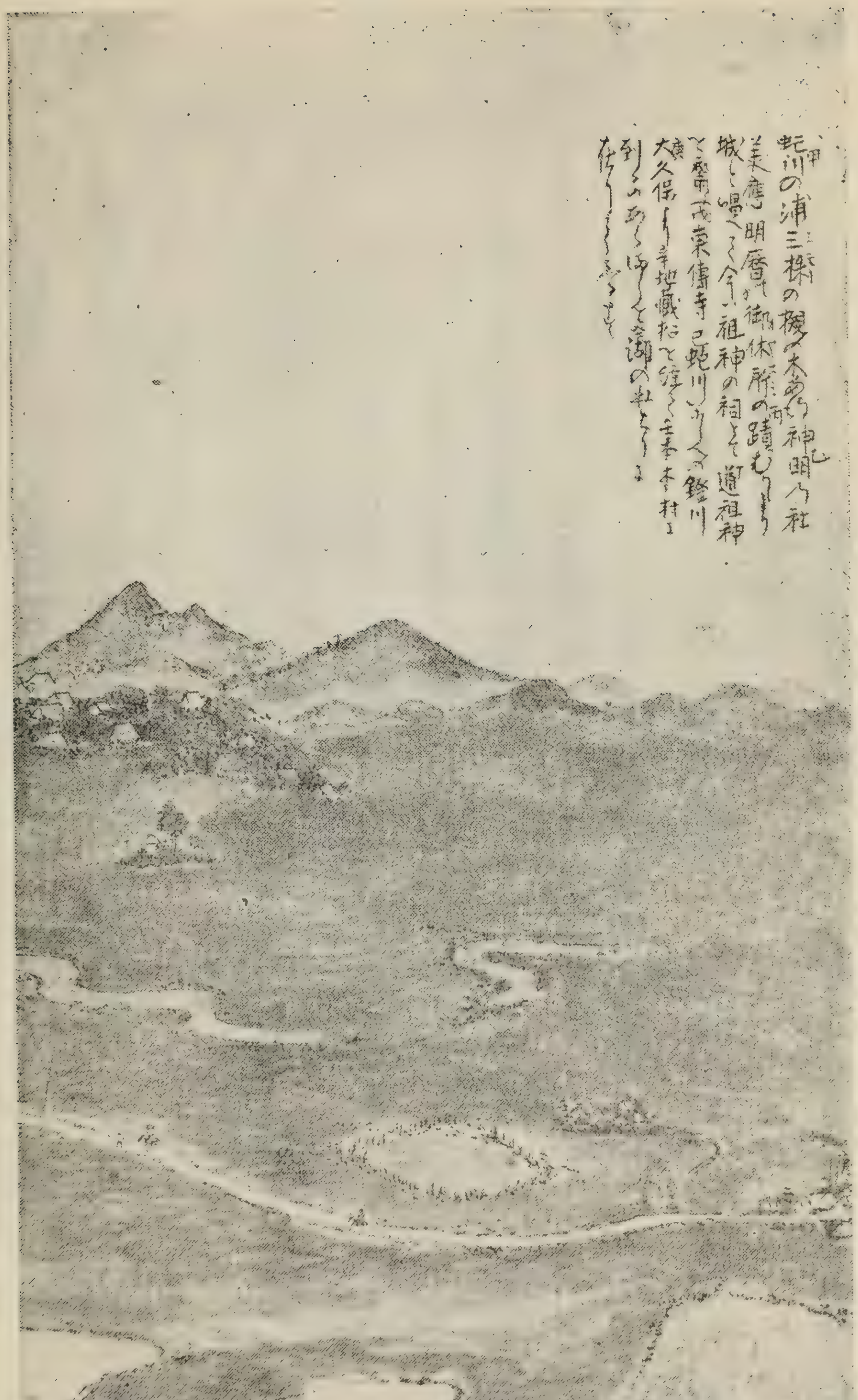
しげ〳〵なりき。毛鷺の田つらにあさるを、すこし矢ころの遠ければいかゞあらんとためらひ、道のべのさゝやかなる社にぬさとりて、この矢をねんじてはなち給ふに、あやまたず射あてさせ給ひて、そも此神は何の神にておまします、内外の神をうつしまつるといふ。公の仰に、われ神社を造りかへ奉らんとたくみらに仰て、日あらす千木あらたに、片曾木高うきよらをつくし、うつのみてくらをたいまつり給ひて、三本の槻なんこゝに公みてづから植させ給ふは、しか是なりと語る。この祠のうちにひめたる棟札あり、「奉造立天照太神宮社檀大檀主源義隆公　開眼久保田寶鏡院宥遍　奉行若木五左衛門　寛文甲辰六月二日　別當福藏坊」とぞ、かい聞へたる。拝みどのゝ札のおなしかりき。神藏（みくら）のうちに三頭の人形、あし手もそなへたり。これなん此君のみづからきたみて、ふみ月の十六日の夜さり此三の人形を車に餝り、いと竹、つゝみにうちはやしてさいたて、戰（そよぎ）といふものを作りておほみたからに唄せたまふが、今し世も此そよぎといふ事をさきだてて、あとより、れいの躍りせりけるとなん。義隆の公けんざ福藏坊をめして、いましは神樂（みかくら）あそびには、いかなるわざをしてか神をばいさめ奉るやとゝはせたまへば、福藏かしこまりて、遠つおやより傳へて鷺舞といふ事をば、あしうもつかうまつりならひてさふらふ也。いかてか、ことわざは一手だに得つかうまつらさるよしをまをす。さらは鷺を舞（まは）して見よとの仰あれば、福藏衣をかゝげて細はぎ

秋の田、櫻

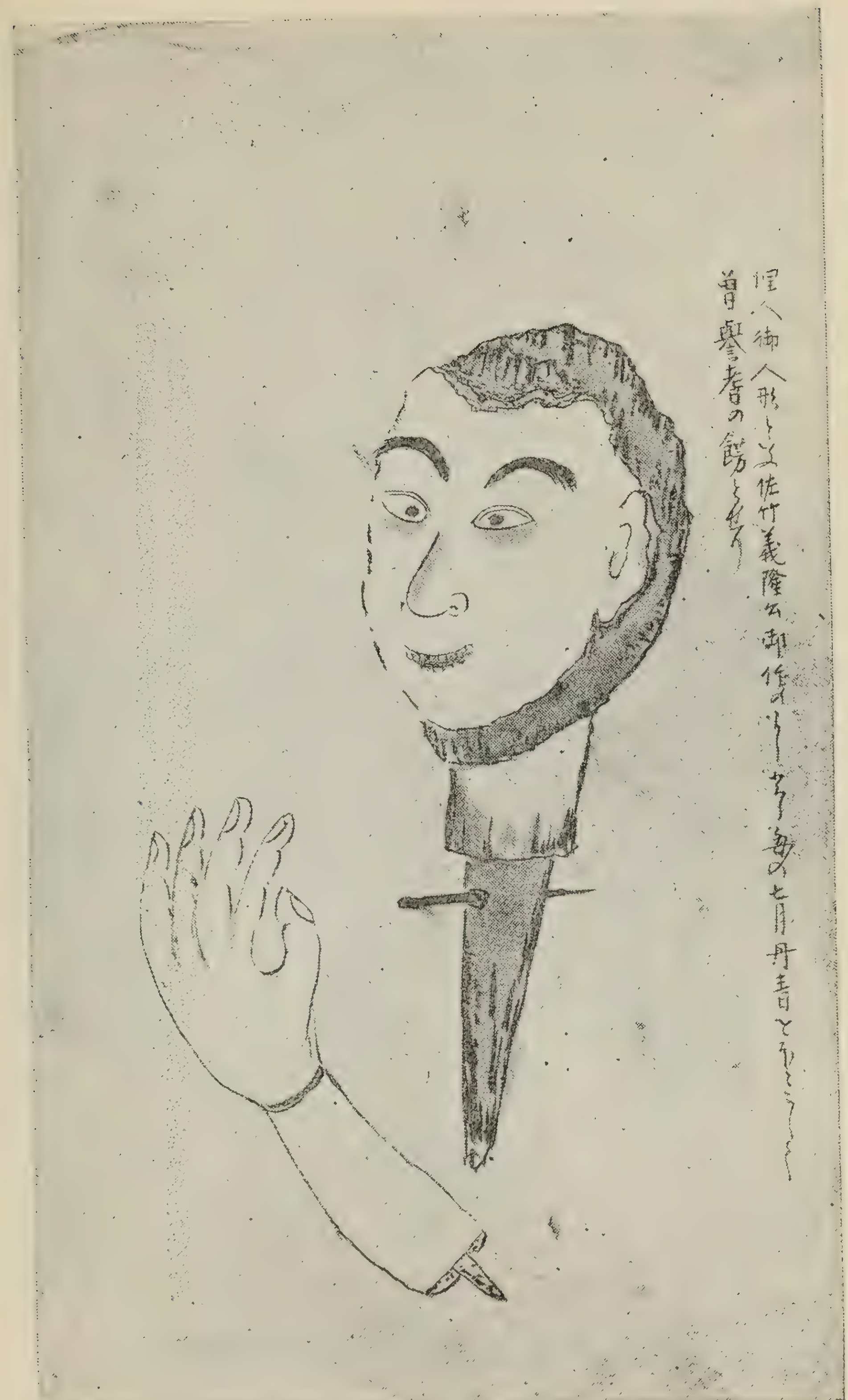
津輕源氏踊

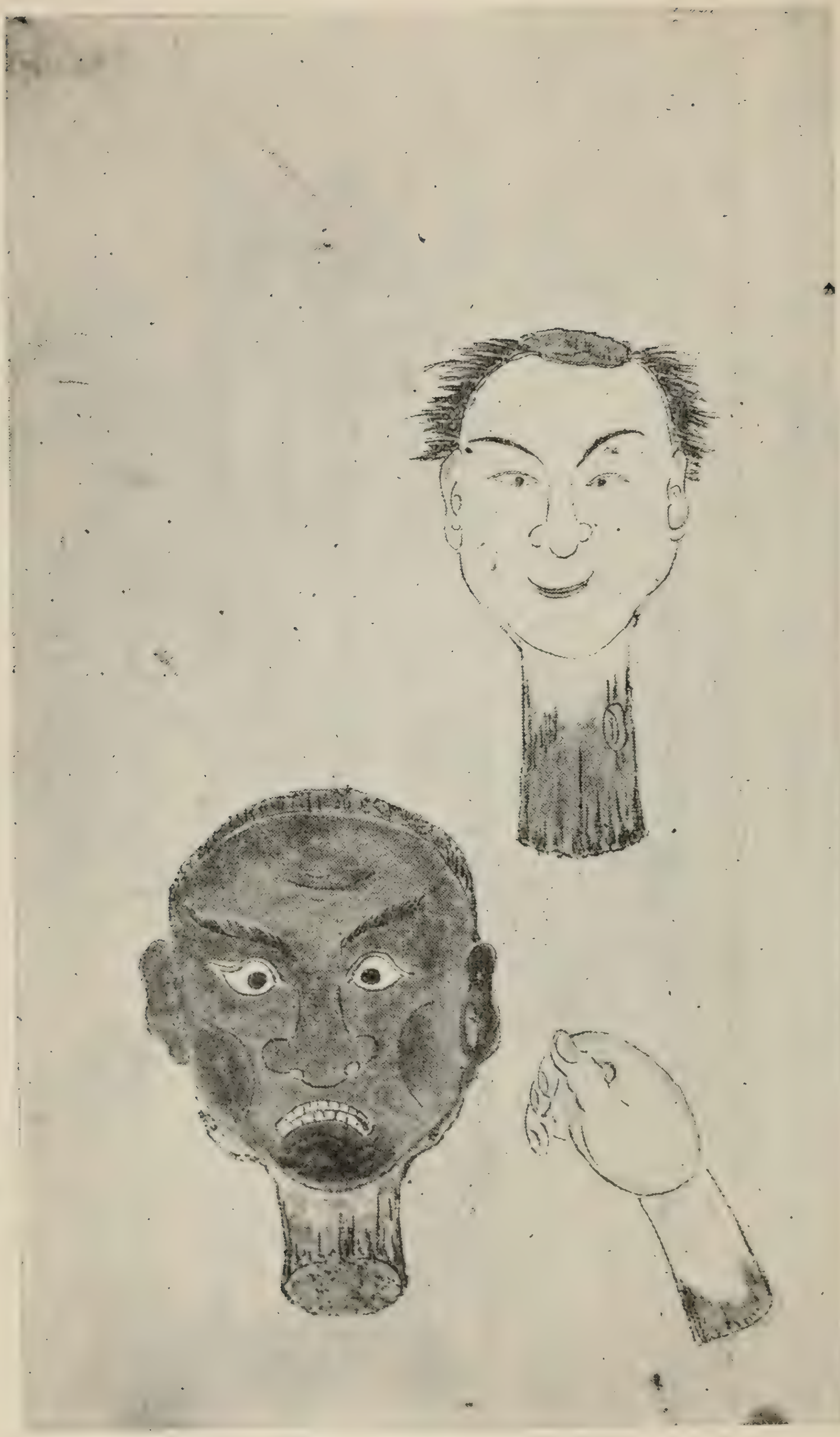
蚯川と鐙氏

をいだし、首さしのべて、さなから鷺のふるまひをして興をそさかせける。公もうち戯れのあまりとて、やよ鷺坊、鷹にあはして一抓とはしてんものと、ならしたまふ扇をつとたばなし給へば福藏かしこまり、此扇をかさしおしひらきて、倘鷺のかきりを盡しぬ。そのころより、鷺舞に扇をもたるこそこれか緣なれ。福藏坊か末は神垣近くにありて、今も鷺舞は世になうあやしきまて上手にて、人みな鷺か家と呼ふ。七月十六日の夜は篝ひし〳〵と焚て、むかしはその夜あゆみとうする馬なんはせて、火のためのならしさせたまひつるよしをいひ傳ふ。高燈籠をあまたさゝげ、二十四孝、あるは三笑、あるはいまやうをまねひて手ごとに飭りて、その君の作らせ給ひしといふさうかとて、秋の田、櫻といふことを唄ふ。これを戰きといへり。安貴能多を大唄といふ、「秋の田の〳〵、そよぎや〳〵と穗にいでて、君よ〳〵と守らんとの君よ、鶴龜は〳〵、池の汀に巢をくんで、君よ〳〵と、守らんとの來三よ。」さくらを小唄といふ、「櫻の花、なかめさふらふと入とはゞ、ほやれ〳〵。」しかいふふたくさのうたひもの也。花山少將、みちのおくの津刈におはして盆躍のさうかを作り給ひて、ぐゑんじ踊といふありき。「こきてんのほそやとのに、たつひとや誰れ、光る源氏のこれや君さんまよ。」とうたふに似て、いづらもその君のこゝろかんばし。この蚯川のはしに古河の水あり、蚯川といふ。さりけれど、蚯川のふるき名は鐙川といひつとなん。今も此驛に鐙勘


蛇川の浦三株の櫻の木あり神明乃社
美鹿明暦か御休所の蹟もあり
城しと唱へて今は祖神の祠とて道祖神
大久保より辛地蔵ねと経て千本木村に







右衞門、はた鐙喜三郎なといふ名あり、ふるき家にてよしやあらん。はた、城の家と字にいふ宿あり、是は渡來(わたらひ)氏にて作七とかいへり。その公のなりごころ御館などの門守ッにして、それかはらからは、こと家をつぎて寒河井(さがゐ)氏たり。（天註 伊勢の度會の郡より出つる人の末にや、渡會氏の文字を渡來と書なしけるにや。わたらひ、又さかゐなと、ふりにし氏也て）その世には肝煎のえだちたらんかし。此末にて、莊助といふか尙ありきとなん。こゝのひんかしのくまにあたりて森の見ゆ、そこなん館の腰といひて、ふるき觀世音の煉像をそこに傳ふ。

二つの寺跡

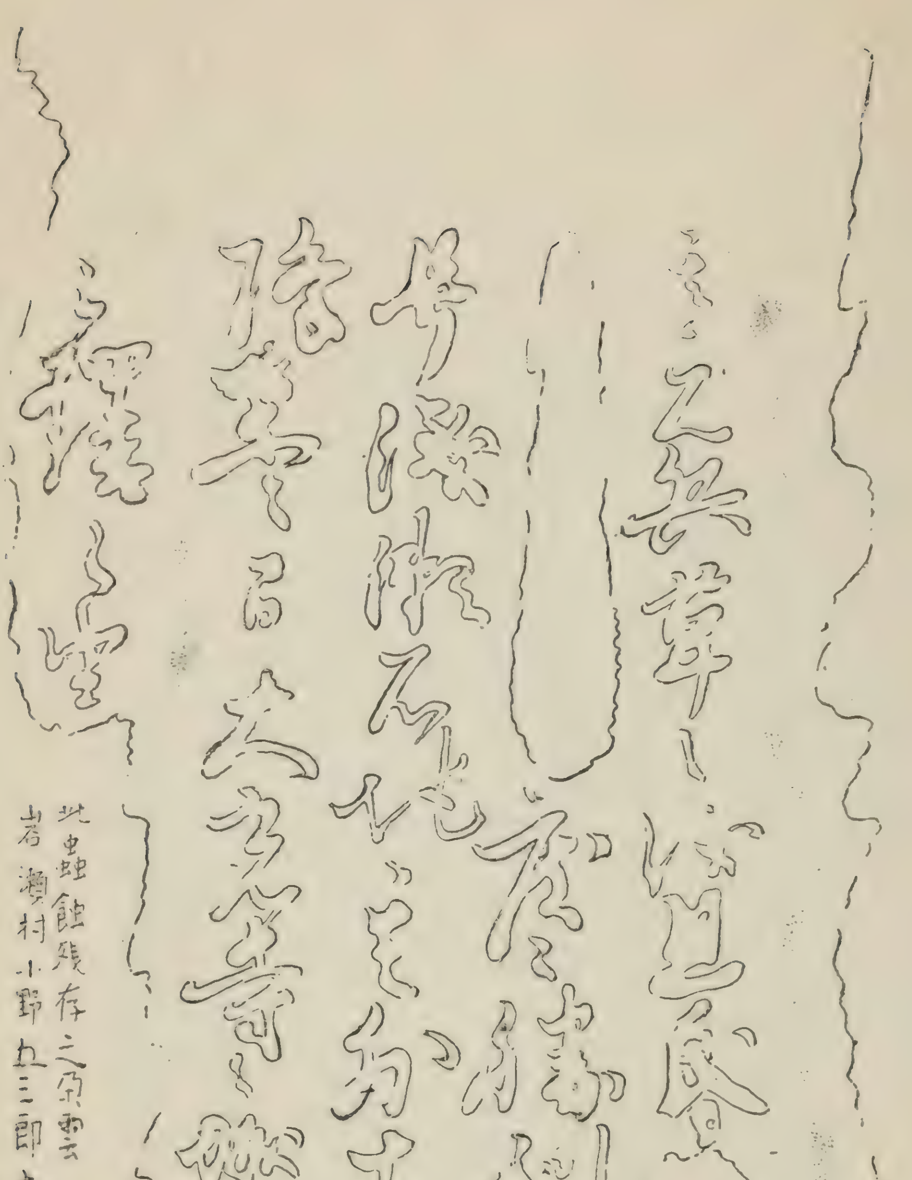
金川山東傳寺の山寺は、濱井川の浦回なる湖のほとりより、むかしこゝにうつせり、その跡のあたりには建武のころほひの碑多し、北に長者屋布といふあり。大宮山照明寺はむかしこゝより槻の木村にうつして、寺跡の名ぞ殘れる。釋迦前といふ田の字あり、ふるき石の釋迦牟尼ぶちのかたしろを掘出しとなん。

字葛卷

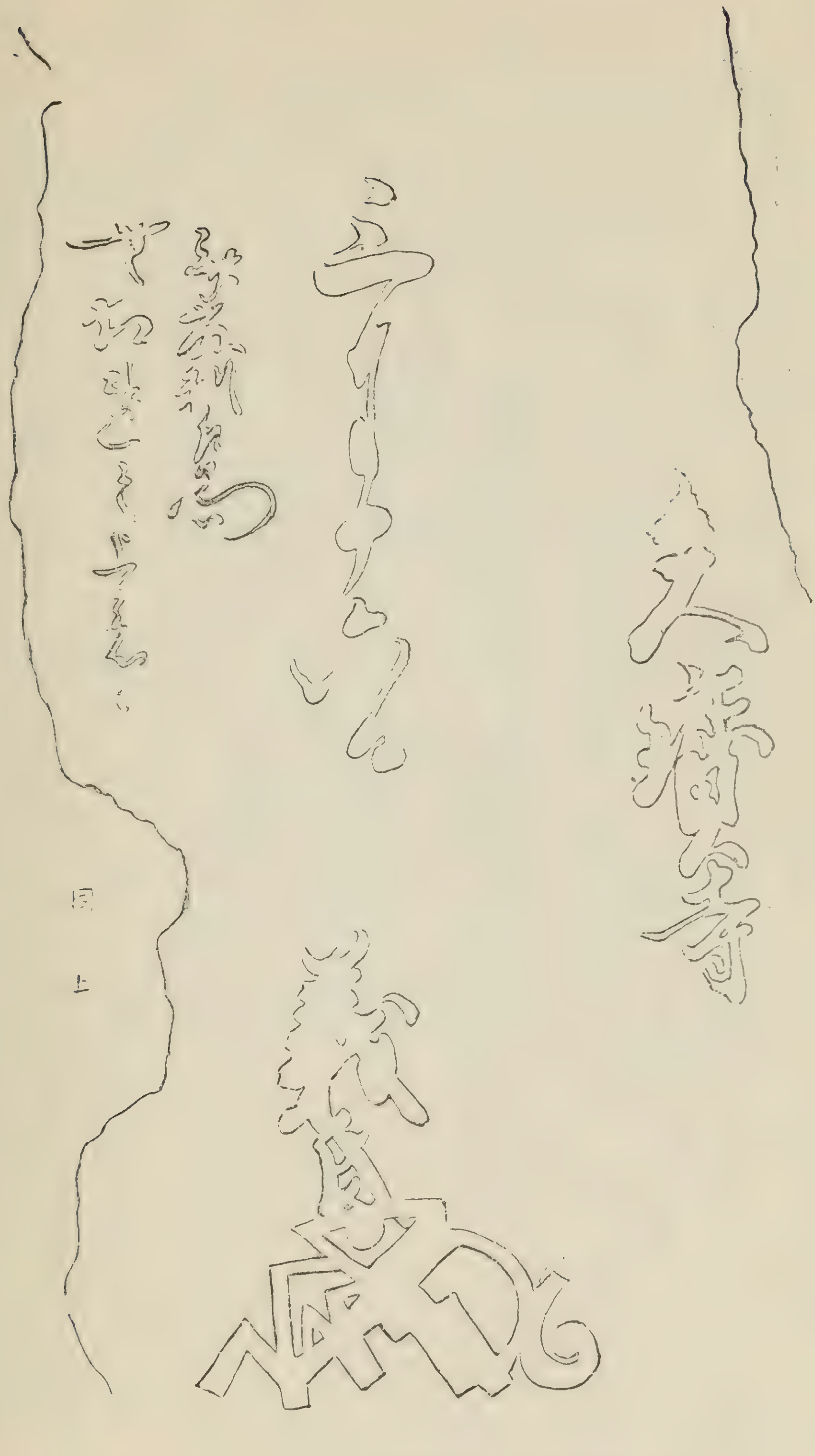
はた葛卷(つるまき)といふ田畠の字あり、いにしへはそこに、劔の宮とて神ッ社ロあり。こは地主の神にして、おほみたからを守らひ給ふのかんさねにておましませと、としころ御社もなう、誰れ產砂(うぶすな)の神と知りけん人たにもなう、あさましきまてなり行給ふをかしこみ奉ると、むかしをしたふ翁の、ふるき物語りに聞へたり。

鹿島流し

二十八日。あすは鹿嶋なかしとて家ごとに餠搗き、れいのごと、篠の葉に露の玉なす餠を軒にさせり。家〳〵には人形を作りてこゝかしこにもていたり、饌(みけ)を備へ、その人形の腰に錢をいさゝか付てこと家に送りぬ、いつらもしかり。かくてその日になれは大船を造り、おも

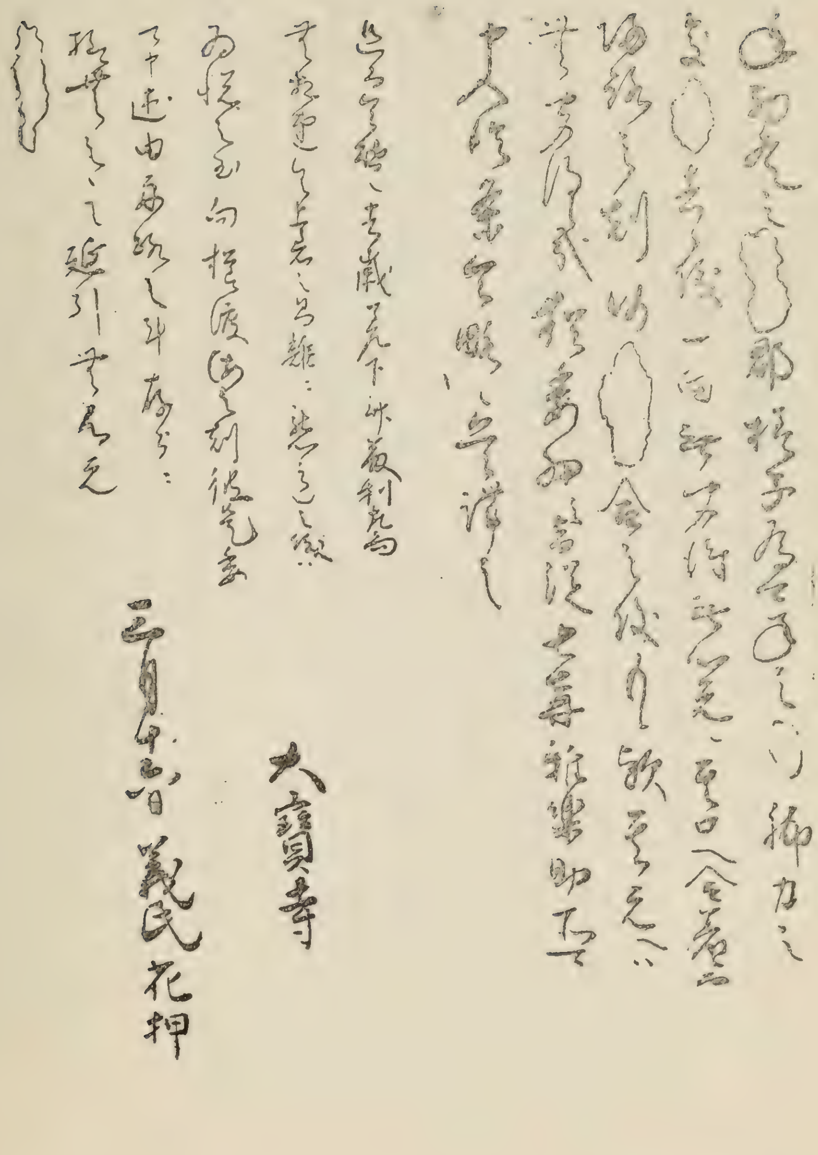


此蟲蝕殘存之頁云　秋田郡神足莊岩瀨村小野丑三郎家藏摹之



同上

然ハ昨年□寿□已後渡海並ニ高中
彫之事南ニ而満足之由ハ真見分筆之
段五冊□唐摘□唐之持利之由物等
御座候不侘重而十餘ヶ掛時分令大変等
之儀候ニ付押請之重年四年十月於ハ七歳
雖無助不之候共可相月十二日ニ与惣兵衛
之□不悉候合得之候此方存候重ハ前後緒
紛失致候而目中願候之由共何共候
角更ニ□之度□之度之事ニ付段以御賴候中
[illegible]
縁手向之□之話一ケ之由ニ之度不存□
事件之段無御変化之[illegible]重之之御五年


大寶寺
義氏 花押

ひ〳〵に軍きみをはじめ、うちかふと、かんどり、鹿子さへ作りて、ふないくさのまねびたり。凡のとしごとに流すはみちのくにもあれど、もはらとはせざりき。是を地震動（なへふら）ぬ祭りといへど、おもふに、くにの守のむかしは、衣手のひたちのくにヽよりこのいてはのくにヽ至り給へば、遠つみおやのくにぶりをやまねひたらんか。去年のなへにおちて、雄鹿の浦〳〵はいふもさらなり、村〳〵ここに鹿島舟なかしとて笛、太鼓にさはきて、とよみきに醉てにきはヽしさは、豐なる世のすかたにこそあらめ。

歯固の祝

水無月けふの朔日は、氷室のためしになすらへて、氷餅くふを歯固の祝ひてふ事といひふりて、いては、みちのおくのならはし也。かヽる神足（かなせ）の莊（さよ）のあたりにて、むつきに若水にひちたる餅をたくはへて是を水の餅といふ。粉として此あした、顔、あしてに附れば虫の螫ぬまじなひとて、老たる、わかき、あし手さしのべ、ぬか、をとがひなとにぬりたるふりのおかし。かくて、むし飯をそくふめる。比武呂母知てふことを句の下にして、

人も訪ひ樂しとすさむ菅むしろたもとすゝしも風のかよひち。

けふよりは土用になるてふ。小雨ふれり。

夏まつり

二日。けふは夏祭とて昆蟲やらふの祓禊をして、大なる柳の枝を家（やか）の中央におし立、ゆふさ

りかけ、短册やうの紙の牌をひし〳〵と付て、はふ虫の災とのりとごとをへて外に持出て、笛鼓して田圃をはやして山路に入ぬ。かうぬし、村君も歸りいぬれば、あとふきとて、又あるしめけることとして、とよみきにみな醉ひて手をうち唄ひて、くさ〳〵の舞、くさ〳〵の戯れのあそひに更たり。

岩城の城址

四日。小泉の雌雄の沼を見つ、新城の莊岩城といふ處に至る。下箇枝の橋渡ぬ、この水はしら山、大股の落合なるよし。むかしこゝに、岩城右衛門大夫康信といふ城の主ありたり。このふる城山の麓寺を、吉祥山福城寺とて臨濟のありき。その康信の君の次郎なりける、岩城

福城寺の虚空藏

の平治郎なにかしの君の念佛寺とて、ひめたる虚空藏菩薩あり。此ほさちは、陸奥の國なる柳津の虚空藏を作りましし木のうれして、空海のきたみ給ふたるといひ傳へり。(天註—新著聞集に云、出羽の國柳津の虚空藏の池に鮮魚おひたゝしくあり。蒲生下野守殿是を見たまひて、いかなるゆゑにや、毒を流し入殺すへしとありければ、これは往古より殺生禁斷の地なりしよし達ていさめしかと、終に承引したまはす悉くころしたまひけりと。其日より十日の間大地震止さりしかは、山崩れ洞となり川埋て陸となり、城中をはしめ民屋ことく〳〵く癈頽して人多く死しけり。程なく下野殿家もほろひたりとそ聞へたり。此福城寺の虚空藏ほさちもおなしう空海の作りたまへは、あらたなる事なしかはことなることのおはしまさんと、住僧のつはらにしめし聞へたりと。) 岩城氏の世に在りつるころは、此佛をいつくしう扉の内にこめて、そか中に文、花なと、ふたりの女房の名そ有ける。此寺の近となりにも又寺あり、

雲性寺

瑞龍山雲性寺といふ。雲祥院貞祐大姉といふふりたる牌のたてり、こは、岩城平治郎の孀なりしよしをいへり。如意輪觀世音を本尊とせり。あるしの長老は、美濃の國武藝郡上有

館神の社

城山の展望

知村より出て謙宗といふ人也。あかちゝはゝのちかさなりの國なれは、いさなつかしう、その國の事ともを語りて云、鵜舟撈く中良川のほとりに、ゆかりのありてつねにゆきかひしつる。「すへらきのみよさかへんと聞へたりし、陸奧山より石ひとつをとり來て山にすゑてより、金花山てふ名に、かなたくみらかよびなせり、まほの名は稻葉の山にこそあなれ」なと聞へ、はた、このほとりよりして古城山へのほりてなと、ねもころに門にたち出てあないしてけり。やはらよちて館神の社にぬさとれば、はちすの上に、あなうらをむすびたる佛像を、方なる石の面にきたみたり。こや、いつゝむすひのすかたをつみなしたる、もとつ石の一ツ、いはゝ、はにやすひめのおほん神にもたくへつべう。此城山は高からぬやうなれと、四方の能そ見えたる。南に土崎の浦いと近うして、舫ひたる泊り船眞帆ひきたるか入くなと、つはらに見渡しの涼し。北に井戸澤、烏館、大張山、東に寺の澤、むかしは天台ののりたりしとき、福性寺のありつる跡とか。したゝみの形したるいや高山の麓より、つとさし出たるやうにてそありける。名を燈籠長根といふ。そのよしは、岩城の家榮へたりし世は、ふん月の十三日になれは此山にこゝらの灯火を照らして、峯も尾も溪水の底までも、かゝよふ光みちたるとか。竹の澤とて竹の林ありつ。西に笠井戸といふあり、是を開山堂と人よこなはれり。烏屋場といふ處の見ゆ、むかし廣瀬友益といふくすしが、眞白府の鷹をあかけたりし物

鶴の池

話のありき。その廣瀨氏の末の侚ありけり。寺山のうち南にあたりて、廣野のやうにて草の生ひ茂りたるなかより、ところ〳〵水の見へし處のあり、これなん鶴の池とて名たゝりし處といふ。さと雨の零り來れはひろ前に入て、

白雨ははれ行みねの雨の音を松にゆつるの池そ涼しき。

その野原のやうなる處は大池にして、鶴のあまた群れあさり、雛をかいそだてたりし處あり、それを入して、まほらせられしといふ。そこの名を子鶴の池とて今も呼ひたり。ひんかしに遠からす、水のしろ〳〵と高う落るは神田ン、八ッ柳、岩瀨、中村に入りく、是を犬塊（いぬくゎ）の堰といふ也。この水の行めくりては矢橋に渡るてふ。かくて、かへさに見やる大臺の塘のよ

舊蹟處々

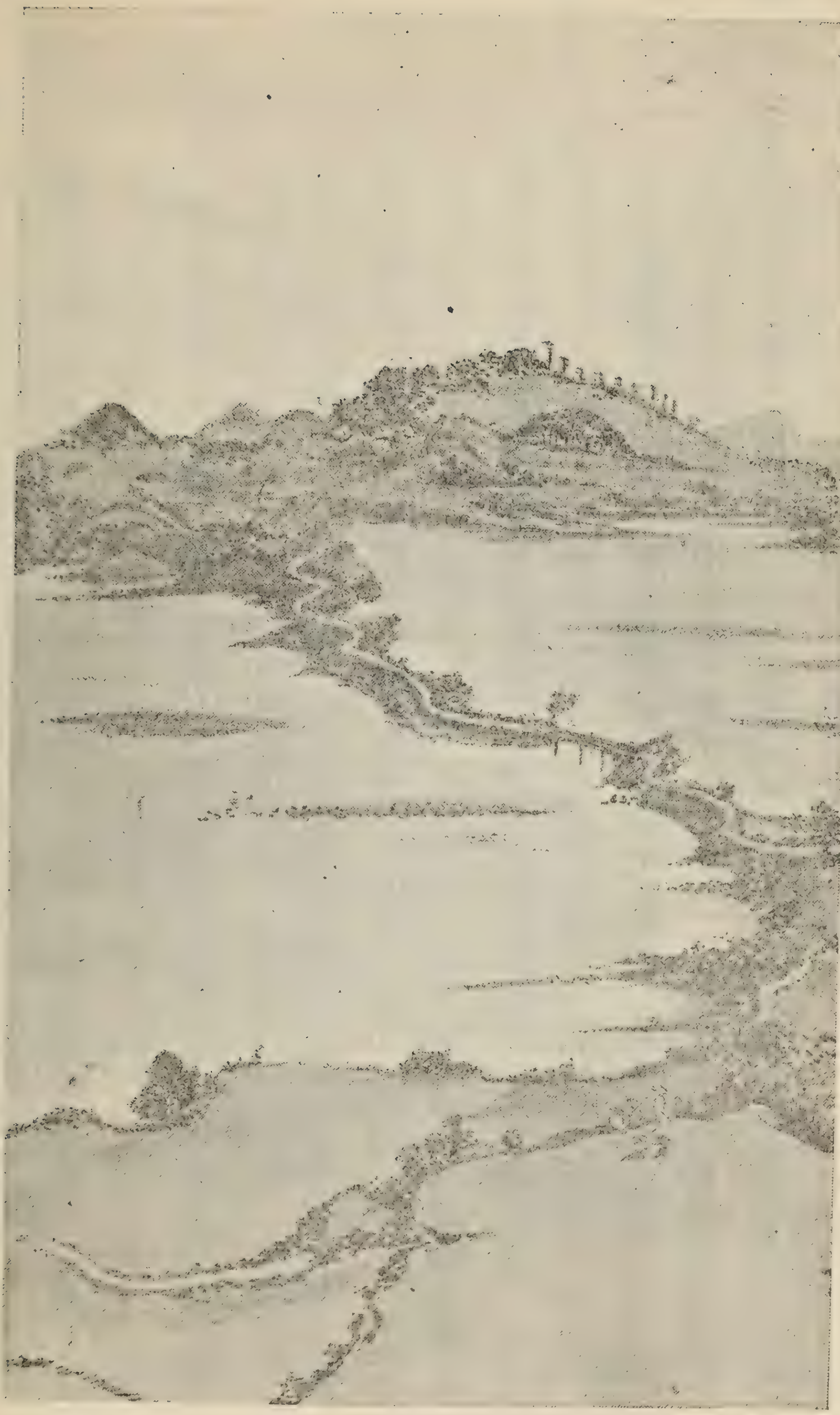
こなかね、伊勢のおほん神を齋ふ。そこの下つかたには馬隱し澤とて、その亂し世に、君の馬をひきかくしたるところあり。鹿嶋の神垣ありてけるほとりには頸塚あり、木畠が澤もほと近し、村に下りぬ。横町、町口、門前、彌藏小路なと昔の名あり。甚兵衞小路といふ名あり、これなん陣場小路を訛りていふとなん。岩城の臣にて大張氏の末作右衞門といふあり、安養寺治部之助の末は角右衞門とて、此家に、近きまて具足、よき横刀なと傳へしかと、やはしかりける世に、うせたりしものかたりもありけり。神ぬし近谷宗光の家に、しのぎいたく

神王寺歷世

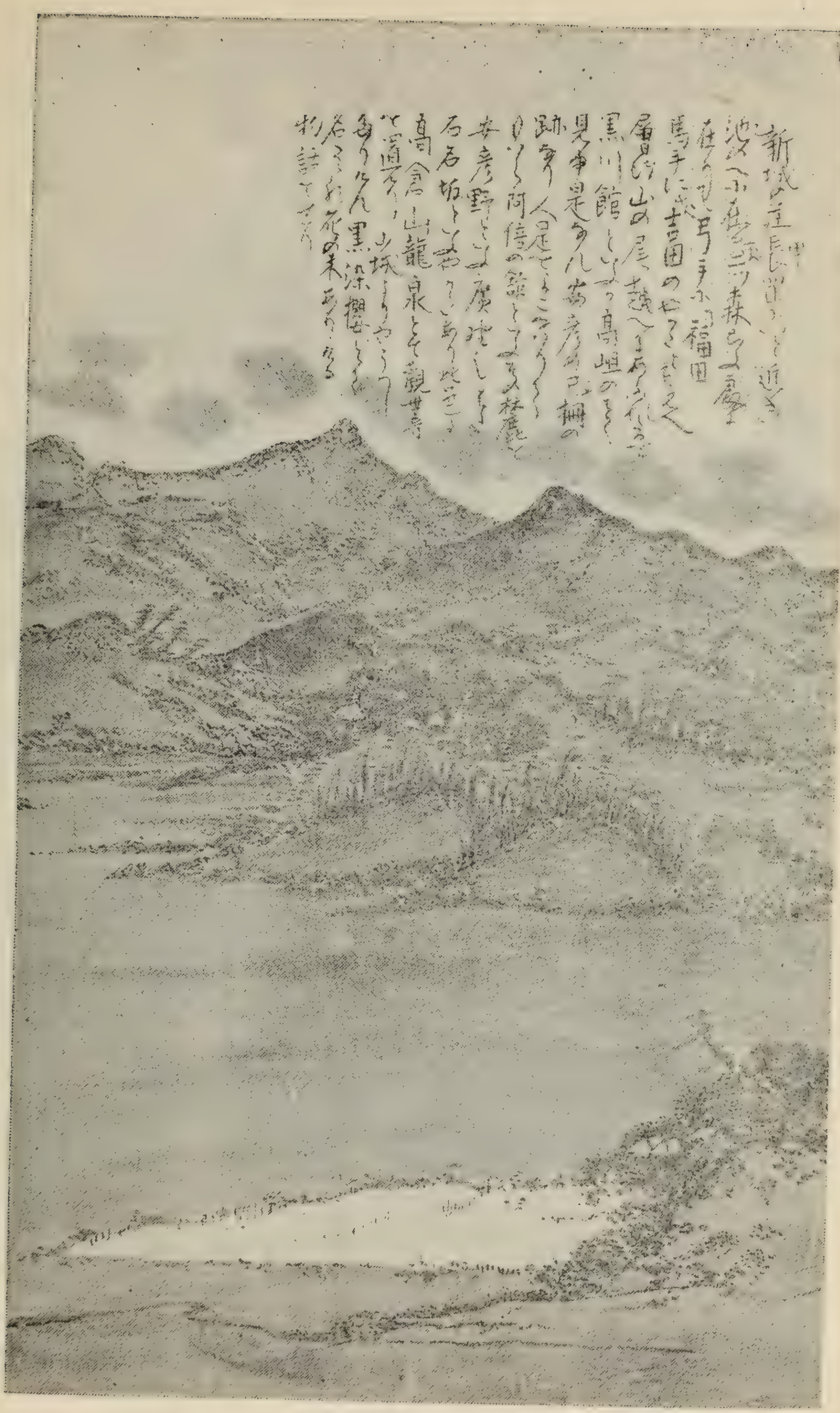
削りなしたる友次の二尺五寸を藏めぬ。龍寶山寶藏院神王寺法印玉容、その子善隨坊玉豐

同寺重寶

などゝ居ならひ語りてけるを聞つ。上祖は鈴木重家なり。八嶋の戰ひのころは重家の代にして三人りの子あり、一人は越後に栖ぬ、ひとりは四國に渡りぬ。重家の舍弟助家か、熊野別當丹宗に心替りしてければ、重家も九郎義經のおほんうたかひを蒙りて、藤代にひき籠りて居れり、かくて七とせを經たり。重家の五郎なりし藤家は、伊勢の國に在りて神主となれりとか。此藤家はるばると陸奥に來て、平泉にいたりて父のうち死のあととふらひてんとて行しかと、四品のうたかひにちからなう白川の邊りをたとり、棚倉といふ處に來つゝ彥六といふ家にとふらひ、此あるしに平泉の戰ひのなり行をつばらに聞て、常陸の國に入て太田にすみて今宮の家につかへて、藤家の名を尊盤とぞいひける。芳野のみたけさうしのころも師にしたかひて、頭襟すゞかけにけんざき卷て、すきやうしけりとなん。一世寶藏院尊盤、二世常覺院峻賢、三世寶性院尊養、四世寶藏院峻養、五世寶性院尊宥、六世寶性院尊清、七世寶藏院尊榮なり。文治のむかしより、いま八世寶藏院玉容たり。三郎重家の家のふみあり。はた、神護景雲のとし光仁の帝の霞衛嶽にて御劔をうたせ、南無地藏大士の像を作らせ給ふ、これを花園地藏とて世に聞へたり、霞のみつるぎたちは傳らねど、花園地藏菩薩のみぞ殘りたる。此菩薩に副書ありき。其詞云、「紀州熊野本宮、花園地藏大權現之尊像、並本地緣起卷物一本、右者讓汝者也、永後代可奉尊護者也。」とぞ聞へたる。

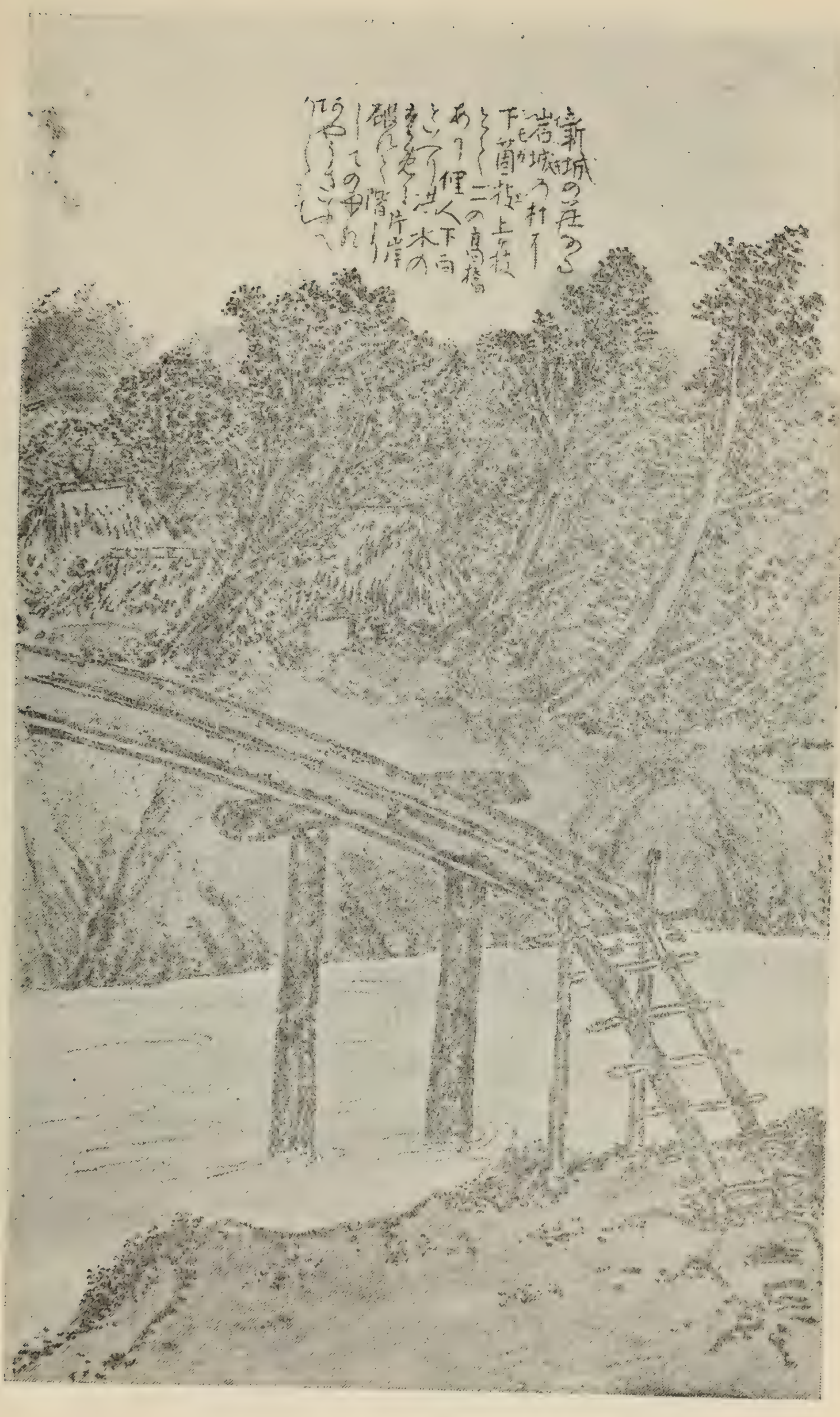






錢迺金棣棠





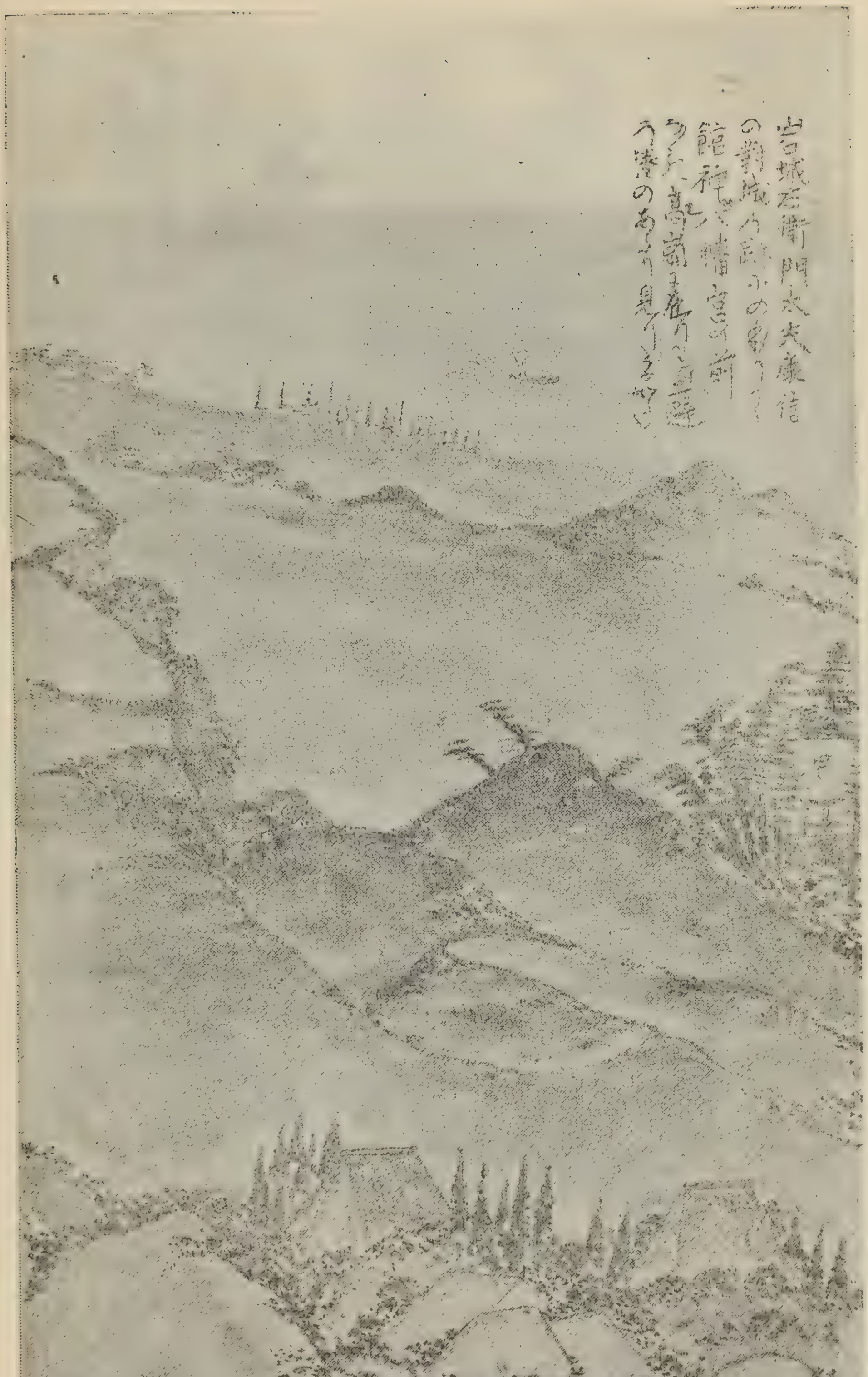
詹迺金棣棠





譚 迺 一「金 棣 棠



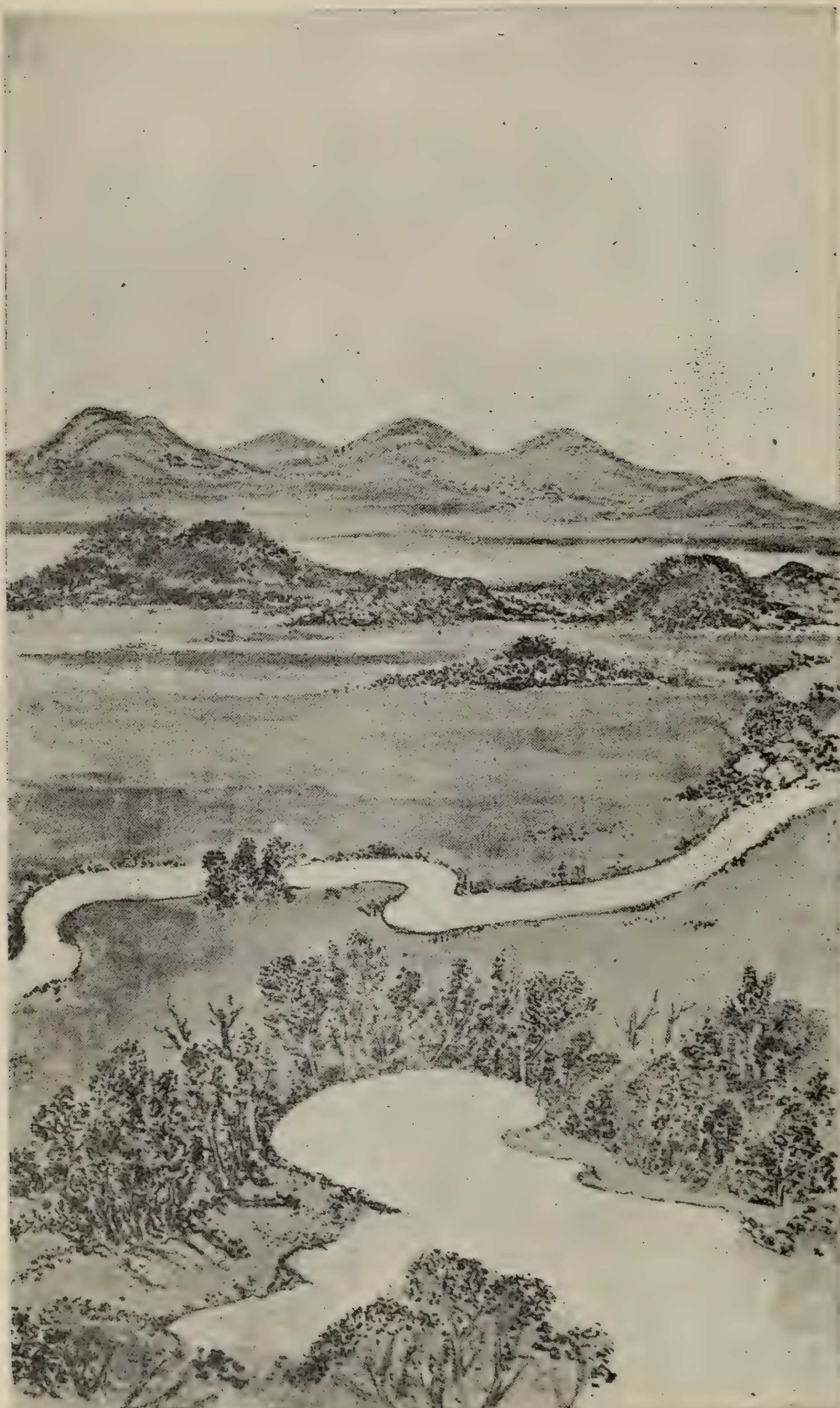


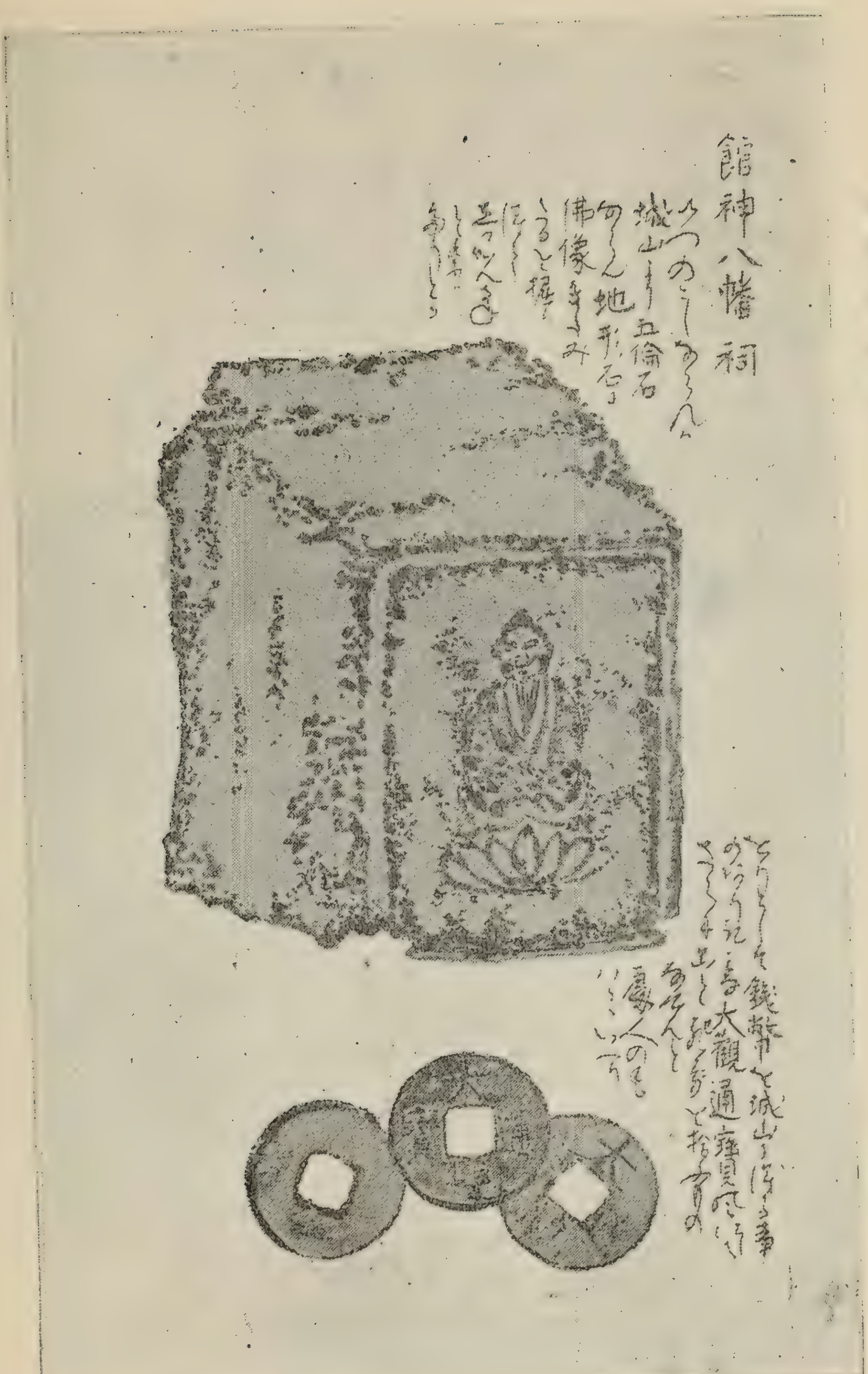


犢酒金棣棠



齊洒金棣棠




館神八幡祠

伊藤喜右衛門家藏

[illegible]

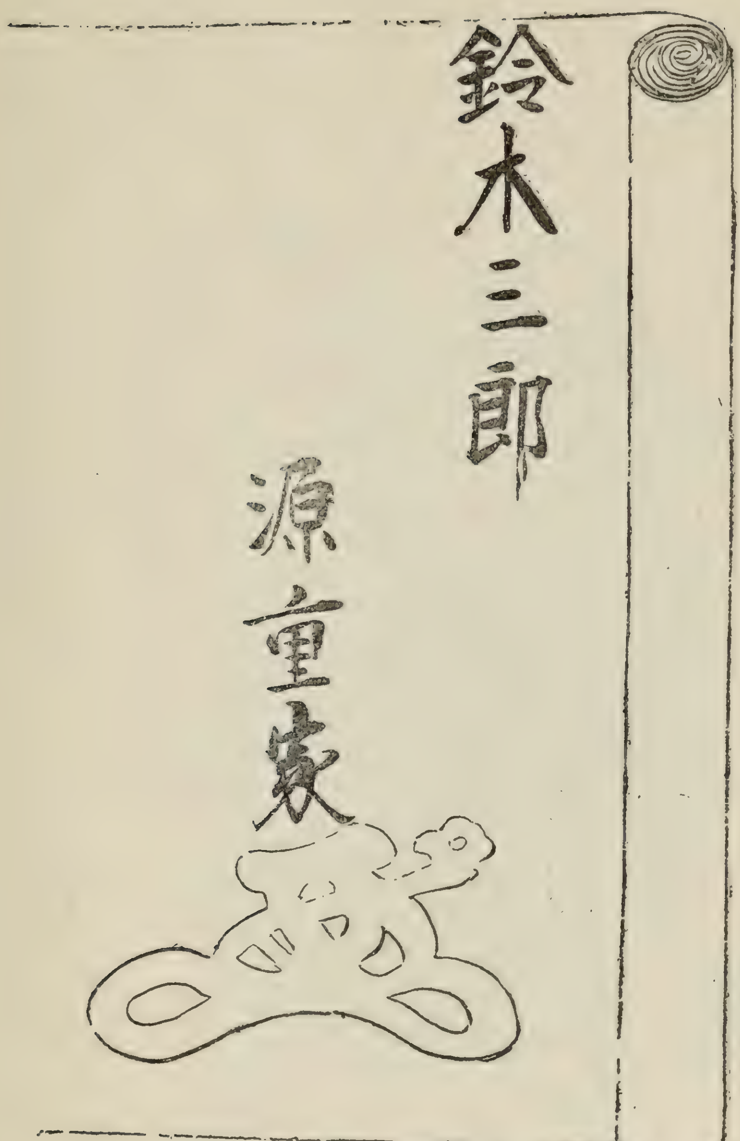
胴廻一尺八寸　高四寸五分

口亘　三寸四分



岩城村神王寺家藏

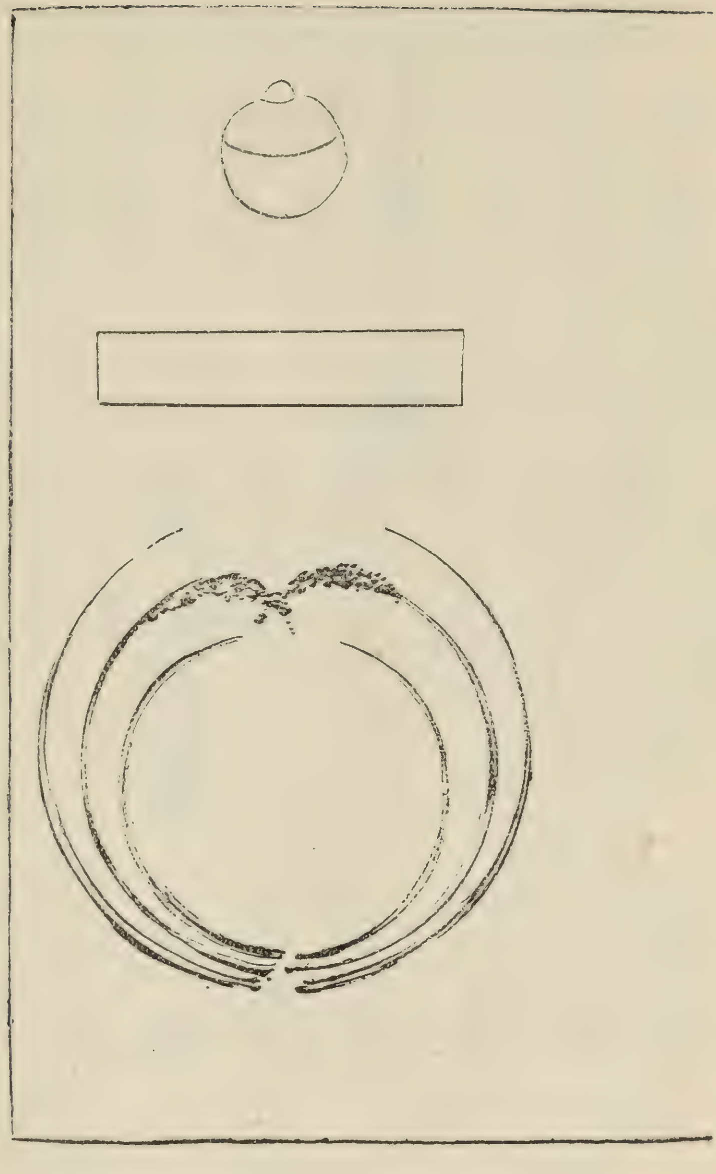
其一



重家　廣家　助家　義家　賴家　常家　賴家　藤家　種家

重家　經家　持家　平家　秀家　高家　貞家　宗家　為家

信家　住家　胤家　次家　直家　伊家　村家　藤家



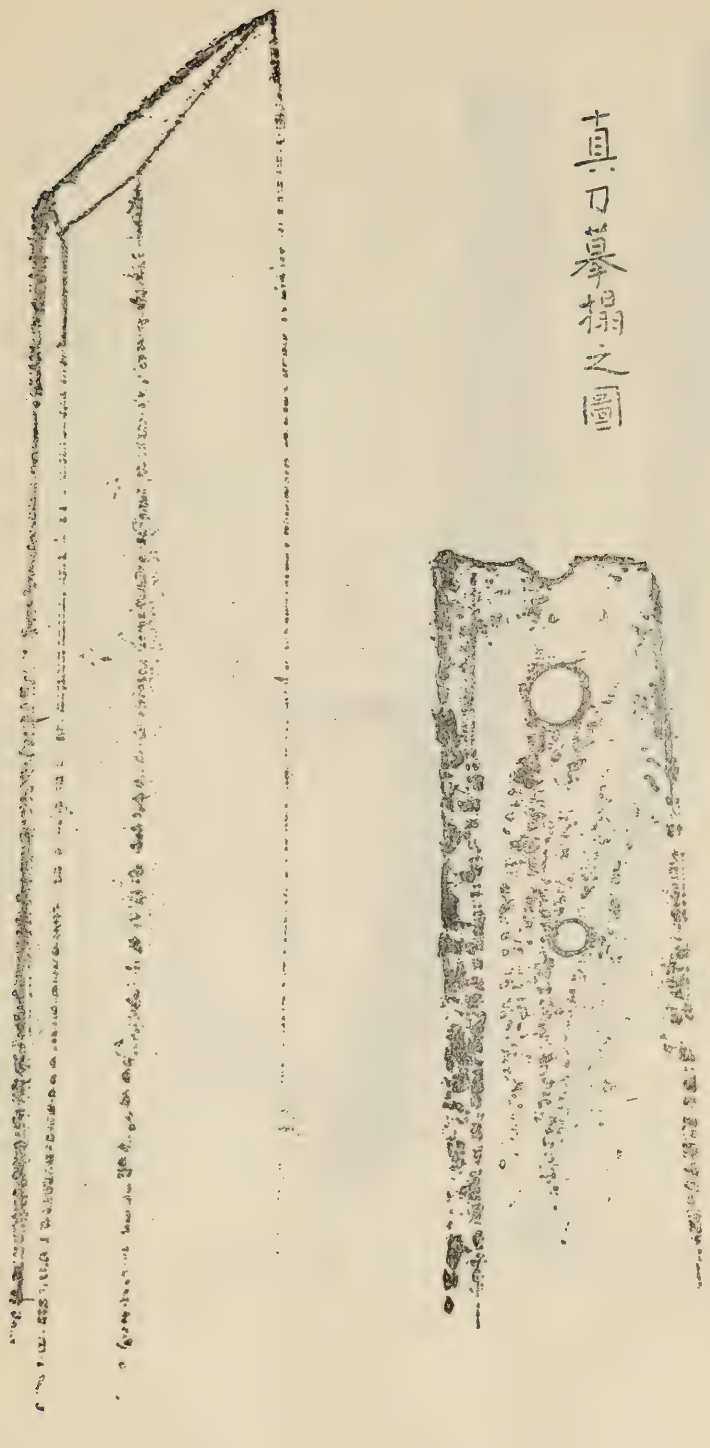
其二

常覺院芳野の嶽ニ行しとき祖師よりつたえりのつるき横刀の
うしろてまいりて帯しけるとぞありし
拵造ノ鞘甲一尺五寸七分　乙一尺四寸六分乙



其三

真刀摹搨之圖

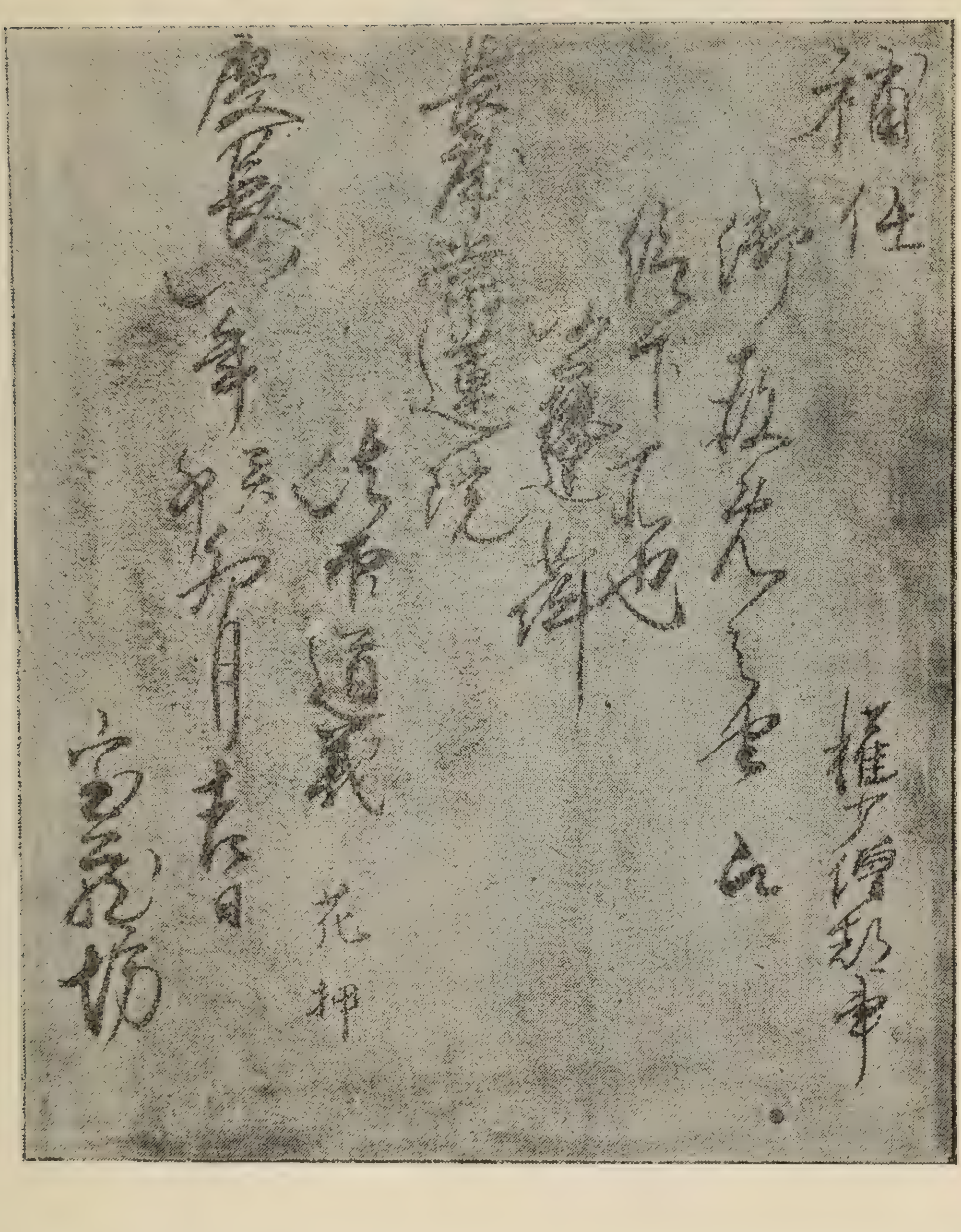


其四



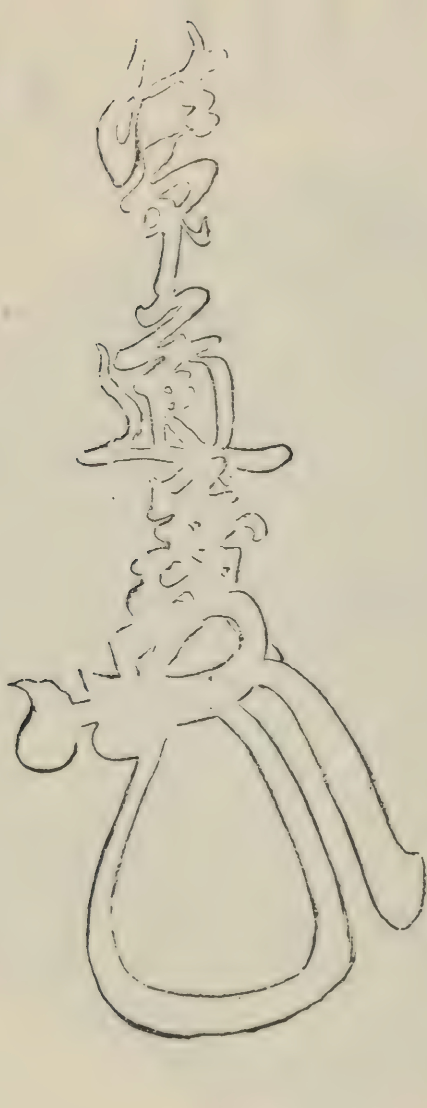
其五

臨書



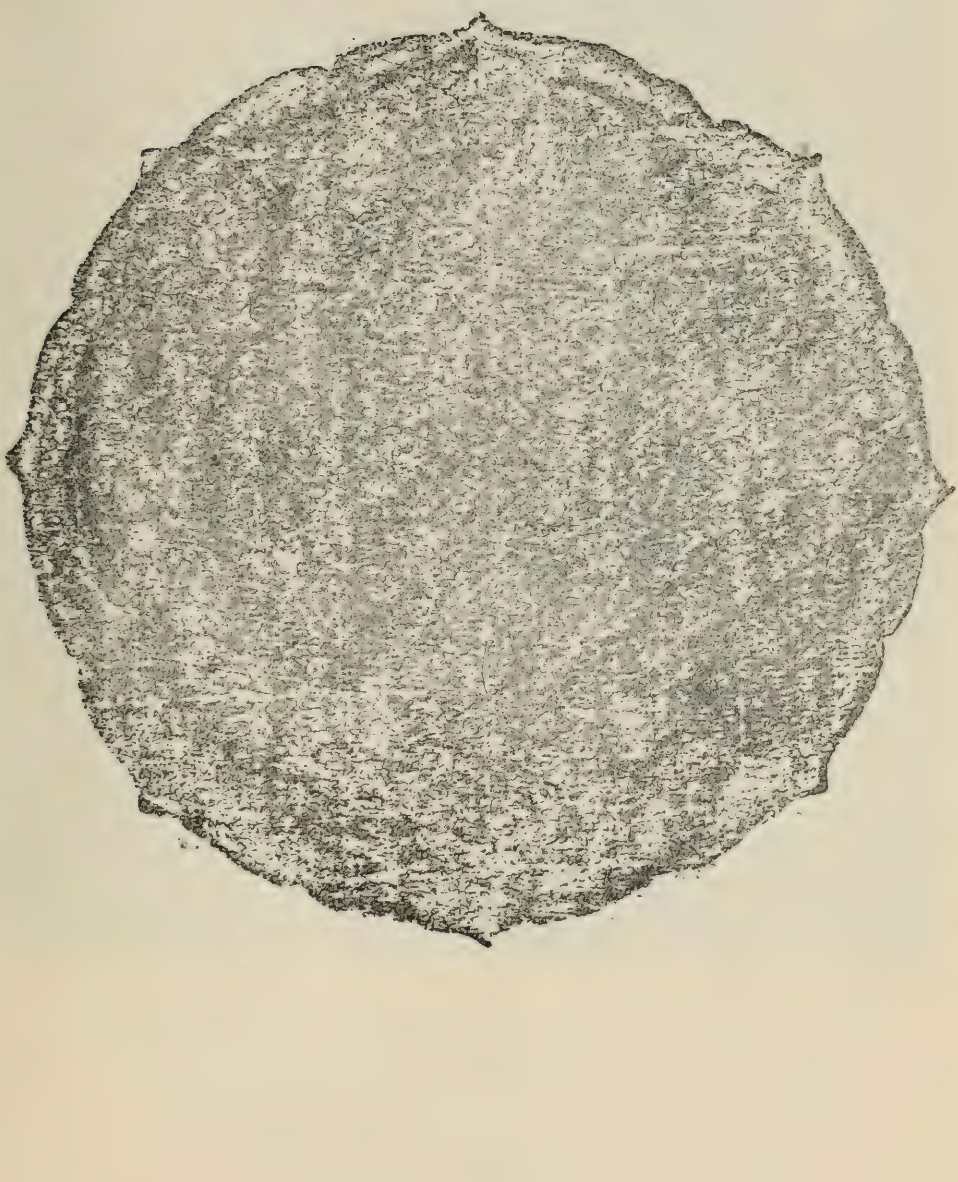
其六

道義花押摹書



子懸山觀音堂寶物
花菱鏡　其一

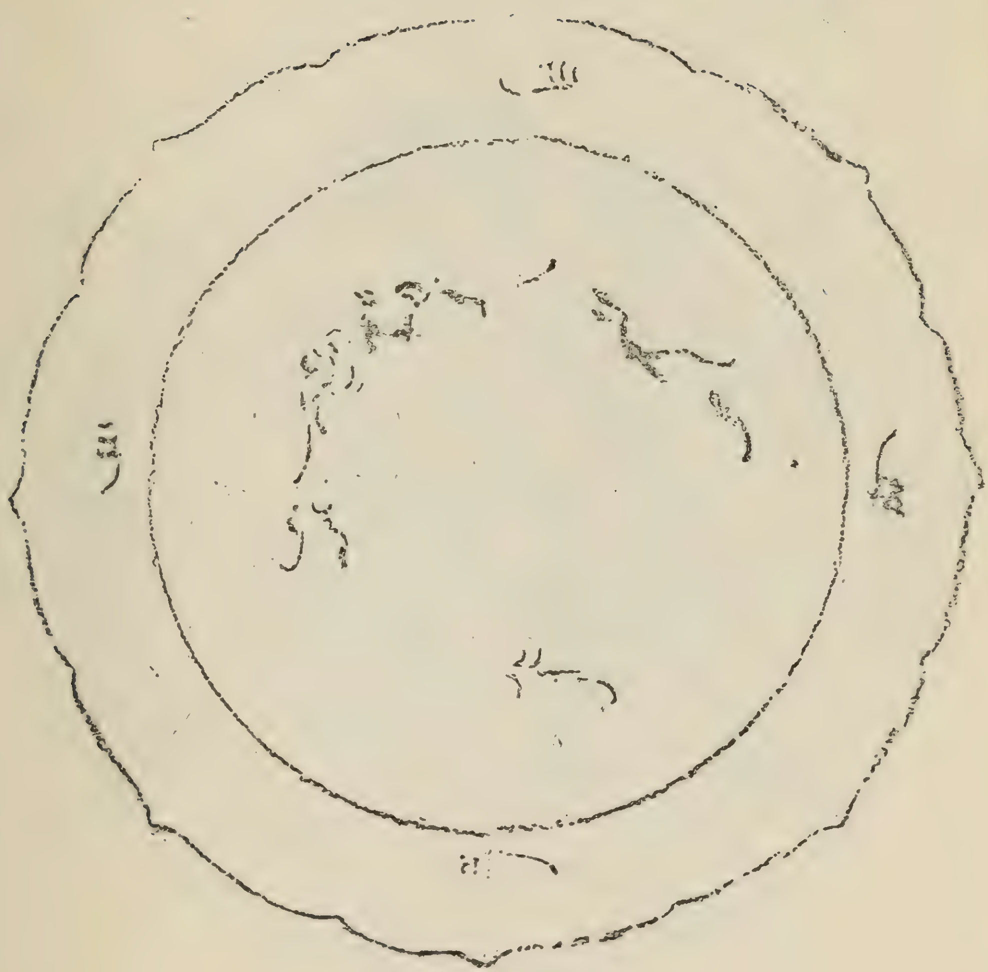
面中にあすらのごとき像を彫たり。搨墨の力をよはねば其二に摹してこれを備ふ。



其二
摹圖鏡面像



其三
鏡背摺墨花葛之圖



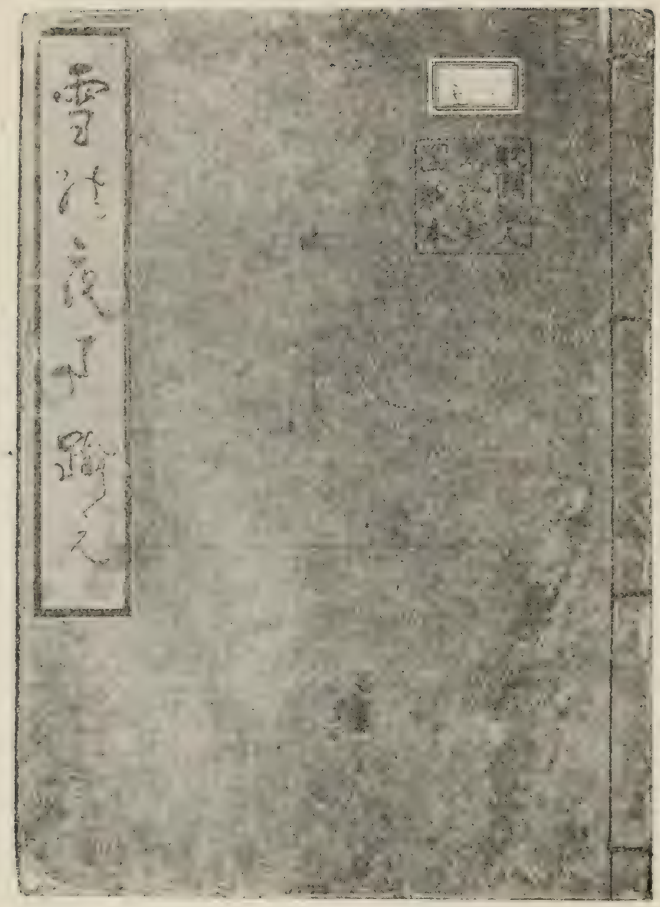
五城の目森明庵乃記

いかにうはらやうれしかるらんと、梶原景時のなかめありつるたくひにこそあらさめれ、この里にも母黎夜麼とてさかしき山あり。その麓にひとつの屋戸あり、荒河光弘の、なりところのことにしてつねにすめり。伏原中納言宣光卿のおほんふみでのすさひ也ける、森明庵といふ額をそ掲られたる。眞木の柱つや〱ときよげにたてなし、木立奥ゆかしく見入よしある栖居也。霍公鳥は待てしも聞なん、琴の海もいと近く、峯の松風吹通ひてしらへ涼しう、夏なき庵ともいはゝいひてんかし。春は櫻の雲ふかうかゝり、いやたつ松杉のなかより見へみ見へすみ霞わたるに、鳥も色音をこほし、秋のゆふへはあはれことにふかう、人まつむしのこゝら鳴音に友も訪ひ□□、しら露も時雨もいたくと聞え渡る。淡海路の山におなしう、こゝも名たゝりて下葉のこらすもみつるころは、倚しめやかに見やられ、はつ太雪零るまてひとゝせのなかめ飽たらす、わきて花の曙、雪の明仄のおもしろかりけれは、うへも、森明ちふ辭もしかすかに聞へたまふものか。

涼しさよ樂しき宿の木の間より月雪花も森の明ほの。

文化八とせの夏　須賀衣眞澄かしるす。」

雪のやま踰え



五十目出立

貢負ふ人々

猎物語

○ゆきのやまごえ

としはつる月のとをかの日、五十ノ目ノ郷なる古河町チの肆かどや彦兵衛某がもとにあまた旅ねて、むつびしたしまれたるなさけ淺からず、外にいつるとて、

　　あつぶすまなごやがうへにいく夜寐てこよひは雪のくさまくらせむ。

やかの人とら、をさなき童までもみな出たちて、春はこゝにまたも來ませ、此いやふる雪の山越えさぞな行なやみさもらひなむなンど、なさけ〳〵しう聞ゆれば、いとゞたち別るゝ眞袖も氷るこゝちせられて、やをら田町チといふところに出たり。そのゆゑよしある辻の地藏堂の前ト浮石田のくろ路を經て、山內ノ郷近づくほど、貢にやあらひかし、よねあまたおひつれて、いと〳〵太き横首杖を雪の中におし立て、鹿杖上に負ひながら俵するゑて、立ならび休ひ話る。此ごろ久保田の寺町に猎ありて、うたひ舞ひ、あるは巧木曳のまねをし、また、なも

あみだぶちを書ておのが手形をおしたるなンど、あやしの事どもをくち〴〵に云ひしらふ。こは傳へ聞し、かの專念寺に狢すみて、露斗その業せし事あるを、雨山と云ひたつるにこそあらめ。出羽、陸奥、高志に狢多く、佐渡には狢の福者ありて、ひんぐうの人に黄金を借したるものがたりあり。また書紀に、みちのくにうじなありて、人にまじりてうたをうたひしこと見えたり。

浦の里の狢

また此處に近き浦の城主三浦兵庫頭世に在りしころ、浦の里にて盆踊する群女に交りて、紅の帽子なよゝかにきなして、みめよりはじめ姿よき女の、夜な〳〵ごとに此柵より出來て聲能く唄ひ、しなよく踊るさま人にこえたり。群れたつ人みな、此女を見てむ、唄聞てむと、日くるゝをおそしと、かなたこなたにつきまつはり、女の歸らむかたはいづこの宿ならむと、うち群れしたがひ行に更にふけて、うしのすてつゞみうつころ深き林の中に女の聲にて、虎子〳〵と呼ぶにいらへして、かいけつやうに見えざりしとなむ。そは、とらことといふ少女狢にてありしとなむ。今も盆踊の一トふしに殘りて、「浦の城から出た丁女、としは十七、名はとら子、いまを盛りと咲たる花よ、人が見たがる折りたがる。」とうたふは、そのうじなへんぐゑの女の事となむ。

久保の狢

また此近きあたりに久保といふ村あり。そこに夜更人さだまるころ、なにならんか地をしとゝ打ッ音して、地震の如に家〳〵ひゞき渡る事あり。そを狢の野槌うつといへり。其村の自正院とかいふその禪舍あばれしかば、こぼち

て、ふたゝびおこし建むとせしとき、人の柴小屋に、毛もはげたる古狢の死むくろあり。こやその寺に栖たる、としふる狢の穴まどひして死たるならむ。それより野槌うつてふ事はふつにせざりしとなむ。百鬼夜行ノ圖に、野槌のへむぐゑといふものゝあり。うじなのばけものにや。また、狢のたぶてうちする事古きものにも見え、近きころも、久保田にて夜な夜なたぶてうちたりし事あり。此狢といふ事を皇都、また吾妻にても狸とのみ云ひ、高志のくに、陸奥にては狢とのみぞ云ひけらく、またみやこぢ、あつまぢにては天狗の事をもはら語れど、こなたにては山丈、山姑なンど云へど、天狗の事はさらに聞えず。是も狢狸をもはらにいふにひとしう、狢はみやこぢ、あつまぢにいへる狸の事也。狸のはらつゞみ打ッてふ事さへ、むじなのはらつゞみとぞいふなる。牝牡のたがひにや、世にいふ浪速のあしは、いせのはま荻にやゝ似たり。「あれはててかねも音せぬふる寺にたぬきのみこそ皷うつなれ。」此歌もこのくにうどのよめらば、うじなのみこそ皷うつとやいはむ。皇都の回祿しとし、いづこも〳〵廣野のごとくいと〳〵淋しう、夜は狸の腹皷をひたに敲て、身の毛もいやだちすゞろ寒くて、夜はさらに行かふ人もあらで、更にふけ行ころなほさびしさのあまり、蘆菴ひとり琴とりながら、「さびしくは狸つゞみうて琴ひかん吾れ琴ひかんたぬつゞみうて。」とよめれば、このつゞみうつ音は絶てせざりきとなむ。人々、狸をたぬ、またのなンど、省語もて

よめるためしやはあるといへば、蘆庵こを聞て、狐をきつにはめなでとよめるたぐひにこそあらめといへれば、とひし人は口をつぐみしといへり。おのれ考ふに、きつねをきつにといふ。その邇字てにはにあらず、狐、きつには、奈邇奴爾のに通へり。そを、とひつる人の口をふたぎたるもまたをかし。

山内村

山ン内ィ村になりぬ。此あたりはいくたびも〳〵見し處なれば、つばらかにはものせず。さりけれど、ふりつみし雪にひときは氣色かはりて、野山の姿ことに面白く見やられたり。山内といふ處、此秋田路にいと多し。みふみに寒苗とあるは此處ならむか。佐牟奈以もと蝦夷言にて、倭人澤とて、蝦夷國に其地名あり。サムナヰはシヤモナキ、またショナヰの轉音ならむ。秋田に蝦夷人の住たる地いと〳〵多し。此雪の中にながめて、

春はまたこゝに萌えなん寒苗の寒き山田は雪埋むとも。

古跡

上ミ山内村に、かの山内右衛門尉某の柵趾あり。また猿田五郎が館の迹は、猿田の澤とて名のみ殘りぬ。其末苗今五十目の樋口豐口とも村にありて、その家みな麻呂木の杜にて、五百とせを經るよし。猿田五郎戰ひにまけしは天正のころならんか。また此家は往古山伏の住みし、其家を借りて猿田の館とせしとなん。其山伏は熊野ノ修行者にて豐口村に末あり。

圓通寺

楞嚴山圓通寺といふ曹洞あり、むかしは眞言にて、この寺は松前のとのゝ菩提寺にして松前に末

をなごの林

いがしま

七變りの池

院多し。また山內右衞門尉の寺也。佛前に天光通青大禪定門、天正七己卯年八月十五日」とゑりたる靈牌こそ、山內右衞門某のしるしなれ。また御寺の寶物をはじめ、此あたりの事どもは「浦ノ梅園」といふ日記にしるして、こゝにはつばらかならず。かのみてらも、雪の中に零り埋れてぞ見えたる。此寺におし並て袁南碁の林とて神ませり。そは大天魔、また魔王ノ神とまをすを齋るといふ。しかいふ大天魔の名は、雄勝ノ郡の山々に在る地名也。こゝに、をなごといへる名の、同秋田ノ郡松原山內にもあり。また、この五十ノ目山內にもあり。こを考ふに遠奈古は宇奈古にて、續紀卅六卷に、寶龜十一年八月乙卯、出羽國鎭狄將軍安倍朝臣家麻呂、狄志良須、俘囚宇奈古等欵曰、己等據憑官威久居城下、今此秋田城遂永所棄。」云々と見えたり。さりければ俘囚宇奈古や、此處にいにしへ住みたりけむ。松原山內も五十ノ目山內にも宇奈古のゆゑよしこそあらめ、蝦夷の名は今もおなじ名のあまたありき。書紀天豐財重日足姬(齊明天皇の御事をまをす)のみまきに、いがしまといふ蝦夷ありし事見えたり。今も松前の西磯に五十日嶋といふ夷あり。いがしまとは物の餘ることをいへり。から文字に云はゞ十有七、十あまり七ッなンどのたぐひ也。そをもて蝦夷の名とせり。みちのく南部にて末の子を與豆といひ、よて子といふ。同津輕にて迦須といひ、かす子といふ。そは糟にて、撰り滓てふ事といへり。また、いがしまも末ノ子なンどをいへるにやあらむかし。七變化の池あり。

此ゆゑよしも、「うめの花ぞの」の中になほ書(のせ)つる也。此城山の麓あたりは天正のころ、むかしの町並の跡とて崩れ殘りて、田畠の字に大手、二廓(にのまる)なンどいふ處あり。かくて中津股川を渡りてしばしイ(たゞず)めば、黒ロ土チといふ村見ゆ。野も山もみなくろつちなれば、村ノ名しかいふと、あない雪にたゝすみていふ。

黒土村

野も山もみな黒つちの名にも似すたゞしら雪に埋むやま里。

この黒土の石井與右衞門といふ里長(むらをさ)のもとに、久保田の琴齋ふみあつらへて、かねて事ものし聞えつれば、いと／＼めやすく、この石井の家にやどづきたり。あるしなにくれとねもごろに聞えて、雪の寒さも忘れたり。此石井氏は石井彌兵衞尉某とて、山ン內ィ右衞門尉の家士(このひと)たりしむかし語りをせり。

伊差麻山

此村の伊差麻山の尾に神明ノ社あり。能差衣(のざえ)といふ處に在(ませ)る稻荷の御神をうぶすなとして、三月十三日花の眞盛りに祭して、山ン內ィの常樂院といふやまふしがいのり、みずきやうを奉るといへり。鉢杜(はちもり)、八幡峠、水上ノ澤なンどいへる處、いさまやまの麓あたりに家はまばらにたちならびて、雪ことにふかき山里也。おなじ村ながら羽立(はだち)とて、ことと村のごとにうち隔る處あり。なめて此あたり近き村々は、小倉(をぐら)、湯ノ股、淺見內の溫泉、又大馬ノ澤といふあり。

大馬澤の大鐒明神

この大馬澤には牝馬のみありて牡馬はあらず。牡馬は住まねど女馬ははらみて、よき馬も產(うめ)り。他處より男馬の入り來れば、いづことなく牡馬のはせ來

餅搗き

富田村

て、その男馬をかみころしけるとなもいへり。そこの山の上に大津馬ノ祉あり。そは亘八寸斗、めぐり二尺五寸、その形鐵の藥研の鐔のごときものを神體として、大鍔明神と齋ひ奉る。其ゆゑよしをさらに知れる人なし。おのれ、七とせのむかし登りて見しところ也。

十二日。やかの隣のあるしは相しりたる家にて、二三日はといへれば此宿に移ぬ。けふは山ノ神祭るとて家ごとに餅搗く。いと〳〵細き杵を、撞木のごとに作りたるを七八人してつくに、杵のすれ合ふ音して、また連架てふものもていがしねの庭うちする音して、また水鷄の鳴やうに、をやみなく聞えしかば戯れて、もちくひしのちよめる。

飽クまでももちを水鷄のあたゝかさ夏こゝちしてはら叩く也。

久保田、土埼のみなとなゞの人々のもとより、としたちて樋打火内(ひない)よりしかいへりへいきね、此雪深く、いかでか山越の道ふみ分てむ、とく〳〵歸り來と、ふみもていへる返り事に、

春はなほ越へやわひなむ雪の山身に一とせのふりもつもらば。

十五日。富田村に來る。この村ノ名は、松のちゞりもて濱栗を燒く伊勢ノ國桑名ノ郡富田の鄉をはじめ、尾張、三河、その外にも多かる名也。また姓氏にもありき。新編東國太平記に葦名ノ盛氏の事語るくだりに、永祿のころ、みちのくの領主葦名ノ修理太夫盛氏といふ人あり、しか〳〵。葦名義廣は、いかにもして政宗を追ひ拂はむとさま〲思慮をめぐらされける

藥師如來社

天昌寺

原田氏にて

字名光神（いかつち）

ところに、富田、平田さへ政宗に屬しければ、今まで兩心なげに見えたる郎等どもゝ、悉くとみだ、ひらたに一味して云々（しかじか）」と見えたり。此秋田路に、葦名の家士（このひと）の末いと〳〵多し。この富田村も、その氏の末ありて墾（ひらき）たる田地の名にやあらむ。此村の高岨に、伊豆筥根の御神を遷し奉りて藥師如來ノ社といふ。四月八日ごとに山ン内ィの山臥常寶院がいのりし、みごきやうして齋（まつ）り奉るといふ。寺あり、舊（もと）は山内の圓通寺の閑居寺にて、松原ノ補陀寺の四世和尚の勸請（みたま）を開祖として、富田山天昌寺といふ。今廿一世にて鐵雄和尚こゝにすめりとか。此ゆふぐれつかた、原田儀右衞門といふぬしのもとにつきたり。相知りたるあるじにて、ねもごろに事聞えたり。ことしも田ノ實水に流れて、いつも〳〵やはしき年のみをへぬ。名こそ富田なれ、かくては民艸もみなかれ〳〵になりなむ。此郷の榮ゆかむ末を祝ひて、歌ひとつよみてたべといへれば、

　里はみなとみたがへして豐なる千穗の八千穗の秋に逢はまし。

此家に持つたふ紺紙金泥の高野大師の書（みふで）とて、「子如來見諸衆生樂」といふ一行あり。その包ミ紙に歌書てと、あるじのせちにいへれは、

　めつらしなその名たか野のやまふきの色なる文字にうつすそめ紙。

十八日。雪いたくふりて、宇奈古ノ山、湯ノ股やま、鼈具理（へぐり）やま、黑土やまなンどみなかき埋れ

て、見わたす木々は春のこゝちせられて、あさびらけ行けしきことなり。

　ふり埋む梢は花の明ほのや雪さへ匂ふこゝちのみして。

此屋戸のあたりを光神といふ。そはむかし、雷公とけてその霹靂祭せし地なれば、水田字にもしかいふさなむ。かゝるところ此あたりにいさ／＼多し、しかすがにいにしへふりぞ残りたる。

十九日。ひるつかたよりものしてこゝを出たつ。家の人々、はやことしは算日なり。來ん春は、いとはやこゝに歸り來ませ、此山の花も見たまへなンど情あさからす聞えたり。

　さしくれぬ歸さは春になる神の山路は雪と花咲や見む。

中津俣川の獨木橋いとあやうく渡りて、深雪ふみ分るほど、あやしき跡の雪にふみ入りたるあり。あない是を見て、鼯鼠の足迹也。此ごろ家ごとにて猫のうせたるは、この牟佐々婢のわざにこそあらめ。むさゝびは脚の爪五ッ、手の爪四ッ、爪はくろがねをさしたるがごとにて、猿さへとり喰ふなンど語りつゝ中津俣の經緣とて、河の邊をつたふ細徑あり、また南に馬場ノ目川、北に淺見内川流て中津又とはいふ也。みな笹森山、黒森嶽より二瀬に落て一瀬となり、山内うなごの麓に落合、五十ノ目ノ里にて馬場ノ目河とひとつに流て、一日市のうまやより琴の湖に落る。中津又は美濃ノ國に中津川、洲ノ俣なンどあるがごとし。いと寒く岸も厚凍と

八田村

長面村

藏王權現堂

ちて、流るゝ雪に水も行なやみぬ。

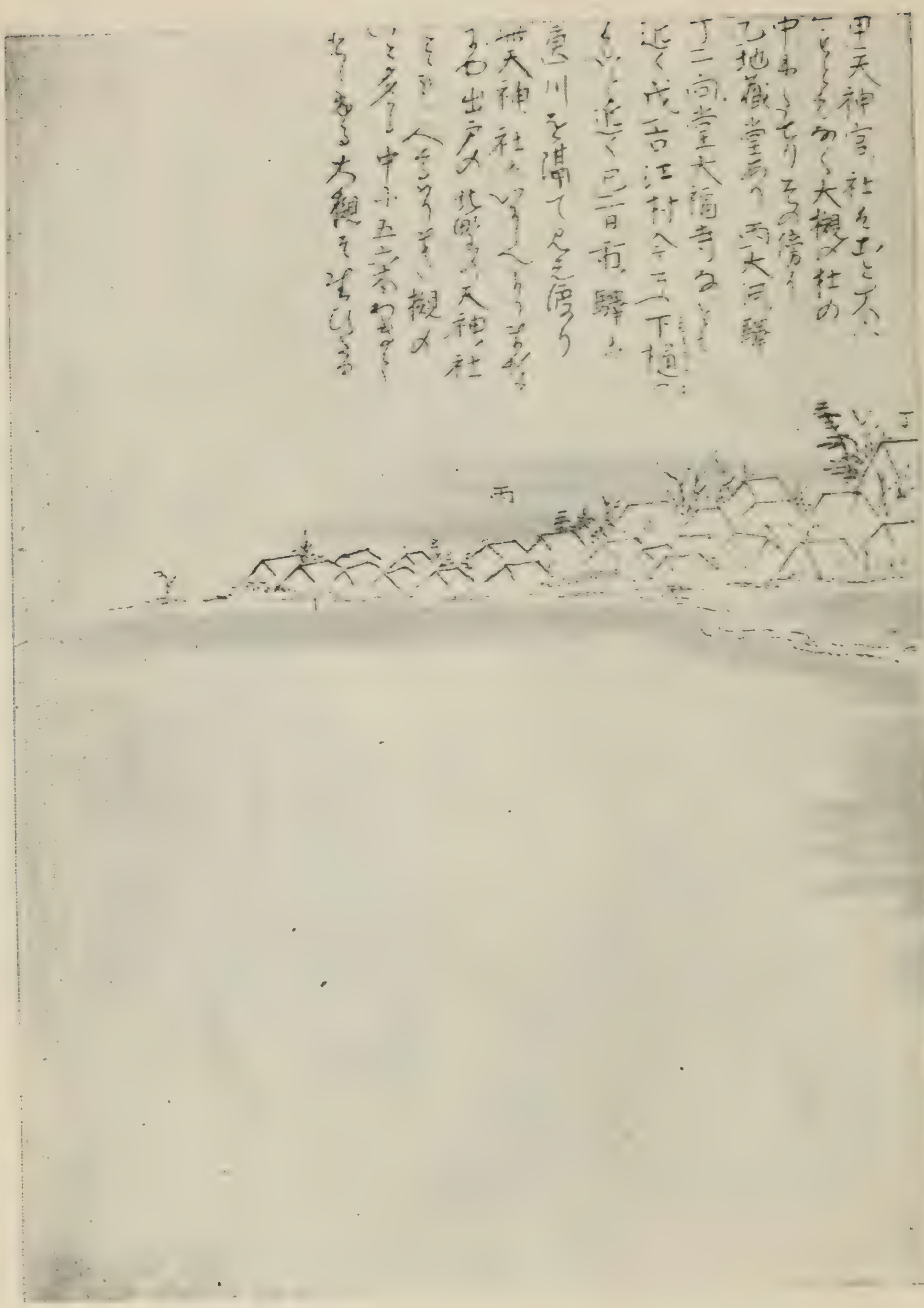
上津瀬やその下津瀬のなかつまた中なる淀やなほ氷るらん。

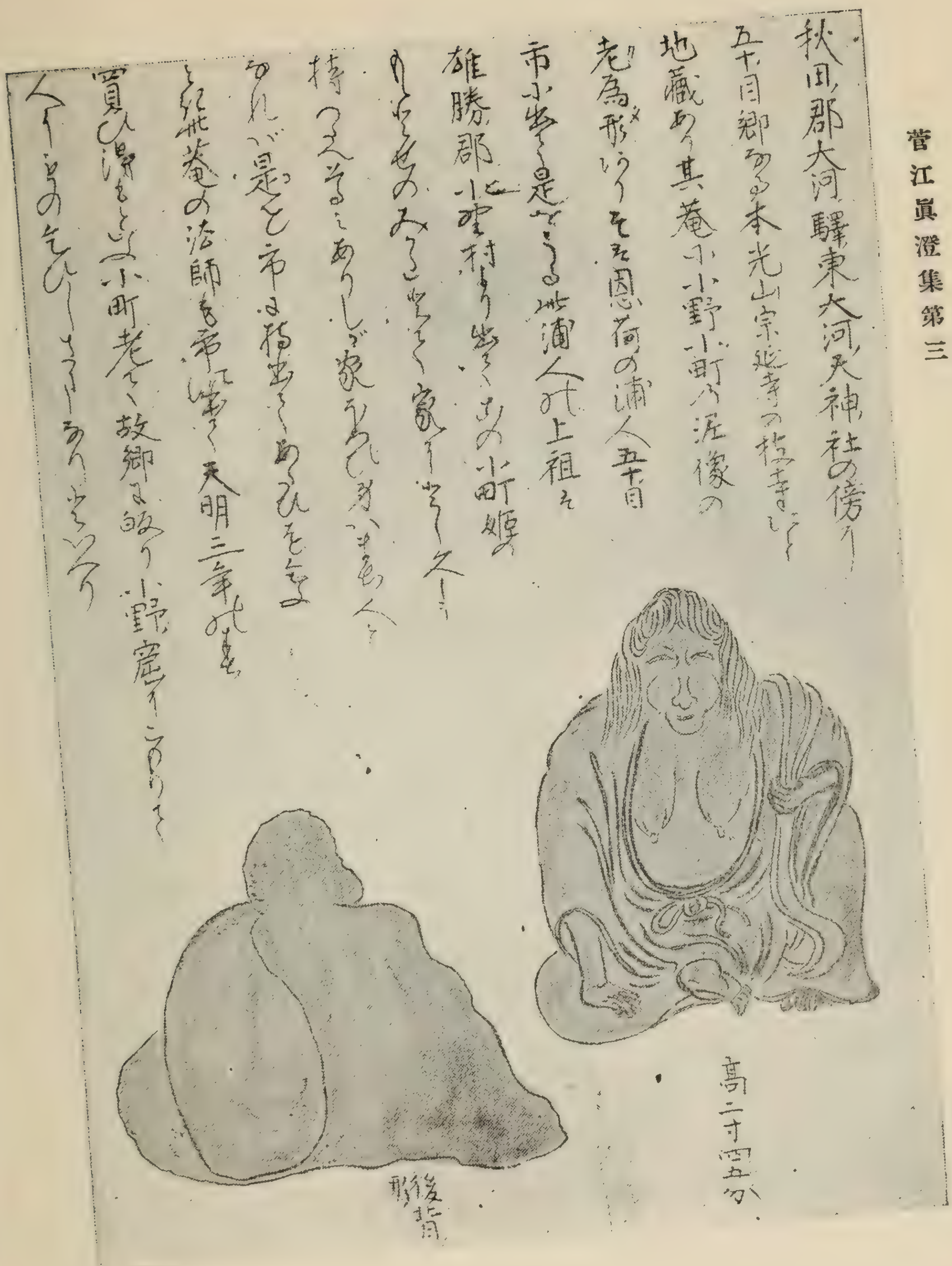
此處より中津又ノ莊にて、中津又鄕の枝邑多し。やまぐちに八田村あり。此八田といふ村名多し、また比八田、仁八田、八田大藏なッどいふ處もあり。西の山根に、皀角子の木に大藤かかりたる森の中に、住吉ノ御神を齋ふ。いつも、半夏生には田祭りをすといふ。また川向にませる若宮八幡の御神にも、御湯をその日に奉るといへり。そは、乙市村の龜藏院といふ山伏のへたう也。長面に至る。此名も、山本ノ郡岩川ノ莊をはじめいと〳〵多し。こゝを昔は豐ノ口といひしとなむ。また、河のあなたに御藏下タといふ村見ゆ。臺といふ村あり、乙市といふ處あり、こゝもむかしは、鰙田といひてゆゑありし處といへり。乙市の杉群ラに神明ノ社あり、やはたのおほむ神ませり。龜藏院大仝坊といふ山伏すめり。脇村に來けり。こゝに中つ又てふ名あり、こをもとゝして中津又ノ莊とはいふ也。藏王權現堂、山ノ神ノ社あり。寬文、延寶のとしならむ、大杉のうつほ木に大蛇すみたるが、天火て七日夜をへてやかれたり。その骨かうへをはじめ、いと〳〵おほきやかにてあまたありけるを、あらこも七重につつみつかとして、そを藏王權現とは祭り、としことにあらたにこも一重を包みかへて奉る也。

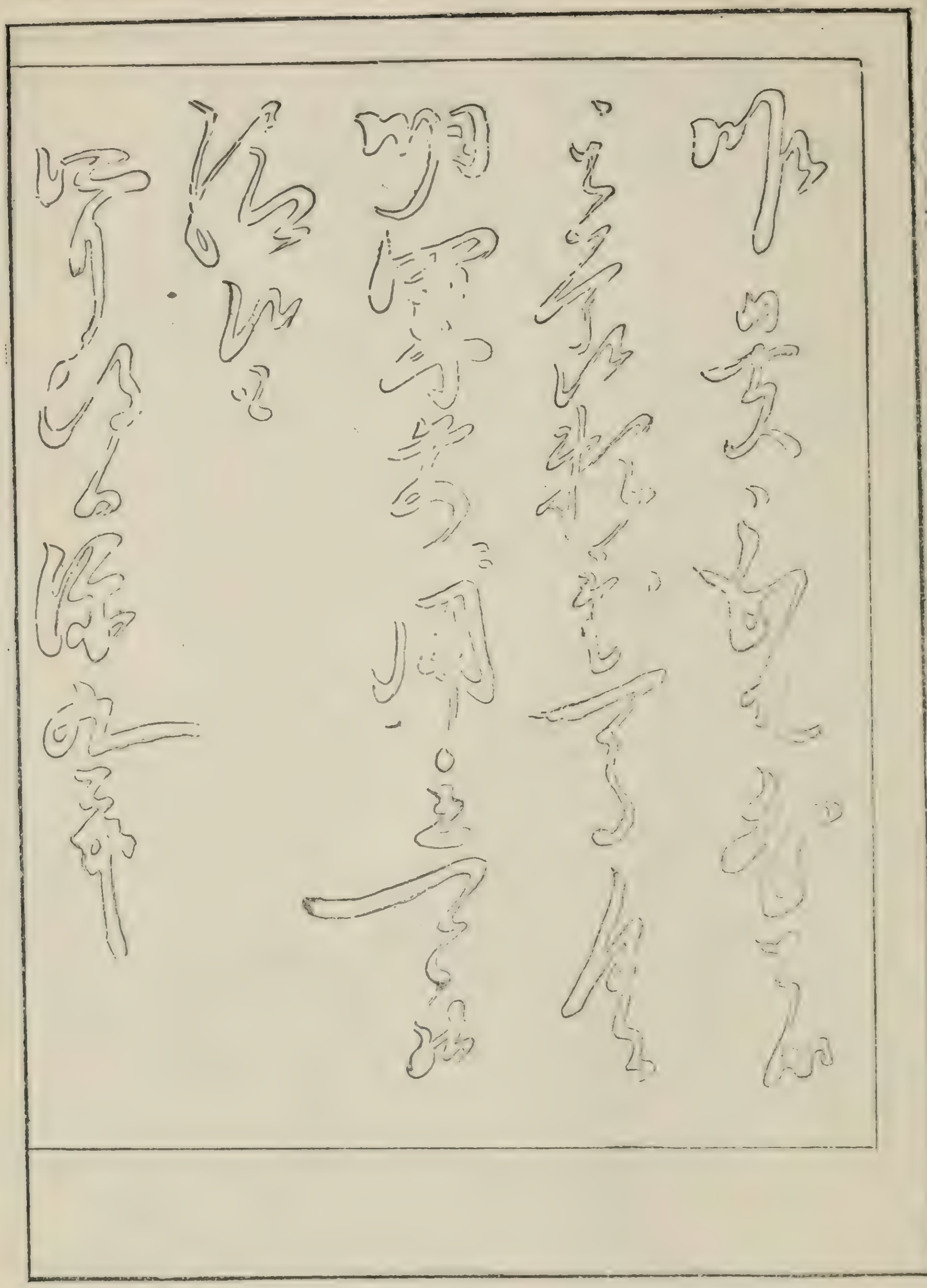

丙
五十ノ目ノ古城ハ
甲
前北良の
北なる砂ノ澤と
在り丁
川を隔て
丙
丁

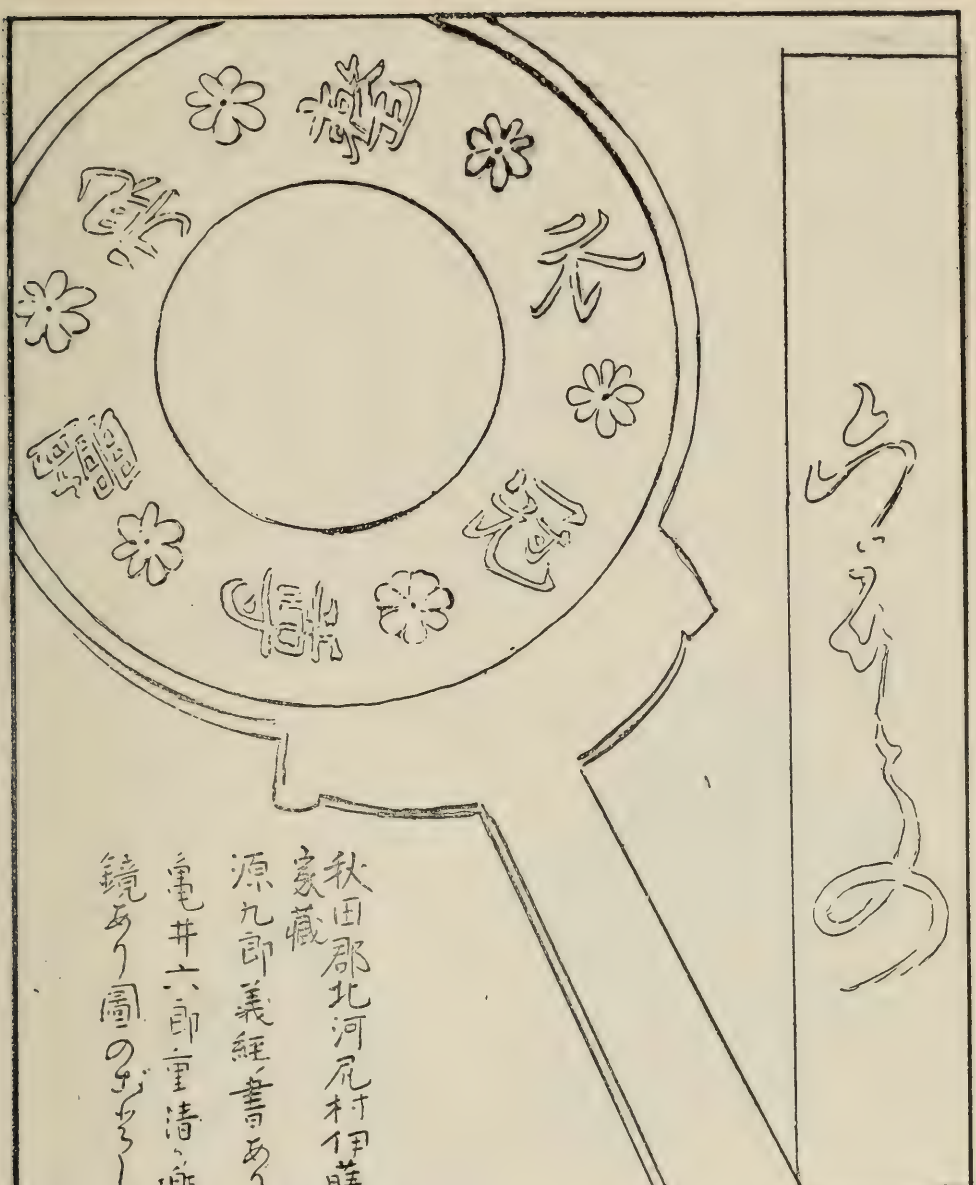

北
甲
乙


甲
乙
戊
己



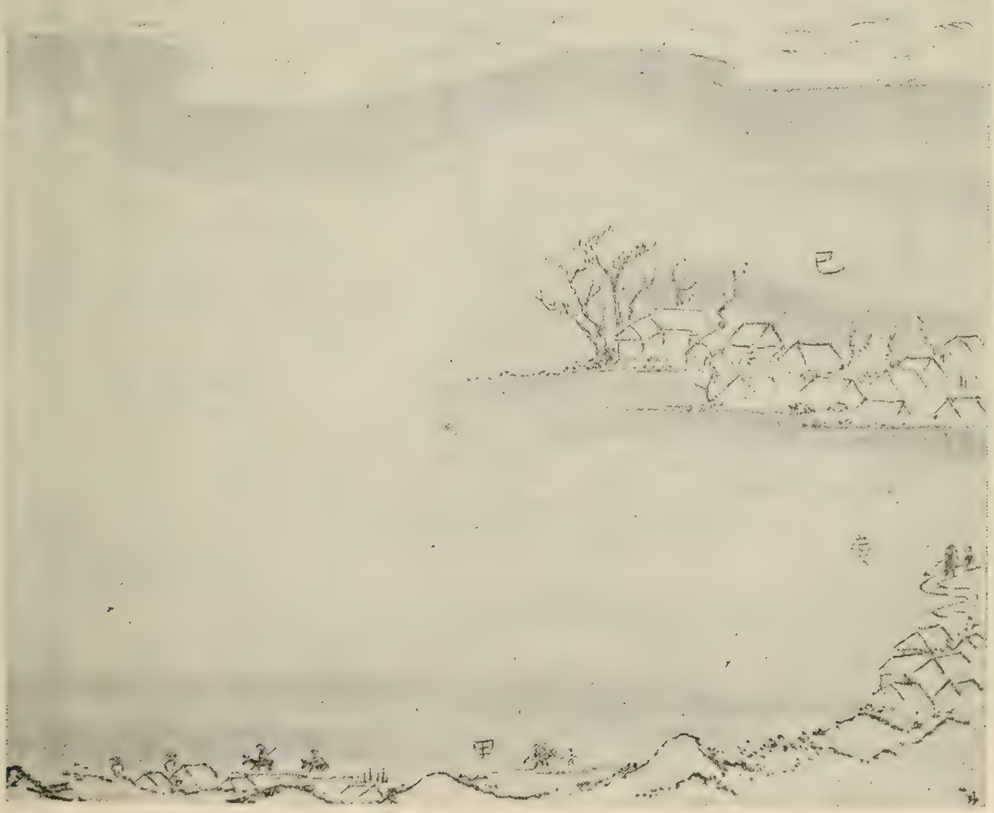

高二寸四五分
背後形



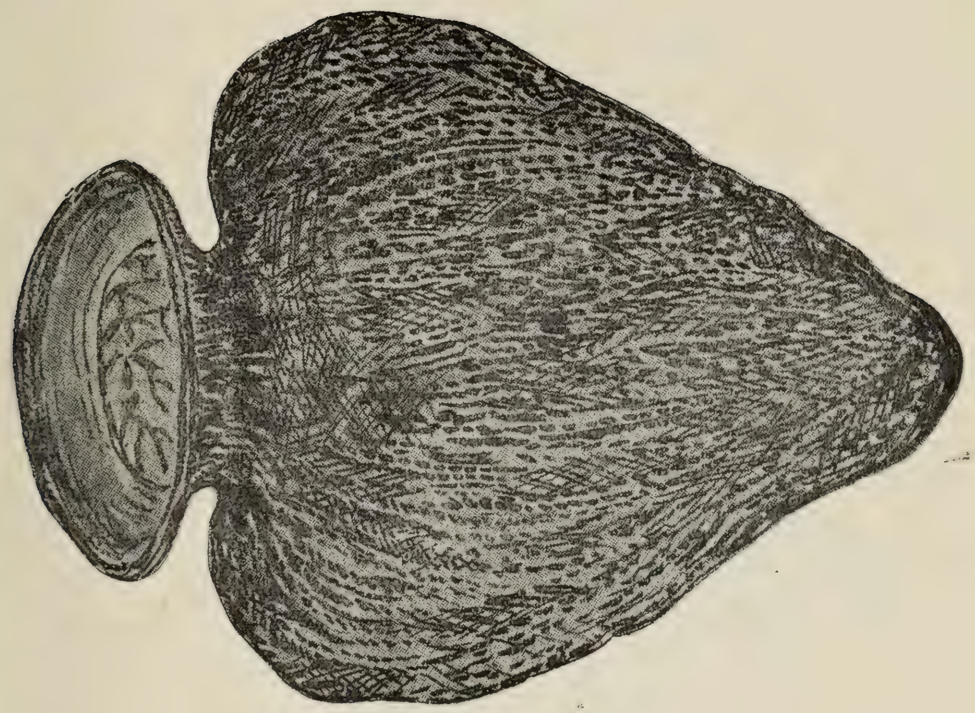

秋田郡北河尻村伊藤市兵衛
家蔵
源九郎義経ノ書ありけり
亀井六郎重清ノ兜の立物の
鏡あり図のごとし



三代實錄に貞觀六年の條に
以出羽國觀音寺預定額
とあるは、その古寺の跡、妹河村の乾方
濱妹川村とも此處にありしといへり
妹河羽立村に近く八龍湖邊にありし
其觀音寺乃跡は貞和三年に人
あり石の碑あり、此寺ありしを其後
貞和三年再ひこれ興しきの
[illegible]
その寺亂れし世[illegible]
跡に堂を建て觀音堂とも[illegible]
その菴に元道法師といひつる僧
ありて田まなかくして一日二夜[illegible]
溝堰掘り通して元道堰といふ
其名今殘りぬ此觀音寺の舊跡と
飯塚村なるよしをもて論じ[illegible]
その村へは道[illegible]
妹川の[illegible]いと近くよりて古道
[illegible]ある妹河の[illegible]

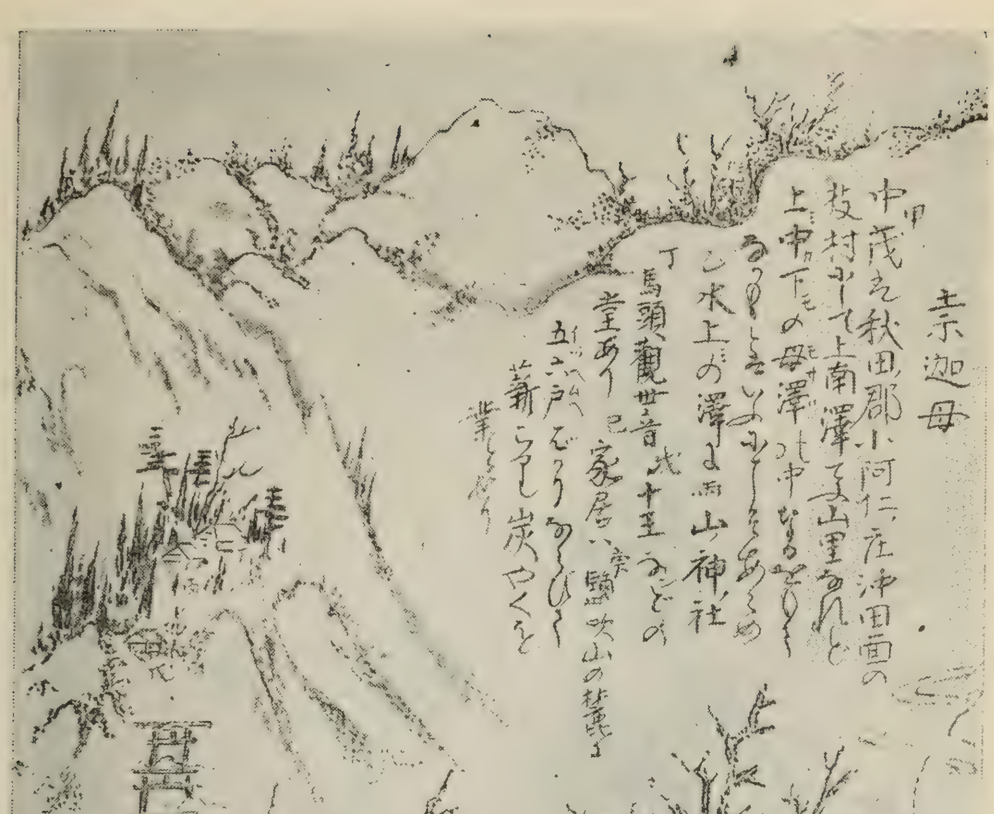



觀音寺ノ舊地
丙
甲

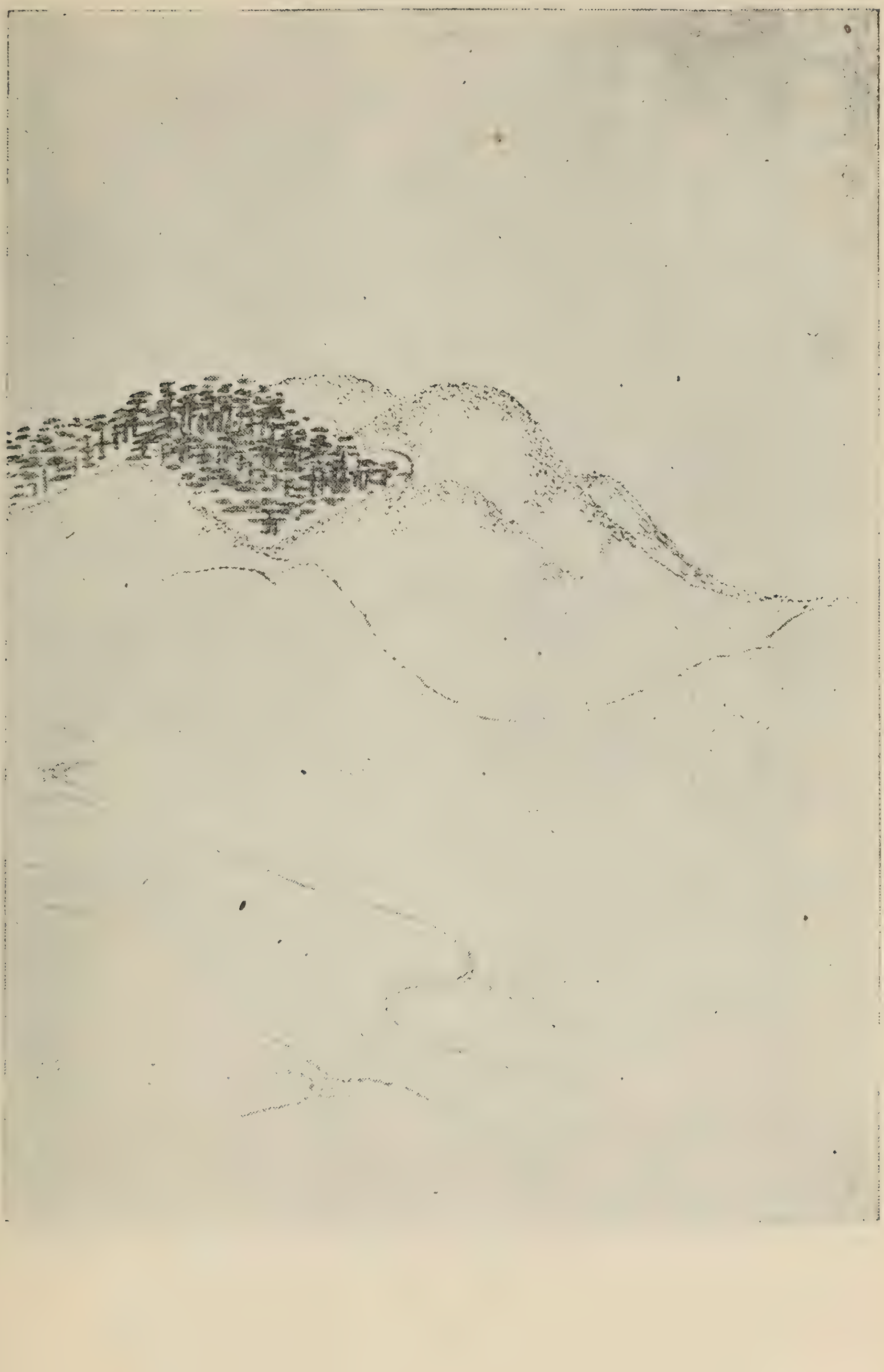








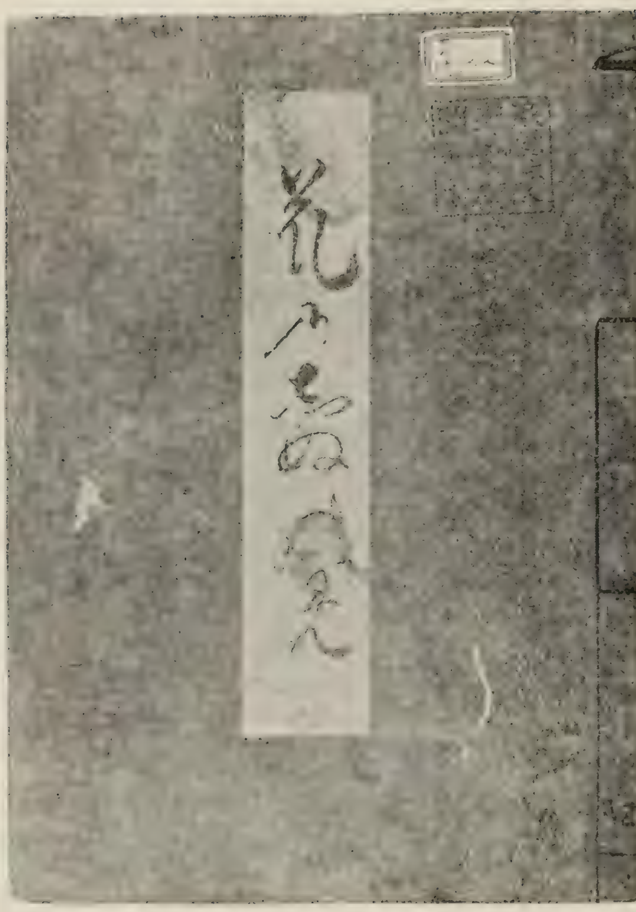




雪のやま踰え



花のしぬのめ



○花のしぬのめ

眞澄

久保田にて

やよひもやゝなから過きいなむころほひ、山の墳(て)といふ處の櫻いま眞盛りのよし、見まほしう、いさ出たゝまく心あはたゝしけれど、そのあたりは人さはにうち群れ入りみちて、こゝろ空におしありき、いと竹にうかれ、あなたのしとうたひ、山谷とよむまで鼓うちて酒飲み、ゑひしれ、ゑひなきをして、あなかまと耳うちふたぎて皈り來し人も多かれば、いかゞさためらふほどに、やがて落(ちり)なむ花の明ぼの、花のしら雲心にかゝれば、其坊路(まち)のすぢ〳〵をふみなれ通ふ、こゝろたしかなる童ひとりをみちゐないとして、鷄(とり)のかけろとこゑたつころよりおきでて、

五丁目橋

此とをかばかり來(き)宿(やどり)し山本某(うち)の家を出て、五丁目橋といふより旭河を渡れば、橋の左の方々は河ぎしの高やかに柳ひし〳〵と生ひ茂り、いと〳〵くらき中に、よねぐらあまた立ならびたり。

うば庫

そが中にうば庫とて、いと古きよねぐらひとつあり。そは、こゝらのよ

佐竹義隆公

ねぐらの長也となもいへり。そのむかし佐竹義隆ノ公と聞え給ふ國司添川のべに鷹狩し給ひて、ずむさどもにさいだち、たゞひとゝころやつれ給ひて、みちのべの石にしりうたげしてやすらひおはしますに、よねおふせたる牛を曳返す翁あり、公の御前を行キ過る。やよ翁、ほぐすあらば火うち出てもてことあるに、人もあまたゐておはしまさねば公とはゆめえしり奉らず、たゞうごとや思ひけむ火うち出て、おのれもけふりうち吹きて、これめせとてさしいづるに、公とはせ給ふやうは、米はみな久保田へこそもてはこぶべけれ、わ翁は、よねつけし牛を、こなたへ引返すぞあやしき事かなとのたまへば、翁の云ク、こはみな、公のあさよひにめしたまふよね也。そのみかしぎのれうなれば、うからやから集りて、ひとつぶづゝ撰りもてきよらを盡して御藏へ奉りし米を、いかゞ見たまひけむ、そか役たらむ人さら、かゝるよからぬ米をいかにしてもて來し、にくきおゆぼれ、もて皈れ、とく／＼えりもてことはらぐろにのゝしりてければ、すべなう昨日も此牛曳もどし、けふもまた引皈りさふらふ也と、うちなげゝば公聞たまひて、そはいかなる米ぞ、翁、俵のはらに手をさし入れて、よねいさゝかくじりいでて掌にのせて、是見てたもれや、よき米也とて奉れは、公、此米我にえさせよとてたゝむ紙におし包み、袖にうち入れ給ふをりしも、鷹するゑ、たゞむきをいからして犬引つれて、人あまた群れ來て、御前なるぞ、むらいなり、ゐやし奉れ、はやぬかづけよところゑ

御試し米
御腰掛石

〱に叫ば、聞キおどろきてふしまろび、牛を曳捨て逃げいぬるを、なしか云ひそ、牛ひかせよ、老人をいたはれとてやがて飯らせ給ふ。かくて明るあした、よねほふしをめして、庫なるよねのよきかぎりみなもてことのたまふを、こはなにのれうにかあらむと、くらほふしあやしみながら、仰せのまに〱よきよね一ト升づゝ奉れば、公たもとより、たたう紙に包みたるよねをゆくりなうとうだして、此よねにくらべては、いづれかよけむと仰あれば、人々ゐよりて、こは、いとよきよねにこそさふらへ、このよねにうへこゆるよねやはあらむ、御庫の内には此よねにまさるよねこそさふらはねとおの〱申せば、さこそ侍らめ。公はいづれよりかもておはし給ひしものかと人々申に、うちゑみ給ひて、こは昨日の鷹狩の手がら也とのたまふ。いよゝあやしみて問ひ奉れば、しか〱のよしなりと語り給ふを、さふらふ人々聞てかしこみ聞キおどろき、はし近う蹲りをるよねほふし、あきれ顔して恐居たり。公仰たまふは、今よりわれも庫に入りて米のよしあし撰りて試なむ、米おふ牛の來ばしらせよとのたまふに、己があやまりをくいてひきしぞき、たくみらを庫に入レて米庫しつらひ、一ト間を高く作りなし、上段にあつ疊をしかせて公の御坐とはまうけたり。そのときかの翁が獻たる貢米は御試米とて、近きまで、藏の中柱にその俵ゆひ添てありたりしとなむ。また、そのとき公の御腰したまひたる石は、鬼踰山の麓なる濁川ノ村近う、御腰掛石とて今もなほあり。

かしこくも傳ふ物語なりけり。

あなかしこそのうばぐらの姨櫻今もむかしのいろそのこれる。

やゝ空晴れて曉月夜、霞もやらてかたふき、行袖のしろ〳〵と見えたり。

春のよの花あり月もあり明の影も匂ひも袖にこほるゝ。

龜ノ町

此處に龜ノ町(ちよう)といふ名あり、みちのくの津刈にもまた龜ノ甲と云ふ町あり、いさゝか似たる坊街(まち)の名ども也。弓手の方いと近う古河町チなンどいへる名も聞えたり。「古川の底のこひぢに在りと聞く龜のかふをもしらせてしかな。」と六帖の歌もおもひ出て上根子屋町(うはねごや)といふ

明徳館

處にいたれば、明徳館とかや云ふ學校いかめしう建て、あまたのふみわらはをおかせ給ふ。そがちか隣(となり)なる家に、大なる櫻のしろ〳〵と月影にうつろひて、いよゝしろし。

あたら夜と花もまなびの窓近く月と雪との色に咲らし。

手形の庄

廣小路を經て、やをら手形ノ庄(さう)になりぬ。谷町(やちまち)といへる處のやど〳〵の後なる岨はいと〳〵高クして、山の手の花、また山のとかげに咲キかくろへる花までも、屋のむね越しになごりなうぞ見やられたる。やゝしのゝめもちかし。

またたぐひあらじやちまちいくちむら花の錦をかくる山かげ。

かくて山の手に來る。こゝを山の端(て)とはいかなるよしにや。山のでと、山のではなンど云ふ

此國の方言あり、そのよしにや。また奴踊リの唱歌に、「おやどはどこじや、山の手〳〵。」とうたふ。また本朝三國志ニ云ク信長公富士一覧ノ條に云ク、斯て信長公同十日甲府をうち立たまひ、其日は姥口に一宿ある云々、十四日には姥が原、長沼、狐崎、田ノ上、鈎金を過て駿府に著せたまへば、町口に御茶屋を立置せられ又一獻進上あり、故今川義元の植ゑ置れし千本の櫻を眺めさせたまひ安部川に至りたまへば、河上ミの方左の山の壇に、勝頼の持たれたる望宗の堅城あり。志豆機山を一覧あり、云々と見えたり。山の壇と書るは、壇を云ふ字音のうつれるにやあらんかし。やゝしらみわたりたる花のしのゝめ、いはむかたなし。犬のけいけいと鳴き、べう〳〵と吼る。

折りとらじ犬なとがめそさくら花たゞ見るのみを家つとにせむ。

この山の手に岡彌重郎、梁此面、牛麿角兵衞、岡健藏なンどいへる人々の軒をならべて、四ツの隣をへだつ中垣やうのものもあらで、千本の芳野櫻をひし〳〵とうゑにうゑたる軒ばの花の曙、またたぐふかたやはある。こゝらの花の中をわけめぐりてふしのそめば、八千萬千の屋戸〳〵のしりにも花ノ苑ありて、小堰の水流たり。此山の手の花の影おちうつりたるがおもしろく見おろされて、さゝやかなる水のながれながら芳野川なンどのこゝちせられて、人々もめやとゝめけむ。さいだつ童も、あなおもしろと云へり。

山高みちもとのさくらみよし野をうつせばうつす花のした水。

此花の梢ごとに有明の光り殘りたるが、しら／＼と照りあひたるなンど、たとへつべうかたなし。ふりあふき見つゝ、

またぐひ半天(なかぞら)たかく影のこる月と花とにしらむ明ぼの。

あなおもしろと、童(わらは)もこゝろほこりかに見つゝたゝずみ、えしも行やらで、

有明の月に櫻に入るやまのてれるは花のひかりなりけり。

芳野山とも

此山の手をなすらへて芳野山とも云ふ人あり、そは吉野櫻の山てふ事となむ。

かくてこそ命をしけれ春の夜の月と花とを見よし野のやま。

知教の詠歌

なほ、そのまことの山もおもひやられてめぐりめぐるほどに、やどてふやどにつゆ音なひもせで、もともむらいなるわざかとてイめば、やど／＼の苑(その)のあるじも起づるけはひして、板戸おし明け窓おしひらいて外(と)をさしのぞきて、しばしは入りね、休らひてなンど、な入り來しそことがめもやらで、ゆめしらぬ人をねもごろにいへるも、さすがは花もるやどのあるじとこそおもはれたれ。十とせのむかし茂木知教この花苑に來て、「三芳野の花の俤うちそひてさくらに霞むやまのての色。」此人今は世に無き人から、言葉の花に面影のしのばれ、見る／＼花も露けきおもひして、

市女の歌

寛政に植ゑし櫻

歸らずの澤

言の葉の殘りて今もみよし野の花にたちそふ人のおもかけ。

また三とせのむかしの春ならむ大野家市女、「春を經て猶咲そはゞいかならむちもとの花の深き色香は。」また市女、「わけ入ればこはみよしのゝ山路かとたどるもふかき花のしたかげ。」また佐竹義和ノ公ミノ御詠ありしを、市女あなめでたと、こを聞つゝよめる。「言の葉のいともかしこきめぐみには花もうれしき色や見すらむ。」とそ聞えたる。此春はいかになかめけむ、いまだし聞ねども、とし〴〵の春こゝに花見て歌よめる老女也。その外、しるしらぬ人々の歌多かれど聞キもらしたり。花はつかばかりちりそめて風情ことに、花の雪ちる春の明ぼのとずンじ返して立出なむほりに、いざなふ童の、朝戸明る女に此花一ト枝と乞ふをおし止て、

見てのみやつとにかたらむこのやまのてことに花はよしをらすとも。

そも〳〵此山の手の花は、寛政のなから斗にうゝるをはしめとして、花は世に云ふひがん櫻のさまして、いさゝかたがふものか。近きころとなりては、うゑにうゑてとし〳〵に茂り、春ごとにふかき花の林とはなりぬ。こゝにては芳野櫻といふ、吉野の花のたねもとり蒔たるよしをも、人のもはらいへり。さゝやかの山ながら、芳野初瀬の外に、またかゝるめでたき地ココロやはある。なほあきたらぬ花のかけにこそあはれ。やゝ此花苑を出れば、飯らずの澤

てふ名の聞えたり。此山陰に分ヶ入れば、皈り來る人なしと云へり。おなじ名も、おなじさまなる事も多し。津村氏の片玉譚海ニ云ク、武州安立ノ郡赤山村に慈林寺の藥師とて尊き堂あり。聖武天皇ノ開基、文德天皇ノ再興といふ、額に彫付ヶ有リ。並木の松など年經る寺にて閑寂の地也。傍の茂りたる小山に入ル人あれば再び皈らず、藥師の眷屬とて三足の雉子あるよし、七不思議ありと所のものゝ云ひ傳ふ。邊地にはめづらしき精舍也。」と云へり。また、尾張のくに熱田ノ宮の垣の內に楊貴妃ノ宮とてあり。此社にて楊貴妃の謠をうたへば、其人歸り來る事なきよし、そこをも皈らずの澤と云ひしが、今は其名さへ知れる人まれなりと、ある翁の云へり。茂木知敎、此皈らずの澤にてよめる歌ありなンど人の云へり。其澤口に彳たゝずみて、

誰レもさは家路わすれて皈らずの澤邊のさくら唉キとさきなば。

寶鏡院の櫻

寶鏡院の垣の外に、大なる櫻の水の面に枝さし出て、雪の姿をよそふがごとし。

こゝも又寶の池の鏡なすむかへばうつる花のおもかけ。

此池のこひちも匂ふこゝちして、しばし見めぐり此寺に入れば、なからはちり行櫻あり。また眞盛りなるもたちまじりて、行ひのこゑも灰ほの聞え、鶯はこたまにひゞきあひて、さすがに山寺の閑さは世の外のこゝちせられたり。

北の丸

朝の花うり

　うくひすもとなふみのりの庭櫻あかふる鈴のこゑも聞えて。

北ノ廓といふ處に出來れば、くさ〲の花おひもて朝市に立ッとて、道もさりあへず行キ續きたり。こは蛇野、赤沼なンど云ふあたりにすむ花うりにて、去年より花室に籠て初梅、はつ櫻よりうりそめ、秋は紅葉にをはりぬ。なほ引キもきれず花うりの行ケば、

　山さくら山吹つゝじ折りませて花のなさけに世を渡るらし。

　　世わたりも花にいとなくくらす身はこゝろも花になさばなしてむ。

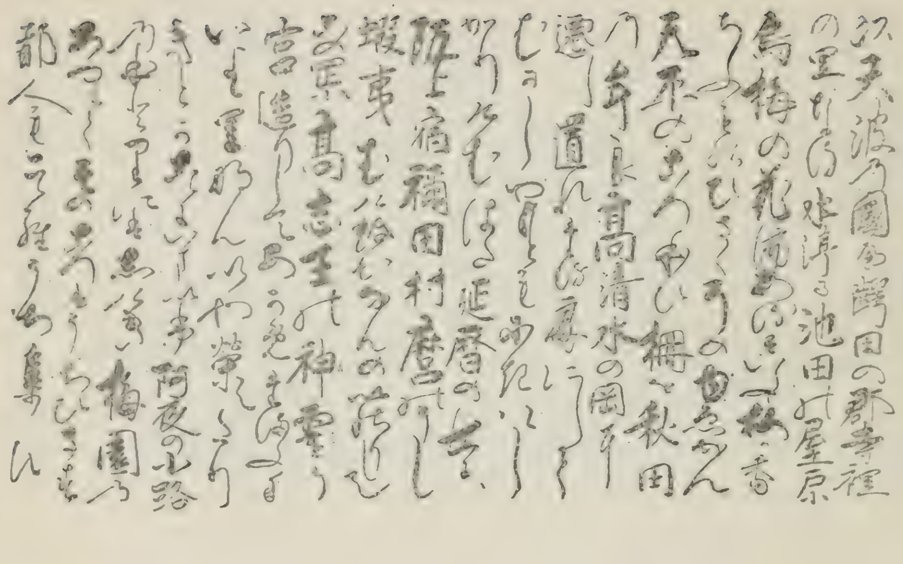
此花うりらをみちあなひ行まじりて、こたひはこと橋より旭川を渡りて通ッ町に出たり。花市も立たり。むつき、きさらきに見しときは「花や〲、初櫻、今朝ひらいたる初櫻。」とうりしは、催馬樂に、「けさひらけたるはつ花」とうたふにひとしかりき。小夜庵五明か句に、「初櫻これを折り賣る人こゝろ。」と云へり、もともおもしろし。かくて童に別れて、能登家に來けり。」

○花の家つと

やよひ十五日ばかり、山の手の櫻見にまかりし人々折りもて贈りければ、

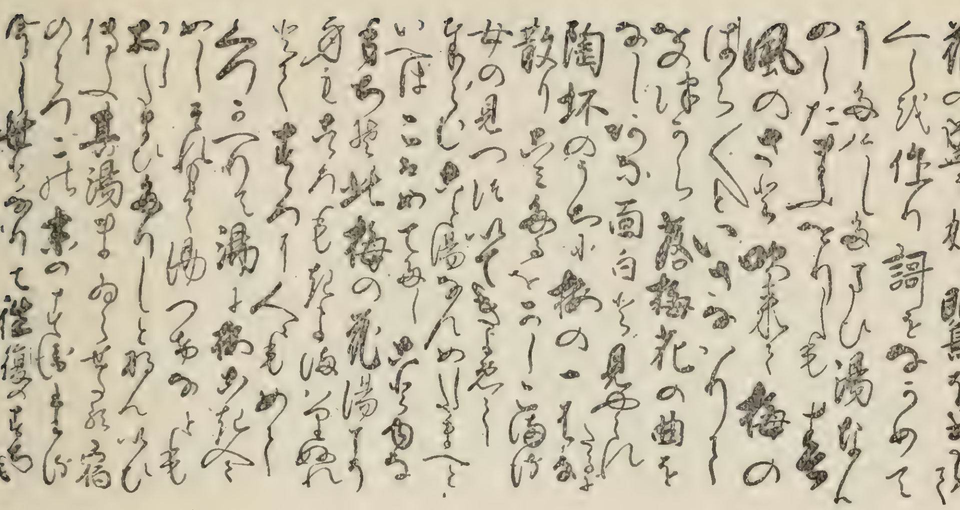
　言の葉の色をも添へて咲山の手毎の花のつとそうれしき。

梅の花湯の記

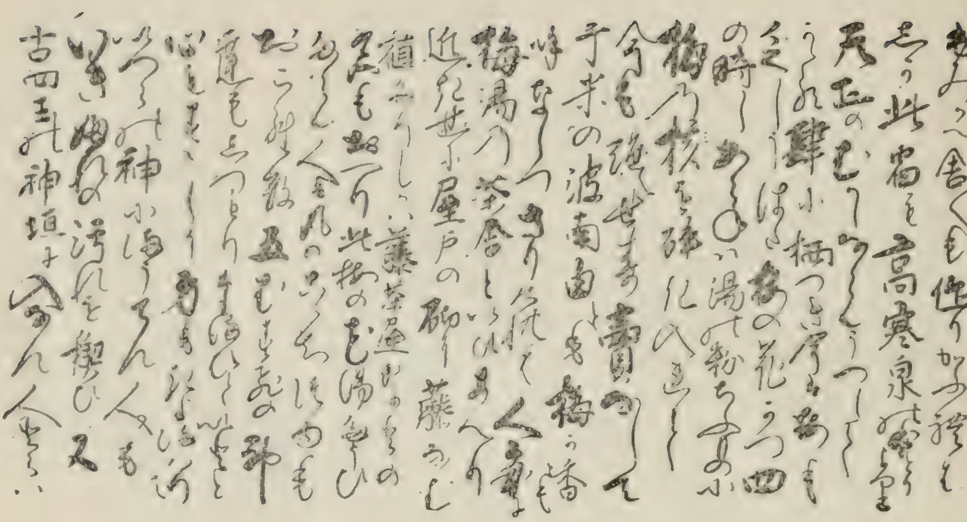


梅の花湯の記

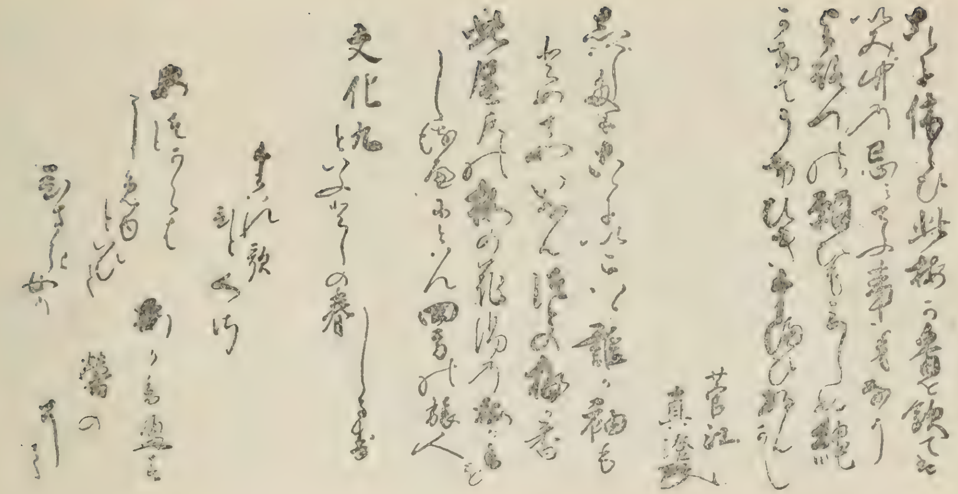
以天波の國べ齶田の郡寺裡の里なる水渟る池田の屋戸に、烏梅の花湯、あるはいふ梅か香ちふものひさく。そのゆゑなん、天平のころほひ栅を秋田乃牟良高清水の岡に遷し置れたる處にして、むかしや、もともにきはゝしかりけむ。はた延暦の世には、阪上宿禰田村麿のうし蝦夷むけ給ひなんのいのりして、この岡に高志王の神靈(かみ)の宮造りしてあかめたまふに、いよゝ里なんいや榮へたりきとか。こゝにいまいふ阿夜の小路のほとりには、しけき梅園のありて、そのころは、うちひさす都人もこゝらうち集ひ



花の盛を好み、鶯をきゝてくしを作り、詞をなかめてうたけしたまひ湯なんめしたまふをりしも、春風のさと吹來て梅のはら〳〵といさなはりて、をのつから落梅花の曲をなし、あな面白と見やられたるに、陶坏のうちに梅の一はな散りこみたるを、かしこまる女の見つつ、いてきよめて奉らむ、こと湯なんめしたまへといへは、こはめてたし、ことゆなもちそ、此梅の花湯こそ身もこゝろもきよまはりぬれとて、すゝろに人々もめてくつかへりて湯に梅こき入てめし、それもて湯つけなともおしたまひたりしとなんいひ傳ふ。其湯まゐらせたる宿のはつこの、末のすゑたる今し世となりて、往復のすちも



ふみかへ、舎〳〵も作りかふれは、しか此宿
も高寒泉のほとりより天正のむかしならんう
つして、かゝる肆に栖つき、今は梅も乏しう、
はた梅の花かつ四の時しあらねは、湯の粉ち
ふものに梅の核を砕き入れて、今も絶へせす
賣なして于米の波南由とも、梅か香とも呼な
しつ。さりけれは、人毎に梅湯の茶舎といひ
あへり。近き世に屋戸の砌に藤なむ植たりし
かは、藤茶屋なとの名もおへり。此梅の花湯
たうひたらん人は風のこゝちつゆもおこら
す、五むすひの神達もしつもりたまひて、い
とと心もすゝしう身もきよまはりて、いつら
の神にまうてん人もいきふれの汚れを禊ひ、
又古四王の神垣に入なん人とらは



こゝに休らひ、此梅か香を飮ては、いみ竹の
忌ミてふ事もなう、よろつの願ひも、みしめ繩
かけてうけひきたまひなんかし。

菅江
眞澄（花押）

しはしたにこゝにいこはゝ誰か袖も
とめてやいなんつとの梅か香。

此屋戸の梅の花湯の梅か香を
しるへにとはん四方の旅人。

文化九といふとしの春。

たはれ歌
ひとくさ

あつからはうめゆといひてひさき女の
梅か香盈す鶯のそて。

昭和六年七月二十五日印刷
昭和六年七月三十一日發行

秋田叢書別集 菅江眞澄集第三

不許複製（非賣品）

編纂兼發行人 秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市

印刷者 甲田藤太郎
東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷所 東京印刷株式會社麴町出張所
東京市麴町區紀尾井町三番地

秋田縣横手町
發行所 秋田叢書刊行會
代表者 深澤多市
振替仙臺八二五二番